Japan　Force

坂崎紗葵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｊａｐａｎ　Ｆｏｒｃｅ

【Ｎコード】
Ｎ９７９０Ｔ

【作者名】
坂崎紗葵

【あらすじ】
陸上自衛隊第１０師団の隊員を描いた作品。

時は２０１０年、世界では平和という腐った文字が羅列されていた。
しかし世界は着実と「歪」つつあった

始まりのカオス（前書き）

※残酷表現ありです。自己満ですので文章力はありません

始まりのカオス

「もう少し腕伸ばせ！」

「はい教官！」「了解です！」

―２０１０年　７月５日　愛知県名古屋市守山区　陸上自衛隊守山駐屯地―

午後５時の夕暮れ時

夏になって日に日に暑さが増してくる

俺、坂崎修一２等陸曹（２５）は新規隊員達の訓練をしていた

「仲沢！腕をもう少し上げろ！」

「はいっ！」

仲沢凛１等陸士（１８）

今年度入隊の女性自衛官。

俺は２５で７歳違いだが、高校生でも通りそうだ。彼女は。

「池田ァ！お前はもう少しペース上げるんだ！」

「了解！」

池田宗司一等陸士（１８）

同じく今年度入隊

元はスレたヤンキーだったようだが更生したのか今は普通の好青年

俺は彼らの教官役回りである、２等陸曹である。

最近、世界情勢は混沌としている

中国、ロシア連邦の動きも気になる

と、言ってもだ

おれ達に声が架かることはないだろう・・・

しばらくは

「訓練終了！各自６４式小銃は片付けてここへ戻れ」

俺が号令をかけるとハイポートを終わった二人は武器保管庫へと走っていった

数分後、俺の元へと戻ってきた

「池田一士、６４式小銃を返却し戻りました！」

「同じく仲沢一士、６４式小銃を返却し戻りました！」

俺は声を出す

「うん、お疲れ様。各自寮へ戻り、明日の訓練に備えてくれ」

そういって俺も自分の寮へと戻る

－ＰＭ６：００－

大食堂で夜食を摂る

「おう、坂崎」

俺が座っていると横に同期、赤坂俊也（２５）がやってくる

「おう、赤坂か・・・」

俺はハンバーグを食べながら赤坂に問う

「そっちの新規隊員、どうだ?」

赤坂は味噌汁をすすりながら答える

「七宮と江崎か?江崎は甘い、七宮はキツイ。まあ、なんとかなるだろうが・・・」

と味噌汁をすすってご飯をかっ食らう

「そうか・・・」

俺もご飯を食らう

赤坂は俺に問う

「お前のところは?どうなんだ」

俺は答えた

「両方筋がいい」

そこへ江崎・池田・七宮・仲沢の４人がやってきた

「教官!同席よろしいですか!?」

と池田

「俺はいいけど、赤坂は?」

赤坂は答える

「2等陸曹殿に従います」

二組に割れる。思考を変えるのか担当ではない二人が俺の横に来た

江崎友樹一等陸士（２２）

七宮竜宮1等陸士（１８）

「坂崎2等陸曹殿は、どこの出身なんですか?」

と江崎

「ん、愛知県の片田舎だ」

そこへ七宮一士が

「坂崎2曹殿ってどこの大学出なんですか?」

俺は答える

「防衛大学じゃないよ。地方大さ。親が自衛官でね、俺もその伝さ」

ひとしきり雑談をして、俺と赤坂は寮へと戻る

3人部屋の寮には俺、横田次郎3等陸曹（２４）、小関正孝3等陸曹（２３）（第1小隊）が入る

しばらく雑誌を読んだり腹筋をしたりしているといつもどおり消灯を迎えた

ー消灯時間ー

「池田、明日も訓練あるからきっちり休んどけ」

「はーい、教官」

俺は新兵用兵舎を一回りし、自分の兵舎へ戻った

「なあ坂崎」

珍しく2段ベッドの上段に住まう横田3曹が話しかけてきた

「ん?なんだ、横田」

同期の横田とは入隊してからあまり喋ったことがない

「そろそろ脱柵がでるんじゃないのか?」

そういわれると今年はまだ脱柵者（逃亡兵）が出ていない

「そうだな・・・よし、ちょっと楢木隊長んとこ行ってくる」

横田とは毎年脱柵者狩りを楽しんでいる

「俺も」

と横田も着いてくる

「毎年恒例の脱柵者狩りか」

「ええ」

隊長部屋で残業をしていた楢木真二郎2等陸尉（３４）は笑う

「よし。第1小隊の隊員も数名呼べ。確かにいるはずだ」

第一小隊からは小宮義信陸士長（２２）と神部広軌1等陸曹（３５）が来てくれた

「坂崎、また狩か」

と神部先輩

「ええ、まあ」

「それじゃ、いくか」

４人は懐中電灯を手に、新規入隊した隊員の宿舎を洗った

「思ったとおりだな。こちら坂崎、第３小隊の宿舎で土井春斗２等陸士が行方不明だ。同室のものによると午後９時から午後１０時はいたとのこと。つまりここ３０分の話だ」

俺が訪れた第３小隊宿舎で脱柵がでていた。

土井春斗２士（１８）、今年度入隊

現在訓練期間中、地元の出身である

「ホームシックか、どうだと思う？」

と横田

俺は答える

「この手合いは恋人とかだろうな。基地内にゃいないかもしれない」

とりあえず、脱柵者を狩るためにワザト警備が緩い鉄柵を見に行く

「ここだな、見てみろ」

すぐしたの草地には足跡があった

「全員外を探すぞ」

基地の外に出る

名古屋市にあるこの基地、辺鄙な土地じゃない。

だが１８歳でスウェットを着られると町に溶け込む。

早く探さねばならない

「守山駅か・・・？いや、捜索を恐れて使わないか。なら、どこだ？」

と横沢

神部先輩が答える

「町に溶け込むことを考えてるはずだ。市内を探すぞ」

高機動車を使い、守山区の市街地へと車を走らせた

「森を探せ。深くは入らないだろう」

すこしあぜ道に入る

そこには一人の人影があった

「いた！」

小宮士長がハンドルを触りながら叫ぶ

ヘッドライトに写った男は高機動車を見るなり雑木林へと入った

「全員降車！追え、追え！」

俺は懐中電灯片手に走り出した

「小宮、横沢！高機動車で待機だ！」

神部先輩の声、そして了解との返答

道なき道を走る

「待てぇ土井ぃぃ！」

俺が叫ぶと土井は

「ひぃぃぃ！」

と叫びながら雑木林を走った

「待てコラァァァァ！」

俺は手に持っていた懐中電灯をぶん投げた

「ぐへっ！」

懐中電灯は土井の後頭部に直撃した

倒れこむ土井

俺は土井を確保する

「動くなよ、馬鹿め。休暇は半年抜きだ！」

―7月6日―

「起きろ起きろ！」

俺は各部屋を回って隊員を叩き起こす

女子寮は里中美紀３等陸尉（２８）が起こす

「馬鹿女共全員起床！」

私は音で目覚めた

「ナナ！おきて！」

私は友達をゆすり起こす

部屋長の加藤有希陸士長（２１）が確認を始めた

「早く起こして～」

私はナナ（七宮竜宮）を叩き起こす

「え、もうそんな時間？」

「全員集合までにかかったのは１０分か。来週は８分だ」

と、俺はいう

「坂崎２曹、女子寮が遅れてすまなかった」

と、上官である里中３尉が頭を下げた

「い、いえいえ。とんでもないです」

訓練は着々と進み、８月には一人前程度の練度を誇れるだろう

ーキューバ共和国グアンタナモ湾　グアンタナモ米軍基地ー

「囚人番号７０５０４番」

「はい」

「囚人番号７０５０４番、貴様を故国へと帰し、そのちの法律を受けさせることを認可する」

一人の老人が囚人服を着て手錠と足かせをされて基地内の法廷で裁かれている

「囚人番号７０５０４番　イサオコジマ。貴様を本日付でグアンタナモより日本国の最高裁において処罰が下される」

小島勲（６４）、元日本赤軍兵士。パレスチナを拠点として動いていた日本赤軍はパレスチナ民族解放戦線やアラブの左翼グループとつるんでいた日本人のテロリスト組織。

小島は１９７２年のイスラエル・テルアビブ空港での乱射事件に参加し、数多くの非道行為を繰り消した。

しかし１９９０年代に兵士達が数多く逮捕されたのをきっかけに１

９９８年に日本国内に潜入。

横須賀のアメリカ軍基地をシンパと協力して爆破、アメリカ兵５名と日本人１０名を死傷させてベカー高原へ戻り現地テロ組織の傭兵の教官として働いた。

しかし２００８年、米軍特殊部隊がベカー高原付近のキャンプを襲撃。

小島は逮捕され、グアンタナモで抑留。本日日本政府との取り付けで帰国が決まったのだ

ー同刻　レバノン　ベカー高原ー

「キミタニ、同志キミタニ」

「あ？なんだ、アルルか」

「なんだじゃない。勲を助けに行くんだ」

「は？あのオッサンまだ生きてるの？」

「貴様は本当に働きたくないようだな」

「冗談冗談」

コウ・キミタニ（２７）

元陸上自衛隊特殊作戦群。退役（傷病を理由に）後ベカー高原で小島と共に教官をしていた。

「勲は４日後、グアンタナモから日本の名古屋空港に到着する。現地は米軍と自衛隊が警備をする」

カオスは始まった

「次のニュースです。元赤軍派の小島勲被告が先ほどキューバのグアンタナモ空港を出発いたしました。小島被告は１９７２年のテルアビブ空港乱射事件で」

テレビを切る

「ふぁぁ・・・マジで来るの？」

喜美谷　功は日本の名古屋に潜伏していた

「はい、喜美谷２尉」

「まぁ、日本で戦争起こすなんてさ・・・できることじゃ、ねぇよなぁ」

と喜美谷は不気味な笑いを浮かべる

「第１分隊は全員集結しております」

陸上自衛隊特殊作戦群第1分隊
喜美谷に賛同し辞職した分隊。
12名の隊員は中東や東欧に分散し、傭兵活動を行ってきた

「なあ四方村」

「はっ、なんでしょうか喜美谷2尉」

「一丁、派手に行きますか♪」

ー同時刻：陸上自衛隊守山駐屯地ー

「ほら！行け！行け！」

俺は午後の昼下がりに叫んでいた

「どうした仲沢！しっかりしろ！」

「だ、だめです・・・ぅ」

部下の一人仲沢はトラック５０周の２７周目でばてた

「立ち上がれるか？」

仲沢は首を振るので

俺は仲沢の腕を持って立ち上がらせた

「いけそうか？」

聞くと仲沢は

「は・・・はいっ」

また走り出した

そして倒れた

「ああクソッ！」

俺は駆け寄る

「大丈夫か、仲沢！」

意識はある。日射病か

「しっかりしろ、仲沢」

俺は彼女をおんぶして木陰で休ませた

「俺の責任だ。すまない」

仲沢は答えた

「さ、坂崎教官の責任じゃないです・・・」

俺は腰の水筒を差し出す

「飲め、生理食塩水だ。あと・・・これを」

俺は左手でバックパックから冷却ジェルシートを取り出す

「ちょっと、我慢しろ」

俺は上着を脱がせてTシャツにする

「えっ、あっ・・・ちょっ」

「我慢しろ」

俺は脇のリンパ管にそれを貼る。もう片方にも

「これで体温は下がるはずだ。池田、これ濡らしてこい」

「はいっ！」

池田にタオルをわたす

「落ち着いたか？」

俺はうちわで仲沢をあおりながら問う

「はい、楽になりました・・・」

「我慢せずに次からは言うんだぞ?」

「えっ・・あっ・・えと・・・」

「俺ってそんな怖そうに見えるかな」

ヒゲは剃ってるというか生えないけど

「い、いえ・・・」

「そうか」

「でも」

「でも?」

仲沢は言った

「教官って大胆ですね・・・ぬ、脱がすなんて」

「ばっ、馬鹿！・・・世邪な気持ちはないんだ。許してくれ」

「ふふっ、冗談です」

彼女は医務室に運ばれ、1日の休息を与えられてから原隊に復帰した

ー7月9日ー

「訓練期間は本日を持って終了とする」

『やったぁぁぁぁ！』

新人隊員の養成期間が終了し、彼らは部隊へと配属された

「坂崎教官、みんなで呑みにいきませんか？」

池田が俺に聞いた

「ふうむ・・・いや、遠慮しようかな」

「えーそんな」

そこで後ろに居た仲沢が

「行きましょうよぉ！」

という

「赤坂、どうするよ？」

赤坂は自分の部下に聞いた

「ドーする、お前ら」

江崎と七宮は

「イーッスね！最近呑んでないんで！」

「わたしもさんせー！」

赤坂は答える

「酒豪、坂崎の復活だな」

「酒豪？教官って酒豪なんですか？」

仲沢は聞いてきた

「いやっ、その・・・だな」

赤坂がばらした

「一回呑みすぎて楢木小隊長と取っ組み合いして勝っちゃったんだよこいつ。呑み対決して第1小隊の幹2尉にも勝っちゃうし。そんで最近呑まなくなったんだよ」

「お、お前！」

一午後8時20分　名古屋市内の居酒屋一

「おい坂崎、お前・・・酔わないのか」

「里中3尉も酔ってないだろ」

結局里中3尉、加藤陸士長、神部1曹、小宮陸士長が加わった飲み会

開始2時間で里中・坂崎は生中を5杯と焼酎3杯を飲んで顔ひとつ赤くしない

他の隊員達はほろ酔いだが池田・七宮・仲沢は未成年なので飲んでいない

「坂崎教官ってすごいんですね」

とオレンジジュースをちびちび飲んでいた仲沢が言った

「ん？そうか？」

「はい」

午後９時を回ったところで加藤と神部と小宮が酔いつぶれた

「こいつら帰らせるから俺は帰るぜ」

と赤坂（ほろ酔い）が言い残してタクシーに分乗して帰った

「お前達はいいのか？」

俺は池田、七宮、仲沢　そして

「３尉殿も」

里中３尉は

「あんたが酔いつぶれるの待ってたんだけどなぁ・・・」と言い残しかえる

「俺も帰りますわ」

と池田は里中3尉について帰っていった

「・・・お前らは？」

残った七宮、仲沢に問う

「私は・・・うーん」

と七宮が答え

仲沢は

「私は教官が心配なので」

「こいつ、お前は俺のなんだよ」

と俺は笑いながら小突いた

「いたぁ～」

９時１０分過ぎ

居酒屋に柄の悪い不良が入ってきた

ズカズカと部屋に入り大声で話す

「見たか？コウチャンの面！あれはもう女誘えねえよ！」

「見た見た！ハッチやりすぎだよな～」

「ハッチの奴女相手に強いんじゃねえんだな！ぶわっはっはっはっ！」

「ツーかオマワリはやっぱ楽だな！ババァからひったくっても全然捕まえられねえでヤンの！」

「ラッチ、お前声でけぇ！」

俺は耳で話を受け流す

本当ならボコボコにしたいところだが、面倒な騒ぎになる

「教官、私そろそろ帰りますね」

と七宮が出て行こうとする

「支払いは割り勘だぞ」

俺が言うとちぇっと言って１５００円を置いていった

七宮は答えた

「夜道だぞ？」

「今タクシー呼んだんで平気です」

俺がトイレに入って出てくると仲沢がさっきの不良に絡まれてた

「ねぇ、若いね。いくつ？」

「じゅ、１８です・・・」

「へえ、おれらと同い年じゃん。一緒に飲まない？」

「いっ、いやっ、私連れが・・・」

「いーじゃんいーじゃん、ほっとけば。おれらのほうがいいって」

「だ、だから・・・」

「はいはいオイタはそこまで。帰るぞ、仲沢」

「教官ッ・・・」

俺が声をかけると仲沢は安心した顔を見せた

だが不良も黙っちゃいない

「なんだよオッサン、俺ら話てたろ?すっこんでクソでもして寝ろよ」

「ウッゼー奴だな、殺っちゃう?」

「ミキクン半端ねぇ!」

「俺サンセー」

「ラッチがやんならおれもやるわ」

4人の不良が絡んできた

俺は頭を掻いて言う

「顔が誰か分からなくなるまえにお家へ帰れ、不良少年」

ガキが叫ぶ

「なんだとコラァ!てめぇマジぶっ殺すからな!」

「やっちまおう」

俺は言う

「店で暴れたらだれが金出すんだ?外へ出ろ、外へ」

「構うか、テメェが出せよカス！」

４人が一気に飛びかかってきた

「きょ、教官ッ！」

俺は正面から来た奴のパンチを腕で受け止め、振り払ってひじでたたきつけた

「うべっ！」

前方右から来た奴には金的をお見舞いし、左から来た奴には右手で顔面にパンチを入れる

一人残ったラッチと呼ばれていた１９くらいのガキがぶるぶる震えだした

「どうした、お前は来ないのか」

ガキは叫んだ

「て、テメェターミネーターかよ！強すぎんだろうが！」

俺は冷静に返した

「この管区に来たのがお前らの間違いだ。ここは自衛官が多く来る場所でな」

「クソッ、ぶっ殺してやる！」

正面から来た不良は闇雲にパンチを繰り出し、俺のみぞおちを殴った

「やっ、やったか！？」

「坂崎教官！？」

「・・・全然いたくないぞぉ？♪」

俺は思い切りガキの顔面にアッパーを食らわせた

帰り道、仲沢が俺に喋りかけてきた

「教官やっぱり強いです！」

「そ、そうか？」

俺は内心喜びつつ答える

「はい！」

「ラッチ、顔・・・」

「クソッタレ自衛官め・・・目に物見せてやっからなあ・・・・」

―翌日―

「は？暴力を振るわれた？」

「ああ、親御さんから苦情電話が入って今日直接来るそうだ」

俺は朝早くから小隊長室に呼び出され、行ってみると昨日のした不良のうちの一人が俺を名指しで苦情を入れたらしい

「坂崎２曹、君が正当防衛なのは店と仲沢一士の証言で分かってる。だが、一応会話をしてもらいたい。そこにきている」

俺は仕方なく、帽子を深くかぶって本部の応接室へと向かった

ー同時刻　愛知県小牧市名古屋空港付近の廃工場ー

「喜美谷２尉、武器の用意が出来ました」

「へぇ、いい武器じゃんっ。どっからめっけたの？」

スチール製ＯＤ色の箱にはスイスアームズ製ＳＧ５５２が収められていた

「依頼主のアルル氏の個人ジェットで運びました。税関はフリーですから」

「ほんで対戦車火器は、どうよ？」

「こちらを」

四方村は木箱を開けた

中には筒状のものが入っていた

「ん？Ｍ７２ＬＡＷか？」

喜美谷が言うと四方村は答えた

「いえ、ＲＰＧ－２２です。ソビエト軍横流し品のひとつですね。十分装甲車を破壊するパワーは持っています」

「ふん、まあパトカーなんかこれ使わなくてもいいだろうケドな。何発だ？」

「５０発です」

「よっしゃ」

「教官・・・」

部屋を出ると仲沢が立っていた

「なんだ、仲沢」

「私のせいで・・・何も悪くないのに」

と泣きそうな顔をするので

俺は手を仲沢の頭に置いて

「なくな。俺が悲しくなる。なに、気にするな。すぐ戻るから兵舎で待ってろ。終わったら今日もハイポートだぞ」

そういうと仲沢は

「はいっ！」

「うちの息子、こんな大怪我なんですよ！」

と母親

ラッチと呼ばれていた餓鬼は鼻に添え木をしていた

顔も包帯で巻いてある

「いや、しかしですね、彼が先に手を出したというので」

と楢木隊長

「だからといって大人が子供に暴力を振るうなんて！」

「そうだよ。何も本気で殴ることはないだろ！」

俺は口を出すなといわれているので座りっぱなしだ

「大体、そちらがさきに手を出したんじゃありませんの？」

「はい？」

と楢木隊長

「うちの息子がいい金づるにでも見えたんじゃなくて？」

俺は堪忍袋の緒が切れた

「いい加減にして欲しいですな。親ばかも」

楢木隊長が気まずい顔をした。俺は目線ですいませんという

「なっ！？お、親ばかですって！？」

俺は続けた

「ああ、親ばかだ。あんた、自分の息子が何してるか知ってるのか？」

ラッチと呼ばれてた餓鬼は顔を青ざめさせた

「うちの子は見た目はアレでも成績優秀のいい子ですのよ！」

俺は答えた

「ひったくり、お前だろ？昨日のさ」

ラッチは顔をさらに青ざめさせる

「う、うぐっ・・・」

「晴彦！？あんたまさ・・・か・・・」

「いやぁ、お手柄お手柄。よくやった」

と隊長

「すいません、勝手に出てって」

「いい、いい、気にするな」

俺が兵舎に戻るとやっぱり仲沢はいた

「あっ、教官！どうでした？」

俺は答える

「問題ない。さて、一緒にハイポートだ」

－７月１０日ＡＭ９：３０分　名古屋空港－

一機のガルフストリームが滑走路に向かってやってくる

機体にはＵＳＡＦのマーク

アメリカ空軍籍のビジネスジェットだ

中には完全武装のコマンド兵が５人小島勲を監視していた

滑走路には愛知県警機動隊とＳＡＴ、警察官が数百人待機していた

報道陣はシャットアウトされている

ガルフストリームは車輪を滑走路にこすり付けて着陸した

ドアが開き、アメリカ兵がＭＰ５Ａ５を構えながら外へ降りてきた

そして二人のアメリカ兵に連れられ、鎖をジャラジャラつけた小島勲が降りた

数十年ぶりの日本の地である

「引渡し許可証だ」

「了承した。護送車まで頼む」

青と白の鉄格子のはまった輸送車に小島は載せられた

なかには武装したＳＡＴ隊員１０名が載り、ルーフを開けたパトカー３台が護送する

上空には航空警察のドーファンヘリ１機とベル４１２ヘリが１機、追跡する

警備は大規模で、小牧市から名古屋刑務所までのルートは封鎖されている

２台のＯＤ迷彩をしたハマーＨ１が廃工場近くでエンジンを暖機させていた

中には喜美谷以下１０名の兵員が乗っていた

「いいか、１台目がまず警察車両を掃討。２台目は輸送車を襲撃する」

最終チェックが行われていた

喜美谷は大方を確認するとモトローラ無線を手にとって連絡をした

「大矢、そっちはどうか」

「はい、滞空しています」

大矢正信元陸上自衛官。航空隊出身。

大矢はＭＤ５００Ｄを飛ばしていた

中には２人の元自衛官が乗り込む。

手には旧ソ連製９Ｋ３８イグラがある。これも密輸品だ。

９Ｋ３８イグラはロシア連邦軍でも最新の地対空ミサイルである

「準備はばっちり。いつでも」

喜美谷は全員に言った

「いいか、最初の襲撃以外の射撃は絞るんだ。ＳＩＧの弾は弱装弾だ。殺傷力はない。相手を気絶させれるだけだ。手榴弾の使用は控えろ。最悪でもスタングレネードだ」

喜美谷は言う

「じゃあ一丁行くか！」

「名古屋０２から本部。マルタイのトレーラーを確保」

「こちら本部、了解」

３台のパトカーは道を走り始めた

「名古屋０１から名古屋０２、ＥＴＣを使い、高速道路へ進入する」

「名古屋０２了解」

「こちら航空隊あけぼの。付近一帯に異常な車両はない」

「名古屋０３了解。名古屋０３から護送車どうぞ」

「こちら護送車、どうぞ」

「マルタイに異常は？送れ」

「なし、以上」

３台のパトカーと護送車はＥＴＣを使って名古屋高速に進入した

あたりは非常線が張られ、一般車は進入できない

「行くぞ」

２台のハマーＨ１は高速道路の封鎖された通路近くから出発した

「こちら航空隊あかつき。第７セクションに不審な大型車を発見。色は緑、大型のＳＵＶに見える。どうぞ」

「こちら本部、付近のＰＣ（警察車両）はこれに職質をかけろ」

「こちら小牧０１、了解。直ちに向かう」

１台のパトカーがハマーＨ１の近くに寄ってきた

「喜美谷隊長、警察です」

と隊員が声をかけると

「わかった。大矢、行動に出ろ」

「了解」

ＭＤ５００Ｄは空域に侵入した

「こちら名古屋空港コントロール、ＪＡ７６４５２機に告ぐ。現在空域は警察の管理下にあり飛行は不能。直ちに空域を離脱せよ」

「こちらＪＡ７６４５２機、機体に不備があり空域を離脱できない」

「了解した」

「こちら名古屋空港コントロール、ＪＡ６９２２．空域に故障したヘリが侵入する」

「了解」

航空警察隊は報告を受けたヘリを目視で発見した

黒塗りのＭＤ５００シリーズだ

「こちらＪＡ６９２２から該当機へ。異常はどうか」

大矢は無線を返した

「こちらＪＡ７６４５２、問題ないが飛行に支障あり」

「こちらＪＡ６９２２了解」

「おい、ドアを開けてもいいがまだＳＡＭは出すなよ」

大矢は後ろに乗っている元レインジャーの自衛官にきつく言った

幾分か近づく

「ＪＡ６９２２，コントロールが効き難い為、そちらの機体付近を通過する」

「こちらＪＡ６９２２了解」

大矢は本隊の喜美谷に連絡を取った

「こちら大矢、航空隊と接触。ＳＡＭ発射許可を」

「こちら喜美谷、許可する。撃墜せよ」

大矢はキャビンの隊員に告げた

「ＳＡＭ発射用意」

隊員達はてきぱきとイグラを組み立てる

「発射用意ＯＫ」

喜美谷は無線で連絡を入れた

「撃て」

隊員はスコープを覗き、ロックスイッチを押した

一般航空機はＳＡＭで狙われることを想定しない。

無論、レーザー警報などない。

イグラは発射音を立ててＪＡ６９２２に向かった

「機長、ＭＤ５００が爆発音を」

「何？」

「？飛翔体が向かってきます」

「なっ、ミサイルだ！？」

ＪＡ６９２２は大爆発を起こした

近くを飛んでいたあけぼのは本部へと連絡を取った

「こちらＪＡ２１ＡＰから本部！」

「こちら本部どうぞ」

「ＪＡ６９２２がミサイルで撃墜された！」

「ミサ・・・本部からＪＡ２１ＡＰ、もう一度繰り返せ」

「ミサイルだ！ミサイルで撃ち落された！」

「本部よりＪＡ２１ＡＰ、何者だ」

「空域にいるＭＤ５００、ＪＡ７６４５２より発射された模様！指示を！」

あけぼの機内のＳＡＴ隊員は豊和Ｍ１５００狙撃銃にＦＭＪ弾を装填し、本部へ発砲許可を問い合わせる

「こちら特機１２、発砲許可を」

「こちら本部、現状でヘリコプターへの射撃は認められない」

「次弾装填」

隊員はイグラを捨て、新たなイグラを取り出す

「ＭＤ５００，新しいミサイルを出したぞ！発砲許可！」

「こちら本部、許可は出せない！繰り返す！許可は出せない！」

そしてあけぼのは連絡を絶った。同時に炸裂音を残して

「航空隊との無線が途絶したぞ！どういうことだ！」

本部が置かれた愛知県警名古屋市警察本部では怒声と混乱が始まった。

ハマーを追跡していた所轄の渡辺巡査と村木巡査長はその撃墜劇を見ていた

「こ、こちら小牧０１！２機のヘリは別のヘリに撃墜された！く、くりかえ」

ハマーの天板があき、元レンジャー隊員潟木2尉が頭を出す

全身グレーの都市迷彩に身を包み、肩には緑の筒を担ぐ大男だ

「む、村木巡査長！」

「くりかえ・・・・なんだあれは」

「ＶｅｒｙＶｅｒｙ，グッドだねえ」

潟木はＲＰＧ－２２を組み立て、スコープに警らパトカーを収める

「Ｂｏｏｍ！」

スイッチが押され、ロケット弾が発射される

パトカーのボンネットに命中し、爆発を起こす

「名古屋０２から本部、爆発音が聞こえたが？」

「こちら本部、状況を確認中だ」

ハマー２台は警護隊へと近づいていた

「こちら第２検問所、本部どうかしたか？」

「こちら本部、付近で警らとの連絡が途絶した。注意を怠るな」

「隊長、検問です」

と四方村が言う

喜美谷は潟木にＲＰＧ－２２の新しい弾をわたした

「吹っ飛ばせ。ＥＴＣごとな」

料金所に設置された検問所

６人のＳＡＴ隊員はＭＰ５短機関銃で武装し、十分な訓練を受けていた

「センサーに車両反応」

パソコンを触っていた隊員がつげた

全員がＭＰ５短機関銃を発射体制へと替える

「射撃用意」

さきほどから無線が途絶しているため、用心しての選択だった

ＳＡＴの隊員は拡声器を用意する

「とまれ！とまれぇぇ！」

緑色の大型車はそのまま来る

「発砲許可願う！」

本部に問い合わせる

「許可する！」

ひとつ返事だった

「撃て！」

タタムタタム！と９ｍｍパラベラム弾が吐き出される

しかし緑の大型車両は弾を受け付けなかった

「防弾ガラスだ、なめるなよ」
喜美谷はつぶやき、潟木に命令をだす
「撃て！」
天板が開かれ、瞬時にＲＰＧ－２２は発射された
ロケット弾は料金所ごと検問所を爆破した
「名古屋０３から護送車、武力トラブルだ。スピードを上げ、高速道路からの離脱を図る、どうぞ」
「こちら護送車、了解。援護を頼む」
護送車はスピードを上げた
ピラミッド体系の護送隊は鋭角となる

「連中スピードを上げたな。四方村、スピード出せ」

ハマーＨ１２台はスピードを上げた

「巡査長、ハマーです！」

ＳＡＴ隊員はＭＰ５を取り出し、窓から身を乗り出す

「木島、やれ」

喜多村は後部座席に座っていた隊員に指示を出す

「後続車も攻撃を開始だ」

ハマーからも隊員が身を乗り出し、ＳＩＧ５５２を構え、撃った

「発砲！発砲！」

ＳＡＴ隊員は車内へ引っ込む

隊員達はパトカーの車輪を打ち抜いた

パトカーは制御を失い、くるくる回りながら縁石にぶつかっていく

ハマーは護送車を取り囲み、停止させた

「おまわりさん？出てこないと蜂の巣～。どうする～？」

隊員たちはハマーに運転手を残して小銃で取り囲んだ

ＳＡＴの隊員達は怖気づき、ＭＰ５サブマシンガンを手からはずして護送車を降りた。

全員が手錠をつけられ、護送車に押し込められる

「貴様か、喜多村」

「ええ、小島先輩。どうぞこちらへ」

喜多村達テロリストは無事、小島勲を確保した

「今日は射撃訓練を行う。本日は８９式５．５６ｍｍ小銃を使用する」

俺は８９式小銃を手に持ちながら隊員に説明する

俺は第２小隊での射撃スキルが高いため、教官をやっている。

仲沢、七宮、江崎、池田の隊員達は見よう見真似である。

「この８９式５．５６ｍｍ小銃は陸上自衛隊でも完全に採用された銃である。５．５６×４５ｍｍＮＡＴＯ弾を使用し、３０発をマガジンに装填する。基本的動作は

６４式7．６２ｍｍ小銃と変わらない。いいか、まずはこのボルトを引き、弾を薬室に装填する」

俺がやる動作を全員がまねをする

「肩に銃把を乗せ、脇をしめる。照準を覗き、目標にあわせる。このとき、セイフティが解除されているのを忘れるな。８９式小銃はア・タ・レ鉄砲と呼ばれ、安全装置、単射、連射、そして3点バーストだ。」

全員がセレクターをカチカチと触る

「模擬弾薬だが人に当てれば殺傷力はある。人に銃口を向けるな。よし、次はセレクターをタにあわせろ」

カチッという音があたりに響く

俺はみんなの前からずれ、発射ブースに入った

そして弾を撃ちだす

タン、タン！と音が響く

「いいか、連射では敵に弾を当てることは出来ないんだ。単発射撃でゆっくりと撃つ。これが基本だ。よし、全員撃ち方はじめ！」

タン！タタン！タン！

真鍮の薬莢が当たりに散らばる

そのときだった

一人の3等陸曹が走ってくる

「坂崎先輩！大変です！」

後輩の野々村だった

「どうした、ノノ」

野々村は答える

「小牧市付近でテロリストが対戦車ロケットを乱射、護送中の囚人を奪取されたとの報告が！」

「はぁ？映画の見すぎだぞ」

「いえ！至急講義室に3等陸曹以上のクラスは集まれと！」

―１２時２０分　陸上自衛隊守山駐屯地―

「先ほど午前１１時ごろ、囚人を護送していた警察の車両部隊及び航空部隊が何者かによって破壊された。囚人は奪取、逃亡した」

第３５普通科連隊連隊長「飯島直行」１等陸佐は重々しい口調で喋る。

「警察部隊は全力で犯人が使用したハマーH1を捜索しているがいまだ発見には至っていない。政府の見解としてこの件は隠密に進めたいらしい。そこで我々、第1、第2小隊投入が案として出ている」

第2小隊長、楢木2尉が質問をぶつけた

「我々でなくてもＳＡＴがいるでしょう」

飯島1佐は答えた

「ＳＡＴは被害を受け、建て直しをしている。機動隊も動いてはいるが行動は無理だ。そこで一番近い我々がやることになった」

神部1曹が質問をする

「発砲許可は出ていないんでしょう？」

飯島１佐は頷く

「我々に許されたのは特殊閃光弾と威嚇射撃だ」

里中３尉が口を開いた

「死傷者数見込みは」

飯島１佐は口を開かなかった

「我々はいかなるときもやる事をやってのけることが出来る力を持っている。それでこそ国防だ」

幹康貴２等陸尉が口を開いた

「条件をつける。明野のＡＨ－１Ｓとうちの師団のＵＨ－１を出せ。これらには自由射撃を許可させろ」

飯島１佐は渋る

「しかしだな、有事でもないのに発砲だなんて」

幹2尉は退けた

「有事なんだよ、十分！ロケット弾で武装したテロリストが今もこの愛知県にいるはずだ！」

ーPM4時12分　愛知県春日井市西部ー

「春日井153から本部、どうぞ」

「こちら本部、どうぞ」

「捜索車両と思われる大型車両を発見、位置は」

ーPM5時22分　愛知県春日井市西部　廃工場ー

「感づかれたか」

小島勲は重々しく口を開く

「想定済みですよ先輩。おい、四方村」

「はいっ」

「重機設置しろ。あとライフルで狙撃。ＯＫ？」

「はっ」

愛知県警機動隊は独自で作戦を展開していた

「第１小隊第２小隊は包囲網を敷け！第３小隊は狙撃だ！」

５０人の機動隊員はポリカーボネート製のライオットシールドを装備し、手にはやっと配備されたシグザウエルＰ２３０拳銃があった

３人の狙撃手は廃工場から１５０ｍはなれたビルに入る

「狙撃班、配置につきました」

一人の狙撃手は豊和製Ｍ１５００狙撃銃をもって中腰でスコープを覗き、二人は自衛隊から払い下げられた６４式7．６２ｍｍ小銃にスコープを乗せたものを構えていた。

「ＳＷＡＴの手本どおりだが、ちと雑魚の動きだな。重光」

「はっ」

一人の小男が走ってきた

「狙撃手をやれ。ぶっ殺していい」

「了解です」

重光と呼ばれたこの隊員は黒色のシートをかぶって廃工場の屋上へと出た

外は雨雲がかかっていてくらい

屋上には廃機材が点在し、身を隠すにはうってつけだ

「喜美谷さん、配置つきました」

「よし、じゃあやっちゃって」

重光は箱からシグブレーザーＲ９３と呼ばれる最新式のライフルを取り出した

ボルトアクション式で、弾丸は７．６２ｍｍ×５１ＮＡＴＯ弾を使う

金色の弾薬を薬室にいれ、ボルトを戻す

スコープを覗き、十字に機動隊狙撃班の一人をおさめた

「神よ我を許したまえ」

引き金を引く

サプレッサをつけているためマズルフラッシュもなく弾は機動隊員の額へと納められた

重光は無言でボルトを引き、空薬莢を排出する。そして次弾をこめる

そして自動小銃を持って慌てふためく機動隊員の額に発射する

3発目をこめるとき、建物の縁に弾丸が着弾した

しかし重光はあわてず、次弾を発射した

「狙撃班全員殉職！くりかえす、殉職した！」

機動隊が建物ににじり寄る

「重光サンキュー、おかげであせって近寄ってきたわ」

喜美谷は無線機でつげ、横に座っていた潟木に命令を出した

「潟木、重機で外にいるファランクス崩して来い」

「りょーかいっす」

潟木は武器ケースからＫｏｒｄ重機銃をとりだした

ロシア製のＫｏｒｄは扱いやすいと有名で、密輸した武器では一番高価だった

「よし、やれ」

喜美谷の命令で潟木は窓ガラスが破れ、カーテンで隠してある窓に近づいた

ボックスの機銃弾を装填し、ボルトを引いた

２脚運用可能なため、バイポッドをとりつけてある

窓からそれを突き出した

機動隊員は窓から出てきたそれに驚愕した

「マシンガン！マシンガーーーン！！」

ドドドドドドと重々しい銃声を立て、Ｋｏｒｄは前後に揺れる

ポリガーカーボネートの盾をやすやすと貫通する弾丸。

機動隊員は肉片となっていく

「てっ、撤退しろ！下がれ！下がれーー！」

盾を置いて逃げる機動隊に潟木は銃弾を浴びせた

背中を撃たれた隊員はそのまま事切れた

「潟木、そこまでだ。どけ」

喜美谷は潟木を制止した

そして場所を変わってＲＧＤ－５と呼ばれるソ連製手榴弾５個を外に投げつけた

爆発したのは3つだったが、それでも2人の機動隊員が重傷を負う結果になった

そして喜美谷は拡声器を持ち出して叫ぶ

「次抵抗したら全員根絶やし～。てぇだすんじゃねえぞぉ～?♪」

「機動隊員２０名が死亡、１５名が重傷・・・」

第１０師団の基地にも一報が入った

「なぜおれ達を待たないんだ!」

陸上自衛隊には情報すら入っていなかった

幹2尉は飯島1佐に詰め寄る

「1佐、行きましょう」

しかし1佐は渋った

「し、しかし・・・だな」

そこへ楯木隊長も参加した

「行くべきです」

飯島1佐はしぶしぶ許可を出した

「全員、対テロ作戦だ」

俺は兵舎にいる隊員に話しかけた

「全員完全武装でヘリポートに集まれ」

５分後、ヘリポートには第１小隊第２小隊あわせて１４名が集まる

「楢木隊長、説明を」

俺は楢木隊長に告げる

「全員、自衛隊として対テロ戦は自衛隊初の試みである。現場は春日井市だ。出身者もいるだろう。敵の数は不明だが、かなりの猛者だ。

多くの火器を使用し、警察官５０人近くが殉職している」

隊員たちがざわめく

「しかし我々から死傷者を出すつもりはない。我々はＵＨ－１で現地入りするが、ＵＨ－１の機銃掃射でまず敵を征圧する。そして突入だ」

ＵＨ－１が３機用意され、５人ずつ分乗する。

俺はＵＨ－１の機銃手を任された

Ｍ２重機関銃はすでにドアに取り付けてあった

「坂崎教官・・・私不安なんです」

そう仲沢が喋る

衛生兵として彼女は乗っている

「足がすくんじゃって」

仲沢は両手で足を抑えているががたがた震えていた。

「仲沢、心配するな。誰も死なない」

そういうしかなかった

俺も手が震えていた

「現場に着きます」

パイロットがそういったときだった

空へと銃弾が放たれ、ヘリの機体にガンッ！と音を立てて当たった

「被弾！位置はどこだ」

機内では俺が一番階級が高いと思っていた

「坂崎２曹、俺のいうことを聞け！」

そこには吉山純太陸曹長がいた。
俺の高校の後輩にして最悪の人間だ。
キャリアで防大を出ている
「2曹、空域を離脱する！」
俺は拒否した
「曹長、むりだ。そこにいろ！」
俺は吉山を突き飛ばして席に座らせた
そして機銃に取り付いた
「パイロットさん！銃を撃つから撃ちやすい位置に頼む！」
ヘリは先ほど打たれた空域に戻った
窓から上に向けて撃たれていた

俺はボルトを引いて押しがねを押した

ドドドドドと心地よい振動と真鍮の薬莢が機内を転げ回る

潟木は反撃に驚いた

そして肩と腕に反動を感じた

「ブバッ！」

即死だった

「潟木！くそ、自衛隊機が発砲だと！」

喜美谷は驚いた

上にいる重光が危ない

重光はパイロットをブレイザーで狙っていたが照準が合わなかった

坂崎の射撃に反応し、残りのＵＨ－１も発砲を始めた

ビルは１２．７ｍｍ弾で大穴が開いていった

「おい、遮蔽物に入れ！」

弾丸が部屋内を転げまわった

５人が打たれて死んだ

「くそ」

喜美谷、四方村、小島、残った隊員は４人だ

喜美谷は大矢に無線連絡を取った

「大矢、打たれてる！援護できないか！」

脱出手段としてヘリは残してあったが、廃工場の裏にハイエースが隠してある

大矢は無線に答えた

「ええ！いけます！」

仲沢はヘリの座席からはなれた

坂崎はその行為に驚愕した

「仲沢、戻れ！」

ドアこそ閉まっているが危ない

仲沢はドアから窓を覗いた

「教官！屋上に人が！」

坂崎はその声をきき、建物屋上を見た

逆光でレンズが光っている男が居た

スナイパーだ

坂崎はすぐさまそこに一掃射をした

重光は体に3発の弾丸を受けて斃れる

しばらくすると弾薬がそこをついた

仲沢はまだ外を見ている

反撃はない

先導していた幹２尉の乗るＵＨ－１が掃射した屋上に着陸した

隊員たちが中へと入っていくのが見えた

俺は新しい弾薬ボックスを池田にとらせた

Ｍ２機銃の空の弾薬ボックスをはずし、新しい箱をつける

パイロットが叫んだ

「2時の方向！ヘリコプター！」

機体が大きく動き、衝撃でドアが開いた

「きゃっ！」

俺は墜ちかけた仲沢の手を引っ張る

「あぶねえ！座ってろ！」

ＭＤ５００は空域へと入った

屋上にＵＨ－１がある。あそこへは降りれない

どうする

大矢が考えていると目の前のＵＨ－１が撃ってきた

「うわっ！」

とっさに避ける

後部座席の隊員がすぐにＲＰＫ機銃を用意し撃ち始めた

用意がいい奴らだ

俺は敵が打ってきたことに驚いた

そしてＭ２機銃の銃身が折れるのも見た

敵の弾が銃身に当たり、折れたのだ

１丁しかない

反撃できない

そう思ったときだった

横で突然発砲音がした

驚いて横を見ると仲沢が８９式小銃をヘリに向けて撃っているじゃないか！

しかも驚くほど正確で、ヘリのコックピット付近に当たっていた

数発撃った後、ヘリのコックピットに赤い花が咲いたように見えた

そしてヘリコプターはくるくると回り、人を落としながら雑木林へと墜ちていった

「教官、わたしやりました・・・！」

俺は思わず抱きしめてしまった

「よくやった仲沢！」

幹はなぜ自分が仰向けに寝そべっているのか分からなかった

撃たれた

ケド痛くない

でも動けないのだ

テロリストの弾は弱装弾だとすぐにわかった

「隊長が打たれたぞ！」

小関３等陸曹の声が聞こえた

彼はＭ２４９ＳＡＷを撃っていた

そして彼も倒れる

喜美谷は弱装弾に後悔していた

入り込んできた自衛隊にまず驚き、掃射をしたが倒れただけだった

喜美谷は横で味方が撃たれたのを見た

四方村ではない

だが戦友だ

小島はハイエースへと走り、四方村も走る

俺はここで死ぬんか？軍隊でもない連中に撃たれて

喜美谷はその考えを払拭し、閃光弾を投げた

２機目のＵＨ－１はすでに地に足を下ろしていた

裏口から入った楢木には走ってくるテロリストに見覚えがあった

後輩、３期くらい後の自衛官だ

自らが特殊作戦群の前身組織中央即応集団時代に訓練した・・・・
名前はたしか

「喜美谷！？」

喜美谷は自衛隊に自分の名前を言われたのに驚いた

そして言った隊員に見覚えがあった

即応隊時代の教官だ

「楢木ッ、くそ、四方村！早く出せ！」

ハイエースにエンジンがかかり、喜美谷は飛び込んだ

ハイエースは走り出した

上空にまだ居たＵＨ－１にそのハイエースが確認できた

俺は震える仲沢に気づいた

「あっ、すまない！」

抱きついていたのはまずかった

池田が大笑いする

「教官ッ、それセクハラ！」

仲沢は震えながら言う

「いっ、いえ・・・緊張しただけですから」

顔が赤くなっている

「大丈夫か？」

「はい」

あぁあぁああ！ビックリした！なんで教官・・・突然・・・今じゃなくても・・・頼まれたら・・・って私は何を考え！

自問自答を脳内で繰り広げていた仲沢一士だった

パイロットが喋った

「したの部隊から攻撃要請です！あの車！」

俺は仲沢に再度頼んだ

「仲沢！あれ、撃てるか！」

下を走る車に指を指すと仲沢はこくんとうなずき

「やってみます・・・」

すべては終わり（前書き）

※この回から恋愛成分濃い目です

すべては終わり

すべて順調だった

「なんで自衛隊が銃ぶっ放すんだ、クソッ！」

喜美谷は後部座席で悪態をついた

小島はすでに腹を据えているようだ

四方村はまだ逃げる気でいる

無理だ、ＵＨ－１が追跡してる

「いいか仲沢、よく狙え・・・しっかりと」

俺は仲沢に耳打ちをした

「はいっ・・・」

ヘリの床に寝そべり、８９式小銃を構える

「撃て」

ダンッ！ダンッ！

ハイエースに弾は当たらない

「仲沢、落ち着くんだ」

彼女は答えた

「む、無理です・・・わたしには」

俺は彼女の横に座り、腕を押さえる

「動かすなよ」

彼女は腕を引き締め、銃を握りなおす

「深呼吸、深呼吸」

彼女はゆっくり呼吸をした

「当たって・・・」

ダンッ！ダンッ！ダンッ！

「がっ！？」

運転席の四方村が苦痛の声を上げ、ハンドルを手放した

急激にハンドルが動き、ハイエースは横転をする

「よ、四方村ッ！大丈夫か!?」

喜美谷は衝撃で額を切った。そこを押さえながら聞くが、反応はない

「四方村ッ！ヨモムラァッ！」

「終わったな」

小島勲は重々しく告げる

「何がだ！」

「全てがだよ。我々は終わった。赤軍はもはや過去の遺物・・・私は帰るべきではなかったのだ」

喜美谷は怒りのあまり腰に下げていたシグザウエルＰ２２６を小島に突きつけた

「俺は終わらない！生き抜いて全てをぶっ壊してやる！」

小島は片手でシグザウエルＰ２２６の銃身を握って奪い取った

「なっ、撃つなら撃てよ！６０年代の亡霊が！」

小島は迷わず自らのこめかみを撃ちぬいた

「へっ・・・へへ・・・へ！俺は生き抜いてやるんだ！このクソッタレな世界を！ぶっ壊してやるんだよ！」

喜美谷がハイエースから這い出したときに見たのは

陸上自衛隊の編上靴だった

「動くな」

車内で小島と喜美谷が死闘をしているうちにＵＨ－１は悠々と着陸していたのだ

坂崎修一は８９式５．５６ｍｍ小銃を構え、四つん這いになっている男の背中に狙いをつけた

「動けば撃つ」

喜美谷はどうすることも出来なかった

―2日後―

「事件はどうなったか知ってるか？」

「いえ」

「警察の件は共同訓練中の事故扱いだそうだ。機動隊の件も含めてな。訓練に用意した燃料に引火し、機動隊員、警察官、ＳＡＴが巻き込まれたってさ。

爆風でヘリが墜落とまあ無茶苦茶の裏づけだそうだ」

「そんなんで報道がうんといいましたね」

「片っ端から圧力かけたらしいぞ。自衛隊は動いてないことになってるしなあ」

「ええ・・・」

「大丈夫だよ、仲沢。お前の腕は俺がよく分かってる」

「えっ・・・ありがとう・・・ございます」

「昨日移送されてきた小島勲死刑囚は移動途中に心筋梗塞で死亡し・・・」

「先日の愛知県警合同訓練で殉職された警察官は述べ５０人で、負傷者数は１５人・・・また、爆発によってヘリが墜落し・・・・」

「キリキリ歩け」

「クソッ！」

―キューバ　グアンタナモ基地―

「囚人番号７５２８９番、キミタニ。ようこそ、われらが収容所へ」

―７月１５日　夜　女性自衛官寮―

「ねえ、凛」

「なにー？ナナ」

「あんた坂崎2曹に惚れてるでしょ」

私は飲んでいた炭酸のオレンジジュースを吹きだした

「ごふっ、ごはっ・・・ナナ、いきなり何を・・・」

ナナこと七宮は普通に言った

「だって目で追っかけてるじゃん」

「うっ」

図星だった

射撃の手伝いをしてもらったときからだろうか

彼、教官が近くにいると胸がドキドキする

どくんどくんなんて私なんでこんなおと出すのみたいな

「まあカッコイイっちゃかっこいいけど、気づかないよ?ちゃんといってあげないと」

「えっ・・・でも・・・」

「ああ見えてアノ人恋愛経験ないよ、そんなに。にっぶいしさー」

「な、なんで分かるの?」

「感よ、感。女の」

「へっくしゅ・・・」

「おい、修一、風邪か?」

「ああ・・・分からん」

「でもどうすればいいの・・・？」

私はナナに恋愛相談をしていた

「そうねー、ああ・・・7月のお盆休み（第１０師団はお盆に長期演習日程を組んでいるため、お盆休みが前倒しされている）の休暇旅行あるじゃん？」

「うん、２泊３日岐阜県郡上八幡・・・」

7月２３日（金）から7月２５日（日）を予定している。

「そん時に私が時間つくってあげる。だから頑張りなさいよ？」

「えっでも・・・」

「でももくそもなーい！」

と机をばしんと叩くナナ

「ナナ、そこまでにしといたら？」

と寝転がっていた加藤陸士長

「加藤陸士長こそ空自の1等空尉とどうなったんですかぁ?」

「ぶっ!?あっ、あんたなんでそれを!」

ナナは地獄耳だった・・・

「そういえば修一」

「?どうした、赤坂」

「お前、仲沢のこと気にかけすぎじゃないか?」

「・・・あ?」

俺は意味が分からなかった

「気にかけすぎって、かけすぎちゃだめなのか」

「いや、妙な誤解とかさせてるんじゃねえかなって」

「？」

「マジでお前は鈍いクソ野郎だな」

―7月22日（木）夜9時　陸上自衛隊守山駐屯地女性自衛官寮―

「こんなもんかなあ」

私は旅行の支度を終えた

「ピンクのランジェリーってアンタ勝負下着？やるわね」

「ひゃあああ！」

私の後ろにはナナが居た

「流石に私そこまで手配できないわよ」

「そ、そんなこと思ってませんッ！そ、そんなエッチな事！」

「アンタいつの子よ。私なんか中2で卒業だけど？加藤士長は？」

加藤士長が驚いた

「うぇっ・・・わ・・・私はまだ」

「えっ、まじっすか？」

加藤士長がたじろぐ

「いやっ・・・私・・・その・・・」

モジモジしてしまう士長はなんかかわいかった

「まあいいけど・・・凛はまだ・・・よね？」

「う・・・うん」

キスもしたことないです

私は恥ずかしさを紛らわすため、外の自動販売機に向かった

「喉が渇くな・・・」
7月も中旬だ
暑くて俺は目が覚めた
「修一、俺のも頼むわ」
と赤坂
「人使うんじゃねえ、バーカ」
俺は寮の外の自販機に向かった
外に出ると女子寮からも人影が見えた
月明かりにあったのは仲沢だった

「よぅ、仲沢」

俺が声をかけると向こうは

「あっ・・・えと・・・こんばんは」

と返した

「お前も飲み物か？」

と聞くと

「はい・・・」

と答える

「よし、何を買うんだ？おごるよ」

すると向こうは

「いっ、いえ！お金・・・ありますし」

「気にするな、好意に甘えてくれたっていいだろ」

と、俺は仲沢の頭にぽんと手を置いた

「は・・・はい」

「それで、何飲みたいんだ」

彼女は自販機を眺め、お茶のボトルを指差した

「これでいいのか」

と俺が言うと彼女は

「はい」

と、答えた

俺は５００円玉を取り出して投入口にいれ、お茶と紅茶を出した

つり銭を受け取り、スウェットのポケットへ仕舞う。

「おいしいな」

「おいしいです」

夜空のした、坂崎教官に貰ったお茶を一口、二口と私は飲んでいた

「明日は旅行だぞ。しっかり寝て置けよ」

そう彼は言い残し、後にした

「な、なんで席が一緒に!?」

私の隣、バスの席だが坂崎教官だった

「私のパワーよ」

とナナがへらへらしながら入ってきた

「お、お前・・・とな・・・・・り・・・まあ、いいや」

教官はすこし動揺していたが、私も動揺している

1時間程度走ったあたり、私はうとうとしてきた

「ん・・・」

がくんと頭が下がる

「仲沢、寝るなら寝ておけ」

横から声が聞こえる・・・だれ・・・だっけ

私は思わず右横へ倒れてしまう

「お、おい仲沢!?大丈夫か?」

聞かれた

「はい・・・大丈夫・・・です」

私はそのまま寝てしまったようだ

「んぅ・・・」

頭が固くもなくやわらかいものが包んでいる

目の前には顎があった

よくみるとそれは紛れもない坂崎教官だった

「いっ！？教官ッ！？」

思い切り立ち上がったがために頭頂部が教官の顎にクリティカルヒットした

「あだっ！？」

「いたぁっ！？」

「お前突然倒れてきて・・・しかも顎に頭頂部ぶつけるって、殺す気か！」

「しゅみましぇえええん・・・・・」

「・・・ところで、頭は大丈夫か？」

「えと・・・はい」

サービスエリアで私はそんな会話をした

「なんでお前と行動が同じなんだ？」

「さぁ・・・？」

ナナの手回しは異常で、町の散策も同じだった

ただ何をすることも出来ず、その日は終わってしまった

ホテルの部屋は同じではないのだが、ナナは明日に期待しろという

何が待っているんだろう

私はすこし期待しつつ夢の中へいざなわれた

「2日の散策もなぜお前と同じなんだ。まあ嫌いではないからいいけどな。これがあの吉山だったら郡上の川へ投げている」

そんな冗談振りまきつつ2日目

私と坂崎教官はさんぷる工場に訪れていた

「すごいですよ、教官ッ！これ見てください！」

本物と違わぬ食品サンプルに私は目を奪われた

「よかったら作ってみますか？」

工房のおじさんが気をきかせてきいてきた。

「教官、やりましょうよ！」

食品サンプルは蝋細工らしく、ロウをお湯に溶かして作るのだという

「これがキャベツですね」

グリーンのロウが見る見るうちにキャベツの葉へと変わった

「序の口ですよ」

とおじさんは笑う

「カップルさんですからお揃いのサンプルを作ってみましょうか」

カッ・・・・・・!?

「カップルだなんて・・・えと・・・ねえ?教官」

「あ、ああ・・・そ、そうだな。師弟関係ですよ」

なんか断言した!

寂しい!

「またまた照れちゃって」

『違います！』

結局夫婦さんぷるなるエビフライ2本を作らされてしまった

とりあえずケータイに装着した

時刻は昼を過ぎ、おなかが減ってきた

「教官、おなか減りました」

坂崎教官は

「そうだな、何かうまそうなものは・・・あれなんてどうだ？」

お蕎麦屋さんがあった

「いいですね、入りましょう！」

「へい、ざるそばお待ち」

2つざるそばが運ばれてきて、私はそれをすすった

ズズズ、と音を立てて食べる

「おいひぃ！おいひぃですよっ！これっ！」

「そんなに騒ぐな。ガキか」

「ガキです！18ですよ！」

そんな会話でさえ楽しかった

「しかしうまそうな生蕎麦だな。郡上の水で作ったと書いてあったから相当うまいんだろうな」

と、割り箸をパチンと割って教官もズズズと豪快にすすった

「うまいな・・・」

「ごちそうさまでした！」「ごちそうさま」

二人とも同時に食べ終わる

「すみません、蕎麦湯ください」

「はいかしこまりました」

坂崎教官が何かを頼んだようだ

「教官教官」

「？なんだ？」

「蕎麦湯って・・・なんですか？」

教官は目を大きく見開いた

「お前・・・蕎麦湯知らんのか・・・？」

「はい・・・お湯？ですか・・・？」

「蕎麦湯は茹で汁にかつおだしが入った湯だ。それを残ったそばつゆに入れて飲むんだ、うまいぞ？」

へぇ・・・私ははじめて知った

「物知りなんですね」

「常識だ、常識」

蕎麦湯なるものはおいしかった

飲み終えてお勘定をするとき

「割勘にしましょうよ」

「いや、俺が払う」

坂崎教官は半ば強引に代金をすべて払ってくれた

私の中で坂崎教官を占める部分がどんどん大きくなっていった

「・・・？あれ、なんですか？教官」

橋から人がダイブしている

「ああ、郡上の名物だ。まさか俺に飛び込めとはいわないよな？」

「い、いえそんなことっ！」

すこし濡れた教官を想像したのは事実だけど

途中でアイスクリームをほおばりつつ、私と教官は2泊目の民宿に向かった

「・・・男女で部屋が同じはおかしいだろう」

民宿で私と教官が同室になったのだ

「流石におかしいな」

と里中3尉も同調するが

「まあ坂崎ならまずいことはしないだろう」

と楢木2尉の言葉を皮切りに問題ないという意見が出て私と教官は相部屋になった

「まぁ、その・・・なんだ。何もしないから安心してくれ」

「え、あっ・・・はいっ」

緊張とかの次元を通り越してもう死ぬ！

「仲沢は射撃の腕がいいな。なんでだ？」

「えっ、それは教官の腕がいいからですよ」

「そうか・・・ありがとうな」

「えっ・・・いえ」

気まずい

私が話題を振らないと・・・

「きょ、教官。ご家族は・・・・？」

「ん？親父とお袋と弟と妹だ。親父は航空自衛隊、弟は海上自衛隊、妹は技研。親父はＦ－４で空を翔け、息子は地を駆け、弟は海を駆け、妹は兵器を作る。

素敵な軍人一家の完成だ」

「すごいですね・・・」

「そうか？お袋断固反対だったけどな。それで仲沢、おまえは？」

私に話が振られ、すこし動揺した

「えっ、私ですか？」

「俺の聞いといてお前は言わないのかー？」

すこし悪戯っぽく聞いてきた

「いいますよ！・・・お父さんにお母さんです。核家族ですね」

「そうか、なるほどな。そういえばなぜ自衛隊を目指したんだ？」

そんな答えに困る・・・

「私・・・地元が岐阜県で航空自衛隊基地が近かったんです。それでバイト先に来る自衛官の方にあこがれて。空自は性にあわないしどうしようかと思ってたんですが、

とりあえず陸自を受けてみようと思って」

「お母さんは反対しなかったのか？」

「お母さんは賛成してくれましたよ。国防だし、公務員だしって。でも辞めたらお見合いさせる気らしいですけど。私、絶対やめません」

「おいおい、結婚できなくてもいいのか？」

「大丈夫ですっ！教官こそどうなんですか？」

「うっ・・・いないな、相手は」

「そろそろ寝ようか。かなり喋ったな。かなり仲が深まった気がするよ」

「そういってくれると嬉しいです。おやすみなさい」

寝れるわけないじゃん

「きょ、教官?もう・・・ねちゃいましたかぁ?」

すこし小声で声をかけてみた

「ん・・・何だまだ起きてたのか?」

「すこし暑くって」

緊張の意味で

「・・・ふぅ。夜風にでも当たるか?」

ベランダにはいった

夜風は私の髪の毛をなびかせる

「あぁ、もう少し髪長ければなあ」

「？どうかしたか？」

「髪の毛が短い人と長い人、どっちが好きですか？」

教官は指を顎において考えるポーズをした

「俺はその・・・なんだ、内面を気にするからな。外見がどうであれ、優しい奴なら誰でもいい気がする」

私はすこし自信が湧いた

翌日最終日、最後の目的は帰宅だ

明後日まで休暇があり、明日まで入れない。

全員が実家へ帰宅することが出来る

そんな矢先

ー帰宅バス車内ー

一本の電話が私のケータイに入った

表示パネルには「お母さん」と入っている

通話ボタンを押して耳元に近づけた

「あ、もしもしお母さん?今日の夕方にはそっち行け一」

『あ、凛!?ごめんね!今日だってのすっかり忘れてて!』

「あ、ううん気にしないで。ご飯ぐらい自分で・・・作れないけど、外食とかで済ませればさ一」

『いや、お母さん今家にいないのよ』

「はぃっ!?どこにいるの!?」

『・・・北海道テヘッ♪』

「テヘッ♪じゃないよ!私どうするの!?」

『誰かに泊めてもらって。じゃあばいばい~い』

「ばっ、バイバイじゃないよ!お母さん!?お母さん!?」

ツーツーツー

・・・ヤバイ

帰りは流石に教官の隣ではなく、隣はナナだ

「凛、家は入れないの？」

「うん、ナナぁ、泊めてぇ」

「嫌」

「えええ、なんでぇ！？」

「私だって彼氏と過ごしたいし、私の彼３〇なんて柄じゃないもん」

「ちょっ、ナナ！？」

ナナはいろいろと吹っ飛んでるからダメだ

加藤陸士長は！？

「私見てもダメ、私も・・・彼・・・と・・・その・・・」

ナナが突っ込む

「卒業おめでとうございます！」

「ば、馬鹿野郎！」

ええ、もう誰がいるのぉ？

里中3尉は・・・

だめだ、あんな人と泊まったら酔わされてしまう

「凛、凛」

ナナが呼んだ

「何？ナナ」

「坂崎2曹んとこは？」

・・・・・

「ハァァァァァ！？」

大声を出してしまい、バスの皆が振り返る

気恥ずかしくてそのまま座席に引っ込んだ

「なんでそうなるの！？」

「なんでもいいじゃん。女性隊員はもういないし・・・」

「うぅ・・・」

バスは愛知県名古屋駅に到着し、全員がそれぞれの実家や持ち家に帰っていった

「あ、あの教官」

「?まだ帰ってなかったのか。お前は岐阜だろう?岐阜行きなら直通でてるだろ?」

「じ、実は私家に入れなくて」

「?かぎでも忘れたのか。ご両親がいるだろ?」

「両親もその・・・今北海道で・・・」

「・・・で?」

私は息を吸って答えた

「泊めてください」

「・・・・」

「なにしてるんだ？入れ入れ」

教官は快くＯＫした。なぜだっ！

教官の実家は旧家といった感じだった

「ただいまー。お袋、お客もいるからお茶出してくれ」

「あっ、いえそこまでは！」

家の中から女性が出てきた

「修一・・・？まさか婚約相手？」

私は顔が溶けるんじゃないかってくらい暑くなった

「ばっ、違う！後輩だ！後輩！家に帰れないから今日1日泊めてやるんだよ」

「そぉ？」

「切れるぞ」

「おおきぃ・・・部屋ですね」

「そうか？まぁ、ここが客間だ」

6畳の部屋

テレビはないけど、広くて暮らしやすそうな部屋だった

「親父は事務職でな、空自の。帰りは遅い。弟も休暇だが、向こうは彼女とよろしくやってるらしい」

私は座布団の上にぺたんと座る

「私来てもよかったんですか？」

「あ?うん。問題ない。・・・あっ、そういえば理奈が今日帰ってくるな・・・」

「理奈?」

「ああ、俺の妹だよ。技研の」

「なるほどぉ」

午後6時30分

一台の車が表に止まった

「理奈さんかな?」

すこしすると教官が外へ出て行く音がした

言葉が外から聞こえるが何を言ってるかは分からない

しばらくすると私の部屋に身長の高い、私より美人で・・・年上の女性が入ってきた

「兄貴の彼女ぉ？」

「えっ！？あっ、ち、違います！」

「おい理奈！」

入ってきてすぐに教官も入ってきた

「かわいい、いくつ？」

「えっ、じゅ、１８歳です」

「へえじゃあ新しい隊員さん？兄貴やるじゃん」

「馬鹿！ちげぇってんだろ！さっさと自分の部屋に行け！」

「すごい妹さんですね」

「あれで２２だ。まったく。だが技研の有力新人とまで言われてい

るらしいからなあ」

7時ごろに車がまた来た

教官のお父さんだ

「修一の後輩ですか、息子がお世話になっております」

「い、いえ！こちらこそ」

お父さんは教官そっくりだった

ご飯をおよばれし、自分にあてがわれた部屋に戻った

「はぁ、緊張する・・・」

しかし気づくと寝てしまっていた

翌日、お世話になったので皆さんに私は挨拶した

「ありがとうございました」

お母さんと妹さんが

「次来るときはうちの息子を貰ってね」

「兄貴なんて売れ残りでよければね」

教官が憤慨し

「お前ら仕送りしないぞ！」

と叫んだ

お嫁さんかぁ・・・えへへ

『えぇぇ？なんもなかったわけ？』

電話越しにナナが驚きの声を出した

「で、でも仲は深まってるよ！」

『仲ってあんたねえ・・・まあいいや。やんっ！ちょっ、ダメだって！』

「どうしたのナナ？」

『彼氏、今起きて・・・ちょっ！朝からは疲れるって！ごめん切るね！』

・・・ナナはなんか、もういいや

私はすこし満足しつつ、今日から入れる基地の女子寮へ戻った

東ヨーロッパの小国、エストニアの東に位置するこの国は１９９１年まではソビエト連邦の領土だった。

ソ連崩壊後、独立したこの国は「スラヴィニア共和国」という名を

得た。

共産主義体制を選び、１９９８年までは傾きかけつつものどかな牧草地帯広がる国だった

しかし１９９９年にスラヴィニア開発機構が大規模なレアメタル鉱山を発見し、さらに２０００年には牧草地帯からダイヤモンドが発見された。

これを皮切りにスラヴィニア共和国は力をつけ始めた。

ガスパイプラインも発見され、さらに力をつける。

政府はハト派が歴任したため戦争は起こりはしなかったし、隣国も攻め入りはしなかった。

しかし軍部の軍事費が政権を圧迫し、国民は貧困にあえいだ

時の書記長「プーシキン・グァツォネフ」は軍事政権打倒を掲げ、政権から軍人を一掃しようとした。

しかしかえって軍部の反感を招く結果となった。

２０１０年7月25日　スラヴィニア共和国首都ヴルモフ

軍部は軍事クーデターを起こし、主力戦車＞＞ＭＢＴ＜＜「Ｔ－９０」戦車が街の通り＞＞グラスネクツ通り＜＜を蹂躙した。

ハト派のプーシキンは直ちに隣国のエストニアに離脱。

軍部は政権を掌握し、後任書記長にタカ派「ミハエル・シュパジェノブスク」将軍が就任した。

スラヴィニア共和国軍はスラヴィニア全土の掌握を画策し、住民の一斉弾圧を開始した。

一部では民間軍事企業の兵員が使用され住民が殺害された。

国際連合はジェノサイド条約にのっとって国連平和維持軍（ＰＫＦ）を編成した。

しかし各国には思惑があった

「レアメタル鉱山を自国のものに」・・・と

同時にチェチェン紛争を経験した者たちで作られた傭兵派遣企業「

ブラソトニキ」などのＰＭＣも鉱山資源獲得に入国した。

日本政府にも参加が打診されていたが、それは断られた。

２０１０年7月２８日、日本政府はスラヴィニア日本大使館員および、鉱山技術者などの日本人救助のため米軍に救助を依頼した。

しかし7月２９日、米軍救助機を前に大使館へスラヴィニア陸軍特殊作戦小隊「ボスラヴェキニ」が突入し大使館員と邦人が５０人死傷する惨事になった。

救助機が到着する頃にはボスラヴェキニは退却していた。

国際情勢と国内情勢上日本はＰＫＯ派遣が「必至」となった

「総理、現地大使館から詳しい情報が」

「助かる、頼むよ」

緊急国防会議はマスコミに公表されることなく総理官邸でひそかに行われていた

防衛大臣が一枚のＦＡＸをテーブルへ出した

「死傷者数の詳しい数が上がりました。まず大使館員３０人のうち１５人が死亡。残りも軽い怪我や重傷です。２０人の民間人のうち１０人が死亡、１０人が怪我です」

総理はすこし考え

「実行犯は？」

そこに陸上自衛隊の緒方陸将が割って入った

「実行犯はスラヴィニア陸軍内の特殊作戦部隊ボスラヴェキニが有力視されています」

総理は聞き覚えのない隊名に質問をした

「ＳＷＡＴとかＫＧＢとかじゃあないのかね？」

これだから平和ボケした総理は困る

緒方陸将は内心思いつつ、返答した

「ボスラヴェキニはＣＩＡによると２００１年設立された部隊で中国陸軍特殊部隊の訓練を受けているとのことです。戦闘力はスラヴィニア陸軍を超えていると見られ、精鋭部隊です」

総理はふむ、と声を出すのみだった

「緒方君、報告を」

防衛大臣にせがまれ、緒方陸将はアタッシェケースから資料を出した

同時にスライド映像にその資料が映し出される

「スラヴィニア共和国は１９９１以降から軍事費が驚くべきスピードで上昇。原因はレアメタル鉱山発見と見られています。これは我々日本も加担したことに。

２０００年に入り、軍部の影響力が大きくなり武器がどんどん購入されていました。

現状で分かっている車両ですが、ＣＩＡによればロシア製最新戦車が数十両、中国製戦車が数十輌、他にも旧式の戦車が数百台。

対空システムも優れたものが多く、スラヴィニアは小国ながら要塞

国家として君臨できるレベルです」

総理が質問をする

「それで、自衛隊の派遣はどうすればいいのだ?」

緒方陸将は答えた

「今回もまた、米軍からの依頼です。ＰＫＯに参加しても意味が感じられないですね。ですが国民の一部からは反撃をすべきという声もあります」

総理はしばらく考え

「イラクでもＰＫＯは物議をかもしたし、僕は派遣などまっぴらだね」

これだから弱腰は嫌なんだ

「５０人近くの日本人が負傷しています。ここでＰＫＦを派遣しなければわが国は完全なる戦争無関心国家になってしまいますぞ」

「それのなにがいけないのか?」

総理は平然と返す

「なっ・・・」

「日本はこれからもこれまでも、戦争国家ではないのだよ。すばら

しき平和憲法に守られたエデンだよ、緒方君」

コイツじゃダメだ

切り札はないのか・・・

「そぉりぃ、それ、まずいんじゃないですかぁ？」

間の抜けた声が会議の空気を凍らせる

「おや、君は誰だね？」

黒いサングラスに黒のスーツ

気配が今までなかった

「僕？僕は陸上自衛隊中央情報隊の矢部１佐であります」

「ほぉ、スパイ風情が何用か？」

矢部１佐は１束のファイルを机に投げた

そして煙草に火をつけ、喋る

「それは僕がスラヴィニアで偵察した情報です。1日のラグがありますがね」

緒方がこの1佐を呼んだわけではなく、彼自身も驚いていた

ファイルには数枚の写真と書類が入っていた

「・・・！」

写真には黒い戦闘服姿の集団が会議をしている様子を捉えていた

腕章に

「ボスラヴェキニ・・・」

緒方はつぶやく

ボスラヴェキニの紋章であるダガーナイフが入った腕章を彼らはつけていた

「盗聴した内容はそれです」

と書類を指差す

・

司令官「新たな外国人標的は？」
兵員「標的はアルファチームとブラボーチームが選択をしました」
兵員「標的は駐スラヴィニア日本大使ヨシオ・サイトー。彼は明日、スラヴィニア国際空港から脱します。一部の日本人も一緒に」
司令官「他の外国人は？」
兵員「ＰＫＯに保護されていますね、日本は参加していないので狙えます」
司令官「よし、わかった」

「非常に短い会話文でしたが・・・非常に危険なないようですね、ふっふー」

そこに一人の男性が入ってきた

「君！会議中だぞ！」

財務省の大臣が叫ぶ

そして矢部に耳打ちをして立ち去った

「あーあ、早く動かないから」

総理が問う

「なにがあったんだ！」

「斉藤義男駐スラヴィニア大使と取り巻き、あと大使館を生き残った１０人が死亡しました。死因ですけどね、飛行機をミサイルで撃ち落されたらしいですよ」

その場にいた誰もが凍りつく

「し、死んだ・・・！？」

「決めるっきゃないっしょ、総理」

「坂崎２曹、赤坂３曹、横田３曹、集合命令だ」

神部先輩がおれ達の部屋を訪れてそういう

「？集合っすか？」

俺が尋ねると先輩は

「ああ、なんでも一刻も早くということだ」

以前と対テロ行動後、司令官は辞任し、後任として佐竹山１佐が就任している。彼はタカ派として有名だ

「全員よく聞いて欲しい。先日の対テロ行動が鮮明に残っているだろうが、今度はＰＫＯとして派遣が決定された」

会議室の隊員たちがざわめく

「場所はゴランですか？それともスーダン？」

一人の隊員が尋ねると

「違う」

と佐竹山1佐は答えた

「ではどこですか」

「スラヴィニア共和国」

さらにざわめく

「スラヴィニア？聞いたことないぞ」

「アフリカ？」

「いや、ヨーロッパじゃねーの？」

「スラヴィニア共和国は東ヨーロッパ、エストニアの東に位置する鉱山小国であります」

俺が発言者の方向を見ると、それは里中3尉だった

「正解、里中君」

佐竹山1佐が評価する

「我々はあくまでも後方支援だ。アメリカ軍の兵站及び物資路の確保が最優先。しかし現地では外国人狩りが横行しているため、日本大使館警備も行う。

もっていける武装は限られている。アサルトライフルやＬＭＧ（分隊支援火器）なら問題はないが、ロケット砲とかはちと交渉がいる。装甲車両も９６式装輪装甲車が限度だろう」

隊員達はおのおの納得し

「了解しました」

と答える

これが序章に過ぎないのは言うまでもない

「ポイント2、タンゴ5に支援砲撃要請。標的は戦車」

『Ｒｏｇｅｒ、ポイント2タンゴ5に空中警戒中の―ウォートホッグ《Ａ―１０サンダーボルト?》を向かわせる」

「早く頼む」

『ＨＱより―ホームベース《エストニア駐留米空軍基地》へ。地上交戦部隊がウォートホッグを要請。答えれるか?』

『こちら―ホームベース《エストニア駐留米空軍基地》、可能だ。座標は?』

『ポイント2、タンゴ5に戦車が1台』

『了解、数分後に花火をあげる』

『こちらホームベースよりアイシャロー1へ。地上軍が攻撃要請。標的は戦車1台。付近に友軍戦車無し』

『こちら―アイシャロー1《A―10サンダーボルト?》、AGM―65の使用許可を要請する』

『許可する。現地部隊との無線をつなぐ、オーバー』

「こちらリチャード軍曹だ」

『こちらアイシャロー1。敵の数とレーザー照準を頼む』

「随伴歩兵が5名、戦車が1台だ。おそらく中国製。できるか?」

『チョロい』

アメリカ合衆国陸軍第75レンジャー連隊チョーク5　リチャード・ヴェルディーク2等軍曹

アメリカ合衆国テキサス生まれの27歳

若いレンジャー隊員ではない。

イラクやアフガンを生き抜いた男は、東欧にも出撃をした

彼がいるのはスラヴィニアの地方都市「スラッコー」

スラッコーは戦略的重要拠点なのだ
国境の町として盛んであり、エストニアと正式につながるのは唯一ここだけ。

レンジャーはスラッコーへ潜入し、ここの占領を遂行していた

リチャードの目の前で角ばった白い冬季迷彩の戦車は吹き飛ぶ

チョーク５の指揮を執る彼はスラッコーでも中心部へと突き進んでいた

「２等軍曹、今のでスラッコーの防衛隊最後の戦車です」

「了解だ上等兵」

スラッコーはレンジャー部隊が完全に制圧し、ＮＡＴＯの平和維持部隊が一気に国境を越えてきた

―２０１０年８月９日―

「軍曹、任務だ」

「はい」

アメリカ陸軍第７５レンジャー連隊本部テント

「スラヴィニア軍の敗残兵がスラッコーより南へ２ｋｍのところに集結している。ＣＩＡのＵＡＶ、リーパー（ＭＱ－９リーパー）４２の偵察によれば数は１０～２０。

ＡＰＣが２台いるとの情報だ。制空権がその村は確保できていないから航空支援は不能だ。現にリーパー４２は墜落している。君らのチョーク５で偵察、可能なら奇襲して欲しい」

「政府の発表によりますと、スラヴィニア内乱に巻き込まれなくなった邦人は６０人以上、中には大使も含まれていると見られています。

これを受け、政府はＰＫＯ派遣を昨夜遅くに決定。陸上自衛隊１００人と航空自衛隊５００人、海上自衛隊７００人を現地へ派遣することを表明しました。

それでは紺屋尚内閣総理大臣の会見をご覧ください」

画面は一転し、国会にある会見場が映される

総理は重々しく口を開いた

「まず、今回亡くなられた方に哀悼の意を表明します。今回、国民への調査もなしにＰＫＯ派遣を決めたのには大きな理由があります。ひとつに邦人の安全確保。すでに６０人近い方が命を落とされています。

ふたつに日米安保に従った米軍への支援。これは戦闘的強力ではありません。物資輸送路の警備と輸送を担います」

記者からの質問があった

「違憲行為では！」

総理は返した

「イラク派遣のように特例法案を後に通しますが、一刻を争うため派遣を先にいたしました」

テレビがぷつんと切れる

「教官、私・・・」

大広間には物資を集めた隊員たちが集まっていた
これだけいても１００人だ
「どうした？」
仲沢は顔色を悪くさせ
「怖いんです・・・嫌な予感しかしなくて」
俺は答える
「心配するな、俺が護ってやるさ」
トラックに全員乗り込み、小牧基地を目指す
１時間程度でトラックは到着し、小牧空港に駐機していたＣ－１３０輸送機に全員がつめられる
「ふぅ、緊張するな」

「はい」

俺と仲沢は隣同士に座る

フライトは１０時間近くかかった

着陸したのはエストニア国際空港で、現場にはさまざまな国の国旗を装飾した輸送機が点在していた

「わぁ・・・すごい」

仲沢の口からそんな言葉が漏れる

おれ達はエストニアからスラヴィニアへ入るため、自衛隊の輸送トラックへと乗り込む。これはＣ－１３０に積まれて来た物だ

数時間で国境を越え、スラッコーという町に着いた

死臭がする

荷台の幌を開け、外に下りるとそこには数多くの死体が重なっていた

「ひっ！」

仲沢がおびえる

赤坂がつぶやいた

「ひでぇな、こりゃスラヴィニア陸軍の兵士だ」

自衛隊はスラッコーの町の片隅にテントを置き、１０００人の隊員たちが入った

―８月１１日　ＡＭ７時５分自衛隊到着から３０分後―

『・・・ガ・・・お・・・と・・・ガー』

無線が途絶えた

「・・・ミルトン・・・ミルトン３等軍曹、どこだ」

ミルトンは応答しない

「くそ・・・キース、キース1等兵・・・？」

誰も反応してくれない

「クソッ・・・あし・・・足が」

材木が俺の脚に横たわり、酷く痛む

「誰か生きて・・・ないのか？」

「ぐ・・そう、ぐん・・・そう」

声が返ってきた

「誰だ・・・？」

「自分です、ロレンゾ上等兵であります」

「無事か」

「何とか・・・」

フランクリオン・ロレンゾ（19）

カンザス州生まれのイタリア系アメリカ人

「私も何とか・・・」

「アリシェルト伍長か！・・・お前は無事か」

アリシェルト・ウィッテ伍長、ボストン出身の女性レンジャー隊員

一拍置いて

「いや、そのおなかに大木が・・・痛みはないんですけど動けなくて。ロレンゾは？」

「俺は背中に木が・・・これだから針葉樹は嫌いだ」

事態があったのは８月１０日ＰＭ１１時２０分

米陸軍第７５レンジャー連隊チョーク５は２ｋｍ離れた村をがけの上から偵察していた

「８月だと東欧も暑い・・・」

双眼鏡を覗きながらリチャード・ヴェルディーク２等軍曹はつぶやく

「夜なんですけどね」
とミルトン３等軍曹
「見えたぞ」
双眼鏡に映ったのは５，６人のスラヴィニア陸軍兵だった
「チョーク５からＨＱ、応答願う」
『こちらＨＱ』
「敵５人を視認した。まだいると思われる」
『対処は？』
「危険と判断する」
『了解、レーザースポットシステムＳＯＦＬＡＭを起動させて目標になりそうなものをロックオンしてくれ』
「了解」
リチャードは背負った袋から大型の機械、―ＳＯＦＬＡＭ《ＳＯＦＬａｓｅｒ　Ｍａｒｋｅｒ》を取り出す

「状況を開始する」

ＳＯＦＬＡＭ越しには―ＡＰＣ《装甲兵員輸送車》が１台見えた

「よし、こいつをクラスター爆弾で吹っ飛ばそう」

ロックオンしたときだった

「―ＲＰＧ！《対戦車ロケット弾》」

シューッと推進剤が燃える音がし、崖にぶち当たった

崖は崩れ、おれ達は土へと消えた

「クソッ、あれからどれだけたった?」

アリシェルト伍長が答えた

「５時間弱でしょうね・・・イツツ・・・」

「助け来るといいんですけど」

ヴェルディーク伍長のつぶやきが、ただ空を震わすだけだ

「先ほど米陸軍がこの先の村を制圧し、さらに向かっている。我々はそれに随伴して兵站を補給する」

指揮官の大和田1等陸尉が指示を出す

「全員89式小銃のセイフティをかけ、乗車せよ」

パチン、パチンと音を立ててセイフティをかける

高機動車が前衛を勤め、後衛に軽装甲機動車が入る。

俺達第2小隊は兵站輸送のトラックへ護衛として乗り込んだ

村に入ったところで銃声が響く

「おいっ、なんだ！？」

トラックの荷台に積まれた無線機がガーガーと音を出す

『スラヴィニア軍の攻撃、繰り返す攻撃。全員、応射はするな。繰り返す。応射するな』

タン、タタンと弾が突き抜ける

ピシュッと音を立て、どこかの小隊の1等陸士の腕に当たった

「イテェッ！うた、うたっ撃たれた！」

血がどくどくと流れる

「たすけ・・・死ぬっ、死んじまうッ！」

俺が動こうとしたとき、仲沢が医療パックを取り出した

「教官、手伝ってください」

俺は止血するため、動脈を抑える
そこへ仲沢は止血剤を貼る
腕には突き抜けた後があるから問題はない
「これで平気だけど、今日で帰国だね」
仲沢が告げると1等陸士はありがとう・・・ありがとうと言った
トラックは流石に進めなくなったのか、停車した
『射線上に出るな、繰り返す出るな・・・全員降車しトラックを護れ』
射撃許可は！
俺が叫ぶと無線は
『許可はないが、生命の危険を感じた場合は各個の判断で威嚇射撃せよ』

トラックを降りると銃撃戦というすさまじさを体感した

「全員降りろ！遮蔽物に身を隠すんだ！」

隊員たちがあわてて飛び降りる

夏の針葉樹林の山

あちこちに緑色の夏季迷彩に身を包んだ敵が見える

「全員撃て！当ててもいい！」

俺の指示で全員が撃ち始めた

俺が目をつけたのは山肌に折り敷いているスラヴィニア兵だった

奴はＡＫをこちらへ撃っている

スラヴィニア兵はグリーンのヘルメットと緑の防弾アーマーをつけていた

俺は無難に胴を撃つ

一射撃で奴は倒れた

隣で一ＭＰ２４９《分隊支援火器》が火を吹く

空薬莢が散乱する

一連の動作に俺は戦場へ来てしまったという念を抱いた

隣では仲沢が８９式小銃をパンパンと撃つ

「第２小隊、前へ！」

楢木隊長の声にあわせ、隊員数人が歩き始めた。俺も従って仲沢の方を叩いて進ませる

「吉山曹長！そっちは右の建物！私は中央！坂崎は左の土手へ回りこめ！」

俺は向かって左側の山道へと走った

死角だ。敵は気づいていない

俺には池田一士と仲沢がついてきていた

「怪我ないか、二人とも」

「ないっす！」

「ないです」

「よし」

しばらく歩くとがけが崩れているのに気がついた

「？」

あまりにも不自然だった。こう、崩れたてというか

敵までは１００ｍといったところか

「坂崎２曹、あれ！」

池田一士の声に反応した俺は振り向いた

彼が指差す先には事切れていると見られるアメリカ兵の姿があった

「死んでるな・・・」

首筋に人差し指と中指を当てて脈を計ったがない。体温も失われている

「きょ、教官！生きてる人いますッ！」

右から仲沢があわてた様子で走ってきた

「どこだ」

俺が走っていくと一人のアメリカ兵が大木に足を挟まれて脂汗をかいて倒れていた

―「Ｈｅｌｐ　ｍｅ．　Ｉ　ｐｉｎｃｈｅｄ　ｔｈｅ　ｌｅｇ　ｉｎ　ｍｏｂｉｌｅ．　Ｐｌｅａｓｅ．」《助けてくれ。足を挟まれて動けない・・・頼む》

男のアメリカ兵は英語で告げる

「足が挟まれて動けないか・・・池田、手を貸せ」

俺と池田で針葉樹を持ち上げ、仲沢はアメリカ兵を引っ張り出した

―「Ｈｕｈ！・・・Ｓｕｒｖｉｖｅｄ，ｔｈａｎｋ　ｙｏｕ」《ふぅ！・・・助かった、ありがとう》

―「ＹｏｕｒＷｅｌｃｏｍｅ」《どういたしまして》

俺はそう告げた

アメリカ兵は辺りを見回し

―「Ｗｈｅｒｅ'ｓ　ｍｙ　ｃｏｌｌｅａｇｕｅｓ？　Ｎｏｔ　ｓｅｅｎ？」《俺の仲間はどこだ？見てないか？》

？

―「Ｓｏｒｒｙ，Ｉｃａｎ'ｔＳｐｅａｋＥｎｇｌｉｓｈ」《すまない、俺は英語が得意ではない》

俺はあまり英語が出来ない

そう答えざるをえなかった

―「Ｏｈ．．．Ｓｈｉｔ．．．Ｐｌｅａｓｅ」《そんな・・・くそ、頼む》

その時、左足を誰かに掴まれた

見ると誰かの手があった

木に隠れていたんだ

しゃがむとそこにはアメリカ兵がまだ居た。奥に二人見える

「おい、お前の仲間だ！」

俺がジェスチャーで伝えると彼はその草陰を見て

―「Ｌｏｒｅｎｚｏ！！Ａｒｉｓｈｅｒｕｔｏ！！」《ロレンゾ！アリシェルト！》

数分で男女のアメリカ兵を引きずり出すことに成功した

戦闘はいつの間にか終わり、自衛隊はその村の警備を命ぜられていた

―「Ｈｕｎ・・・？Ｙｏｕａｒｅ Ｊａｐａｎｅｓｅ？」《ふぅ？、お前日本人か？》

隊長格らしきアメリカ兵が俺に問うので

「Ｙｅｓ」

と反応する

すると男は女の隊員と話して

「それはよかった。私日本留学経験があるんです」

女が流暢な日本語を話した

「我々はアメリカ陸軍第７５レンジャー連隊チョーク５です。私はアリシェルト・ウィッテ伍長で、彼がフランクリオン・ロレンゾ上等兵、彼がリチャード・ヴェルディーク２等軍曹です」

俺は答える

「ウィッテ伍長、君に通訳を任せても？」

すると彼女は

「はい、大丈夫です」

「じゃあ、俺は陸上自衛隊第１０師団の坂崎２等陸曹だ。そっちのガキは池田一士、そこのは仲沢一士」

すこしの間をおいて彼女は向こうのヴェルディーク軍曹に相談した

「我々は感謝しています。もしよろしければ、救護テントまで連れて行ってくれませんか？」

この出会いは俺の人生に深いものを残すこととなった

スラヴィニア共和国軍ラヴェニズク・クラフチェネンコ（前書き）

※徐々に至らないところ直したいとおもいます

スラヴィニア共和国軍ラヴェニズク・クラフチェネンコ

「本当に助かりました」

アリシェルト・ウィッテ伍長は再三そう告げた

「気にしないでくれ、同盟国だしな」

するとリチャード・ヴェルディーク軍曹が近づいて俺に手を差し出した

俺も手を差し出して握手する

「Ｓｅｅｙｏｕ，Ａｇａｉｎ」

―スラヴィニア共和国陸軍第２１歩兵機械化連隊指揮所ポイントズルー―

「クラフチェネンコ少佐、第７歩兵分隊がポルソーの村を離れました。偵察部隊によると敵の数はＭ１Ａ２戦車が３台、ブラッドレー騎兵装甲車が４台だそうです。またポルソーには日本の自衛隊の装甲車部隊がいるとの情報も」

ラヴェニズク・クラフチェネンコ陸軍少佐、２９歳

ヴルモフ陸軍士官学校を首席で卒業したエース。

近年、ロシア国境間で起きた小規模戦闘にすべてかかわっているインテリかつ、現場の叩き上げ
部下からの信頼も厚く、さらに彼の部隊の生存率は７５％と非常に高い。

「ステリネフ少尉」

「はっ」

「第７歩兵部隊はすぐ帰還させろ。それと第９戦車中隊はどうなっている？」

ステリネフ少尉は地図を取り出し

「第９戦車中隊はポルソーより南に３ＫＭの地点にあるラヴィエスカという都市にいます。空軍さんと防空軍の地対空ミサイルで制空権が確保できています。敵の部隊は
そこで迎え撃ちますが、いかがしましょうか」

クラフチェネンコはすこし考え

「第１１対戦車攻撃班と第４機動歩兵連隊の狙撃部隊を動員してく

れ。ボスラヴェキニは？」

ステリネフは地図を指差し

「ボスラヴェキニの第２小隊は現在ラヴィエスカにいます」

「狙撃部隊か？」

「はい」

「なら第４機動歩兵連隊がは無しだ。連中に狙撃させろ」

「了解しました。しかし第１１対戦車攻撃班は移動手段がＵＡＺです。間に合いませんよ」

「問題ない。コネでＭｉ－３５スーパーハインドを借りてある。そこにつめるだろう、対戦車ミサイル」

－１時間後　ラヴィエスカ、ミーシャ自動車工場屋上－

「こちら第１１対戦車攻撃班。９Ｍ１３３コルネット対戦車ミサイル設置完了」

３人の対戦車班の隊員はレーザー照射で追尾する９Ｍ１３３コルネット対戦車ミサイルを屋上へ取り付ける。

これならＭ１Ａ２戦車を狙い撃つ事が可能だ。

「ロジャー、これでいいよな？」

そこにはスラヴィニア共和国陸軍の制服を着ていないものが居た。

ロジャー・ヒッカース、元アメリカ陸軍の対戦車部隊。

現在は―ＰＭＣ《民間軍事企業》に在籍。彼の入社した企業は「ブライネル・セキュリティカル」と呼ばれるＰＭＣで、業界でも大手である。

軍事オフィサーとして現在彼は対戦車戦闘について教えている

「ああ、問題ない。第1攻撃終了後にコルネットを解体して下層階へ移動しＲＰＧ－7を撃て」

『トリニティー1からトリニティー2、ラヴィエスカが見えてきた』

『了解』

2台の戦車が舗装道を突き走る

『空軍さんはなにやってんだ？』

『まったくだね』

―同日２０分前　エストニア米空軍基地―

「フォーブス１、フォーブス２、フォーブス３、ライオネル小隊離陸準備完了」

滑走路に米空軍制空戦闘機Ｆ―２２ラプターコールサインフォーブスが３機、発進体制をとっていた

『こちら管制、離陸を許可する』

３機のＦ―２２ラプターは一気に空へと躍り出る

『こちらトースタージョーキング（ＡＷＡＣＳ）、ただいまから貴機編隊（ライオネル小隊）の管制を任せられる。よろしく』

Ｅ―３セントリー早期警戒管制機はバルト海上空を飛行していた

バルト海にはスラヴィニア海軍のＳＡＭ搭載フリゲートが哨戒活動をしているため、Ｅ―３セントリーは高空かつエストニアよりで飛行をしている

ＰＫＯの海軍部隊はバルト海へ向かっているものの、まだ到着には至っていない。

『よろしくトースタージョーキング』

『よろしくぅ』

『よろしくお願いします』

ラプター3機にはジョン・ラトヴィッツ中佐（フォーブス1）、クリストル・スタックハウス大尉（フォーブス2）、アマーリア・ケンショー中尉（フォーブス3）が搭乗していた。全員プロのパイロットだ。

『作戦行動を早めに行って欲しい。すでに現地にはコールサイントリニティー、M1A2小隊が入っている。現地の空中哨戒機は5機。F－22初のドッグファイトってわけだ。飛行速度とデータから照らし合わせるとボギー（敵機）はMig－29ファルクラムだ。十分注意して欲しい。それから対空戦闘準備がなされているため、SAMにも警戒を怠らないでおくれ』

『コピー（了解）』

－現在時刻PM2：30－

『トリニティー1、空軍さんが登場するぞ』

『了解トリニティー2』

ラトヴィッツはＩＦＦ（敵味方識別信号）を送信した

『ＩＦＦ反応なし、ボギーだ』

『コピー』

『コピー』

さて、どうするかな

ラトヴィッツは7年前の２００３年にイラク空軍のミラージュＦ－1やＭｉｇを多数撃墜したエースだ

『全員ＦＣＳ（火器管制）作動、敵航空機に注意』

レーダーには５つの機影がしっかり表示されていた

『カダーニャ2からカダーニャ5までの全機、敵航空部隊が空域へ入ったぞ』

Ｍｉｇ－２９ファルクラムの小隊はカダーニャというコールサインだった

『雇い主のガゼル（対戦車ヘリ）を守らにゃならん。気を引き締めろ。機体は古いが近代改修されたコイツならフランカーにも遅れはとらん筈だ』

カダーニャ小隊、実は彼らも「ＰＭＣ」の社員である

ロシア空軍出身者などで構成されており、腕もピカイチである

スラヴィニアは早期からＰＭＣを戦争へ導入しており、人材不足を補っていた

『ＡＩＭ－９発射準備完了』

ラトヴィッツはディスプレイに表示される文字を見た

『全員敵をロックオンできるようにしておけ』

ついに目視で確認できた

両軍の戦闘機は一斉に誘導ミサイルを発射する

『フレアフレアフレア！』

『フレア撒けっ！』

赤い発光体にミサイルは踊る

『もらいいいい！』

スタックハウスの機はＭ６１Ａ２機関砲が発射しやすいよう、ステルス性重視で装備されている開閉装置が取っ払ってあった。

ヴォオオオ！と機関砲が唸る

Ｍｉｇ－２９ファルクラム（記録ではこれはカダーニャ３）が被弾した

『カダーニャ３被弾！機器系統停止！機内に黒煙がッ！クソ！なにも・・・みえ！』

『カダーニャ３、落ち着け！』

『墜落す－』

爆音が空を震わす

『こちらフォーブス２、ファルクラム撃墜。あと４機』

サイドワインダーミサイルがフォーブス３より放たれた

『カダーニャ４！ロックオンされた！回避行動に入る！』

Ｍｉｇ－２９ファルクラムはその旧式機ではありえない挙動を見せる。

ラトヴィッツは目を疑った

『なっ・・・！敵は近代改修をしたファルクラムだ、気をつけろ』

ビーッ！ビーッ！

ミサイルにロックオンされたのを知らすアラームがＦ－２２フォーブス２機内に響く

『ロックオン！？』

フォーブス２は被弾した

『フォーブス２！応答しろ！』

ラトヴィッツの答え駆けむなしく、スタックハウスのＦ－２２は針葉樹林へと突っ込んでいった

『ターゲットダウン。残り２機！』

フォーブス3、アマーリア・ケンショーは故郷の恋人を思い出す

彼女は自らの意思でこの戦地へと赴いた

『ラトヴィッツ中佐！後退しましょう！』

ラトヴィッツは言う

『俺を置いてゆけ。貴様は援軍を連れて来い！』

『し、しかしっ！』

『構うな！行け！行け！』

ラトヴィッツは手元のＭ６１Ａ２バルカン砲のスイッチを握った

ドドドド！とけたたましい砲声がＭｉｇ－２９ファルクラム　カダーニャ２を打ち抜いた

『アメ公やりやがる』

カダーニャ小隊隊長マルコス・オルグレイブは死を覚悟した

『カダーニャ４、カダーニャ５！全員編隊を組み、一気に襲い掛かるぞ！』

『ダー！』

敵は編隊を組んできたか

ラトヴィッツの手袋の中は汗でまみれる

Ｆ－２２の全兵装を持って叩き潰す

ラトヴィッツは複数目標を同時にロックし、残ったサイドワインダーなどを打ち込んだ

『カダーニャ４被弾スるっ！ぐぁあああ！』

『カダーニャ５ひだーガガガッガガ』

空域に残るはＦ－２２とＭｉｇ－２９

”衝突”

２つの機体は空中で大爆発を起こした

「随分派手にやるもんだな」

ロジャー・ヒッカースはつぶやく

『フォーブス１ロスト。同時に敵哨戒機もロストした。フォーブス３、応答せよ。こちらトースタージョーキング。隊長は残念だった。基地へ帰投せよ。』

『コピー・・・』

『トリニティー1、前進』

M1A2戦車、トリニティー1戦車長グスタファ・マーコウ陸軍中佐はキューポラから頭を覗かせて言う

「補修キットが間に合ってよかった」

M1A2戦車後部にはアクティブ防衛システム用の小型追尾ランチャーが取り付けてあった

「ヤード兵長、行くぞ」

キューポラを閉め、中へと引っ込んだ

ロジャー・ヒッカースは双眼鏡に写る迫り来る戦車の装備に驚いた

「アクティブ防衛システムだ？あんなもんあったらコルネット無駄だな。コワルスキー、来い」

第１１対戦車攻撃班のコワルスキーはこのＰＭＣの男にくっついていた。

ロジャー・ヒッカースは組し易いコイツを上層部との駆け引きによく使っている

「いいか、敵戦車はミサイル迎撃システムを搭載してる。地雷でもない限り壊せん。ボスラヴェキニの狙撃兵を二人要請しろ」

「はっ」

すぐに都市迷彩を着たボスラヴェキニ第３狙撃小隊第２班の隊員二人が駆けつけた。

観測手
スポッターと狙撃兵だ

「よっし。いいか、１台目の戦車の砲塔後部についてるケースがわかるよな？」

「ダー」

「あれに伸びてる赤いケーブルは見えるか？」

「見えます」

「あれを撃ちぬけ」

「ダー」

てきぱきと二人は狙撃用意を始める

狙撃手、アンドレイ・ポコヴィッツ中尉が握る銃はダネルＮＴＷと呼ばれる対物ライフルだ。

弾薬は１４．５ｍｍ×１１４弾と呼ばれる大型弾薬を使用する。

スコープはドイツ製の光学スコープで、精度は高い

「距離はざっと計算して・・・５００ｍ、いけるか？」

ロジャー・ヒッカースが言うとアンドレイは

「打ち抜いて見せますよ」

と答える

「距離５００、風向きは・・・西。風速はざっと１０・・・」

アンドレイはスポッターの情報を元に、ＮＴＷのカールツァイス製スコープをいじる

「準備ＯＫ。いつでも」

ロジャー・ヒッカースは撃てと一言

「ダー」

引き金を絞るだけだった

ダァガァン！と大きな銃声と共に１４．５ｍｍ弾は風の抵抗をあまり受けることなく、Ｍ１Ａ２戦車のアクティブ防衛システムのコードを撃ちぬいた

「アクティブ防衛装置故障！」

「は？なんだって？ヤード兵長」

ヤード・スコッツェニー兵長はディスプレイを指差した

「見てください。オフラインになってます」

「コルネット、レーザー照射開始」

対戦車班の隊員はコルネット対戦車ミサイルの発射装置に取り付いた

「アゴーイ！（撃て）」

ミサイルは射出された

「ミサイル警報！」

M1A2戦車にはレーザー照準されたときになる警報装置がついている

「ミサイルに対して正面からぶつかるように動かせ！」

トリニティー1はミサイルによる損壊を減らすため、増加装甲されている前面をミサイルに対して向けた

「第2射発射」

ロジャー・ヒッカースの合図により、別の高層ビルに配置されていたコルネット部隊が撃った

「2発目来ますッ！」

「ナニッ！？」

グスタファ・マーコウ中佐は対処に困ってしまった

結果として、世界最強のM1A2MBTは2発のミサイルを受けて

行動不能となってしまった

―コウロー山スラヴィニア空軍基地―

スラヴィニアは鉱山と同時に普通の山も数多くある。

そのひとつがこの「コウロー山」だ

全体が空軍基地の要塞となっており、山中は戦闘機の格納スペース及び弾薬庫、バンカーにパイロットが住む施設が併設されている。

空軍の防衛部隊も常駐する、スラヴィニアでも攻め落とせない陣地となっている

「ラヴェニズク・クラフチェンコから連絡です、少将」

「うん、見せて」

一人の軍人が、革張りのいすに座って報告書を読む

「ふーん、Ｓｕ－２５ＫＭスコルピオーンの派遣要請?あのガキ身分わきまえてるのか」

ドミトリー・スパヴェノビッチ空軍少将

旧ソ連時代からスラヴィニア空軍に在籍し、冷戦時代には自身も戦闘機に乗っていた。

軍でハト派の一人の彼は戦闘機の出撃にすこし渋った

「・・・まぁ、いいか。出撃準備させろ」

戦闘は激しさを増してゆく

「赤十字の輸送トラックの護衛？」

「ああ、そうだ」

陸上自衛隊第１０師団の隊員達はそう言い渡された

「なぜ？」

「ポルソーの村に避難民キャンプが出来た。赤十字の車両は何かと狙われやすいんだそうだ」

坂崎修一は楢木隊長へ質問するが、答えはそんなものだった。

―エストニア・スラヴィニア国境―

「赤十字社のエミリー・ランドグリーズです」

「陸上自衛隊中部方面隊、第１０師団の楢木です」

楢木隊長以下９名の第２小隊は国境に居た

赤十字社のエミリー・ランドグリーズと名乗った女性はとても若かった

「本日は我々のために来ていただきありがとうございます」

金髪は後ろで結ばれている。茶色の小さなめがねにそばかすの顔。十代に見えなくもない

「いえ、それで物資は何を？」

「食料と衣類です。医薬品もすこし」

「了解しました」

陸自は９６式装輪装甲車を出すことになった。

６輪装甲車は銃架にＭ２重機関銃を装備している。

２台の装甲車が輸送トレーラー３台の前後につき、脇は軽装甲機動車が固める

俺、赤坂、池田、仲沢４名は右側の装甲車に乗る。

運転手は赤坂が務め、俺は銃座（Ｍ２重機関銃）を使う。

左には江崎、横田、七宮、吉山陸曹、楢木隊長が乗りこんだ。

前後の装輪装甲車には別の師団が乗る。

「出発」

―スラヴィニア共和国陸軍第２１歩兵機械化連隊指揮所ポイントズールー

「クラフチェネンコ少佐、第３師団機動歩兵中隊第二偵察隊のウェニスク中尉から無線が入っています」

「ん？わかった」

ラヴェニズクは無線機をとった

「こちらポイントズールー、ラヴェニズク・クラフチェネンコ。そちらは？」

「こちら第二偵察隊ヴィクトル・ウェニスク中尉であります」

「用件は？」

「赤十字のトレーラー３台を発見しました」

ほう、中身によっては襲撃する価値がある

「中身は？」

「医薬品と食料と見られます」

価値はあるな

「よし、場所は」

「スラッコーよりポルソーへ向かうＭ７２国道です」

「偵察隊だけでやれるか？」

「ええと、援護がいます。ＪＧＳＤＦ（陸上自衛隊）です。装甲車２台、兵員輸送用の機動車２台」

「お前達の武器は？」

「ＲＰＧ－７、小銃です」

「無茶だな。制空権はもない。撤退させ・・・いや、待て」

受話器を置き、部下のモンショル・ステリネフ少尉を呼びつけた

「はい、なんでしょう」

「ポルソーの近くに重火器を持った友軍はいないか？」

「いえ、いません。しかしポルソーより南２０ｋｍのグラヴェンズ山に第３砲兵隊がいます」

「よし、それでいこう」

―グラヴェンズ山第3砲兵隊―

「第3砲兵隊のミコシェ中尉です」

『こちらポイントズールーのクラフチェネンコだ』

グラヴェンズ山第3砲兵隊指揮官リュミエール・ミコシェは脳裏に基地で読んだ軍の新聞にあった青年を思い出した。

「ああ、あの！」

『ごちゃごちゃいうな、緊急任務を任せたい』

「は、なんでしょうか」

『ポイントアルファ、座標は・・・9と21だ』

「砲弾の種類は？」

『榴弾だ。目標には命中させるな』

「了解しました。何発程度打ち込みましょうか？」

『10発頼む』

「了解しました」

無線機を切り、ミコシェはため息をつく

「全く、ガキは・・・おい軍曹！兵隊達に自走砲２台動かさせろ！ポイント座標はアルファ、９２１！種類は榴弾！数１０発！復唱！」

「２台！アルファ！９２１！榴弾！１０発！」

「よし、やってこい」

８８式１５５ｍｍ自走榴弾砲は中国、中国北方工業公司（ノリンコ）製の自走砲でスラヴィニア軍はこれを主力としている。

「ハンマー１、こちらミコシェ。準備は？」

『こちらハンマー１、いつでも。全車ＯＫです』

「よし、各車５発を連続射撃！」

―同時刻　Ｍ７２号線―

「おい、なんかどんどんって聞こえねえか？」

「あ？そりゃ戦場だからな！」

９６式装輪装甲車の後部スペースに座る隊員達はその音を何かとは知る芳もなかった

『着弾５秒前・・・４・・・３・・・２・・・着弾確認！』

砲弾は９６式装輪装甲車をはずれ、横の随伴していた赤十字の白いトヨタのランドクルーザーに直撃した

隊列中央、右の銃座に座っていた坂崎は息を飲むとともに、死臭と金属が焼ける臭いをかいだ

『２発目・・・２・・・１・・着弾！』

今度はＭ７２号線に着弾した

坂崎は銃座から中へ入り、仲沢と頭をぶつけた

「あだっ！」

「いたぃっ！」

しばし沈黙し、すばやく坂崎は「すまん」と謝る

そして運転席の赤坂へ話しかけた

「遠距離砲撃だ。砲声と着弾から見てそこまで遠くはない。だがココを狙っている。本部へ状況を確認しろ」

「了解」

―スラッコーＰＫＦ統括本部―

「こちらＪＧＳＤＦ」

『こちら第１０師団の赤十字護衛部隊！敵から攻撃を受けた！』

担当官の勝呂茂一２佐はすぐにマップを出した

「砲撃地点は？」

『おおよそだが・・・おい、坂崎！どの程度だ？・・・・わかった。聞こえるか？位置は南！５０ｋｍ圏内の山！通信終了！』

勝呂はすぐに位置を割り出した

「・・・グラヴェンズかニキョリカ山岳だな・・・よし」

彼はＰＫＦ空軍部隊へのホットラインをつないだ

―エストニアＮＡＴＯ空軍基地―

『こちらＪＧＳＤＦの勝呂中佐（２佐）、航空支援を願いたい』

「こちらイタリア空軍のアルナンド・ペドロルロ大佐だ、状況は？」

『わが部隊の赤十字護衛部隊がスラヴィニアの砲兵に攻撃を受けている』

「よし、座標は」

『不明、しかしグラヴェンズもしくはニキョリカ山岳と見られる』

「了解、すぐに援護機を回す」

イタリア空軍機、Ｆ―１６ファイティングファルコンは滑走路に３機並んだ

―Ｍ７２号線―

「また砲撃音だ！」

坂崎は叫んだ

ひゅぅぅぅと音がし、目の前へ墜ちた

ドォォン！

車の中にアスファルトの焼ける臭いが充満した

偵察していたスラヴィニア陸軍の隊員達は砲撃に歓喜した

「これでいけるぞ！」

１０人の偵察隊員は手に持つＡＫ－１０３の安全装置をはずした

砲撃はほとんど外れ・・・いや、わざとはずしたのか？

坂崎は落ち着いて考え始めた

「・・・敵だ、敵が来る」

そうつぶやいた

「え？敵？敵が来るんですか？２曹」

池田の声を無視して坂崎は銃座へと戻った

M２を触り、ジャキンとレバーを引く

M７２号線の脇は丘陵地帯だ。しかも木が生い茂っている

右で何かが動いた。

坂崎は回転銃座を右へ回す

そこには敵、スラヴィニア軍の制服を着た隊員が１０名ばかし、走ってきていた

坂崎は迷うことなく、M２の押しがねと呼ばれる引き金に当たる部分を押す

ドドドドドドド！

銃声は彼らのアーマーを切り裂く

ロシア語で何かが聞こえてくる

坂崎、彼は知らない

「敵の攻撃！退避！」

まず最初の掃射で工兵のヤロスラフ・マーギン上等兵がなぎ倒された

次に分隊支援火器を持つユスリフ・コロコフ1等兵も頭を粉々にされる

ヴィクトル・ウェニスク中尉はこの反撃に驚いた

（アノ砲撃の中、ここまで正確に射撃を！？）

命の危険、そして部下の全滅を恐れ彼はすぐさま部隊に撤収命令を出す

「敵は逃げたぞ」

坂崎はそういって車内へ滑り降り、今度は仲沢の胸と激突した（そんなに大きくはない）

「あぶっ！」

「んくっ！？」

しばしの沈黙

「・・・わぁぁあぁああ！？」

「ひゃあああ！」

坂崎は胸から顔を離し、顔を赤らめてスマンと謝る

「あっ、いえっ、そのっ」

しどろもどろする仲沢

―グラヴェンズ山第３砲兵隊―

「砲撃の増量命令だ！５発をさらに撃ち込む準備をしろ！」

砲兵達は砲弾のケースを保管所から持ち出して自走砲へと向かう

―グラヴェンズ山より南へ２０ｋｍのＮＡＴＯ軍の領空―

「こちらビッター・ピエトロ、コールサインアンジェロ」

「こちらＪＧＳＤＦの勝呂。援護を頼みたい」

「・・・早速対地レーダーに反応あり。大きさからして大砲だ。攻撃する」

HUDに入力された敵が捕らえられる
７０ｍｍロケット弾を装備するこのＦ－１６は対地攻撃に特化されている
「敵を目視で見つけた。自走砲だ」
－グラヴェンズ山第３砲兵隊－
「おい、何の音だ？」ミコシェは聞き覚えのない音に疑問を抱いた
すると砲兵達が逃げ始めた
「お前らどこへ・・・・！！！」
山の向こうから戦闘機が飛んできていた
「はいはーい、こっちみてねー」
赤いトリガーを押すと７０ｍｍのロケット弾が８発発射される
ドォンドォンドォンドォンドォンドォンドォンドォン！！

３機のＦ－１６が計２４発のミサイルを砲兵隊の基地へ撃ち込んだ
８８式１５５ｍｍ自走榴弾砲３台は見事花火を咲かせて砕け散る

「敵撃破、帰還する」

－スラヴィニア共和国陸軍第２１歩兵機械化連隊指揮所ポイントズール－

「そうか・・・しかたあるまい。それに赤十字のキャンプにはうちの工作員が入っているらしいしな・・・」

生き残った偵察隊の報告を無線で聞いたラヴェニズクは無線機を置いた

部下のモンショル・ステリネフ少尉がそこへ駆けて来る

「少佐、ラヴィエスカ攻防戦に勝利しました。米軍機甲師団はさがります」

「よし、よかった。Ｓｕ－２５が助かったな」

「はい。これに乗じてわが軍の戦車部隊が駐留に成功しました。他にもＰＭＣが軍事顧問として入っています」

「まずまずの出来だ」

―ポルソー赤十字キャンプ―

「ありがとうございました。仲間は失いましたが、最低限の被害で済ますことが出来ました」

とエミリー・ランドグリーズは答える

「いえ、完全にお守りできなかったことは申し訳なく思います」

「お気になさらず。それでは」

赤十字スタッフを援護した自衛隊はスラッコーの基地へと帰還した。

―1時間後　ポルソー赤十字キャンプ―

そこにはビジネスマン風の男が立っていた

しかし日に焼けた肌が黒いスーツに合っていない

彼はスラヴィニア保安局の工作員、ダニロフ・マックトゥグスキー中佐、通称ハウンド（猟犬）。

彼はこのキャンプである人物を捜索していたのだ。

「・・・見つけた」

そこにはスラヴィニア国財務大臣「リュングルト・ミシェルコネフ」とその一派がぼろぼろの平服に着替えて難民面をしていた

ハウンドは獲物を狩る（前書き）

今回は海戦なのですが、知識がなさ過ぎて酷いです。今回ストーリーの動きは少ないので、軽く読んでやってください。

ハウンドは獲物を狩る

一人の壮年の男性が居た

彼の名はリュングルト・ミシェルコネフ

スラヴィニア国財務省財務大臣

彼はクーデター軍から逆賊の判を押され、首都ヴルモフから密かに脱していたのだ。

「私は生きて帰れるのか？」

部下は答える

「わかりません」

状況は最悪だった

国境近くのポルソーまではやってきたが、どうも避難民に工作員が混じっているのだ

「ウシュコ、工作員がいる」

ミシェルコネフは部下、元スラヴィニア司法局捜査官ウシュコ・グルンタールに告げた

「大臣・・・ではこちらへ」

ウシュコは群集の中へ大臣を押し入れた

「丸見えだっつーの」

猟犬は一部始終を見ていた

「問題は、どう殺すかだなあ・・・」

猟犬、ダニロフ・マックトゥグスキー中佐は目標の殺害方法に悩んでいた

（このまま行けば蜂の巣だろうしな・・・ふぅむ・・・）

エミリー・ランドグリーズ２４歳

イギリスの大学を卒業後、赤十字社へ入社した。

「エミリー、こっち手伝ってくれ！」

「はーい」

彼女は人を助けることに集中し、周りが見えていなかった・・・

ダニロフこと猟犬は持ってきていた注射器を取り出した
非常に小型な軍用のアドレナリン注射器だった。
中にはアドレナリンではなく、危険な劇薬ではあった・・・が

そこからの動きは往年の工作員、さすがというべきかすばやい動きで群集へ近づいた

（・・・殺気!?）

ウシュコはそのかき消された殺気を体で感じた

だが位置がわからない

（どこだ・・・・ッ!?）

目の前に大臣へ伸びる手があった

ウシュコはその手を払いのけようとし、針が指へ突き刺さった

（ぐ!?）

針を刺した男はすぐに立ち去った

ウシュコは体に激しい痛みを覚えた

「うぐっ・・・！うごぉぁっ！」

口から信じられない量の血が、吹き出る

「ウシュコ！？ウシュコッ！」

同僚の声を尻目に彼は事切れた

「何？・・・えっ・・・死んでる！？

エミリーが雑踏を踏み越えて行くと一人の男が死んでいた

「誰！？だれが殺したの！？」

そばについていた男を問いただす

「ドクター、我々はココを出る。構うな」

「できないわ！死んでるのよ！」

「どくんだっ！」

男はぼろぼろのスーツからピカピカ光る拳銃を取り出した

「どけ！我々は出国するのだ！」

その時、群衆の一人が叫んだ

「あいつ、財務大臣のリュングルトだ！」

群集が怒気を増す

「お前のせいで家族は離散した！」

「そうだそうだ！」

リュングルトは恐怖した

国民が怒っている

その時一発の銃弾が、リュングルトを撃ち抜いた

ハウンドは狩ったのだ。

ハウンド、ダニロフは雑踏の中へと消えた。

こちらにもハウンドが居た

コディアック・サービス・コーポレーション（以下ＣＳＣ）の社員、マグダネル・グォンツォフ。

彼は愛銃のＭ８２Ａ１を取り出した

ＣＳＣはスラヴィニア専属のＰＭＣで、彼もまた軍事顧問の一人だった。

オーストラリア軍の出身の彼はこの地を楽しんでいた。

彼の手には指令書が握られていた

彼が倒すよう命令されたのは法務局局長、ラーニン・シャスク。

グォンツォフがいるのはバルト海沿岸の町ハロウシャセクス。

ハロウシャセスクは冷戦時代、欧米への牽制をかけるためソビエト海軍が作った軍港である。

現在、港は拡充されて普通の港と軍港が併設している。

港は来るＰＫＦ海軍侵入阻止のため、軍艦がひしめき合っていた。

スラヴィニアでも内陸部のここは、ＰＫＦ空軍でさえ近寄れないのだ。

ここにラーニン・シャスクがいるという情報はスラヴィニアの秘密機関が探し出した情報であった。

ラーニンは今日、避難民輸送船で亡命をする・・・と

彼は3日、座礁した貨物船にへばりついていた

ここから港がよく見える。

ラーニンは長身で、２ｍの身長だ。

目立つ

そこへ一台のタクシーが止まる
そこから２ｍの男が出てきた
奴だ

ラーニンは国民に顔を知られていなかった
秘密裏に動く彼は国民へ知られてはならないとかん口令が敷かれていたのだ
それが利点だった
グォンツォフは精度の高いスコープをカチカチと動かす
倍率が上がる
スポッターはいないが、グォンツォフは撃ちぬく自信があった

「こいつで一儲け・・・だ」

グォンツォフは２ｍの巨人の頭を撃ちぬき、座礁した貨物船に乗り付けてあったゴムボートで一目散に逃げだした。

ふんふふん♪ふんふふん♪

―8月25日　スラヴィニア共和国、首都ヴルモフ　書記長官邸―

不気味だが、かわいい歌声があたりを漂う

「そこにいましたか、ミス・シュパジェノブスク」

「んー？」

ミハエルとは父の名、彼女は18歳のアナスタシア・シュパジェノブスク

”彼女”は18歳の少女にしてクーデター軍の長だった。

彼女の祖父、コーソン・シュパジェノブスク将軍は孫娘をたいそう気に入っていた。

祖父は陸軍士官学校に彼女を入学させ、軍事知識を自ら教え込んだ。

そして卒業後すぐに他界したのだが、祖父は彼女、アナスタシアに将軍の座位を譲ったのだ・・・

国外には彼女の父、ミハイル・シェパジェノブスクとなっている。

「財務大臣、ならびに法務局長を始末しました」

「うんうん」

「残っている目標はただ一人です」

「・・・プーシキン・グァツォネフ？」

「正解です。彼はエストニアになど逃げてはいません」

「どこにいるかわかったの！？」

「いえ・・・」

「じゃあどうして断言が？」

「国境地帯はすべて崖、逃げ様がないのです」

一人の男、部下をすべて失った男

彼はスラッコーへとたどり着いた

そこで黒い髪と漆黒の瞳をした男達に気がついた

「日本人・・・！」

彼は日本への留学経験があった

日本語はたしなむ程度ならできる
そして彼は男へと駆け寄って一言

「助けてくれ」

ブラソトニキ、チェチェン人のＰＭＣ
彼らはスラッコー近くで書記長を襲撃した
だが彼らはまんまと書記長を逃した

彼らをまとめるのはチェチェン解放戦線で名を上げた戦士、イスラマ。

イスラマは逃がしたことを悔いたが、考えを改めて奴を追跡してきた。

「イスラマ、奴はこの先のキャンプじゃないか？」
「ＮＡＴＯのキャンプだ、危険すぎる」

イスラマはキャンプに逃げ込んでいると踏んだ

そして衛生電話を取り出してある番号へとかけた

「イスラマです。・・・はい、そうです。見つけましたがＮＡＴＯのキャンプで・・・はい。わかりました」

「助けてくれ！」

修一は後ろから叫ぶ声に驚いた

「うわっ！・・・誰だ？」

修一には見覚えのない、だが・・・どこかで見た気がする顔だった

坂崎修一と仲沢凛は外で喋っているところをこの奇妙な男に呼び止められた

「教官・・・この人・・・この国の大統領・・・」

修一の頭のもやもやがすべて吹き飛んだ

「プーシキン・グァツォネフ！そうだろう、おっさん！」

プーシキンはただ頷くばかりだった

報告を受けた楢木隊長はすぐさまＮＡＴＯ軍を統括する米軍に指示を求めた

ＰＫＦアメリカのロバート・ジェイコブズ大佐はこの報告に驚いた

「エストニアに逃げたとばかり・・・しかし確かに報告はなかった・・・彼を助けるにはどうすれば」

エストニアへ逃がすことが先決だった。

スラッコーはエストニアへの国境のある町だ。それで済む。

ジェイコブズはエストニア側へ打診した

結果はＮＯだった

「なぜです」

担当者は答えた

「現在、ゲリラ部隊が国境を越えてわが軍の国境警備隊と交戦しています。おそらく書記長の確保が目的でしょう。よってわが国に危険が及ぶため、認可できません。

万が一、通過した場合は・・・撃墜も辞しません」

彼を安全に護送するには海路を利用することだった。

だが、スラヴィニア唯一の海路であるハロウシャセスク軍港はいまだスラヴィニアが保持していた。

ＰＫＦ海軍部隊はあと1日で近辺へと近づくことが出来る。

―８月２５日深夜　ハロウシャセスク―

「対艦ミサイルはこれでよし・・・と」

「ありがとう陳さん」

「いや、商売だからね」

陳と呼ばれた男は海岸線に地対艦ミサイル「ＹＪ－８２」を設置していた

トレーラーに詰まれたミサイルたちは今か今かと発射を待ち望んでいる。

これを提供したのは陳の耀山國防貿易公司、中国軍外商部のダミー企業である。

スラヴィニア海軍は中東製の哨戒艇とドイツ・中国製のフリゲート

艦を運用していた。

潜水艦は運用していない。

スラヴィニア海軍はスラヴィニアでももっとも行き遅れた組織で、艦艇数はすべて合わせても7隻だった

そこで、スラヴィニアはこれを補うためにエアロスパシエルのガゼルヘリコプターに対艦ミサイルを積んだり、地対艦ミサイルシルクワームを大量に輸入していた。

スラヴィニア海軍のドイツ製ＭＥＫＯ型フリゲートは初期のものであり、旧式艦であった（アルゼンチン海軍より譲渡）。

旧式化が否めないため中国製の補修キットを使って何とか補修がされている。

しかしレーダーシステムはＥＣＭ（ジャミング）に対するすべを持たないため、現在ＰＫＦ海軍のＥＣＭ攻撃でレーダーは白くなっている

―８月２６日早朝　バルト海洋上―

ＰＫＦ海軍は数十隻の船で構成されていた。

アメリカ海軍よりアーレイ・バーク級ミサイル駆逐艦が３隻、強襲

揚陸艦２隻

イギリス海軍よりインヴィンシブル航空母艦１隻

ドイツ海軍よりザクセン級フリゲート２隻

フランス海軍は各国の陸戦兵器（戦闘ヘリ・戦車・火砲）を積んだ揚陸艦を５隻

何とか間に合った海上自衛隊は護衛艦ありあけ１隻に補給艦３隻

潜水艦はなく、スラヴィニア海軍も導入していないのでシーホークなどの対潜ヘリは武装を変えられ、対艦ヘリとされている。

「こちらアメリカ海軍、ＤＤＧ－１０２サンプソン。機雷など危険な浮遊物無し。概ね良好。そろそろイギリス人のハリアーが出番だ。ＳＰＹ－１レーダーが敵の航空機を捉えている」

レーダーには数十にわたる航空機が表示されていた

「こちらインヴィンシブル、スタンダードミサイルで処分してくれ。うちの航空隊を出したくない」

「こちらＤＤＧ－８０、ルーズベルト。イージスシステムに出来ないことはない」

「ＤＤＧ－７６ヒギンズ、いつでも」

「アメリカ海軍艦艇に告ぐ。敵航空部隊迎撃のためシステムを活用

し、迎撃に当たれ」

『ＡｙｅＡｙｅＳｉｒ！』

アメリカ海軍のイージスシステムは同時に複数の目標をロックすることが可能。

イージスシステムはすでに接近しているスラヴィニア空軍の航空機部隊を完全に捕捉していた。

―ハロウシャセスク軍港沖　バルト海洋上―

「パーファー１からパーファー２０、全員戦闘に関して準備はＯＫだ」

Ｍｉｇ－２９ファルクラムはスラヴィニア空軍主力戦闘機である。

現在洋上を飛行するパーファー飛行隊からは空対空ミサイルＲ－７３（中国製）が取り外され、中国コピーのＫｈ－３１Ａ対艦ミサイルに換装されていた。

さらに後続の陸地でエンジンを停止させて赤外線センサーへ映らないようにしているのはエアロスパシエルガゼル対艦ヘリである。

装備されている対艦ミサイルはスラヴィニアアーマメント技術研究所（ＳＡＩＴ、サイト）で改良した密輸されたＥＵ製のＨＯＴ対戦車ミサイルである。

ＳＡＩＴはこれをＳＲ－０３対艦ミサイル（スラヴィニア共和国の頭文字をとって）としている。

ＳＲ－０３対艦ミサイルは量産体制に移行しており、ガゼルにかなりの数が搭載されている。

ＳＲ－０３を搭載したガゼルはエンジンを止め、出撃準備をしている。その数３０機。

－再びＰＫＦ艦隊－

「こちらＤＤＧ－１０２サンプソン。ＳＰＹ－１レーダー全敵勢力を捕捉。数は・・・なんだ、２０機か」

オペレーターはロックオンされた機体数を見て言う

「ノーリックス艦長、迎撃許可を」

艦長は迎撃許可を発令し、Ｍｋ．４１ＶＬＳ（垂直発射装置）からＥＳＳＭシースパロー改がロック可能である１２標的へ発射され、リボルバー形式に新しいミサイルが充填される。

「第２波攻撃準備、コメンスファイア！」

さらに１２発が発射される。

―パーファー航空隊―

２０機の戦闘機に一気にミサイル警報が鳴り響く

「全機チャフを放出！フレアもめいいっぱい使え！」

ぶわっとオレンジの花が咲き乱れる

照準がずれたミサイルはかなり多く、半数が海へと墜ちた

少なからず生き残ったミサイルはパーファー航空隊へ襲い掛かった

５機のＭｉｇ－２９ファルクラムが迎撃され、墜落した。

―ＰＫＦ艦隊―

「標的５、レーダーから消滅。依然、１５機健在！」

「ＤＤＧ－１０２から全艦へ。対空戦闘準備」

各艦は持ち前の対空ミサイルやファランクス（ＣＩＣＷ）、艦砲を敵へ向ける

「インヴィンシブルは後退、補給艦もだ。揚陸艦？撤収しろ」

「こちらＤＤＧ－７６ヒギンズだ。ダメ押しでミサイル発射。コメンスファイア！」

ＥＳＳＭが１２発発射される

－パーファー航空隊－

「またか！第３派攻撃！」

Ｍｉｇ－２９は急機動で大きくかわした

隊長機と９機は生存した

残った５機はミサイルに食われてしまう。

－ＰＫＦ艦隊－

「１０機撃ちもらしたぞ！」

アーレイ・バーク級ミサイル駆逐艦の主砲が唸る

バンバンバンと連射音が轟き、ＣＩＷＳのバルカンがバリバリと耳を劈く音を放つ

生き残ったＭｉｇ－２９ファルクラムも被弾し、すべて海中へ消え行く。

苦し紛れに放たれたＳＡ－０３が一発、ＤＤＧ－８０ルーズベルトの右側面へ命中した。

「船体に被弾！損害大！第３ブロック浸水！ええい、水密ドアを閉じろ！」

「第３ブロック封鎖・・・できません！浸水が早すぎる！」

「沈没するぞ！」

「くそっ、総員退艦！」

ＤＤＧ－８０ルーズベルトはゆっくりと沈んでゆく

救助艇が集まり、隊員達は全員無事救出された。

－ハロウシャセスク軍港司令部－

「パーファー航空隊全滅。戦果、アーレイバーク級ミサイル駆逐艦1隻。アメリカ軍のものです」

「ＭＥＫＯ型フリゲート、敵と接触します」

―バルト海洋上スラヴィニア海軍ＭＥＫＯ型フリゲート（古い戦艦のため、名前はない）―

「敵艦と接触するか・・・？」

―バルト海洋上アメリカ海軍アーレイ・バーク級ミサイル駆逐艦ＤＤＧ－１０２サンプソン―

「ＳＰＹレーダーに敵艦を捕捉。１隻」

分析官が告げると艦長は答えた

「ＤＤＧ－７６ヒギンズへ。データを転送する。ハープーン対艦ミサイル発射用意」

『了解』

ＤＤＧ－７６ヒギンズは船に４連装発射筒を積み、中には対艦ミサイルハープーンが詰まっていた。

「ＳＰＹ－１レーダーに敵艦を捕捉、ＭＥＫＯ級ですね・・・アルゼンチンからの」

「よし、目標をあわせろ。海底に沈めてやる」

ＣＩＣの担当官たちがあわただしく命令を伝え合う

「ハープーン発射準備！・・・コメンスファイア！」

バシュッ！と右舷の４連装の筒の１つが音を立てた

ハープーン対艦ミサイルは一直線にＭＥＫＯ型フリゲートへと向かった

－バルト海洋上ＭＥＫＯ型フリゲート－

「敵がミサイルを発射！」

「ＡＫ－６３０ＣＩＷＳを起動、迎撃せよ！」

中国がコピーしたロシア製ＡＫ－６３０ＣＩＷＳがＭＥＫＯ型には搭載されていた。

アルゼンチン海軍時代にはないもので、中国軍技術者が設置したも

のだ。

中国軍、およびＳＡＩＴで改修されたＡＫ－６３０は目標を自動で追尾、ファランクスにも引けをとらないレベルになっていた。

迎撃されたハープーンは３門のＡＫ－６３０によって爆発した

－ＤＤＧ－７６ヒギンズ－

「迎撃された!?ＡＫ－６３０か」

「第２波を?」

「ああ、しこたまだ!他のイージスにもアスロック（対艦ミサイル）を撃たせろ!」

－スラッコーＰＫＦ．ＪＧＳＤＦ基地－

「きょーかん、教官ってば」

「・・・んぁ？」

まどろみの中、坂崎修一は目を覚ます

「お昼寝ですか？」

部下、仲沢凛がそう尋ねる

「ん・・・寝てた・・・か？」

昨晩、歩哨で徹夜だったからだ

「ぐっすり。はい、どうぞ。水です」

ヴォルヴィックのミネラルウォーターをわたされ、飲み干す

「日本ほどではないが暑いな」

スラッコＰＫＦ基地はプレハブ製なので、クーラーもない。

すこし暑い

「ほんと、下着が背中に張り付いちゃいます」

「だな」

―バルト海洋上　ＭＥＫＯ型フリゲート―

「敵対艦ミサイル7発！だ、だめです避け切れません！」

「全員衝撃に備えろ！」

ＡＫ－６３０は3発の迎撃に成功したが、残った４発をもろに船体へ食らった。

瞬く間に船は水へと引きずり込まれた

―ＤＤＧ－１０２サンプソン―

「レーダー反応なし、ＭＥＫＯ型フリゲート沈没」

わぁ、と歓声が上がる

「・・・新たな目標を捕捉！・・・フリーヴェフィスケン級哨戒艇！」

ーバルト海洋上　フリーヴェフィスケン級哨戒艇ー

「ハープーンミサイル発射！」

フリーヴェフィスケン級哨戒艇はリトアニアから購入した哨戒艇で、ハープーンはリトアニア海軍時代から積んである劣化品だった。

もちろん劣化しているため、自爆してしまう

ーＤＤＧ－１０２サンプソンー

「・・・レーダーから消失！・・・自沈！」

「自沈？」

「はい・・・っ、新たな目標！リマン・エル・ハドラミ型哨戒艇。数は４隻！こちらへ高速で進入してきます！」

「迎撃！」

「迎撃アイアイサー！」

ＰＫＦ艦隊は対艦ミサイルで照準をあわせた

「発射！」

イージス艦2隻がハープーンとアスロック対艦ミサイルを発射した

「弾着まで・・・3・・・2・・・1・・・弾着！4隻すべて沈没！」

PKF艦隊はイージス艦1隻を失ったものの確実に距離をつめていた

―ハロウシャセスク軍港司令部―

「防衛ラインを突破されました！」

「ええい、被害を知らせ！」

「F－22Pフリゲート以外と連絡が途絶！」

「クソッ！F－22Pフリゲートは！」

「現在、Z－9EC（F－22Pフリゲート搭載の中国製ドーファンヘリコプター）の誘導で対艦ミサイルを準備中！」

「発射体制に入ったらぶっ放させるんだ！」

―バルト海洋上　Ｆ―２２Ｐフリゲート―

「ＹＪ―８３発射可能！」

「撃て！」

４連装発射筒から４発の対艦ミサイルが射出された

―バルト海洋上　ＤＤＧ―１０２サンプソン―

「敵艦を捕捉！すでに対艦ミサイルが！」

「スタンダードＳＭ―２で迎撃せよ」

「了解、ＶＬＳを使用！」

「撃て」

「コメンスファイア！」

ＶＬＳから迎撃ミサイルが発射された

「弾着まで３・・・２・・・１・・・弾着！・・・２発迎撃失敗！」

「１２７ｍｍ砲、迎撃用意！撃て！」

イージス艦に積まれた１２７ｍｍ連射砲がドォンドォン！と放たれる

「全機迎撃！」

「反撃準備、アスロックを敵艦へ撃て！」

「了解！」

―Ｆ―２２Ｐフリゲート―

「敵がミサイルを！」

「迎撃しろ！」

Ｆ―２２Ｐフリゲートに積まれるＦＭ―９０迎撃ミサイルは８連装で、ＶＬＳに大きく劣る

ＰＫＦ艦隊はこれを考慮してアスロック対艦ミサイルを１０発、撃ち込んでいた

「目標捕捉できません！多すぎます！」

「やれ！やるんだっ！」

「だ、ダメで―」

Ｆ―２２Ｐは反撃するまもなく、海底へと沈んだ

―バルト海洋上、ハロウシャセスクまで１５０ｋｍＤＤＧ―１０２サンプソン―

「・・・敵艦隊全滅を確認」

「全艦機関停止、インヴィンシブル級アークロイヤルはＡＶ―８Ｂハリアーを出動させて欲しい」

「こちらアークロイヤル、了解した」

―インヴィンシブル級アークロイヤル航空母艦―

「パイロット全員出動、攻撃命令」

パイロット達は自室から飛び出す

フライトスーツにフライトヘルメット、サバイバルキットなどを体

に身につける。

ヘンリー・ブルックス英国空軍中佐を筆頭に搭乗して行く

「よし、スラブ女のケツにぶっこんでやるか！」

『ワハハハ！』

イギリス人らしくない下品なジョークを飛ばし、ＡＶ－８Ｂハリアーに乗り込む

「ＴＡＣネームＧＡＣＫ、ヘンリー・ブルックス中佐であります。出撃許可ねがいます」

『こちら艦長のウィンブル・リー。許可する。発艦せよ』

ハリアーは甲板を突き進む。

やがて空へと躍り出た

『ＧＡＣＫ（ＴＡＣＫＮＡＭＥ）よりＴＥＬＬＹ（２番機）、我々最後の任務であろうこの任務成功させよう』

アークロイヤルは今年度をもって退役が決まっていた。

同時にＡＶ－８Ｂハリアーも除隊となっているのだ

『こちらＴＥＬＬＹ、一花咲かせよう！』

８機のＡＶ－８Ｂハリアーはバルト海の上を飛んだ

『こちらＤＤＧ－１０２サンプソンのノーリックスだ』

『こちらサンダー飛行隊のヘンリーブルックスであります』

『ミスターブルックス、君たちにお願いしたいのは対艦ミサイルの破壊だ。これらが合っては我々にはどうすることも出来ない。地上部隊がいればトマホークミサイルを撃つこともできるが、それも望めない』

『了解しました。だからこんなでっかいイチモツ（ＡＧＭ－６５マーベリック空対地誘導弾）をつけてるわけですな！ダハハッ！』

『ぷっ！くすくす！』

ブルックスの部下の笑い声が混入する

ノーリックスは厳格な海軍将校であり、このような下種な笑いは気に食わなかった

『ＡＧＭ－６５マーベリックは廃盤なんだ。くれぐれも大切に使ってくれたまえ』

『りょーかい』

「面白くねー奴」

とオフレコでブルックスが言うのは誰も聞いていない

ーハロウシャセスク軍港司令部ー

「ええい、ガゼルだ！ガゼルを出せ！」

「・・・レーダーに敵機反応！空母から出撃した戦闘機！」

「なにぃ！？」

「数は８！」

「迎撃ミサイルの準備だ！」

「了解！パーンツィリＳ－１（ロシア製地対空ミサイル）用意します！」

パーンツィリＳ－１はロシア製の地対空ミサイルで、最新式である。

これはロシアとの国境小規模紛争で鹵獲し、中国側へわたしてコピ

ーしたものだ。

ーサンダー飛行隊ー

『全機へ、ＳＡＭの臭いがする。全機低空で進入する用意をしろ』

『Ｒｏｇｅｒ！』

『・・・何も起こらないことを願おう』

ーハロウシャセスク軍港　ヘリポートー

「ヴニヴェスク飛行隊、貴様らの目標は侵入してくる敵航空部隊だ！」

短時間でＳＲー０３からＡＡＭミサイル（中国製）に換装されたガゼルヘリは防空のためにヘリポートから飛び立った

『ヴニヴェスク飛行隊のドン・ランフォードだ。全員散開し、進入してくる敵機を待て』

ＣＳＣ航空部隊のドン・ランフォード。

イギリス空軍の中佐で、軍役を離脱したあとはＣＳＣに入社した

彼は故国との戦闘となるとは夢にも思っていなかった

「・・・所詮、軍を裏切った男だ・・・」

『はいはい、今夜のディスクジョッキーブルックスさんだよー、みんなマスターベーションの準備したかな?興奮しすぎて玉がなくなる位気持ちい任務だぜ!』

『ぶはははは!』

陽気なブルックスの下世話なジョークに部下達の緊張はほぐれてゆく

『ＧＡＣＫより全機、レーダーにヘリが映ってる。連中のハエを叩き落せ!』

『ＲＯＧＥＲ!』

ガゼル飛行隊とハリアー飛行隊は衝突した

だが、所詮鈍行のヘリに勝ち目はない

次々と落とされていくヘリにドン・ランフォードは思わず暗号化されていない無線で叫んだ

『俺はイギリス人だ！』

その声にブルックスは聞き覚えがあった

あれは空軍の養成学校を出たばかりの、フォークランド紛争に出向いたときにいた同僚の声にそっくりだ。

あいつは悲観主義で、声に特徴があって耳に残っている。

『ドン、ドン・ランフォードか？俺は・・・フォークランドでは同じ飛行隊だったヘンリー・ブルックスだ！』

またドン・ランフォードにも聞き覚えがあった。下ネタを連発するお調子者男、ヘンリー・ブルックス

『へ、ヘンリー！お、俺を打つな！同胞だ！』

ヘンリー・ブルックスことＧＡＣＫは冷たく答えた

『大英帝国に背いた者は万死に値する』

冷酷な機銃弾がドン・ランフォードのガゼルを砕けさせた

『た、隊長？』

『・・・裏切り者は蜂の巣に。いよいよイチモツをケツにぶっさしてひぃひぃ言わせるときが来たぞ！』

―ハロウシャセスク軍港司令部―

「くそっ！防衛隊はなにをしておる！」

「・・・し、司令ッ！」

「なんだ！」

「・・・同志シュパジェノブスクよりお電話が・・・」

「・・・わかった」

基地司令は背中に寒気が走った

狂気に包まれた女王からの電話だ

「はい、ハロウシャセスク軍港のスピリデッチ大佐であります・・・」

『あ、大佐ぁ？私、アナスタシアだけど』

「は、なんでありますかシュパジェノブスク中将・・・」

『あんた、いらないわぁ』

ゾッとした

背中の産毛がすべて逆立つ

「は・・・い、いえしかし！」

『はいはい、いーわけっしょ？いいからいいから、後任もう送ったし。ファルクラム何機ぶっ壊せば気が済むのよ、あんた。・・・あ？ガゼルもぶっ壊した？もうあんた・・・はー』

「それは申し訳なく！し、しかし敵艦隊は我々が責任を持って一」

『消えろ。それが私の願いだ、大佐』

ブッ・・・ツーツーツー

「大佐？顔色が悪いですが・・・？」

「・・・なんでもない。すこし指揮を任せる、大尉」

「はっ」

「・・・何年だ、何年軍に尽くしたんだ！３０年！３０年だッ！それなのにあのクソガキ！俺の軍歴に土足で入りやがって！」

スピリデッチは一人悪態をついていた

そこへ一人の黒い海軍の軍服を着た男が歩いてきた

「ミススピリデッチ、後任のドラグマ中佐であります」

「ドラグマ？何者だ」

「イェスタール・ドラグマ中佐、今年度ヴルモフ空海軍を卒業しました」

「なっ・・・新米のぺいぺいの来る場所じゃない！」

「・・・中佐ですよ？私は」

「俺は大佐だ、この階級章が見えんのか！」

するとドラグマはその階級章を思い切りちぎりとった

「なっ！貴様何をするか！」

するとドラグマは自分の階級章をはずしてポケットに入れ、スピリデッチの階級章を付け直した

「元大佐、あなたはクビだ」

「ふざけるなよ青二才！」

スピリデッチは腰のホルスターから旧ソ連製のマカロフ拳銃を取り出す

「俺は、俺は軍歴を護る」

ふっ、と鼻で笑ったドラグマはさっと、ホルスターから中国製の９２式拳銃を取り出して撃った

「ぐぅっ！？」

「邪魔だ、消えてくれ」

ー サンダー飛行隊 ー

『よぉし、見えてきた見えてきた。敵のＳＡＭを発見。トレーラーだな。１番から３番機はＳＡＭを撃破するぞ！後の連中は対艦ミサ

イルをぶっ壊せ！

パーティーの始まりだ！』

1番機のブルックスは左へ旋回し、パーンツィリS－1地対空ミサイルを乗せたトレーラーを照準に合わせた

『敵航空隊侵入！』

『迎撃に当たれ！鎧1（パーンツィリ）、迎撃！鎧2から5も撃て！』

パーンツィリS－1の装備する57E6地対空ミサイルと2A72 30mm機関砲が火を吹いた

ドォンドォン！と30mmの弾丸が炸裂し、地対空ミサイルがハリアーを追い回す

『くっそがぁあぁあ！』

思い切りエンジンをふかしてミサイルから逃げるブルックス

『こちら4番機！対艦ミサイル発見！攻撃する！』

『同じく5番機も！』

『8番機発見！』

『7番機発見！』

『6番機発見！』

ブルックスはフレアを使った

フレアが機外へ放出され、ミサイルは戸惑い自爆する

『対艦ミサイル撃破！』

『こっちもだ！』

『鎧1と連絡途絶！』

『対艦ミサイル隊！応答せよ！』

『大佐が外で死んでる！』

『それよりまずいぞ！レーダーに敵舟艇！揚陸してくるぞ！』

『海軍の防衛隊は！』

『間に合わない！』

『くそ！全員武器を取れ！』

『空域安全確認、海域も問題ない』

『あれ？隊長？隊長ッ！？』

『・・・・生きてるよ』

『よかった！』

ブルックスはハリアーの後尾に３０ｍｍ機関砲を2発食らっていたものの、何とか飛行していた

『全機、帰還するぞ』

―アメリカ海軍強襲揚陸艦ＬＨＤ－７イオージマ―

『海兵隊員、出撃だ！』

『Ｏｏ－ｒａｈ！』

ＬＣＡＣエアクッション揚陸艇には海兵隊員が１８０名敷き詰められていた

『本日はＬＣＡＣをご利用いただきありがとうございます。このフェリーは揺れがありませんが、もし気分が悪くなればお友達の首筋に吐きかけるか、海へ吐くか、ご自分のヘルメットにどうぞ』

Ｍ１６Ａ４小銃を手に持ち、１世紀過ぎてもなお使われるＭ１９１１Ａ１ＭＥＵを腰へ刺した海の兵士。

あるものは神へ祈り、あるものは異常なほど興奮していた

『上陸まで５分！』

敵の攻撃はない。

上空をイギリスの戦闘機が通ってゆく

「おれ達の分残しただろうな！」

どっと笑いがおこる

後続のＬＣＡＣ2隻にはＭ１Ａ1戦車が積まれている。
上空は武装したヘリが覆う

制空制海権ともにＰＫＦが制圧している

簡単な戦いだ

なんたっておれ達はＭＥＵ、最強兵隊（ウォーリアー）だ。

ニュージャージー出身の海兵隊員、リーヴェン・カマラスター上等兵は手に持ったＭ１６Ａ４小銃をぎゅっと握った

問題ない

問題ない

ＬＣＡＣは派手に浜へ乗り上げた

『降車！降りろ！』

前方のタラップが激しく倒れる

『Ｏｕ－ｒａｈ！』

リーヴェンはＭ１６Ａ４の安全装置をつけたままだった

「許可があるまで撃つな！」

上官の大尉が叫ぶ

「敵が揚陸を開始、人数はざっと数えて２００人。海兵隊だ」

『了解した。階級の高いものは？』

「一人指揮を執っていそうな奴がいる」

『ではそいつを撃て』

「リスクが高いんだが」

『給料は弾む』

「・・・りょーかい」

ＣＳＣのマグダネル・グォンツォフは愛用のＭ８２Ａ１対物ライフ

ルを構えていた。

「・・・まったく」

寝そべりながらスコープを覗く

一人、指揮を執る男の頭に狙いを定める

そしてゆっくり引き金を引いた

「アルファ小隊は右へ！ブラヴォーは左へ！チャーリーは―」

その瞬間、大尉の頭が粉々に吹っ飛んだ

そして数秒後に銃声が鳴った

「遠距離狙撃だ！注意しろ！」

「大尉が死んだ！本部！大尉がやられた！」

「ＭＩＡ！ＭＩＡ！」

全員があわて始める

ニヤリ、とグォンツォフは笑みを浮かべた

「俺の仕事は終わりだ」

彼はてきぱきと武器を片付け、ハロウシャセスク軍港に隣する1軒の高層アパートから立ち去った

狂気に満ちた女の陰謀

「狙撃手は攻撃せず。全員前進！」

『Ｏｏ－ｒａｈ！』

湾口に上陸した海兵隊は一路、指揮司令部のある建物へ走る

後続のＬＣＡＣも上陸し、戦車が荷揚げされていく

「・・・おい！あれ見ろ！」

先頭の隊員が司令部を指差した

司令部には白旗が揚がっていたのだ

「アメリカ海兵隊のジョージ・ウォーカー中尉です」

「スラヴィニア海軍のゲラシウム・ヴァルコフ大尉です」

ジョージ・ウォーカーは疑問に思った。
おれ達は代表者会議をしているはずだ
「失礼ですが、大尉でこの基地を・・・？」
するとゲラシウム・ヴァルコフは笑った
「ああ、失礼。実はあなた方の到着を待っていた将校が暗殺されてしまいまして。
後任の将校は好戦的過ぎて全員が反発して殺してしまいましてね。」
仲間割れか
「なるほど。で、降伏合意で間違いは？」
「ないです。スラヴィニア海軍、総員２００人。捕虜となることを約束します」

ースラッコーＰＫＦ基地ー

坂崎は赤坂に聞いた
「書記長は？」
「輸送準備できてるよ」

「しっかしなんで自衛隊が出るんだ?アメリカ軍で大丈夫だろう」

「途中で他国の避難民を収容しているアリーナから日本人を連れて行くんだと」

「?死ななかった日本人は脱出したんじゃなかったか?」

「元自衛隊の軍事アドバイザーらしい。さっきやっと避難したとか」

「めんどくさいな」

「そういうな、坂崎」

坂崎修一と赤坂は装備を整えながらそんな会話をした

坂崎は手元を動かしながらつぶやく

「PKF海軍は橋頭堡を確保したから仕事をしやすくなるだろう」

「だな、海自様様だ」

「国内でも早期撤退がもう言われてるらしいぞ」

赤坂は驚いた

「なぜだ?まだそんなに経ってないだろ」

「そういう国ってことだよ、赤坂」

「第1小隊、第2小隊。集合しました」

「よし、時間どうりだ」

楢木隊長は時計を見ながらうんうんと納得する

「よし、これより米陸軍と合同でハロウシャセスク軍港まで書記長を護送する。空路を使えばいいじゃないかという意見もあるだろうが、まだ
地上のＳＡＭを駆除しきっていない」

次に米軍の日系の兵士が歩み寄り

「我々レンジャー部隊と動いてもらいます。自衛隊は後衛を務めてください。今回、我々はストライカー装甲車を用いて警護するほか、必要に応じて戦闘機を
出撃させれます」

「だ、そうだ。我々の任務は書記長を護衛し、途中のガヴェンスクス市記念スタジアムで日本人を回収する。

ハロウシャセスク軍港までは5時間だ。途中、敵と遭遇する可能性もある」

アメリカ陸軍第７５連隊レンジャー部隊のチョーク１からチョーク３までがハンヴィーと装甲車に分乗し、陸上自衛隊第１０師団第１、第２小隊は９６式装輪装甲車および
軽装甲機動車に分乗した。

「きょ、教官っ。なんできょ、今日は中なんですか？」

「ん？気分だ」

坂崎修一は銃座には着かず、車内に居た。

今回は池田一士が銃座に着き、Ｍ２４９ＭＩＮＩＭＩを握っている

「ところで、きょ・・・うかん、今回はどういう道を行くんですか？」

「ＰＫＦ軍が制圧している山岳道路だ。だが、森林地帯まで手が回っていないらしいし、スタジアムから軍港までは全くのフリーだそうだ。

スタジアムからはフランス陸軍のルクレール戦車がついてきてはくれるらしいが・・・うーんってとこだな」

車両部隊は走り始めた

書記長を乗せる車はＭＲＡＰ装甲車と呼ばれる重装甲トラックで、通常の対物地雷では破壊できないほどの硬さを持っている（ただし走行は不能）。

ＭＲＡＰの先頭に米軍のストライカーＩＣＶ装甲車が1台、その左右に同型車が1台ずつ。

ＭＲＡＰの後方に縦隊を組んでハンヴィーが2台つき、その後ろに自衛隊の９６式装輪装甲車が1台、その後ろに軽装甲機動車を2台。最後尾に９６式装輪装甲車がつく。

3時間ほどは問題なく通過していった

3時間後に到着したのは「ダリュンクルストレインヤード」と呼ばれる大規模な列車の駐車場だった

「大きな場所ですね」

車内から窓にしがみついて外を見る仲沢。

すこしかわいい・・・

「あ、ああ・・・ダリュンクルストレインヤードというらしいな」

「ドイツっぽいですね」

俺は答えた

「ここはナチスドイツが支配していた時期があるんだそうだ。その時期にドイツ軍が作った鉄道基地をそのまま使っているらしく、その名前らしい」

すると仲沢は目を輝かせ

「詳しいんですね！教官って！」

と嬉しそうな顔をした

「ま、まあやることないときはこれ読んでるからな」

俺はバックパックから小さなガイドブックを取り出した

「これ・・・？」

「この国は戦争前は一応、観光国でもあったんだ。旧ソ連時代の遺物が好きな人用にな」

―同時刻ダリュンクルストレインヤード―

「予定通りだ」

「ええ、まさに」

「地雷は？」

「用意済みですよ」

腕につけられた部隊章、ダガーナイフと拳の絵調

ボスラヴェキニ、彼らはここで罠を張っていた。

「敵の数は・・・ええと、装甲車が5台に・・・ええと、車両が4台。我々、30人のボスラヴェキニに勝るわけなし」

ボスラヴェキニ30人は各々、強力な重火器を装備していた。

そしてさらに後方、トレインヤードの監視塔に二人の兵士が配置されていた。

一人は双眼鏡、もう一人はSVU狙撃銃を装備していた。

ＳＶＵ狙撃銃、旧ソ連製ＳＶＤ狙撃銃の基本的データを応用して再設計されたこの銃はプルバップ式に改良されている。

銃の全長は短くなり、携行性が強化された。さらに消音装置もつけられている。

彼らはこれを中国軍経由で入手し、装備している。

完全に取り囲まれていた。

ボスラヴェキニは列車（戦争状態のため、運用されていない）のコンパートメントに潜んでいた。

他にもトレインヤードの倉庫の中にも潜んでいる。

―護送部隊―

「なんだか嫌な予感がします・・・」

「？」

アリシェルト・ウィッテ伍長がハンヴィー後部座席でつぶやいた。

リチャード・ヴェルディーク２等軍曹はその発言に不安を覚えた

「どうしてだ？伍長」

「見られているような」

「・・・ロレンゾ、伍長を視姦するんじゃない」

運転手、ロレンゾ上等兵が叫ぶ

「見たくても見れませんよ！」

「なんだか不気味ですね」

「？」

「トレインヤード見たらそんな気持ちに」

「まぁ、確かに不気味だ」

坂崎と仲沢は会話を続けていた

「ん？」

「どうした、マイケル」

ストライカー装甲車の運転手は路上に転がっているものが目に付い

た。

「あれは・・・乳母車か？」

「怪しいな」

目を奪われていた

ボスラヴェキニはこの乳母車に集中させ、地面にある対戦車地雷に気づかせないようにしていた。

対戦車地雷は起爆した。

高威力の地雷はストライカー装甲車の底を食い破り、中に居た兵隊を粉々に砕き、停車させた。

ＭＲＡＰの運転手は急いで無線機を取り、叫んだ

『アンブッシュだ！』

ＭＲＡＰは停車し、後ろのハンヴィーが急すぎてぶつけた

ハンヴィーに乗るレンジャー５人、そのうち３人が飛び降りて状況を確認しようとした

観測手は

「降りた奴は後でいい。銃座の奴を狙うぞ。まず1台目」

ＳＶＵを持った狙撃手は1台目のハンヴィーの射撃手を狙った。

「距離、４００m。問題ないな。撃て」

ぱすっ

銃の振動とともに、弾丸は射出される。

弾丸は一直線にハンヴィーの銃座に座るレンジャー隊員のヘルメットを貫いた。

カーンという心地のよい音は周りに狙撃を知らせた

「狙撃だ！あの塔に狙撃手がいる！」

狙撃手は2，3発を一気に撃った

しかし危険を察知した射撃手達はすでに車内へ入っていた。

ハンヴィーを降りたリチャード・ヴェルディーク軍曹はＳＣＡＲに取り付けられたＭｋ．１３グレネードランチャーを巧みに使い、監視塔を爆破した。

「敵の狙撃手だ！池田！頭引っ込めとけ！」

「はい！」

銃撃戦が始まった

ボスラヴェキニは列車のコンパートメントの窓を破り、そこに銃架を取り付けていた。

もちろん貫通しないようにケヴラー繊維で窓枠を覆い、コンパートメントを保護。

銃架には中国ノリンコ製の８８式軽機関銃を設置し、射撃をした。

列車車庫のボスラヴェキニは時期を待ち、ひたすら潜んでいた。

「敵発見！停車した列車だ！撃て！」

ストライカー装甲車に詰められた兵隊達はＳＣＡＲ小銃を手に、敵と向き合った。

ＲＳＷ化（機銃を触ることなく車内から発砲することが可能な装置）

されたＭ２ブラウニング機銃はコンパートメントに重い１２．７ｍｍ弾を発射した。

「あの機銃を黙らせろ！」

ケヴラーは７．６２ｍｍ弾は止めれるものの、１２．７ｍｍ弾は完全に貫通してしまった

「了解！」

ボスラヴェキニの一人はＲＰＧ－７を取り出した。

ＲＰＧ－７にはタンデム型弾頭「７ＶＲ　タンデム対戦車榴弾」が装備され、西側のスラット装甲を装備するストライカー装甲車に対して非常に有効な手段となっていた。

「この弾頭に驚くなかれ！」

ＲＰＧ－７はバックブラストが激しいため、射手は列車の天井から撃った

タンデム弾はスラット装甲を貫通し、内部で爆発した。

「撃て！」

射手は列車の後方に飛び降りようとしたが、レンジャー部隊の銃撃によって身を裂かれた。

陸上自衛隊も黙ってはいなかった。

９６式装輪装甲車に取り付けられていたのは９６式４０ｍｍ自動てき弾銃。

日本製のグレネードランチャーである。

これはＲＷＳ化されていないため、射手が外へ出なければいけないという危険もあるが制圧力は抜群であった。

この９６式装輪装甲車は北部方面隊の車両であり、この運用には北部方面隊の隊員が参加していた。

射手は第１０師団の第３小隊の隊員が行う。

ドン！ドン！と４０ｍｍの炸薬が発射され、コンパートメントにぶち当たる

コンパートメントは吹き飛び、ボスラヴェキニの隊員が爆散する。

「くそ！自衛隊の力を見誤った！撤退準備！倉庫の連中もだ！」

軽装甲機動車から降りた第一、第二小隊の隊員達は逃げるボスラヴェキニを見た。

「追え！行くぞ！」

楢木隊長と第二小隊は倉庫へと入った。

倉庫の入り口手前で楢木隊長は手でストップのハンドサインを作った

そして中を確認する。

古臭い貨物列車が多く止められている。

その上には整備用の金属でできた通路が造られている。

しかしボスラヴェキニはいなかった。

８９式小銃を手に、クリアリングを行う楢木隊長と坂崎、そして赤坂。

その後ろを池田、江崎、横田、七宮、仲沢、吉田が着いてくる。

坂崎の目に何かが映った。

２階建て倉庫の２階部分、おそらく調整室か何かだろう。

そこにボスラヴェキニのヘルメットが窓枠からすこし見えていた。

「発見！」

ダダンッ！と８９式小銃は火を吹く。

５．５６ｍｍ弾は窓を貫通し、ヘルメットを吹き飛ばした。

「うがっ！」

悲鳴が上がり、調整室に見えていたヘルメットは消えた。

「敵発見！２Ｆの部屋！」

全員がそのあたりを撃ち始めた

分隊支援火器を持つ赤坂はＭ２４９の圧倒的発射速で窓周辺を蜂の巣にした。

ボスラヴェキニたちはそこにいたのであろうかその部屋から飛び出し、２Ｆの防護されていない通路から銃を撃ち始めた。

窓からはいつの間にか８８式軽機関銃が突き出され、猛威を振るい始めた。

数は１０人。

楢木隊長が叫んだ

「坂崎！数が多い！０６式！ライフルグレ撃ち込め！着弾したら吹っ飛ぶようにしろ！」

「了解！」

坂崎は遮蔽物へ隠れ、腰のポーチから０６式小銃てき弾を取り出した。

これは米軍のＭ２０３のようなアドオン式グレネードランチャーとは違い、小銃の先っぽに取り付けるだけでいい。

空砲を用いることなく実弾での射出が可能でかなりの命中精度を誇る。

２２ｍｍと、Ｍ２０３の４０ｍｍよりも口径は小さいが破壊力は抜群。

坂崎はそれを８９式小銃の銃口に取り付け、照準機も取り付けた。

「援護！」

射出するにはある程度の時間、無防備になる。

全員が銃を撃ち始めた

窓枠とその周りのコンクリート壁がガジガジと削れて行く。

坂崎は引き金を引いた

バシュッ！と発射されたライフルグレネードは窓の中へ滑り込んだ

閃光と炸裂音がし、敵からの銃撃は沈黙した。

「確認しろ」

坂崎は照準機をはずし、８９式小銃を構えて２Ｆのクリアリングに入った。

部屋にはまだ生きているボスラヴェキニの隊員がいた。

一人、だけだった。

『おい、お前。武器を捨てて降伏しろ』

坂崎がロシア語で言うと、バラクラバをかぶった兵士は答えた

『くたばれ・・・日本人！』

彼は腰から９２式拳銃を取り出して撃とうとした。

坂崎はすばやく一射し、ボスラヴェキニの隊員は死んだ。

「クリア」

第1小隊はコンパートメントをレンジャーとともに制圧した。

死者、負傷者0。

完璧な戦いだった。

「本部？こちら護送部隊のリチャード。うん、敵の襲撃。うん、トレインヤード。自衛隊は死人出てないけどレンジャーが20人死んだ。

うん、CH－47まわして欲しい。負傷兵と遺体、あと補充要員。よろしく」

リチャード・ヴェルディーク軍曹は無線を切り、ため息をつく

「どうしました？軍曹」

「ん・・・アリシェルト。自衛隊が損害0で実戦経験のあるおれ達が20人やられた。どうなってるんだ」

「そういえば倉庫を制圧した自衛隊、この間助けてくれた人の部隊みたいでしたよ！」

「何？挨拶に行くか」

『Ｈｅｙ！Ｓａｋａｚａｋｉ！』

突然話しかけられた坂崎は驚いた

「ん・・・ああ、この間の」

「今回も助けられましたね」

相変わらずこのブロンドの女兵士は流暢な日本語を話す。

「教官！あ、この間の！」

「あ、仲沢さんね！よろしく！」

ひとしきり雑談をし、二組は分かれた。

「っとそれで、さっき何か用があって呼びに来たんじゃないのか？」

仲沢ははっと気づき、俺に告げた

「倉庫に変なものがあったんですよ」

列車が多く並ぶ倉庫に俺は連れてこられた。

２Ｆの死体は放置されているが、まだ臭いはしない。

仲沢は俺を１Ｆの隅へ連れて行った。

「なにがあったんだ？」

「これ、見てください」

仲沢の腰当たりの壁に小さな突起があった

「これは・・・」

俺はそれをつまんでみた

それを引くと壁から隠し部屋が現れた。

床に掘ったようで、半分地下のように見える。

「まさか敵が・・・？いや・・・」

床には埃がたまっている。

しかしよく見えない。

「仲沢、懐中電灯もってないか？」

「あ、はい」

仲沢はバックパックから懐中電灯を取り出して俺にわたした。

俺はそれを点ける。

部屋には鉤十字の布が壁に貼られ、テーブルには黒の鉄兜。

そしていすに座る骸骨。

「・・・これは」

旧ドイツ軍の遺骸に間違いはなかった。

座っていた兵士達は自らこめかみを撃ちぬいたようだ。

俺は両手を合わせ、ドアを閉めた

「中はなにかありました？」

「ああ、世界大戦の遺物だ」

「・・・？」

「まぁ、いい。おい、ヘリが来たぞ」

3機のヘリMH－47Eは第16特殊航空連隊「ナイトストーカーズ」の所属を表すエンブレムが輝いていた

「チョーク5のミッチェル・バクスフォード大尉だ」

「チョーク3のリチャード・ヴェルディーク2等軍曹です」

「？チョーク1のシューン・ロッカー中尉はどうした？」

「ロッカー中尉は1台目のストライカーで戦死され、次のバクスター少尉も別のストライカーで戦死されました」

「そうか、では俺が最高責任者か？」

「はい」

「よし、全員乗れる車に乗せろ。おれ達はハンヴィーしか連れてきていない」

増加装甲板が取り付けられたハンヴィーは多少不格好ではあったが、背に腹は替えられなかった。

―ガヴェンスクス市―

「ここらは戦火を逃れてるようだな」

「そうですね」

坂崎と仲沢は車内から窓を見ていた。

ガヴェンスクス市は首都のヴルモフ市に次ぐ大都市である。

戦中ではあったが、人は町を闊歩している。

運転手の赤坂が後ろに向かって喋った

「ここの防衛隊、たしか第2首都防衛隊は開戦後に反発して戦闘を放棄したらしい。それでここまで平和なのさ。スタジアムは周辺からの異国避難者を集めてる」

―同時刻　ヴルモフ市書記長官邸―

「ラヴェニズク・クラフチェネンコ少佐、入ります」

「うん、入って入って」

一国の主にしては若い。

ラヴェニズクはそう思った。

だがそのそそる魅惑的な体にすこし興味もあった。

「アナスタシア・シュパジェノブスク大将よ、よろしく」

「はっ・・・ところでご用件とは？」

Ｍｉ－８ＨＩＰまで遣したんだ。

用がないわけはないし、あっても下らん用じゃない筈だ。

「うん、これから私達は全面攻勢に出るわ」

「はっ」

「その第一陣をあなたに飾って欲しいの」

「・・・それはどういう？」

「わからないの？」

アナスタシアはラヴェニズクに近寄ってその体から香る匂いを漂わせた。

軍服のカッターはきくずされ、胸が見えている。

アナスタシアの年齢にしては熟している・・・

「キョウミ、ナイ？」

ラヴェニズクの体は熱くなった

ーガヴェンスクス市記念スタジアムー

「お、ありがとう。帰国手伝ってくれるんだって？サンキュー、地元軍金払い悪くてサー」

頭に黒のバンダナを巻き、手にはＡＫＳ７４ｕ

「名前は工藤、工藤庄治。んま、よろしくぅ」

３０歳過ぎと見られるこの元自衛官は自由奔放なのか
ＭＲＡＰ装甲車に乗ろうとして止められ、結局俺の乗る軽装甲機動車に落ち着いた。

「フランス陸軍のジェレミー・ジェレ中尉です、我々が道中お供します」

「よろしく頼む」

レンジャーのミッチェル大尉はフランス軍と会話し、ハンヴィーへ戻る。

フランス軍最新戦車ルクレール。

ＲＷＳ化した機銃を搭載し、１２０ｍｍの大砲を備える。

道中この戦車が俺たちを守る。

そうリチャードと坂崎は思った。

アナスタシア・シュパジェノブスク

「書記長を無事に揚陸艦に積みました。はい、そうです」

書記長は揚陸艦に乗せられ、イギリスで保護されることになった。

「一仕事終えた感じだな」

「はい」

仲沢と坂崎はふぅ、と落ち着いた。

「しかし工藤・・・大丈夫だったか？」

「・・・はい」

―２０分前―

「かわぃぃ！なんで自衛官してるの？」

「あっ、いえ・・・っと・・・」

「お近づきになりたいなぁ！」

工藤は仲沢の手を握った。

俺はなぜかそれを見てムッとしてしまい

「工藤さん、部下は勤務中です」

「えー、いいじゃねえかあ」

そんなやり取りを繰り返すうちに

「胸もいい感じ、おしりもいいよね～」

「ひぅっ！？」

「工藤さん！」

俺の怒りは沸点に

「まあ、そう怒るな！冗談！」

「客じゃなけりゃ殴ってた」

教官は素直にそういった

（なんかすごく嬉しい・・・）

私は内心、すごくハッピーだった

―８月２０日ＰＭ１０時スラッコーＰＫＦアメリカ軍司令部―

「よし、聞いてくれ」

一人の将官が兵隊達の前へ歩みだした。

「我々が今回叩くのはコウロー山、敵空軍要塞だ」

スライドに衛星写真が映る。

「敵はここに６割の戦闘機を入れている。４割はすでに撃墜済みだ。残った６割がこれだ。山頂には滑走路と戦闘機の昇降機がある。敵の本拠地はすべて山中で、ミサイルなどの爆発物も地中だ。山中は頑丈なバンカーで保護され、我々のバンカーバスターでも破壊できない。

そこでまずＭＬＲＳ部隊がクラスター爆弾を発射、敵を錯乱させる。
次に君たちの出番だ。君たちはＳＯＦＬＡＭを使用し、トマホーク巡航ミサイルを要請。
山肌に置かれた銃座や砲床を破壊、最後に入り口となる巨大な鉄門を爆撃する。そこからが戦闘だ。全員、気をつけて欲しい」

―現在より４時間前、書記長官邸―

「んふ・・・はげし・・・」

高価な樫の木などで作られた調度品に囲まれた部屋。

そこに軍服を乱した男女が二人。

「・・・しかし・・・ア、アナスタシア・・・この私に何をしろと・・・？」

「・・・んふ、かっこい・・・中に出しちゃだめじゃない」

「・・・いや、それは・・・」

「んふ、来て」

アナスタシア・シュパジェノブスクは下着を穿き、ズボンのベルト

を締めて髪をかき撫でた。

若いエリート将校、ラヴェニズク・クラフチェネンコもまた、着崩れた制服を着なおす。

アナスタシアは樫の木の机に置かれたひとつのファイルをラヴェニズクに投げわたした。

ファイルの封を切り、ラヴェニズクは中の資料を読んだ。

「・・・旧ソ連製戦術核爆弾・・・？」

アナスタシアは頷き、答えた

「そう、スラヴィニア共和国の虎の子。これをもってコウロー山に行って欲しいの」

「あの要塞に・・・」

「うん。私の計画だとＰＭＣがもう少しがんばってくれる予定だったんだけどさー、パイプラインだとか鉱山全部ＰＫＦにとられてさ。ノリンコとかもてぇひいちゃったんだよ。ボスラヴェキニも全滅。」

スラヴィニア軍は海軍壊滅をきっかけに降伏する部隊が続出していた。

すでに陸軍の４０％の部隊が全滅または降伏している。

しかし空軍は統率が取れており、コウロー山に部隊は引きこもっている。

「そこで虎の子の出番。だてに元占領地じゃないよね」

ラヴェニズクは脂汗をかいた

「それで私はどうすれば・・・」

「取引に使います。それがあれば攻撃できないしね、空軍全滅したらスラヴィニアはもうおしまいだよ」

ー現在　コウロー山へ向かう米軍機動部隊ー

「・・・中隊長、無線です」

「？俺に？」

中佐の階級章をつけた米軍の将官はハンヴィーの助手席で無線機を手渡された

「こちらエコー中隊のジミー・マックエイン中佐だ。誰だ？」

『こちらスラヴィニア陸軍、ラヴェニズク・クラフチェネンコ少佐であります』

敵・・・？

「敵の将官が、なんのようだ」

『実はあなたにお伝えせねばならぬことがありまして』

実に流暢な英語だ。

ラヴェニズクといえばロシア紛争でも功績を上げ、今回の戦いでもうちの戦車を何台も壊してる英雄だ。

「お願いだと？攻めるなとでも？」

『・・・我々は戦術核爆弾を所有していますよ』

「よし、ＭＬＲＳ部隊発射よう・・・あ？中止！？」

「いつでも・・・え！？攻撃中止！？」

―スラッコーＰＫＦ米軍基地―

「戦術核の情報は！」

「カンパニー、ラングレーのバカどもを呼び寄せろ！」

数名の将官が口論する。

「ＣＩＡのバザードです。呼びましたか?」

ＣＩＡの現地諜報員がやってきた

「君!核は無いといったじゃないか!」

バザードは青い顔をした

「ば、ばかな!?あったんですか!?」

将官の一人は重々しく答えた

「戦術核だ。威力は分からん。だが写真を送ってきた」

一枚の写真をＣＩＡのバザードへ手渡した

写真には核砲弾を特殊ケースに入れ、爆薬をくくりつけたようなものが映っていた

「・・・」

「これをどういうのだ!」

ＣＩＡのバザードは答えた

「実はヴルモフに核砲弾を装備できる長距離砲が冷戦時代に置かれたことが。１９５０年代だと思われます。その当時の遺物ではないかと」

「なん・・・だと」

「とにかく攻撃は！どうする！」

「どうしようもできん！ＣＩＡが何とかしたまえ！」

「わたしでもどうすることは・・・」

そこで一人の将官が答えた

「なかったことにすればいい。ＭＬＲＳ部隊に攻撃命令を」

「なっ！？し、しかし・・・！」

―ＭＬＲＳ部隊、コウロー山より２０ｋｍ―

「タイガー１からタイガー３、目標はセットしたか？」

『タイガー１、ＯＫ』

『タイガー２、問題なし』

『タイガー3、いつでも』

「こちら第3攻撃部隊、ＭＬＲＳは準備完了。攻撃許可を」

『こちら本部、オータム中佐だ。撃て』

「了解。タイガー1から3！攻撃開始！」

ＭＬＲＳは箱型のミサイルが入った箱を動かし、座標へ向けて発射した

ーコウロー山航空基地ー

「ふぁあ・・・戦術核だなんてよくやったなあ・・・」

「そうだな」

山頂で警備をしている兵隊二人は椅子に座ってくつろいでいた

「あ・・・？なんか音するぞ？」

ひゅうううという甲高い落下音が聞こえた

「・・・攻撃だ！」

ロケット弾は二人へ命中した。

ドカンドカン！と山頂で炸裂した。

兵舎は吹き飛び、防衛用の装甲車や地対空ミサイルもまとめて吹き飛ばされてしまった。

「攻撃されないといわなかったか？ラヴェニズク・クラフチェネンコ」

ドミトリー・スパヴェノビッチ少将はラヴェニズクに問いただした

「私は・・・あなす・・・いえ、シュパジェノブスク大将の命令できただけであります」

「・・・ふん、まあいい」

この若造、あのあばずれ女の毒牙にかかったか。馬鹿め。だがコイツならあのあばずれ、止めれるかもしれん。

「反撃は？」

「できないよ。防衛部隊は山頂と山肌だけだ。なーんにもできない」

「なっ！？」

「大体ここは、陸上部隊と合同で防衛することになってるんだ。その部隊もおととい米軍に降伏した。負け試合だよ」

「そんな・・・」

「悪いことは言わん。君は逃げろ」

「職務を全うしたい！」

「大将に恋焦がれた男、さっさと逃げろ。まだ首都まで通じる地下坑道は封鎖してない。行け！」

ラヴェニズクはアナスタシアを選んだ。

彼は核爆弾の入ったケースを脇に抱え、地下へ通ずるエレベータへ飛び乗った。

「いい厄介払いだ。あれがいては核を爆破しかねないからな」

この基地で死者をこれ以上出さん

「大尉！米軍と連絡をつけろ！」

『私はドミトリー・スパヴェノビッチ少将です』

『こちらはアメリカ陸軍のオータム・ラッカス中佐であります』

『オータム中佐、遠距離砲撃を停止してください。我々は降伏します』

―3時間後　首都ヴルモフ―

「それで・・・逃げ帰った・・・と？」

「・・・はい」

「無能の屑がっ！何のための虎の子だ！」

アナスタシアは腰から古いトカレフを取り出した

「ぶっ殺す。命令も聞けないような奴！」

ラヴェニズクは動いた

思い切りアナスタシアを抱きしめた

「なっ！？」

「・・・アナスタシア、目を覚ませ！君は、君は何を望んでいるんだ！？」

「わた・・・私はただおじいちゃんの意志を・・・」

「将軍の意思！？」

「そうよ！おじいちゃんはこの国を軍国主義にしたかった！でもおじいちゃんの時代じゃお金がなかったの！私の代で、お金が潤沢に！だから！だから私は・・・！」

「国民を殺してまでもか！」

「裏切り者はみんな死刑だわ！スターリンの時代からそう決まってるもの！」

「スターリンが死んで６０年、そんな考えはもう捨てろ！」

「いや！いやだっ！私は・・・私は！」

ラヴェニズクは泣く彼女をさらに抱き寄せ、言った

「俺が護ってやる。この国から出るんだ」

アナスタシアはこくんと頷く。

アナスタシアとラヴェニズクは逃亡した。

顔がばれぬよう、バラクラバをつけてボスラヴェキニの余った軍服を着て。

－ＰＫＦ連合部隊－

アメリカ陸海空軍及びＥＵ連合軍、そして自衛隊は首都ヴルモフまでのルートを確保した。

首都ヴルモフは士気の高いスラヴィニア軍が固めていた。

まさか長であるアナスタシアが逃げたとも知らず。

彼女の父もとっくに降伏しており、現状で彼らをまとめるものはいなかった。

しかし連合軍の電波妨害で無線連絡が凍結され、各自防衛に当たっていた。

「軍の指揮官が１８歳の女の子だなんて」

仲沢は驚いたような口調で喋った

「ああ、残虐な大量殺人を行ったな・・・」

クーデター初期に官民合わせて２００人以上が殺害されたという

「信じられないです・・・同い年の子が・・・」

スラヴィニア軍降伏部隊の司令官は尋問ですべてをさらけ出した。

アナスタシア・シュパジェノブスクこそスラヴィニア軍指揮官だと。

「そうだ・・・な」

陸上自衛隊は国内圧力もあり、この作戦が集結し次第この国を出ることになっていた。

しかも自衛隊は連合部隊の占領した後の残兵狩りを任されただけであった。

―最前線　ヴルモフ―

「軍曹！砲兵部隊は！」

「同志少尉！敵の攻撃により砲兵部隊は全滅！戦車部隊がこちらへ！」

「そうか！よし！」

スラヴィニア軍は連合軍の圧倒的火力で押されていた。

しかし、町を爆撃するわけには行かずスラヴィニア軍の補給路をいまだ断てていなかった。

「同志シュパジェノブスクのため、この町を守り抜くぞ！」

『ｙｐａａａａａａ！！！！』

米軍の戦車部隊はビル群から猛烈な攻撃を受けていた

「空軍はまだか！？」

「爆撃機はこれません！」

「クソッ！民間人なぞ知るか！」

ビルからの熾烈な重火器攻撃は陸上部隊の侵攻を妨げた。

「ピンポイント攻撃だ、本部に攻撃要請をしろ！」

―ハロウシャセスク軍港沖　海中―

「こちらニューハンプシャー。座標は特定した。これよりＶＬＳによるトマホーク攻撃を行う」

海中に潜行するアメリカ海軍ＳＳＮ―７７８ヴァージニア級ニューハンプシャーはトマホークによる遠距離支援攻撃を開始した。

―同海域　水上―

「こちらＤＤＧ―１０２サンプソン。こちらも目標を捕捉。直ちにトマホーク攻撃を開始する」

海からによる遠距離巡航ミサイル攻撃は文字通り「飽和攻撃」だった。

「ウォ！スッゲー！」

アメリカ兵はその攻撃力に胸が高鳴った。

スラヴィニア軍が潜伏するビルというビルはトマホークによる攻撃で吹き飛ぶ。

「中尉！戦車だ！」

スラヴィニア陸軍のＴ－９０戦車が友軍の遺骸を踏み越えて爆走してきた

「撃て！」

ジャベリン対戦車ミサイルを装備した戦闘工兵がミサイルを撃つ。

ジャベリンミサイルはそのまま上へ推進し、そのまま落下。

Ｔ－９０の砲塔部にトップアタック攻撃を仕掛けた。

爆散するＴ－９０にスラヴィニア軍はおびえた。

「う、うて！ひるむな！」

銃撃戦が再開され、道での戦いが始まる。

「騎兵隊だ！」

米軍はＭ２歩兵戦闘車を前線へ出した。

その２５ｍｍ機関砲はスラヴィニア兵をなぎ倒すのにもってこいだ。

「アメリカ陸軍！進撃！」

アメリカ軍の歩兵部隊は戦車の援護でずんずんとメインストリートを進む。

「攻撃だ。ＲＰＧ－７を撃て！」

一人のスラヴィニア兵が道へ飛び出した

肩にはＲＰＧ－７を担ぎ、スコープを覗いている

Ｍ２歩兵戦闘車の隊員はすばやく狙いをつけた。

だが一瞬の差が、攻撃を許した。

ＲＰＧ－７のＨＥＡＴ弾が正面装甲を攻撃した。

バンッ！という音は出したが、内部は異常が見られなかった。

だがキャタピラが爆風でちぎれた。

「こちらオマー1、キャタピラがやられた。これ以上は無理だ。支援攻撃に出る」

Ｍ２歩兵戦闘車は遠くにいる敵を撃ち始めた。

―ヴルモフ　上空―

「ＨＥＹ　ＹＯＵ　ＲＯＣＫ' Ｎ' ＲＯＬＬ！」

ＭＨ－６０ブラックホーク３機は攻撃にまぎれてヴルモフ書記長官邸を目指していた。

第７５レンジャー連隊のチョーク１からチョーク３がこのヘリに搭乗していた。

「軍曹、対空砲火もないですね」

「ああ、全くだ」

リチャード・ヴェルディーク２等軍曹とアリシェルト・ウィッテ伍長はＳＣＡＲを持ちながら時を待った。

―ヴルモフ　地上　議事堂付近―

「敵の攻撃が激しすぎる！援護機は来ないのか！ＲＴＯ（無線兵）！来い！」

無線機を背負った隊員が小走りで走ってきた。

『パトリック1から本隊！歩兵攻撃がすさまじく、進軍不能！航空機による攻撃を要請する！』

『こちら本隊、了解した。ＭＨ－６０が上空を飛行中。支援攻撃に移らせる』

－ＭＨ－６０　サンダーバード１－

「嬢ちゃん達、Ｍ１３６を使って下を掃射してくれ」

リチャード・ヴェルディーク軍曹は座席から立ち上がり、Ｍ１３６バルカン砲を握った。

『こちらサンダーバード1、目標にグリーンのスモーク。自分達にレッドスモークを！』

「了解した！」

地上のアメリカ軍兵士はすばやく敵に緑のスモークグレネードを投げ、自陣地に赤のスモークを炊いた。

「よぉっしゃ、アリシェルト！一発ぶっかますぞ！」

スイッチを押すと銃身がくるくると回転し、「ヴィー」という音を立てた。

そして「ヴァアアアアアア！」という死神の叫びのような音を発て、死を降らせた。

「カモを撃つより簡単だ。テキサスの頃を思い出す」

ブァーー！というけたたましい咆哮。

ＭＨ－６０の圧倒的制圧力にスラヴィニア陸軍は撤収を開始した。

ＭＨ－６０は悠々と書記長官邸上空に入った。

「ＧＯＧＯＧＯ！」

ロープが蹴りだされ、外へレンジャーが飛び出す。

ロープをつかみ、リチャードは滑り降りた。

部隊は屋上からさらにロープをたらし、窓から突入した。

総書記護衛隊は突如現れた特殊部隊に驚き、初動を起こせなかった。

レンジャーは敵を射殺し、すばやく書記長室に突入した。

「居ない・・・」

レンジャーは肩透かしを食らった。

もぬけの殻だ

「ダンブル１からサンダーバード１へ！至急撤収！ターゲットロスト！」

リチャードらチョーク１からチョーク３は急いでヘリに乗って撤収した。

米陸軍の投入したＭ１Ａ２戦車部隊、そしてタンクキラーで名をはせたＡ－１０サンダーボルト?の活躍によりスラヴィニア陸軍戦車部隊は瓦解。

歩兵部隊は援護無しでＡＨ－６４Ｄの攻撃を受けていた。

「隊長！弾薬がつきました！」

「同志中尉！降伏しましょう！」

スラヴィニア軍は根底から瓦解して行く。

また潜入したＣＩＡ工作員による「書記長脱出」のうわさもそれを助長した。

そして９月５日

スラヴィニア陸軍中将「ヴァラヴェル・ジューコフ」はバルト海沖のアメリカ海軍イージス艦ＤＤＨ－１０２サンプソンの甲板で降伏条約にサインした。

陸上自衛隊は最後の任務である、ロシア国境の町スリャクロムでの治安活動に入った。

難民がロシア側に流れ込み、ＦＳＢ（ロシア連邦保安庁）直下の国境警備隊が出動する騒ぎとなっているためだ。

『ゆっくり一列に並んでください！』

坂崎修一はスピーカーで叫ぶ。

「教官、人すっごく多い・・・」

一本の道には多くの難民がいた。

一部にはスラヴィニア軍の脱走兵も見られる。

先ほどＦＳＢのヴィンペル部隊が到着し、脱走兵を取り締まり始めた。

難民もビザを発行できるきちんとした身分でしかロシアの飛び地へ入国できず、多くの難民は着き返されていた。

「仕方ないさ。ま、おれ達のできる唯一の任務だ」

「大丈夫・・・なの？」

「大丈夫です、アリョーナ」

アナスタシア・シュパジェノブスクとラヴェニズク・クラフチェネンコは身分証を偽造し、

「アリョーナ・ジュスタクスフ」と「エフィョム・ベリャコフ」という名前を騙った。

『次！』

日本兵（スラヴィニア側での認識）が手を上げ、私達を呼んだ。

『女性の方、パスポートとビザを』

『はい、どうぞ』

アリョーナ、もといアナスタシアは偽造パスポートと偽造ビザをわたした。

『・・・確かに。どうぞ』

日本兵は一連のチェックをし、アナスタシアを柵の外へ出した。

次は私、エフィョムの番だ

『男性の方、パスポートとビザを』

『どうぞ』

私はパスポートとビザを出した

『・・・確かに、どうぞ』

私は柵をくぐろうとした。

すると日本兵の後ろにいたバラクラバをかぶった兵隊・・・おそらくロシア人が一言私に言った

『・・・同胞の恨みは高くつくぞ』

私の倒したロシア軍のことを?

ロシア人は続けた

『そのかばんを見せてくれ』

私はあせった。

中には戦術核が入っているのだ。

難民にまぎれて首都から出たために、捨てれなかったのだ。

『見せてもらおうか?』

俺は叫んだ

『アナスタシア逃げろ!』

アナスタシアははっと気づき、横の雑木林へ走った

『お、おいそいつを止めろ!』

『動くな！』

日本兵はすこしあわてながら銃を構えた

ロシア人も構える

私は口に出して喋った

『この戦術核が爆発してもいいのか！？』

終戦、そして新たなるクライシス

俺は出されたものに驚いた。

『核爆!?』

男はゆっくり頷いた

『こいつに刺激を与えてみろ!ドカンだ!』

俺の後ろで仲沢がぶるぶると震え始めた。

「心配するな仲沢・・・」

ーロシア国境警備隊基地　監視台ー

「大尉!撃てますが!?」

「ダメだ!弾丸が爆弾に当たったりすれば・・・」

ヴィンペル部隊の隊員は櫓でＳＶ－９８を構えていたが、危険すぎて撃てなかった。

『俺を国境から出させろ！』
要求はそれだけだった。
『落ち着け！』
俺が言うと彼は言葉を返した
『俺は落ち着いているよ』
ロシア連邦保安庁ヴィンペル部隊のヴァシリィ・デグチャレフ少尉は雑木林に走っていった女を追いかけていた
「待ちやがれ！待てってんだ！」
女は一瞬振り向き、さらに速度を上げた。
仲間は誰もついてこれていない。
なんて体力だ。
ヴァシリィは腰からホルスターを引っぺがし、中に入っているスチェッキンＡＰＳフルオートハンドガンを取り出した。

これにホルスターをかねた銃床をつけ、肩で構えた。

パパパパパパン！

と乾いた連射音が響く。

女には当たらなかった。

女は振り向き、腰から拳銃を取り出して撃ってきやがった。

「うおぉっ！」

ヴァシリィはとっさにかわしたが、弾丸がワークパンツを貫いて太ももに突き刺さった。

「クソアマァァアァッ！」

女はヴァシリィから悠々と逃げ去った。

『起爆されたいのか？』

男、おそらくスラヴィニア軍将校はじりじりと国境側へ歩む。

仲沢はまだ震えが止まらない

俺はやってやろうと思った。

腰には９ｍｍ拳銃が入ったホルスターがある。

だが手の動きでばれる。

「仲沢、ちょっと・・・引っ付いてくれ」

「・・・・え？」

俺は仲沢を引き寄せて手元が隠れるように密着した。

「な、なんですか！？きょうか・・・」

「静かに」

ホルスターのボタンをはずし、９ｍｍ拳銃をそっと取り出した。

安全装置を手中ではずす。

（パチン）

ぐっと引き出す。

（仲沢、突き飛ばすぞ）

俺が小声で言うとこくんと頷いた

（・・・3、2、1）

俺は仲沢を倒れないくらいに突き飛ばした。

「ひゃっ！」

『！？』

将校は仲沢に一瞬眼を取られた。

俺はすばやく拳銃を構え、撃った。

ガスッという鈍い音がし、男の首筋に直撃した。

『ぶっ・・・』

『やるじゃないか・・・日本兵』

俺は近くへ駆け寄った

『自衛隊だ、スラヴィニア軍』

『ふっ・・・俺はここで終わりというわけで・・・一花咲かせたいよなあ』

男はすばやくケースのスイッチを押した

『わりぃ、起爆させちまうよ』

男は不気味に笑い始めた

『にげろぉぉ！』

ヴィンペル部隊の隊員達はロシア国境側へ逃げ込み、ティーグル軽装甲車へ飛び乗って逃げ始めた。

核爆弾ケースの表示画面には残り２５と表示されている。

間に合わない。

俺は仲沢を抱き起こし、走った。

「ちょっ！？教官ッ！？」

「暴れるない！」

他の自衛隊員も走り出した

難民は事態を理解し始めたのか、国境側へなだれ込んだ。

「Ａｌｌ Ｄｉｅ！」

その声が聞こえたのは２３秒くらいだろう。

俺は仲沢を抱きかかえ、かばうように倒れた。

「ッー・・・！」

「ッ！！！！」

・・・あれ？

俺はゆっくりと目を開いた。

底には小刻みに震える仲沢だけだった。

俺は後ろを向いた

そこには取り押さえられた将校とヴィンペル部隊に搬出された核爆弾。

「・・・どういう・・・」

そこに黒服の男が現れた。

「不発だよ。古いソ連製だ。爆発などするか」

日本語だった。

「陸上自衛隊中央情報隊の矢部1佐だ、よろしくぅ」

「は、はぁ」

「ところでそこの下でちじこまってるＷＡＣ（女性自衛官）、出してあげたら？」

「あ、ああ」

俺が退くと仲沢はゆっくり這いでてきた。

「大丈夫か？」

仲沢に聞くとゆっくり答えた

「大丈夫です・・・ありがとうございます・・・守ってくれ・・・て」

俺は急に恥ずかしくなり

「い、いや、部下の安全も・・・だ・・な」

そこへコホンと咳払いが入り

「ああ、ちょっと話が」

といい始める矢部1佐

「あ、どうぞ」

「うん、とりあえずこれで作戦終了。難民をまとめるのはヴィンペルに任せて撤収だ。」

「はっ！」

翌日、俺達は輸送機に詰められ帰国を果たした。

ー9月8日　日本ー

「任務、お疲れ様だ。諸君。今日から我々は通常任務へと復帰し、変わらない日々を送る」

基地司令が演説をし、全員が基地の懐かしき隊舎へと戻ってゆく。

そこで俺は後ろから声をかけられた。

「教官ッ」

「ん?仲沢か」

俺が振り向くとそこには嬉しそうな顔をした仲沢がいた。

「週末の非番、一緒に外へ出ませんか!?」

「一緒に・・・か?他は誰も連れずに?」

誤解されないかな

「はい」

「そ・・・うか、うん、いいぞ。土曜だな?」

「はい!」

俺の週末は埋まった。

陸上自衛隊及び海上自衛隊、そして航空自衛隊の被害はないに等し

かった。

運も味方したのだろう。

陸自の車両に弾痕が残った程度、隊員達も軽傷が数人いるのみだ。

戦闘自体も少なかったためＰＴＳＤを発症する者もなかった。

国内ではこの成果に祝福がなされた。一方で違憲行為との批評もあったが特に問題もなかった。

―ロシア　サンクトペテルブルク　プルコヴォ空港　９月１０日―

そこに一人の女がいた。

ジーナ・ドゥミトリィンスクというロシア系イギリス人のパスポートを持って。

彼女は国際線ロビーにいた。

手にはサンクトペテルブルク発パリ行きの航空チケットがあった。

『お嬢さん』

そこに一人の男がロシア語を使ってやってきた。

「ラヴェ・・・すいません、間違えました。私英語しか出来ないんです」

彼女に話しかけてきたのは東洋系の男だった。

そう英語で答えると男は英語で答えた

「にしては随分とロシアなまりをした英語だ」

びくっ

「私は日本国陸上自衛隊中央情報隊の矢部1佐と申しまして。貴女をアナスタシア・シュパジェノブスクと見ています」

そうか、彼は・・・死んだのか。ここにこないなんて

「そうそう、あなたを自爆までしようとして守った彼、彼は今ですね国連軍に拘束されていますよ。よろしければ房も同じにしましょう」

いき・・・てる?

アナスタシアは答えた。

「ふん・・・おとなしく歴史に消えるつもりはないの」

「そう・・・ですか。んじゃあ、まあ僕が消えますよ」

日本の工作員はすぅっと消えていった。

・・・え？

私はサンクトペテルブルク発パリ行きへ無事乗ることが出来た。

矢部は彼女を見送り、つぶやいた。

「イワンのバカにご用心」

ーロシア航空　Ｔｕ－１５４Ｍ　７２便ー

「当機は3時間４０分のフライトの後、フランスはパリのシャルルドゴール空港に着陸いたします。サインがあるまではベルトを締めてお座りください」

「ふぅ」

私は座席に座り一息ついた。

これからどうしよう。

彼、ラヴェニズクはスイスへ入国して亡命をしろといった。

亡命先はキューバだった。

眠れなかった。

気が張っていた。

どうしよう、どうしよう。

途中で気づいた。

”囲まれている”

『殺された同胞が待つだろう』

両脇の男がキャビンアテンダントに見られないようにしながらアナスタシアを押さえ、通路を歩いてきた男がアナスタシアの首筋に注射器を突き刺す。

「いぐっ！！！??」

男達はそそくさと立ち上がり、別の座席へ移った。

―翌日オランダ　ハーグ収容施設―

「ラヴェニズク・クラフチェネンコ、今日の新聞だ」

「・・・ああ」

ラヴェニズクは酷くやつれていた。

彼はジェノサイドで起訴され、懲役２５０年がすでに決まっていた。

彼はオランダの国際新聞を取り寄せていた。

元々は軍エリート、英語も出来る。

その見出しにラヴェニズクは驚いた

―スラヴィニア反乱主導者亡命に失敗か　フランス行きの機内で変死体として発見される―

記事本文：パリからによると、スラヴィニアクーデター騒乱の主導者であり9月5日より消息を絶っていたアナスタシア・シュパジェ

ノブスク容疑者１８歳が

サンクトペテルブルク発フランス行きのロシア航空７２便の機内で遺体として発見されたらしい。

死因は不明だが、フランス警察の検証によれば毒物は検知されなかったとのこと。

彼女には国連が１００万ドルの賞金をかけていたが、遺体として見つかった今その価値はなくなったようだ。

彼女は９月５日にロシア国境より逃走している事が確認され、以後足取りは不明だった。

国連事務総長パン・ギムンド氏は遺憾の意を表明し、犯人捜索に全力を注ぐとのこと。〔オランダ／ガイ・ルックス〕

「そ・・・んな・・・」

ラヴェニズクは倒れこんだ。

―翌日紙面―

―スラヴィニア共和国、解体へ。国名はスラヴィニアとされる模様―

スラヴィニアの首都ヴルモフでは生き埋めになった兵隊や民間人の捜索が続けられているが、先日プーシキン・グァツォネフ書記長が亡命後に再入国した。

グァツォネフ書記長は直ちに国家再建プロジェクトに取り掛かる模様。

―紙面右端隅―

―スラヴィニア陸軍エリート士官独居房にて死亡　死因は心臓麻痺―

―日本　週末土曜日―

「ふぅ・・・10分遅刻とはいい度胸だな」

守山駐屯地出入り口で俺は待っていた。

9月で残暑も厳しい。

俺はポロシャツにハーフパンツという暑苦しくもない格好で立っていた。

向こうからカッカッカッと足音がする。

「仲沢、遅い・・・ぞ」

目を奪われたというのは間違ってない。

フリフリした服とキャスケットにジーンズ。

何より目を奪われたのは薄化粧がとてもその美貌を引き立てていたからだ。

「すいません教官ッ！遅れちゃって！」

ー２０分前　ＷＡＣ用隊舎ー

「これで・・・よしッ」

私はお気に入りのフリル付の服とキャスケット、ジーンズをはいてピンクの靴を履いて

その時呼び止められた

「凛、あんた化粧は？」

「え・・・しないけど・・・？」

「はぁぁぁ！？マジで！？」

ナナ（七宮）は持っていた雑誌を放り投げて私の手を掴んで化粧台へ連れて行った。

「ちょっ、ナナッ！遅れちゃう！」

「遅れたほうが好感度がもてるの！」

そして１０分

「はぁい、終了！」

「わぁ・・・」

自分の顔が変わった気がした。

生まれてから化粧したことは数えるくらいで、それも高校時代だけだった。

「はい、行ってくる！」

「うんっ！」

―現在―

「すいません、遅れて・・・っ」

ハッ・・・ハッ・・・と息を切らす仲沢。

「ん、ああ・・・それよりどこに行きたいとか決めてあるのか？」

「い、いえ・・・」

「そうか・・・ならまあ鉄板だ、ついて来い」

俺は仲沢と歩いた。

２０分歩き、新守山駅に到着。

そこからＪＲで名古屋へ向かう。

「定番だよな」

俺は切符を2枚買い、一枚を仲沢へ手渡す。

「そんな、切符くらい自分で・・・」

「まぁいいじゃないか」

電車にすぐ乗り込む。

名古屋行きとあってか、すこし混雑していた。

快速なので座席タイプである。

仲沢をとりあえずおばあさんの横へ座らせ、俺はつり革につかまっていた。

数十分か数分か、電車は名古屋駅に到着した。

俺は仲沢と降り、地下鉄へ乗り換えた。

「あれ?名古屋じゃないんですか?」

「大須だ。あれ?行ったことないのか?」

「はい。名古屋も数えるくらいで」

「そうなのか?あれ、出身はどこだったっけお前」

「私ですか?私は木曽川市ですよ」

「そうか」

「はい」

電車で揺られて大須観音駅に到着し、俺と仲沢は大須商店街を歩いた。

カップルや学生、さまざまな人間が歩いている。

「わぁー！！」

目をきらきらと輝かして周りを見ている仲沢に声をかけた。

「なにか欲しいものあるのか？」

仲沢は振り向いて

「えっとですね、服と、靴と・・・アクセサリーと・・・！」

「おいおい、そんなに金ないぞ」

すると仲沢はきょとんとした顔で振り向いた。

「えっ・・・？買ってくれるんですか？」

「あ？ああ、女の子にお金使わしたら嫌だからな」

「そ、そうですか・・・」

仲沢はそっぽを向いてしまった。

まずったか。金もっともってこればよかったかな、と俺は思った。

元々金はあまり使わないんだ。

ゲーム機が出たら買ったりソフトが出たら買う程度で、かなりの額がたまってきている。

「ＡＴＭで下ろしてくるよ」

「あっ、いえ！そこまでしなくて大丈夫ですから」

しばらく歩いていると一店のアクセサリーショップが目に入った。

「すいません教官、ここ見てもいいですか？」

「ん？ああ、好きにしろ」

私が目に留まったのは銅のネックレスだった。

ハート型でかわいい。

自分で買えるかなと値札を見てみた。

（１万ッ・・・高いな・・・諦めよ）

「ん？買わないのか？」

「あっ、えと、はい」

すると教官は値札を見て店員に

「これください」

といってしまった

「えっだって一万円もするし!?」

すると教官は

「いい、いい。欲しいんだろ?」

という。

私は恥ずかしくなったけど、頷くことはできた。

「ほら」

と私はケースをわたされた

「すいま・・・せん」

そうしかいえなかった。

「すいま・・・せん」

という仲沢は小動物のようでかわいかった。

買った甲斐があるというものだ。

「大事にしろよ」

「はいっ！」

そう答えた仲沢の顔は笑みに満ち、童顔の顔が栄えていた。

俺達はその後、食事をすることにした。

「何か食べたいものは？」

「えっと・・・何がいいかなぁ・・・」

うーんうーんと仲沢が唸る。

なんだ、卑怯的なかわいさだな。

口には出せないけどな。ただの変態だ。

「じゃあ矢場とんで」

俺たちは歩いて矢場とん本店へと向かう。

昼時で込んではいたが、すぐにテーブルへ座ることが出来た。

「じゃあわらじトンカツ定食、仲沢は何がいいんだ?」

「えっと、こっちの小さいので」

「はい、かしこまりました」

注文を済ませ、俺は仲沢へ聞いた。

「なんでまたトンカツなんだ?」

すると仲沢は

「教官、このお店見てましたよ」

「え・・・?」

そういわれれば見ていた気がする。

「お前・・・それを見て?」

「はい」

「観察力のいい奴だな」

と、俺は仲沢の頭をぐしぐしと撫でた。

「ちょっ、子供じゃないんですけどっ！」

撫でるたびに彼女の茶色の髪がふわりふわりといい香りを漂わす。

ぐしぐし撫でられて内心嬉しかった。

厳格なお父さんだったからそんな経験はないから。

教官の動きを見ていてよかったなぁ、って思う。

「お待たせしましたー」

「おっきい！？」

教官の頼んだわらじトンカツは私の顔2個分くらいのサイズだった。

「うまいんだよ、これ。食べてみろ」

そういって教官は私にトンカツを箸でつまんで口のほうへ差し出し・

・・え？

「早く食べろ、落ちたらどうするんだ」

えええっ！？あ、あーんをするの・・・！？

「早く」

「あ、あーん・・・・」

恥を忍んで食べさせてもらった。

「あむ・・・おいひ・・・」

味噌の味が絶妙だった。

ご飯が欲しい。

って私は男か。

「おいしいだろ？」

そういう教官の顔はご満悦そうだ。よかった。

「じゃあ教官もどうぞ」

私は自分の味噌ヒレカツを同じように差し出した。し返しだっ！

しかし教官は

「おう」

といってなんのためらいもなしにぱくっと私の箸に食いつい・・・

ええっ！？

「なかなかだな。今度頼むか」

私のほうが恥ずかしいよ！

自爆技に私は嘆いた。

これ以上の仕返しも思い浮かばず、私は次のカツを食べた。

あれ？これ・・・間接キス・・・にはならないか。漫画でもないし。

あっ、帰りに漫画買おう・・・新刊でてるし。

なんて事思いながら私は昼食を終えた。

食後の一服はやめられないもので、あまり煙草をすわない俺でもこ

の時だけは吸う事がある。

一日1本未満、やめたいと思えばやめれる位だ。

腰からマイルドセブンを取り出し、1本を加えてジッポで火をつけようとしたときに思い出した。

店からはすでに出ていて、喫煙所の前だ。

問題は隣にいる連れ、仲沢のことだ。

「おっと、煙草嫌いだったか？」

エチケットとして聞くべきだろうと俺は考えている。

「いえ、大丈夫ですよ。父がヘビースモーカーなんで」

そう笑いながら答えてくれたので俺は「遠慮なく」といい、ジッポで火をつけた。

すぅっ、フィルターを発がん性のある物質が抜けてくる。

副流煙を仲沢には浴びせたくはない。

俺は仲沢に煙が当たらないように吸った。

ある程度吸い、縦型灰皿へ落とす。

「すまんすまん」

「いえ。あっ・・・えっと、メールアドレス交換して欲しいんですけど」

モジモジしながら仲沢がケータイを差し出した。

「ん、いいぞ。今まで交換しなかったのも不思議なくらいだしな」

俺は口臭予防用のガムを噛み、ケータイを取り出した。

「赤外線でいいよな」

「はい」

赤外線ポートを近づけ、お互い送受信する。

「よしっと」

時間的にも駐屯地へ戻るときが来た。

「そろそろ行くか」

「はい」

電車に乗り、帰り道を行く。

名古屋から新守山までの電車内で

「今日は楽しかったです、ありがとうございました。アクセサリーも買ってもらって・・・」

というので俺は恥ずかしくなったが答えた

「その・・・なんだ、お前にはかわいい奴とか付けてて欲しいからな。た、ただ訓練の時以外だぞ？」

すると仲沢は

「わかってますよぅ、教官と会うときだけですっ。次もこういう時間って用意できたり・・・？」

俺は素直に答えた

「うん、いいぞ。どうせ非番の日なんてゲームかネットだ。どんどん誘ってくれ」

電車が駅につく頃、仲沢はうたた寝をしていた。

「おい、守山だぞ。おーい？」

揺さぶっても起きない。

こまったな・・・

俺は仲沢をおんぶすることにした。

女の子をおんぶするのはどうかとは思ったが、叩き起こすのはもっと嫌だった。

以外にもすんなりおんぶできた。

軽い。これが女の子の重さか。

高校時代の彼女は背負うなんてことはなった。

ましてや先輩だったからな。

よっと背負い、改札で駅員に切符を二枚見せて通った。

タクシーなんてものを拾うことは出来ない。

近すぎる。

俺は背負って帰り道を歩いた。

夏の暑い日。

背中にやわらかいものが当たる・・・なんて邪な考えを捨て去る。

ゴミ箱へ捨てる。

自分は汗かきではないので仲沢に不快な思いはさせないだろう。

しかし密着部はどうしても汗をかく。

俺は早くこの子を帰してやろうと思った。

駐屯地の警備隊員に驚かれた

「どこからつれてきたんっすか！？」

俺は答えた

「駐屯地の隊員だヴァカ」

女性用隊舎へ近づき、ふと思った

男性禁止ではないか？入れないだろ

しかし運のいいことに仲沢は目覚めた。

「んー・・・ここどこ・・・？」

寝ぼけた声が聞こえた。

俺は答える

「駐屯地だ。強いて言えば俺の背中の上」

仲沢は「なるほどぉ・・・」と理解した声を出したが、すぐさま

「えっ!?せせせ、背中ッ!?」

「お、おま暴れるな!」

漫画なんかだと転んで胸に手が当たるなんてシチュエーションだが、屈強な自衛隊員にそれは通用しない。

足に力を入れて踏ん張り、転倒を防止した。

「降りるか?」

そういうと仲沢は「はい・・・」と力なさ気に答えた。

俺はゆっくりと彼女を降ろす。

女性用隊舎の前で仲沢は言った。

「今日は・・・ありがとうございましたっ・・・えと、その・・・またお願いします!」

俺は答えた

「ああ、わかった」

仲沢と別れ、俺は自分の隊舎へと戻った。

「りーんっ、あんた坂崎2曹の背中で寝てたね」

「ひゃあああ!?」

自分のテリトリーであるベッドにナナが乱入してきた。

「えっほんと!?」

と加藤有希陸士長まで。

「教官ってそんな人なのかな?私が訓練受けたときは厳しくて優しいだけだったけど」

と陸士長は続けた。

ナナは私の肩を掴んで

「脈ありだね!・・・?その箱は?」

買ってもらったネックレスケースを指差してナナは言う

「これ？教官に買ってもらったの。綺麗でしょ！」

私は箱をあけ、首に付けた。

ナナは興奮しながら言った。

「これアンタのセンス？似あってるよ！買ってもらった？すごいじゃん！」

「えへへ・・・そうかな」

「そうだよ。これ１万くらいでしょ？脈ありだね！脈！」

深夜

俺は赤坂とのＣＯＤＭＷ２での対戦（ペイヴロウこえーよ）を終え、ベッドで漫画を読んでいた。

その時、親か旧友くらいからか、それとも元カノくらいが連絡してくるケータイがヴーヴーと唸る。

俺は手にとって開けた。

「Ｆｒｏｍ：仲沢凛

Ｓｕｂｊｅｃｔ：今日はありがとうございました（＾＾）

今日はありがとうございました！また行きたいです（´∀｀）

ＰＳ：教官の背中、気持ちよかったです！」

俺はカチカチと打って返信した。

「あ、返信早っ・・・」

私は髪の毛を解いていた。

ケータイをとってメールを見た。

「Ｆｒｏｍ：坂崎修一教官

Ｓｕｂｊｅｃｔ：Ｒｅ：今日はありがとうございました（＾＾）

気にするな。俺も楽しかった。

また行こう。

それとネックレス、大事にしてくれよ。

似合ってるからな。
明日の訓練で会おう。

ＰＳ：そういうことを言うんじゃない。俺はもう寝るぞ」

「教官、照れてるのかな」

私はそう思い、ケータイを閉じた。

―同日　現地時刻ＡＭ２：００フィリピン　スプラトリー諸島沖―

「ん・・・？」

―ＰＦ―１１フィリピン海軍キャノン級護衛駆逐艦ラジャーフマボン―

乗組員は海域で不審な艦船を発見した。

直ちに無線で艦長を連絡を取った。

「艦長、前方に不審な船が」

船は小型、ゾディアックボートと呼ばれる小型ゴムボートだった。

ラジャーフマボンはサーチライトで海域を照らした。

海域に映ったボートには人が数人いた。

この海域はフィリピンが測量などを行っており、れっきとした領海だ。

何事だろうか。

乗組員は地元の犯罪組織だろうと考え、護身用のコルトＭ１９１１Ａ１を取り出した。

「そこでなにをしている！」

拡声器で乗組員が叫ぶ。

ボートは異様な速さで逃げ始めた。

「艦長！該船逃走！威嚇射撃を！」

『許可する！』

乗組員は艦側面のＭ２ブラウニングを撃った。

ダカダカダカ！と発砲音が響く。

船には当たらないが、船は停止した。

だがサーチライトで当たっていないため、うすボケてしか見えない。

そしてそのボートが光ったのが見えた。

８５ｍｍ成形炸薬弾、つまりＲＰＧ－７のＨＥＡＴ弾がラジャーフマボンの側面へぶち当たった。

ラジャーフマボンはＷＷ２の時の艦艇であり、一時期海上自衛隊へ配備されていた実績があった。

しかし８５ｍｍの対戦車ロケットには耐えられなかった。

ＲＰＧ－７はフマボンの貧相な装甲をぶち破って内部の弾薬庫を吹き飛ばした。

ラジャーフマボンは大爆発を起こし、船は真ん中で千切れてしまった。

フィリピン海軍には被弾、沈没の緊急ＳＯＳ無線が届いただけであった。

第1章ＥＮＤ

終戦、そして新たなるクライシス（後書き）

第1章完結です。スラヴィニア編が大きく1章です。

第2章南沙諸島危機をご期待ください。

南沙諸島危機（前書き）

スラヴィニア反乱から数日、中国海軍は南沙諸島海域における戦闘を開始した。

一方で陸上自衛隊第１０師団の坂崎と仲沢は二人で外泊することに・・・！

南沙諸島危機

第二章「国境紛争」

一第1話「南沙諸島危機」一

一ＡＭ４：００　日本一

「本日未明、フィリピン南沙諸島沖で同国の護衛艦が沈没しました。原因はまだ分かってはいませんが、船体は真っ二つになり生存者はいまだ見つかっていないとのことです。
それでは現地の楢沢リポーターへつなぎましょう。楢沢さん？」

「現場の楢沢です。ここマニラでは朝から軍の動きが活発化してきています。本日の朝2時ごろ南沙諸島スプラトリー沖で哨戒活動をしていたＰＦ－１１

ラジャー・フマボンが沈没しました。フィリピン軍は救助所部隊を現地に派遣するようです。こちらからは以上です」

「わかりました。ありがとうございました楢沢さん。さて、次のニュースです・・・」

一ＡＭ５：００　スプラトリー諸島沖　座標エクスレイＰＦ－１１沈没地点一

フィリピン空軍籍のＵＨ－１ヘリは救助隊の海軍の隊員を積み、飛んでいた。数は５機。

何があるか分からないため、武装したＵＨ－１ガンシップも飛行に追随した。

パイロットは現場に到着するまで後すこしだなと、思った。

その時、航空無線に割り込みがあった。

『こちらは中国海軍である。当海域は我々の支配下にある。即刻引き返せ』

「中国海軍だって！？」

パイロット達は驚いた。

救助に駆けつけようとしていたＵＨ－１飛行部隊を待ち受けていたのは海域を支配する中国海軍の艦艇だった。

Ｚ－９ヘリが銃座でこちらから狙っている。

戦艦の対空兵器もまたこちらに狙いをつけていた。

戦艦は2隻、ヘリは4機だった。

とても無武装機5機とガンシップ1機で勝てる相手ではなかった。

フィリピン空軍機6機は陸へと引き返すこととしか出来なかった。

「孫中佐、うまくいきましたね」

「ああ、那下士官」

ソヴレメンヌイ級駆逐艦の艦長室で男がふんぞり返っていた。

名は孫満兆。

中華人民解放軍の海軍中佐だ。

「しかし特殊部隊の連中、なんで撃ったんだ」

「相手の発砲に驚いて撃ったようですね」

「素人か。これだからバカは困る。それで、沈んだ駆逐艦は?」

「はい、生存者を救出後に全員送還予定です。死体は船体に押入れて海底に縛り付けて回収できないように」

「よろしい那下士官。フィリピン軍は出てこないよな」

「はい。先ほど救出部隊を追い出したところです」

「南方の小国の癖して我々の領海に立ち入るからだ。馬鹿共にはいい罰だ」

ーマニア市　フィリピン陸軍基地ー

「今回の件は流石に横暴すぎます！」

「国内では合わせたかのように華僑が暴れ始めています。すでに国民数名が死亡しています」

「中国軍は揚陸艦を派遣し、スプラトリー諸島に接近しつつあります」

「ふぅむ・・・」

大統領は思案した。

これは中国人による攻撃なのか？

ー日本　沖縄県アメリカ軍司令部ー

「中国艦隊はすでに南沙諸島付近に集結中であります、大佐殿」

「まったく、あの連中はどこがどこだか理解していないようだな」

「はい。現在フィリピン軍のデフコンレベルは3、無線はＣＩＡが傍受しています。また、ベトナム軍もこれに警戒しデフコンレベルは4となっています」

「分かった、いざというときのためにＭＥＵを準備しておけ。あとは日本にも出動できるよう連絡を」

「了解しました」

―日本　愛知県守山市陸上自衛隊守山駐屯地―

「はぁ・・・」

「どうした、仲沢」

昼下がり、仲沢が自動販売機の横でため息をついていた

「あっ、教官・・・いえ、なんでもないんです」

「ん?なんだ、言ってみろ」

「い、いえいいんです！」

仲沢は走り去ってしまった

「なんだったんだ・・・？」

「告白なんてゼッタイ無理ッ！」

私は木陰で叫んでいた

「ナナ、やっぱわたしは・・・」

「おーい、なかざわー」

「えっ！？」

後ろから声が聞こえてきた。

振り向くと教官が走ってくる。

「どうしたんだ？急いで」

「えっ・・・あと、次の非番はどこへ行きましょう！？」

今聞くことじゃないよっ！

何聞いてるんだ私！

「うーん、前回は俺が決めたしな・・・次は仲沢が決めてくれ」

「わ、わたし！？」

「言いだしっぺだろ」

うーん・・・と

「海水浴・・・？」

ーベトナム　南威島沖ー

「艦長！中国海軍の艦艇数隻がわが海域へ侵入しました！」

タランタル型コルベット5隻は直ちに海域へと急行した

「ギュン曹長、インド海軍との連絡は？」

「ハッ、デリー級駆逐艦1隻の援護が約束されております！」

「頼もしい。インド政府と仲良くなっておくべきだった。フィリピン海軍の動きは？」

「現在、スプラトリー諸島沖での事件を受けてか援護は出せないとのこと。ただもし同盟を組むのであれば参加したいと」

「よしよし。では行くぞ」

その海域では中国海軍のフリゲート艦「ジャンフー」が2隻待機していた

両者にらみ合う形だ

―ベトナム　首都ホーチミン―

「ようこそ、フィリピン国外務大臣」

「インド外務大臣も」

ベトナムではインド・フィリピン両国の外務大臣とベトナムの首相が会談していた。

「今回お集まりいただいたのは他でもない、あの野蛮な中国人共の

件です」

「大方そう認識を。我々両国もあの粗暴な振る舞いには心底困っています」

「そうですね。今回の行動はあまりにも逸脱しています。フィリピンも1隻船を沈められおりますし」

「表向きは違うのです。船体と乗組員も帰ってこず、海域は封鎖されていて」

「今こそ我々で立ち上がるべきでは？」

「それには中華民国の了承が・・・」

「台湾はすでに押さえました」

「なんと」

インドが口を開いた

「では・・・こうしましょう。あなた方が主張した領土はすべてその国の領土。そして同盟を組み、中国から逃れる」

―9月20日―

「本日、インド・ベトナム・フィリピン・台湾は条約を結びました。この条約国は南沙諸島連合という組織であり、南沙諸島海域を中国海軍から守る意図があるようです」

「やってくれる」

アメリカ合衆国大統領はこの決定に気に喰わなかった

「結果、わが軍は兵站活動に回るわけだ。フィリピン、台湾はわが軍の旧型武器を使っている」

「はい、大統領」

大統領次官は同意した

「次官、中国の動きは？」

「はい、中国海軍の遠征部隊はフリゲートとミサイル駆逐艦を全域に配置しています」

「ふんふん、それで南沙諸島連合軍（Ａｌｌｉｅｄ　Ｓｐｒａｔｌｙ　Ｉｓｌａｎｄｓ　以下ＡＳＩ）は？」

「はい、主に陸軍部隊を輸送船に積んで個々が主張する領土に運んでいます。海軍力は主にインドとベトナムです」

「ふむ、ありがとう」

―９月２１日ＡＭ３：００　南沙諸島中業島―

中国海軍の特殊潜行部隊は潜水艇でこの島へ上陸した。

目的は島の実効的な支配。

将兵は数百あまり。

滑走路が設置されたこの島には中国空軍機を止めれるため、利点が大きかった。

さらにフィリピン空軍は現在戦闘機を保有しておらず、この空港はもぬけの殻だった。

潜水艇２隻から２０人の特殊部隊が降りる。

０３式自動小銃には消音機が取り付けられている。

「行け」

中国軍特殊部隊は小銃を持って空港施設へ走る。

「管制塔を制圧し、無線を奪取する」

―９月２１日ＡＭ７：００日本　愛知県一宮市―

「仲沢、ヘルメットつけろよ」

「はい、教官」

実家に止めてあったバイク、前に買ったホンダのバイクに俺はまたがった。

大学時代に買った奴だ。

しばらく乗ってないけど、まぁいいだろう。

とりあえず点検だけをしておく。

「よし・・・」

バイクにまたがり、特殊部隊が使うようなヘルメットをかぶる。

仲沢には女性用のヘルメット（元は高校のときに乗ってたスクーター用、ついでにいえば元カノの）をかぶらせる。

高速道路に途中で乗り換えた。

「しかし何で海水浴なんだ？」

「したかったんですもん！」

今から向かうのは愛知県知多半島の海水浴場だ。

残暑がいまだ厳しいのでまだあいているそうだ。

「俺とじゃなくても、七宮とか加藤とか、あと里中先輩とかいるだろうが！」

「だって！」

「まぁ、いいわかった。俺も暇だったしな」

―前日　ショッピングモール―

「うーん、これがいいかな・・・」

私は手に水色のシンプルな水着を手にとっていた。

「奴はこっちが好きだろう」

横から声が聞こえ、進めたのはピンク色のすこし派手な感じの水着だった。

「え・・・？」

顔を見ると里中美紀３尉の姿があった

「里中３尉ッ！？」

「坂崎なら露出が多いこっちのが好みだ」

「何で分かるんですか？」

「実際そうだったからな。私も奴が着たばかりの時に誘おうとしたんだ。ま、結果断られたが好みは聞いたんだよ」

「へぇ・・・」

「よかったら私が色々と教えてやるが？」

「え、遠慮します」

「そうか、残念だ」

結局私は水色の、だけど先ほどのピンク色の水着と同タイプのを買

った。

ー現在ー

「しっかりつかまっとけよ？」

「はい！」

仲沢は俺の腹に手を回し、きゅっと抱きしめる

ヘルメット越しにふわんといい匂いがした。

「行くぞ」

スピードを出して海岸へと向かう。

「到着」

「教官、かっこよかったです！」

「ん？そう・・・か？ありがとうな」

バイクは駐車場に止め、海岸へ向かった。

「暑いな・・・・」

「はい。あっ、着替えてきますね。先に海岸で待っててください」

「わかった」

俺は男性更衣室に入り、服を脱いで黒の海水パンツを穿いた。

じりじりと肌を焼く日光。

砂が足を焼く。

「まだかな・・・」

肩をとんとんと叩かれた。

「教官、遅くなりました」

「おま・・・」

俺は驚いた。

豊満とはいえないが、子供の域を脱した胸に水色の水着、そしてくびれた白磁の腹部に水色の下着。足も綺麗で

思わず見とれてしまった

「きょう・・・かん？」

「ああ、いやっ、綺麗だな。かわいい」

「あ、ありがとうございます・・・」

「泳ぐか」

俺は海へ入った。

ぬるい。

「大丈夫か？」

「はい」

俺は背泳ぎで泳いだ。

「どうだ？仲沢」

教官が私に聞いたので私は

「楽しいです」と答えた。

教官は無駄のない体型だった。

変態かもしれないけど、興奮してしまった。

1時間程度泳ぎ、私と教官はお昼を食べるために海の家に入った。

「何を食べたい？」

「うーん、焼きそばで」

「じゃあ俺はラーメンだな」

料理が届き、俺はラーメンをすすった。

「うまいな」

「はい」

食事を終え、デザートのソフトクリームとカキ氷を頼んだ。

仲沢はソフトクリームで俺はイチゴカキ氷だ。
仲沢はおいしそうにぺろぺろとソフトクリームを舐めていた。
それがまたかわいかった。
俺はすばやく仲沢のソフトクリームを舐めた。
「きゃっ、教官・・・！？」
「うまいな。お前も食べてみろ」
俺は代わりにカキ氷を差し出した。
「あむ・・・おいしいですね・・・ッッ！」
仲沢は頭を押さえた
「キーンッってしたか？大丈夫か？」
「え・・・えへへ・・・」
午後、あと1時間泳いで帰ろうと思った。
俺は波間で体を任せた。

―９月２１日ＡＭ３：１０　南沙諸島中業島―

管制塔は民間の管制官が一人いた。

中国海軍特殊部隊の隊員が一人、アーミーナイフを持って椅子に座っている管制官に近づいて首にナイフをつきたて、掻っ捌いた。

血がぷしゅっと音を発てて壁へへばりつく。

『虎１、管制塔制圧』

「了解」

他の隊員たちはこの島へ駐屯するフィリピン陸軍の部隊に攻撃を始めた。

歩哨を消音機付の８８式狙撃銃でしとめていった。

「行け」

兵舎に特殊部隊たちは高性能爆薬を設置し、起爆した。

島に残っている兵隊たちはもういなく、完璧に島を制圧してしまっ

た。

―９月２１日ＰＭ３：００　日本　愛知県知多半島―

「仲沢、あがるぞ」

「はーい」

教官にいわれて私は泳いで教官を追った

海岸まで２０m、そこで異変を感じた。

「うぐっ・・・！？」

足が痛い

「まさかツッた！？」

私は海の中へ引きずり込まれた。

「教官ッ！助けッ！ごぼっ・・・がはっ・・・！」

ヤバイ。

手が動かない。

目が閉じちゃう。

やばいやばいよぉ

ガッとその時手を掴まれた

思い切りその腕に引き上げられた。

海面へ出た

体力が・・・抜けて・・・

「泳げないか!?」

「は・・・い・・」

「わかった、がんばれよ」

教官は私の腕を掴んで思い切り背負って泳ぎ始めた。

意識・・・と・・・ぶ・・・

「おい、仲沢!?仲沢ッ!」

やばい、意識が飛んだか。

海岸まで持ってくれ・・・・

海岸まで運ぶとライフセーバーが走ってきた

「大丈夫ですか!?」

「大丈夫だ。知識は心得てる」

俺は気道を確保し、心臓マッサージを始める

「帰って来い!」

仲沢はピクリともしない。

俺は人工呼吸に踏み切ろうと思い、顔を近づけた。

そしてマウストゥーマウスをしようとしたとき

「う・・・けほっ!」

帰ってきた。

「きょうか・・・ま・・・さか？」

「人工呼吸はまだだ、バカ・・・どうせならさせてくれよな」

思わず本音が漏れた

「え？」

「き、気にするな。大丈夫か？」

仲沢はこくんとうなずき

「足が痛いのとふらふらします」

「・・・帰れそうにないな」

「え・・・」

「ちょっと待ってろ」

教官どこに行ったんだろ

私は砂浜で腰を落として待った。

数分で教官は帰ってきた。

「外泊許可取った」

「えええ！？」

「いがいとすんなりな」

「だだだだだだって私着替え持ってませんよ！？」

「買えばいい。行くぞ」

－ＰＭ５：００　ホテル－

結局私は下着を購入し、ホテルへ入った。

そこそこに綺麗、いいホテルだった。

「二人分は入れますか？」

カウンターで教官はチェックインをした

「ええと、はい。お二人ですね。どうぞこちらへ」

部屋に入り、私は座布団に座った。

「ごめんなさい・・・教官」

「なにがだ?」

「だから・・・お金使わせちゃって」

そういうと教官は近寄り、私の頭をまたかき撫でた

「わわわっ、やめてください!」

「もうそんな事いうな」

教官は私を抱き寄せた。

「は・・・え・・・?」

「心配させないでくれ」

数十秒は一時間に感じれた。

温かい。

「っと、すまん!抱きついてしまって」

「い・・・・いえ」

微妙な時間が流れる。

「あの・・・ご飯は？」

「ん、６時に来るはずだ」

６時に食事が運び込まれた。

おいしそうな夕食だった。

「おいしいです、これ」

「そうだな。ご飯もなかなか」

食事を終え、私と教官は温泉に入った。

お風呂はそこまで込んではいなかった。

お湯に浸かって今日のことを考える。

一番教官に触れれたんじゃないかな・・・

ナナの「脈あり」の言葉が現実味を帯びてきた、そんな気がしてならない。

お風呂を出ると教官が待っていた。

「おう、お先」

「待たせちゃいました？」

「待つのは得意だ。行くぞ」

部屋にはぴったりと布団が並べてあった

「・・・離すか？」

「・・・このまま・・・でも別に・・・」

「寝れないな」

「はい」

９時に布団に入っても寝れない。

「・・・」

教官はむくっと立ち上がって冷蔵庫からビールを取り出した。

「ふう・・・」

ごくごく、といい音が聞こえる。

私も冷蔵庫からジュースを取り出して飲んだ

その時教官が「あっ」と声を出し

「お前それチューハイだぞ！」

「えっ！？」

缶を見た

「アルコール・・・！」

体が急に温かくなった。

「大丈夫か？」

俺が問うと仲沢は

「う・・・酔っ払っちゃいました・・・」

仲沢はゆっくり俺にもたれかかった

「おま・・・」

「・・・教官・・・」

「な・・・んだ？」

「私教官が・・・・・・・Ｚｚｚｚｚ」

おいおい、そこで終わるか。

俺はよりかかった仲沢を布団へ戻し、自分はソファーで寝た。

一９月２１日ＡＭ４：００　南沙諸島南威島一

「敵襲来！」

中国海軍の制圧した中業島から中国空軍のＹ一９輸送機が飛び立った。

数は５機、人数合計５００名。

ベトナム陸軍は守備隊をすでにここへ派遣し、対空砲で持って迎撃を開始した。

「降下しろ！」

Ｙ一９のタラップが開き、兵隊達が飛び降りていく。

１機のＹ一９は兵員を降ろす前に被弾し、空中で分解した。

「中国人共が降りた！狩り出すぞ！」

守備隊はＵＡＺと呼ばれるソ連製の移動車両に分乗して島での戦闘を開始した。

１９月２２日　ＡＭ６：００日本愛知県知多半島ー

「ん・・・」

俺はソファで目覚めた。

後頭部をぼりぼり掻く。

テレビを点けた。

「昨日、南沙諸島にて武力衝突があった模様です。現地からによりますと、中国軍の部隊が中業島、南威島を攻撃し多数の犠牲者が出ている模様です。

日本国政府は中国へ厳重抗議とともに平和維持部隊を派遣する考えを進め始めました」

「やばい・・・な」

俺はそう思った。

中国の拡大侵略がかなり現実味を帯び始めてきた。

とりあえず俺は仲沢を起こした。

女の子の臭いがする布団周り。

すー、すー、とかわいい寝息を立てる仲沢。

「仲沢、朝だぞ」

「ん・・・っ」

ごしごしと目をこする仲沢

「朝・・・？」

「朝だ。足はどうだ？」

「ん・・・大丈夫です」

おれ達二人はチェックアウトし、バイクで駐屯地へ戻った。

帰り道で会話をした。

「外泊だなんて誤解させるかもな！悪い！」

「そんなことないです！」

仲沢は相変わらず心を任せているのかぎゅっと俺の腹に手を回す。

「凛、外泊だなんて大胆じゃん」

「バ、バカ！そんなことない・・・よ」

「ふぅーん？」

「・・・ないんだから」

「おいおい、坂崎よ。お前外泊だなんてすげーな」

「何もしてないぞ？」

「・・・なんだ」

二人とも仲良く誤解されたのだった。

―9月22日　ベトナムホーチミン市　中国大使面談―

「大使、状況を説明していただきたい」

ベトナムの首長は在越中国大使に詰め寄る。

「まぁまぁ。我々は国家の領土をあなた方から平和的に取り戻しているだけなのですよ」

「平和的ぃ？うちの軍はすでに20人が戦死しているんだ」

フィリピンの首長が噛み付いた。

「ほーう、それはそれはご愁傷様ですな」

「なんだと！？」

大使は言った

「小さな小国が束になろうが我々の偉大なる中華人民共和国には勝てない。君たちは黙って指でもくわえていたらどうかな？」

大使は何食わぬ顔で面会をしていた部屋を出て行った。

直後、ベトナム陸軍は南威島に1個中隊を送って中国軍の空挺部隊を殲滅した。

中国政府は反撃を開始、フリゲート艦が南威島に接近し艦砲射撃を行う。

またフィリピン軍を支援するためインド空軍が派遣したジャギュア攻撃機はＳｕ－３０の護衛の下で中業島の滑走路を爆撃した。

制式に紛争に突入したのだ。

「次のニュースです。連日報道してきた南沙諸島衝突事件で新たな展開です。ベトナム軍とフィリピン軍は全面攻勢を開始し、中国軍との正式な戦闘状態へ突入しました。

国際世論は中国の行動を批判し、国際連合は直ちに戦闘行為を終結するよう両国へ要請しています」

－翌２３日　ＡＭ６：００フィリピン　マニラ－

大統領は国際的権威のあるアメリカの放送局を呼び、全世界ネットで今回の事件経緯を説明した。

「今回の紛争につきまして、世界の皆様へお知らせをしたく今回の会見に至りました。まず、９月１８日に起きたわが海軍のラジャーフマボンの沈没事件です。

ラジャーフマボン生存者によると攻撃は対戦車火器による攻撃と判明しました。生存者は中国海軍に収容され帰国しましたが船体と遺体は海中へ投棄されたとのことです。

この時期から中国海軍の著しい侵略が始まり、中業島への攻撃が始まりました。駐屯していたわが軍の兵は大半が殺害され、民間人も多くが死亡しました。

中国軍は南沙諸島海域における利権を狙っており、これを容認すれば日本の尖閣諸島も同じ結果になりかねません。そこで我々ＡＳＩは戦闘部隊をこの海域へ集中させることとしました。

すでにインド軍、台湾軍がこの海域へ集結しつつあり大規模な戦闘状態へ発展するでしょう。我々は長期化する恐れのあるこの紛争に勝利するためにアメリカ合衆国並びに日本への援助を申し込む考えであります」

実際この演説後、在日フィリピン大使、在日ベトナム大使、在日インド大使が外務省を訪れ（台湾は事実上中華人民共和国であるため

大使館はない）、平和維持目的の自衛隊派遣を要請した。

アメリカ合衆国にも同じことが行われた。

スラヴィニア反乱から数日、世界はまた混沌の紛争へと引き込まれてゆくのだった。

南沙諸島の影と青年たちの闘争

―中華人民共和国　北京―

「主席殿、わが海軍は現在南沙諸島全域をカバーしました。また陸軍部隊も順調に進軍しつつあります」

「南方の馬鹿共に自分達の矮小さを思い知らせるのだ。無停止攻撃を開始せよ」

「はっ！」

―９月２３日　ＡＭ９；００南沙諸島　中業島沖―

中国海軍は航空戦闘を開始するために空軍の援護に回った。

海軍のソヴレメンヌイ級駆逐艦と揚陸艦はずんずんと海域を突き進んできた。

中業島へ戦車部隊を送るためである。

中業島はインド空軍の空爆により滑走路が壊されて中国空軍は出てこれない。

そこに目をつけたインド軍は南沙諸島全域をカバーできる位置に航空母艦ヴィラートを派遣し、ハリアーを使って制空権を確保した。

フィリピン空軍は空軍機を持たないため、全面インド空軍が出張っている。

インド海軍は敵揚陸艦を叩くため、シンドゥゴーシュ級通常潜水艦を４隻派遣し、さらにフィリピンからＳｕ－３０が対艦ミサイルを装備して飛び立った。

一方中国海軍はインド海軍の出撃を考慮し、ソヴレメンヌイ級などの揚陸部隊とは別に対潜部隊を配備。

Ｚ－９対潜ヘリが哨戒活動に当たっていた。

「・・・？」

Ｚ－９対潜ヘリ１番機の林曹分伍長は対潜レーダーに映る機影を確認した。

「敵潜水艦をレーダーに捕らえた。確認してくれ」

「何？・・・これはシンドゥゴーシュ級潜水艦だ！」

「命令を！」

「魚雷を撃て！」

「了解！」

中国海軍のＺ－９ヘリは機体側部についている魚雷を投下した。

－インド海軍シンドゥゴーシュ級潜水艦－

「中国人に感づかれました。敵、魚雷発射！」

「デコイ射出！」

「了解！」

潜水艦は囮を発射し、魚雷を回遊した。

さらに見つからない深さまでもぐった。

「こちらシンドゥ・ナトゥラ。敵に探知されたも回避。空軍さんのデータ網に敵戦艦は映らないのか？」

「まだ映らない。映ってるのはコルベットだ」

「早くしてくれ、対艦巡航ミサイルが今か今かと待ってる」

―Z―9　1番機―

「逃したみたいだ」

「クソッ」

林伍長は悪態をついた

「林、あせるな。ここの辺りに敵がいるのはコレで明白じゃないか。燃料もそろそろマズイし、母艦に帰還するぞ」

「了解、上官殿。1番機、燃料補給のために帰還する」

「敵を捕捉！」

「よし！コード入力開始！」

「完了しました！」

「対艦ミサイル発射！」

1発のミサイルが海中から飛び出た。

インド海軍のそれは中国海軍の指揮を執る戦艦０５２Ｂ型駆逐艦を狙っていた。

２隻しか作られなかった０５２Ｂ型駆逐艦だが、性能は中の中程度だという。

だがレーダーはそれを見逃さなかった。

「敵潜水艦、対艦ミサイル射出を確認！」

「哨戒機急げ！くそっ、対空班は用意しろ！」

艦隊に非常警報が鳴り響く。

警報に、上陸用舟艇に詰められた中国陸軍の兵隊達はおびえを見せる。

元々、ヘリで突然連れてこられて詰められた兵隊だ。ここがどこで、自分が誰と戦っているのかも分からない。

４隻のインド海軍潜水艦はさらに第２波攻撃を開始。合計８発の対艦ミサイルが艦隊をめがけて直進した。

Ｚ－９対潜ヘリ部隊は海域へ急行した。

しかしながら待ち伏せていたＡＶ－８ハリアーに迎撃され、全機が墜落という惨事になった。

「友軍の哨戒機が迎撃されたぞ！迎撃できるのか！」

「対空砲を撃て！迎撃ミサイルは撃てないか！」

フィリピン軍は旧式の車両輸送船ＬＳＴ－１は3隻、中にはスコーピオン軽戦車２０両とコマンドゥ装甲車２０両を積み込んだ。

さらに兵隊を積んだパゴロド・シティー級輸送船5隻。

これらの艦艇は中業島への上陸を目指し、順調だった。

フィリピン陸軍の上陸部隊は何の妨害もなく、海岸へ上陸した。

中国海軍の先行上陸部隊は壊滅的被害を受けていた。

度重なるインド空軍の爆撃機のせいだ。

「敵上陸部隊が上陸ッ！」

「攻撃せよ。われらが中国共産党に栄光あれ・・・・」

中国軍の上陸部隊は無謀にも攻撃を開始した。

フィリピン陸軍部隊はスコーピオン軽戦車と歩兵部隊でコレを撃退し、島の半分を押さえることに成功した。

―ベトナム　南威島―

南威島に空挺降下した中国軍は夜中、ベトナム陸軍の追撃を受けて散り散りになった。

各個小隊が撃破され、中国軍は南威島でも占領をすることが出来なかった。

―南威島方面中国艦隊―

中国海軍の部隊はフリゲート艦を引きつれ、さらに巡航ミサイルが

撃てる夏型原子力潜水艦とゴルフ級通常潜水艦を配備した。

夏型潜水艦とゴルフ級潜水艦には通常弾頭の巡航ミサイルが積まれ、ベトナム陸軍の駐屯する南威島の司令部を狙っていた。

「位置情報入電！」

「ベトナム人に我々の力を示してやれ。ミサイルをロックオンしろ」

「了解！・・・入力完了！」

「発射！」

夏型潜水艦はＶＬＳより巡航ミサイルを発射した。

中には炸薬がこめられている。

巡航ミサイルは防衛網を難なく通過し、南威島司令部を直撃した。

―同時刻中国　北京―

外国人記者等がいっせいに集められた。
会見を開くという。

国家主席は堂々と現れこういった

「我々は安全目的で海域を航行中、フィリピン海軍の攻撃を受けました。我々はこの問題に対処するため反撃、これを撃沈しました」

記者達が叫ぶ

「ベトナムでの侵略行為はなんです！」

国家主席は言葉を返した

「侵略？いいえ、違います。我々の土地を取替えしているだけの行為です」

ー翌日　ＡＭ１０：００アメリカニューヨークー

国連は戦闘の悪化によって中国側の核弾頭使用によるインドとの全面核戦争を恐れ、両国へ停戦を打診し従わない場合経済制裁を行うと通告した。

国際連合はスラヴィニアで活動しているＰＫＦの3分の1を撤収さ

せる手はずを整えてこの地域紛争へ終止符を打つことを決めた。

―通告後　中国・北京―

「おのれ、資本主義共め。侵攻はどうなっておる」

「国連の平和維持軍が停戦ラインに規制線を敷いています。不可能です」

「クソッ！どうにかしてあの島を取り上げろ！あの資源が欲しいのだ！」

―同時刻　フィリピンマニラ　ＡＳＩ総合司令部―

「中国軍はコレで下がるかな」

とフィリピンの大統領。

ベトナムの大使は

「中国人どもは根深い。条約無視の攻勢に出るはずだ」

インド大使も同調し

「まさしく。ああ、そういえば日本とアメリカの支援は受けられそうですかな？」

ベトナム大使は

「両方乗り気ではないなぁ」

フィリピンの大統領は

「この戦い、日本やアメリカの支援なくしては勝てませんぞ」

このあたりから多国籍軍が中業島、南威島に駐屯を開始した。

構成国はイギリス、フランス、ロシアから構成され国境地帯の防衛に当たった。

しかし周辺海域まではカバーできないため、海域での衝突が国連の懸念材料だった。

これは勢力的に劣るＡＳＩにとっても懸念材料であった。

中国側としてはこれはいい条件で、潜水艦や潜航艇を投入した。

ＡＳＩと国連は最大の海軍力を持つアメリカ海軍第７艦隊とそれに次ぐ海軍力を持つ日本国海上自衛隊に支援を依頼した。

ロシア海軍は諸事情と航路の問題ですでに断っているため、ＡＳＩと国連には頼みの綱であった。

アメリカ合衆国は第７艦隊を要請どおり南沙諸島海域へ派遣した。規模はタイコンデロガ級ミサイル巡洋艦シャイロー１隻、アーレイ・バーク級ミサイル駆逐艦３隻、空母１隻、潜水艦２隻のレベルであった。

日本は国内世論批判が多く、更に法律の壁もあるため米海軍の支援役という体で参加した。

と、いえども規模はそこそこでイージス艦あしがら１隻を筆頭にたかなみ型護衛艦２隻、むらさめ型護衛艦２隻、対潜ヘリ収納用母艦ひゅうが、そしてそうりゅう型潜水艦１隻とおやしお型潜水艦１隻。十二分な艦隊をそろえて出港した。

地上部隊も出すことになりアメリカは海兵隊を投入。日本は陸自を投入することになり経験豊富な第１０師団から数人、他の師団から数十人を派遣することになった。

－１０月７日　南沙諸島中業島－

陸上自衛隊の平和維持部隊は１０人でここに駐屯していた。

他にはロシア陸軍が１０人、アメリカ海兵隊が１０人、そしてイギリス陸軍１０人。

島に中国軍はいない。

海岸ラインにＰＫＦ部隊は駐屯し、異常を逐一報告する。

フィリピン陸軍はこのＰＫＦ部隊に見張られつつ１００人規模の部隊を駐屯させている。

中国海軍は即時展開が出来るようにここから数百ＫＭ離れた海域に艦隊を止めてある。

坂崎修一は悩んでいた。

「仲沢は何を言おうとしたんだろうか」

一９月２８日　日本・陸上自衛隊守山駐屯地　遠征前日一

「教官、なんで私ダメなんですか？」

「何度言えばいいんだ？仲沢。今回のＰＫＦは３等陸曹以上でしか

参加が許されてないんだ。おとなしく訓練していろ」

「そんなぁ」

教官は私の頭に手を置き、ぐしゃぐしゃと撫でた

「ちょっ、痛いですって！」

「すぐ帰ってくるさ」

―その日の夜―

「・・・決心・・・したぞ。私は告白する」

「ほー、意気込んでるねえ」

「ナナ、見ててよ。私告白する」

―９月２９日　遠征当日、駐屯地―

「交代要員に絞られろよ、池田！」

「了解です！」

俺は目で仲沢を探した。

もうトラックに乗らなければ。

俺がのり、トラックにエンジンがかかる。

そこへやっと仲沢が現れ

「教官！言いたかったことがっ！」

「なんだ！早く言え！」

「私教官の事が―」

『出発します！盛大な拍手を！』

かき消された。

拍手の中に仲沢の声が消えてゆく

―１０月７日　中業島―

「ふぅ・・・」

「どうした、坂崎。浮かない顔して」

「ああ、赤坂か」

赤坂はサングラスをかけていた。

「いや・・・仲沢が心配でな・・・」

「そうか・・・ま、がんばれよ。とりあえず状況報告だ」

「おう」

俺は椅子にかけ直し、話を聞く体制をとった。

「赴任から５日でわかったことをまとめよう」

「わかった」

赤坂は話し始めた

「中国軍は出てきそうだ。これは間違いない。そしてココにいるフ

ィリピン軍は全員信用できる。

ＰＫＦ部隊も信用できるだろうが、スパイには気を付けたい。まあこんなとこか」

「だな・・・っと」

ＰＫＦ部隊が持ち込んだ携帯電話専用の電波塔を介して送信されたメールが届いた。

－Ｆｒｏｍ：仲沢凛

Ｓｕｂｊｅｃｔ：お元気ですか？

やっとメール送信できました（＜＞）

こっちは元気です。やっと涼しくなりました。

行く時に渡したお守り、なくさないでくださいよ！

「ふっ・・・」

「お？めったに笑わない坂崎がどうした」

「神戸先輩」

神戸先輩はのっしのっしと歩いてきた。

「ん、ああ、あのちっこいやつか」

「はい。まあかわいくて」

神戸先輩はゲラゲラ笑い

「お似合いだとは思うが？」

と分けのわからないことを言い、ノシノシと戻っていった。

―日本―

「あっ！メール！」

私は思い切りとった。

Ｆｒｏｍ：教官？

Ｓｕｂｊｅｃｔ：Ｒｅお元気ですか？

元気だ。いや、お前に会えないから少し不機嫌だ。

こっちは何とかなりそうだが、死んだ時はすまん。

「もう・・・死んじゃダメですよ」

―中業島―

Ｆｒｏｍ：仲沢凛

Ｓｕｂｊｅｃｔ：ＲｅＲｅお元気ですか？

死なないでください！なんのためのお守りですか！

俺はお守りを見た

「安産祈願じゃあなあ・・・」

巫女さんも驚いただろうな。

―中国艦隊　中業島沖―

『孫君、どうかね』

「はっ、匡大佐殿。現在我が海軍は国連という資本主義に縛られてはいますがいつでも攻撃可能であります」

『孫君、我々はこの度国連から脱することにしたよ』

「そ、それは国家主席様のご意思で・・・？」

『そうだ。君はこれから１３億の民の総意を表すのだ』

「了解！」

ーアメリカ合衆国ラングレー　ＣＩＡ本部ー

「マーズ、聞いたか？この回線」

「ああ、聞いた。連中動くな」

ＣＩＡは回線を傍受していた。

「海軍部隊に伝達しろ」

匡壮謁海軍大佐。

内地勤務のタカ派。

国連決議で弱腰となった主席に見切りをつけて自分の操れる中業島方面の艦隊を勝手に行動させている。

主席は撤収を決定しており、すでに秘密裏とはいえＡＳＩも合意していた。

実際、南威島方面と太平島方面の艦隊は撤収を開始している。

中国海軍中業島派遣艦隊は行動に移した。

ゾディアックボートに海軍の特殊作戦部隊が乗り込み、浜を目指す。

時はＡＭ１：００

秋空の下、十二分に暗い。

農村出身の李悌一伍長はこれで家族に腹いっぱい飯が食べさせられると思っていた。

「伍長、これでいつも言っていた家族を裕福にさせる夢が実現でき

ますね！」

「馬一等兵、そうだな。お前もじゃあないか」

「ええ・・・へへ」

彼らは知らなかったのだ。

自分たちが個人の命令で動いていることを。

ゾディアックボートは無事、崖下の小さな浜に着岸した。

「伍長、フックをかけろ」

李はブンブンとカウボーイの縄のようにフック付きのロープを回し、崖上にかけた。

「かかりました」

「共産党に」

『共産党に』

ＣＩＡのつかんだ情報は直ちに艦隊へと送信されるはずだったのだが、手違いが起きてまだ届いてはいなかった。

つまり全員警戒していないのだ。

総勢１００人の潜入部隊は崖を登って林を走った。

男たちはただ、欺かれていた。

それを知らぬ若者たちは家族のため、自分の未来のため、国の未来のためにＰＫＦ部隊の野戦キャンプ地を目指した

青年の意思、国家の意思、上官の意思（前書き）

※性的表現を含みます

青年の意思、国家の意思、上官の意思

「イグナトーチェ、ウォトカをあまり飲むんじゃないぞ」

「けど同志軍曹殿、やってらんないですよ・・・週末は合コンだったのに」

ロシア陸軍ＰＫＦ派遣小隊レオニート

彼らは今日、海岸の警備役であった。

『李、敵は?』

『は・・・警備兵が7名です』

『隠密作戦で行く。5名、来い。湛、貴様は狙撃だ』

中国兵たちは音のなるかさばる装備を置き、手にナイフを持って近づいた。

狙撃手は木にのぼり、時を待つ。

『やれ』

一人の中国兵は一人で見回っていたロシア兵に近づき、喉元をナイフでかっさばいた。

『美しい』

二人目のロシア兵はロープで絞め殺される。

『3人目が遺体を発見する。湛、仕留めろ』

狙撃銃はサプレッサーを装着しており、音漏れることなくロシア兵を地獄へ引きずり落とした。

「ん・・・？定時連絡まだか？」

ロシア軍の使用する野戦テントに中国軍はジリジリと近寄った。

「イグナトーチェ、見てこい」

「えー、俺じゃなくても！」

「行って来い」

「ちぇ」

『一人来ます』

『やれ』

イグナトーチェはかったるそうに草むらを歩いた。

「やってらんねー・・・」

”ガサガサっ”

「・・・」

イグナトーチェはＡＫ７４Ｍのセレクターをフルオートにがちりと変える。

「そこか！」

イグナトーチェは草むらにＡＫ－７４Ｍを撃った。

『あがっ！』

ロシア軍部隊の基地から警報が発令された。

『ばれたようです』

『しかたあるまい。通信兵！本隊に連絡！強制攻撃！』

『は！』

島はアラートモードに移行する。

イギリス軍どアメリカ軍、そして自衛隊にフィリピン軍。

彼らは示し合わせ、陣地防衛に入った。

ロシア軍は生き残ったイグナトーチェ以下7名を後退させた。

中国艦隊の動きはあまりにも大きく、ＣＩＡの衛星は見逃さなかった。

アメリカ海軍の派遣部隊は直ちに行動を開始した。
イージス艦と潜水艦は中国海軍を収める射程へと移動を開始した。

「警報か！」
坂崎は飛び上がった。
赤坂はうなずき
「敵部隊だ。デフコン1、オールアラート。くそっ、武器庫には鍵が！」
「こいつで何とかするしかないな」
坂崎は自衛用のシグザウエルP220（9?拳銃）を叩いた
「予備マガジンは2、か。きついが仕方ない」
自衛官たちの動きは早かった。
展開までに1分を要さなかった。
「点呼！・・・よし、全員いるな」

楢木隊長が話し始めた

「ロシア軍が接敵した。数は不明だが、3名死亡している。武器庫の鍵は今開けに行かしたが、状況は―」

その時、遠くから響く砲声がした。

「艦砲か、まずいな」

着弾はすぐだった。

自衛隊テント横の森林に着弾する。

「全員砲撃の放物線をよく見て行動しろ！」

『こちら古屯3、援護要請』

『了解、現在上陸用舟艇が急行中』

中国海軍は戦車を載せた揚陸艦を急行させ、兵力増強を図る。

―ＤＤＨ―１６　ひゅうが―

「中国艦隊が動き始めたぞ。ＳＨ―６０Ｋは発艦！直ちに対潜行動に移れ！」

「アイサー！」

海上自衛隊のひゅうがからＳＨ―６０Ｋ哨戒ヘリが飛び立った。数は２機。

アメリカ海軍は空母よりＦ／Ａ―１８スーパーホーネット（対艦ミサイル）を発艦させた。

自衛隊は砲撃にさらされた。

「動けない！」

砲撃は彼らにあたりこそしなかったが、的確に動けなくさせてはいた。

そして迫っていた

中国軍は

1発の銃弾が世界を変えるというのは本当で

陸自自衛隊史上始めての戦死者が出てしまった。

1発の弾丸は陸上自衛隊北部方面隊の隊員のヘルメットを貫通し、
脳天を貫いた。

前に居た同じ隊の隊員に生暖かいピンクの脳漿が振りかかる

「い、井上・・・？いの・・・う、うわあああああああ！！！！」

銃弾が彼らを晒した

「敵！敵だ！」

坂崎修一は腰の拳銃をとった

視界には一人の男

名も知らぬ男だが、殺意を込めてこちらを見る。

手には小銃が。

坂崎は９ｍｍ拳銃を撃った。

手には小さなブレ。

これで一人の男は命をなくす。

坂崎は叫ぶ

「撃て！死にたくなければ！」

自分より階級の上のもの、下のもの、全員が拳銃を構えた。

楢木隊長が叫ぶ。

「自由射撃！武器庫まで後退！」

バズン！バズン！

中国軍の侵撃を止めようと拳銃を撃つ。

これに加勢したのはアメリカ海兵隊だった。

イラクで場馴れした彼らは睡眠用のワーキングパンツ、裸に防弾アーマーを装備して自動小火器を撃ち始める。

「ＯｐｅｎＦｉｒｅ！」

―同時刻　日本　陸自自衛隊守山駐屯地　女性用隊舎―

「ん・・・ふ・・・あっ・・・・」

仲沢凛は声を押し殺して自慰行為に励んでいた。

「ッ・・・ふ・・・」

今に始まったことではないし、女性としても６０％以上はこれをするのだ。

「あ・・・教官・・・ッ」

これは口には出ているが、小声だ。

「ん・・・くっ・・・あ・・・ふ・・・ぅ」

仲沢凛は体を震わせ、布団に沈む

「なに・・・してるんだろ」

私には彼氏がいない

というか作ったこともない。

どういうわけか、経験がない。

私にできるのは自分の性器を触り、満足させることだけ・・・

「はぁ・・・」

ボリボリと頭をかき、洗面台で手を洗い冷蔵庫へ向かう。

牛乳を取り出し、コップに注ぐ。

「んぐ・・・んぐ・・・」

一気に飲み干す。

格好はタンクトップに下は下着。
妖艶ではあるが、ココには女しかいない。

「はぁ・・・教官にして・・・ほしいな」

ドクドクと心臓が鼓動する。

「ああ・・・だめだめ・・・」

下腹部がじんじんする。

「女の部分が目覚めてるのかなぁ」

ブチッ

「・・・？」

何かが切れた

「あっ、ネックレスが・・・」

それは教官とデート（たぶん）したときに買ってもらった銅のハート型ネックレスだった。

「縁起悪いな・・・」

仲沢凛は心配になり、メールをする。

状況は刻一刻と悪い方向に進んでいた。

「大丈夫ですか？」

「８９式小銃、確保！」

「よし！」

自衛隊は無事武器庫までたどり着いた。

鍵を開け、隊員たちに銃を行き渡らせる。

「弾には限りがある！注意して撃て！」

と、楢木隊長が声を張り上げる中そこに無線機を持った赤坂が来た。

「隊長、海自が状況説明を要求しています」

「代われ」

―ＤＤＨ１６ひゅうが　ＣＩＣ―

「こちらは艦長の尾崎です」

『こちら第１０師団の楢木です。ご用件は。なるべく手短に』

「状況は？」

『悪いです。中国人がなだれ込んでるように見えます。米海軍に出来るなら掃射をお願いしたいところです』

「ふむ、負傷者は？」

『北部方面隊の隊員１名が殉職、ほかは健在です』

「でてしまいましたか」

『はい。それで、海自は何をしていただけますか？』

「我々はＳＨ－６０Ｋしか持ち合わせていません。現在、２機がそちらへ向かっています」

『回収地点は？』

「島中央部の開けた場所です。そこから３０分」

『了解、通信を終了する』

尾崎は一刻も早くヘリが彼らを救うことを願った。

―ＳＨ―６０Ｋシーホーク　１番機―

「命令変更、島中央部への着陸」

「了解・・・マテ、磁気電探に反応あり。夏級潜水艦と見られる」

「データリンクに照合させろ」

「ＯＫ・・・よし、ビンゴ」

「こちらシーホーク１番機、敵潜水艦発見指示を」

『こちらひゅうがの尾崎。確かか？』

「確かです。敵は弾道弾発射態勢の模様」

『了解、魚雷発射』

「アイサー魚雷発射」

シーホークはホーミング魚雷を海中へ叩き込んだ

「データをあしがらへ転送」

―イージス艦あしがら　ＣＩＣ―

「シーホークよりデータ来ました」

「前方ＶＬＳのセル１からセル５、ＶＬアスロックを発射態勢に」

「了解・・・インプット完了」

「コメンスファイア！」

イージス艦あしがらはアスロック対潜ミサイルを射出する。

１発目の魚雷は潜水艦を破壊できなかった。

一夏型潜水艦一

『日帝の連中に殺されてたまるか。上陸部隊の支援を急げ』

『艦長！』

『何だ！』

『日帝の対潜ミサイル５発が！』

『なにぃ！？デコイはもうないぞ！早くミサイルを撃たんか！』

『無理です！』

―ＳＨ―６０Ｋ１番機―

「・・・圧壊音確認、海域異状なし。命令を続行、島へ向かう」

―中業島―

「聞いたな！３０分で行くぞ！」

隊員たちは素早く森に走りだす。

すると四方八方から銃撃を受けた。

「アンブッシュ！（待ち伏せ）散開し、索敵！」

坂崎は怯える心を何とか抑えこむ

（ここで死んだら・・・仲沢のあの笑顔見れないじゃんか・・・）

８９式小銃を握りしめ、サイトを覗く。

草葉の陰にヘルメットが見えた。

緑のヘルメット、ロシア軍でもアメリカ軍でも自衛隊でもない。

「隊長、敵です」

坂崎の言葉に楢木は返す

「撃て」

坂崎は1発、弾薬を放つ。

5．56?の弾はそのまま中国兵を射ぬく。

『感づかれてるぞ！』

―F／A―18スーパーホーネット部隊コールサイン「スクウォーター：アンジェリコ」―

「レミルズ隊、敵輸送船部隊捕捉。どうぞ」

―E―2Cコールサイン「スクウォーター：レミルズ」―

「こちらレミルズ隊、レーダーには正しくそれがアカの海軍艦艇ということを表している。攻撃し、撃沈せよ」

『アンジェリコ了解』

アンジェリコ隊１０機は右へ高度を落とし、輸送戦艦部隊へ攻撃を開始した。

『おい、あれはなんだ？』

『敵空軍機！』

武装のない輸送船はハープーンミサイルによる集中攻撃を受け、１０隻中８隻を失った。

中業島方面中国海軍は輸送船団と大切な兵員を海の藻屑にしてしまった。

残っているのはソブレメンヌイ級駆逐艦３隻と僅かな補給船２隻

勝ち目などなかった。

ー中国　北京ー

「中業島部隊が勝手に行動を開始！国連平和維持軍と交戦中！」

主席は椅子から落ちそうになった

「なんだと！？撤収させてなかったのか！」

「状況は不明、しかし我が艦隊は壊滅的打撃を受けたとのことです！」

「わ、我が国の利益を考えろと言うたのに！・・・クソッ！全員離反者だ。国家反逆罪だ！」

『こちら1番機、到着。2番もだな。陸自の隊員さん達、早いとこ頼む』

ヘリは予定通り着陸を果たした。

中国軍の追撃を回避し、陸自の部隊は無事についたかに思われた。

「・・・ん？北部方面隊の井之頭3等陸曹がいないぞ！」

それは先程死んだ井上3等陸曹の脳漿を頭からかぶった隊員だった。

遺体は現場に放置せざるを得ず、彼は同意してついてきていたはずだった。

「ちょっと見てきます」

坂崎は走りだす。

森に入ったところで井之頭を見つけた。

「おいいの・・・！」

彼は中国兵に取り囲まれているのが明白だった。

５人、５人の敵が彼を狙っていた。

『日帝め、死んでしまえ』

『このクソ豚が』

中国兵たちが言い合う中、李はこの作戦の成功を確信していた。

家族に腹いっぱい食べさせられる。

坂崎は８９式小銃を構え、横薙ぎに掃射した。

李は自分の血に溺れてしまった。

『ここで・・・死ねるか・・・』

「大丈夫か？」

井之頭は震えてはいたが、ヘリまでは行けそうだった。

坂崎は彼に肩を貸し、ヘリまで引きずる。

『中華人民共和国に・・・栄光・・・を』

ヘリに乗り込んだ時、坂崎は背中に衝撃を感じた。

「・・・え？」

李は最後の力を絞り、９２式拳銃を坂崎に当てた。

李はそのまま崩れる。

「坂崎！しっかりしろ！」

楢木隊長の声が聞こえる。

「あ・・う・・・お、俺は・・・・」

痛みの激しい当たりを手で触ると、ぬるっとした感触が手に伝わった。

「血・・・かぁ・・・」

「しゃべるな！赤坂！神部！手伝え！」

坂崎はアーマーのポケットを開け、安産祈願のお守りを取り出して握りしめた。

「・・・まだ死にたく・・・ない。く・・・そ」

ー中華人民共和国　雲南省ー

あばら屋が点在する村があった。

地図に表記されないが、それなりに農民の住む村だ。

そこに一台の場違いな公用車が来た。

中国共産党の公用車だった、

共産党の制服を着込んだ４人の党員が車から降り、１軒の農家に立ち入る。

「李悌一の親、李鵬眞はいるか？」

一人の６０代の男性が家の奥から出てくる。

「私が鵬眞ですが・・・？」

共産党員は高らかに宣言した。

「貴様の息子、悌一は国家反逆罪及び国家転覆罪を犯した。その思想を教え込んだのは貴様だ。逮捕する」

ー日本　ＡＭ４：００ー

深夜番組も終わり、朝の番組が始まりはじめた頃だった。

「番組の途中ですが、ニュース速報をお伝えします。本日未明、中国軍がフィリピンの南沙諸島へ侵攻を開始しました。

この攻撃により、自衛官が少なくとも3名負傷しているとのことです。続報が入り次第お伝えいたします」

―アメリカ合衆国　ホワイトハウスＡＭ２：３０―

攻撃の数分後には中国の大使が召喚された。

合衆国大統領は大使に状況説明を要求した。

「大使どういうことなんですか?停戦に合意したではないですか」

大使は震えながら

「匡壮謁海軍大佐という海軍将校のクーデターでして、我々の所為ではないのです大統領」

「信用できませんね」

「匡壮謁海軍大佐以下、艦隊の家族は現在公安と党が確保しています。どうかご心配なく」

艦隊は匡壮謁海軍大佐の最終命令「絶滅覚悟攻撃」を受け、艦隊は無理やりにアメリカ海軍・海上自衛隊の支配する海域へ侵入した。

海自のイージス艦あしがら、米海軍のタイコンデロガ級ミサイル巡洋艦シャイローがこれに反撃、対艦ミサイル攻撃をＶＳＬによって行った。

中国海軍艦隊は迎撃を受け、壊滅。上陸部隊もすぐさま鎮圧されてしまった。

李悌一は国への忠誠心を最後まで捨てなかった。

南沙諸島沈静化と韓国の影（前書き）

大韓民国青瓦台の影
そして恋の行方

南沙諸島沈静化と韓国の影

「危篤状態だ。心拍数は？」

「心拍数低下、心停止！」

「チャージ」

除細動器で医官が電気を体に当てる．

体が飛び上がる。

だが、心拍数は戻らない。

「再チャージ」

そしてまた電気が体を走る。

－ＤＤＨ－１６ひゅうが艦内医務室－

坂崎修一はＳＨ－６０Ｋで緊急搬送された。

「心拍数戻りました。安定しています」

中国海軍の派遣部隊は撤収し、中国はだんまりを決めかねた。

国連は中国に経済制裁を加え、一部の国家資産を凍結した。

中国のバブルはこれにより崩壊し、国家軸は大きく乱れた。

－１週間後　日本　愛知県守山駐屯地－

「面会謝絶が解かれたぞ。行ってくるといい」

坂崎教官が入院する前から転勤してきた上官、松平２等陸曹が私にそういった。

「えっ・・・」

「面会はＯＫされたとの情報が入った。仲沢一士、外泊許可を出すから行ってこい」

－１日後　１０月１５日　静岡県自衛隊富士病院－

「えっと陸上自衛隊第１０師団の坂崎修一２等陸曹の病室は・・・」

ナースステーションで私が看護師に聞くと

「ええと、２０４号室の個室になりますが、意識はまだお戻りになっていませんよ」

「はぁ、あってもいいんですよね？」

「ええ、どうぞ」

「教官・・・？」

病室には誰もいなかった。

ベッドに教官が横たわっているだけだ。

「教官・・・」

ベッドの横のイスに腰掛ける。

「・・・」

いい匂いがする。

男の人の匂いだ。

私は震えながら教官の布団に手をおいた。

ゆっくりと上下している。

「なんで起きないんですか・・・」

私は教官の手を握った。

「いつも撫でてくれたのに・・・撫でてくださいよ」

私は頬を伝う涙に気を止めなかった。

「なんで・・・なんで」

教官はじっと寝息を立てていた。

「・・・今日は・・・ッ」

私は袖で涙を拭い

「今日は・・・夜までいますから」

「・・・ん」

寝てしまっていた。

目を開けるとそこには赤坂３等陸曹がいた。

「あれ、赤坂３等陸曹・・・？」

「あ、起こしたかっていうか見てやらないでくれるか」

坂崎教官は服を着替えている途中だった。

「あ、はいっ」

少しすると赤坂3等陸曹は「よろしく」といって帰っていた。

「・・・何時だろ」

時計をちらっと見ると午後7時だった。

「寒・・・」

私は上着を少し深目に着込んだが、それでも寒い。

「・・・♪」

私は教官の布団に入った。

「・・・暖かい・・・」

「・・・あれ?」

目覚めると朝だった。

「お嬢さん、ねるのもいいけどそこは患者さんのよ」

と看護師さんが笑っていた。

「あっ・・・えっ・・・」

「とにかく、バイタルも安定しているし近い内に目覚めるわよ」

私が部屋を出て売店に行こうとしたときに

「あれ?彼女さん?」

「えと、理奈さん?」

教官の妹さんが居た

「バカ兄貴のお見舞い?お疲れ様」

「いえいえ」

「撃たれるなんてね。なんか信じらんない感じ」

「ですよね」

「あっ、売店行くならビターコーヒー買ってきてあげな?兄貴の好物。私は花置いたら帰るわ」

私が買って戻ると確かに理奈さんは花だけおいて帰ろうとしていた。
私が入った瞬間、後ろから誰かが入ってきた
その時、理奈さんの表情が大きく変わった。
「・・・テメ、何しにきた」
私が後ろを向くと２０代後半の女性が立っていた。
「何って、見舞いだけど」
「なんでてめぇが来てんだ？あ？」
「ふー、山猿みたいなのは相変わらずねえ理奈」
「下の名前で呼ぶな糞ビッチ」
なんでこんなに犬猿モード？
「凛ちゃん、こいつ追い出して。コイツだけは許せない」
「え？」
「兄貴の高校時代の彼女。兄貴を精神病にまで追い込んだの」

知らなかった。

「兄貴は1ヶ月自暴自棄だったの。こいつのせいよ」

「あら、ひどい言いようね。ま、そうなんだけどさ」

「消えろクソ女」

私はどうしようか迷ったが

「部屋から出てください。教官は絶対安静です」

「ふーん・・・シュウ？シュウ？」

「その名前で呼ぶな！」

理奈さんがついにプッツンした

「いいかげんにしろクソ女！出て行け！」

「うるさいのはあんたたちよ！出ていきなさい！」

看護婦長が乱入し、理奈さんとその女性を追い出した。

「はー・・・」

誰だったんだろ

私は教官の手を握々した

「・・・ん？」

握り返された気がする。

「教官？教官っ！？」

手がどんどんこわばるのが見えてきた。

「今、お医者さんを―」

ぎゅっ

「は・・・え・・・？」

私が後ろを向こうとしたときに教官が抱きしめてきた。

「えっ!?教官ッ!?」

「う・・・うっ・・・」

泣いていた。

私の服が濡れるのが感じられた。

「教官・・・」

「仲沢・・・ッ・・・しばらくこうさせてくれない・・・か」

私は体を許し・・・というとなんか破廉恥だけど、意味は間違ってないだろうしそのようにした。

１０分抱き合ってたのかもしれない。

１時間かも

「・・・ありがとう」

「・・・いえ」

なんだろう、ドキドキが止まらないし、微妙な雰囲気

いま・・・かな?

「あの・・・教官・・・・」

「ん？」

「・・・お帰りなさい」

教官は笑い

「ありがとう」

と答える。

「・・・教官、私・・・・」

「？」

「私教官の事が・・・・す・・・・す・・・・」

言えない・・・恥ずかしい

「好きだ」

私の言葉は教官に奪われた。

「え・・・」

「あ、あれだ・・・俺もお前のことが・・・好きだし・・・な？」

両思い・・・だった？

「・・・俺は・・・付き合いたい」

私は精一杯の声で返した。

「大好きです、付き合ってください」

－事後収拾－

日本政府は中国政府に死亡した陸自隊員の賠償を要求し、フィリピンとロシアもこれに準じた。

中国政府はその国家力こそ失わなかったものの徐々に経済力に影を落とすようになった。

尖閣諸島問題も強硬に出れなくなり、日本の正式な領土として認められることに合意した。

―１０月２５日　大韓民国青瓦台　大統領府官邸―

「大統領、独島への移民計画が完了しました」

「よし。ジ次官の功績を労ってやれ」

「は。日帝の動きは気になりますが・・・」

「気にせずともやつらは我々の犬だ」

―１０月２７日　日本国竹島―

１隻の輸送船が着岸した。

民間人を載せた移民船だ。

韓国人たちは新設されたコーポに入居を開始した。

―１０月２７日ＰＭ２：００　日本国東京都防衛省地下戦略会議室―

「はいこれ見てくれ。南キムチの船が竹島に接岸」

陸上自衛隊中央情報隊の矢部１佐がプロジェクターで投影された映

像を指揮棒で指さす。

「南キムチは竹島に民間人を居住させ、盾にする計画らしい。そこで、夜に輸送し終わったもぬけの殻の輸送船を沈める。これでまあ連中はビビる。どうだろ?」

「明確な侵略行為ではないですよ」

「はい熊澤くんいい質問。これみて」

次に投影されたのは艦隊だった。

「南キムチ海軍の輸送船団。国内に忍ばせてるうちの隊員は積んでるのは大砲とレーダーだって言ってる。情報と大きさから合わせるとＫＨ１７９　１５５ｍｍ榴弾砲だな。

レーダーはフェイズドアレイレーダーらしい。これらは現在、韓国の軍港に停泊してる。まだ積むものがあるらしい。艦隊規模は忠武(チュンム)公李舜臣(ゴン・イ・スンシン)級駆逐艦

1隻に蔚山(ウルサン)級フリゲート2隻。そこに輸送船だ。こいつらは竹島ルートに行くことが無線傍受でわかってる。つまり軍隊があそこに駐留するわけだ。」

「それはまずい。国内的にも」

「だろ?中くん。そこでおいらはこれを阻止すべく、竹島の湾口施設及び客船の発破解体の企画をした」

「実行隊は？」

「イラクでＰＭＣまがってる第２小隊でいいだろ」

中央情報隊は第１から第４までの小隊を保有し、第２小隊は中でも荒療治向けだった。

第２小隊は現在、イラン・イラク・アフガンの状況調査中で、ついでに日本人ＰＭＣに偽装してＮＧＯを護衛していた。

「うん、それでいいよ」

ここの場を仕切る中曽根陸将は作戦許可を出した。

「じゃあキムチ食べ放題作戦、ＫＴ始動ってことで」

日本はアンダーグラウンド部分での展開を開始した。

これは防衛省独自の作戦で、当然弱体化している民主党の意見をガン無視だった。

キムチ作戦（前書き）

！！！注意！！！

個人的思想があります！思想関しての批評は受け付けておりません！

―アフガニスタン　カブール―

「うん？ＯＫＯＫ。それで？・・・はいはい」

カブールの一角にたたずむコンクリートビルの一室に第２小隊は入っていた。

「真賀山さん、国からっすか？」

「そうだ。帰国しろってさ」

真賀山洋次２等陸佐（３１）
第２小隊隊長。

「千葉ちゃん、雀荘に行ってるバカ二人連れ帰って」

「はーい」

千葉英知３等陸曹（２５）
第２小隊分隊支援火器担当。

千葉はビルを出て外を歩いた。

「ミンさん、ＡＫ入ったよ！買わない？」

彼らは中国人と偽装して入国し、ブラックマーケットではナノ知れた傭兵だ。

「いやいいよインジュ。ちっと国に帰るよ」

「あー寂しくなるね」

「懐がだろう？」

「あちゃー当てられた」

千葉は少し歩いて中国人の営む雀荘へ入った。

「リュン、ケイ、仕事」

呼ばれた二人はそそくさと雀牌をおいてビルを出て事務所へ戻った。

「おかー。国もどれって、矢部がうざい」

「またやべっちですかぁ？」

「そうだよねー涼香ちん」

平城涼香3等陸曹（２４）。女性自衛官。

「矢部のやつ人使い粗すぎだな」

「だよなー、コウタロ」

富坂孝太郎1等陸曹（２８）

「あんたら早く荷造りしな」

『はーい姉御』

通称姉御、三ツ矢静江3等陸佐（２９）。女性自衛官。

ー同時刻　日本守山駐屯地内病院ー

「早く行きたいんだがなあ」

教官がポツリ

「ダメですよ」

私は幸せだった。

教官の状態は回復しており、5日前にこちらへ移った。

「ややっ、よろしゅう」

部屋に誰かが来た。

「えっと・・・矢部1佐ですか?」

教官が体を半分起こして入ってきた人に聞いた。

「うん、覚えてた?あ、彼女ちゃん悪いけどちょっと席外してくれるかな?」

「あ、はい」

「おつかれさんとともにおめでとう」

「いえ」

「早速わるいんだけど、お仕事」

「仕事?」

矢部1佐は起きている事象すべてを俺に話した。

「で、私はどうすれば?」

「第2小隊と合流してほしい。作戦内容は鎮海港軍港の使用停止と竹島港の使用停止。一切の死人が出ることは認められてない」

矢部1佐が部屋を出たのを確認して私は戻った。

「どうしたの？」

「いや、撃たれた件で東京で事情説明だそうだ。1週間離れる」

「そっか・・・残念です。帰ってきたら・・・デート行きませんか？日曜だし」

「もちろん。どこがいい？」

「うーん・・・ショッピングモールが」

「よし。じゃあ今から行かないと。そとで矢部1佐がまっててさ」

「はい。頑張って！」

―2日後　東京防衛省―

「よろしく、隊長の真賀山。他のはそこのが千葉ちゃん、その隣が

コウタロ、その隣が涼香ちん、そして姉御」

「よろしくお願いします。第１０師団の坂崎修一２等陸曹です」

矢部１佐が

「彼はこの間のスプラトリーで生還した隊員だ」

「へー、すげー。撃たれたことないからさー」

と千葉と呼ばれた人。

「痛いだけですよ」

「よし、んじゃあ作戦会議。矢部さん、詳しく頼んます」

矢部１佐はプロジェクターを使って説明を始めた。

「作戦地は説明した通り大韓民国。場所は鎮海港だ。ここにある燃料基地に不審火を起こしてほしい」

「不審火？」

俺が質問すると

「そう。君たちには北朝鮮コマンドになりすまして燃料基地を破壊してもらう。無論深夜に。そして回収地点で回収後、竹島の湾口施

設を爆薬で使用不能にしてもらう。
韓国軍との戦闘は避けてほしい」

―２日後１０月３１日　韓国鎮海港海軍特区ＡＭ１２：００―

『イム上等兵、パトロールより帰還しました』

『了解！交代を許可する』

坂崎と第２小隊の隊員は湾口施設の一角に隠れていた。

「敵は調べたとおり１０人だ」

真賀山２佐はてきぱきと進めていく。

「俺と千葉ちゃんの第１班は陽動作戦。コウタロと涼香ちんの第２班も陽動。姉御と修一の第３班は燃料施設の破壊。第１班は北地区の兵舎に火を放ち、離れて銃を撃つ。

第２班は東地区の弾薬庫を襲撃する。これら４分のうちに第３班は襲撃、炸薬で吹っ飛ばす」

俺たちにはＡＫＳ－７４ｕが渡されていた。服装も北朝鮮軍の物だ

った。

「遺留品はコイツだ」

真賀山2佐は血まみれの金日成バッジのついた軍服を捨てた。

「あんた撃たれたんだって？」

「え？」

姉御と呼ばれていた三ツ矢3佐が話しかけてきた。

すでに定位置に付いている。

「撃たれたんでしょ？」

「え、ええまあ」

「あの痛みだけは憎悪ねー」

『こちら1班、ＯＫ』

『2班もＯＫだ』

爆発音と銃声が轟いた。

「今だよ！」

俺は走った。

幸いにも兵隊たちは銃声と爆発音に耳を取られて気づいていない。

「Ｃ４！」

俺はかばんからＣ４爆薬を取り出して渡した

「ＯＫ、警備して」

俺はＡＫＳ７４ｕを構えてあたりを見回す。

銃声は散発的になってきた。

『こちら1班、追撃をまいた。回収地点へ戻る』

『2班、こちらもだ』

「2等陸曹、引き上げ」

「了解」

回収地点は海上に置かれた小型ゾディアックボート。

沖まで出たらボートを捨て、海上自衛隊の潜水艦もちしおが回収をする。

そこで弾薬類を補給し、竹島沖まで潜行。

海域でゾディアックをまた出して竹島へ向かい、湾口施設を破壊。

そしてまたもちしおに乗り込む。

『北韓のコマンドだ！逃すな！』

『全員攻撃だ！敵は北の兵舎にいる！』

情報が錯綜しているのがわからない言語であってもよくわかる。

俺たちは無事ゾディアックに乗り込み、もちしおに回収された。

ー潜水艦もちしおー

「急速潜行」

潜水艦は一気に海中へ姿を消す

「韓国海軍のソナーには写りはしません。ご安心を」

艦長の言葉に皆がほっとする。

ソナー員が報告をする。

「韓国海軍、沿岸を警戒中の巡洋艦をこちらへ急派。しかし位置を特定できてない模様」

「了解」

後部の乗務員用の大部屋に通された。

「守備上場。ゾディアックにも北朝鮮の刻印が入ったＡＫＳ７４ｕを捨ててきた。しらを切ってもわからんだろう」

「次の作戦も同様にですか？」

と千葉３等陸曹

「そうだぞ千葉ちゃん」

そこで三ツ矢３佐が

「坂崎２等陸曹、お疲れ様。ぜひうちの隊にほしいわ」

真賀山２佐も頷いて

「君はイイね。うん。さあて、次は武器の紹介」

俺たちに渡されたのは見覚えのない銃だった。

「これは？」

俺が問うと真賀山2佐は

「ＢＢＱ－９０１麻酔銃、中国製の麻酔銃だ。今回はどうしても荒事になりそうだからな」

1発1発をチャンバーに込めなければならないのだが、非常に高い即効性の麻酔薬が弾薬内部に仕込んであるらしい。

「次の任務で最後。破壊するのは竹島湾口施設のクレーン。これを湾口部にかかるように倒す」

－韓国　青瓦台－

『大統領、さきほど鎮海港の燃料施設と兵舎が北韓のコマンドに破壊されました』

『何？』

『現場からは血まみれの軍服と北韓の刻印が入った武器が見つかっています』

『死傷者は？』

『0です。奇跡的にも。しかし燃料施設の火災が収まらず、竹島へ向かう予定だった艦隊は使用不可能に』

『ううむ。他の被害は？』

『コルベット1隻が爆発で大破しました』

『直ちに湾口施設の復旧を行え』

『は！』

―日本　島根県竹島沖　潜水艦もちしお―

「付近に韓国海軍無し。浮上します」

折りたたみ式のボートを携えて潜水艦のハッチを開ける。

「寒いなぁ！」

真賀山2佐の発言に同調し、千葉3等陸曹も

「これはいけないっす」

ボートを組み、海へ出る。

「回収は無線で連絡を！ここから５ｋｍ沖にいます！」

船員のお告げを聞き、俺たちは海へ出た。

時刻は深夜３時

真賀山２佐はポツリと

「君が代でも歌いながら入島したいもんだ。いい加減返しやがれ」

すると富坂１等陸曹が

「北方もやってやりたいもんです」とつぶやく。

「そういえば１曹、北海道出身ですもんね」

と平嶋涼香３等陸曹

そこに三ツ矢３佐が

「どちらにしろ、私たちの仕事は竹島の湾口施設の使用停止。それだけ」

ゾディアックボートは竹島沿岸に無事着岸した。

「警備兵は高見台と港だ。この崖から登って高見台を制圧、そして

港の兵士も制圧する。」

崖を登り、高台からあたりを見回す。

「・・・敵を確認。監視台に一人。武装は設置型の軽機関銃・・・港、４人の敵を確認」

富坂１等陸曹の報告を受け、真賀山２佐は作戦を立てる。

「よし、監視台を涼香ちんと千葉ちゃんが制圧。残り４人は俺たちで一気に仕留める。ＯＫ？」

『了解』

『こちら平嶋。制圧しました。どうぞ』

俺たち４人組は素早く港へと走る。

『ソ、お前休暇どうするんだ？』

『うーん、チェジュ島で女漁りってとこかなぁ』

二人の敵は何やら雑談をしているようだ。

『ったく、兵士なのに警官の格好させられるのも嫌だよなぁ』

『全く。どれもこれも日帝のせいだ』

真賀山2佐はハンドサインで射撃用意のポーズを撮った。

（撃て）

俺は麻酔銃を撃った

音もなく、弾は右の敵へ

『う！』

真賀山2佐は左を

『く！』

二人は昏倒した。

音もなく走り、新しい敵を見つける

「坂崎、姉御。頼む」

俺は物陰の敵を見つけ、麻酔銃を撃つ。

『べっ！』

無線に音が入り

『制圧』

湾口施設のクレーンには富坂１曹が爆薬を仕掛けた。

「全員退避しろー」

真賀山２佐の言葉に合わせ、全員が崖のゾディアックへ戻る

「発破！」

クレーンは爆発し、港を覆った。

停泊していた船にクレーンの先が引っかかり、船はつられて港を通行止めのようにした。

―１０月３１日朝　大韓日報―

「国内軍港と独島テロ攻撃か―負傷者１０名

軍によると本日午前１２時頃、北朝鮮の特殊部隊が軍港である鎮海

港を襲撃し、大型の船舶用燃料タンク5基と兵舎4塔を破壊した。
奇跡的に死亡者はなく、5人が軽いやけどを負った。
その2時間後、独島の湾口施設が同じ部隊とみられる特殊部隊に攻撃を受け使用不可能になった。
4人の警備員が麻酔薬を撃たれ、軽症。1名の船員が爆破されたクレーンを避けた衝撃で頭を軽く打ち軽症だった。
遺留品に北朝鮮の刻印が入った武器と軍服、金日成バッチが見つかっており北朝鮮特殊部隊の攻撃であると考えられる」

ー同日　韓国　青瓦台ー

「大統領、どう、いたしますか」

大統領は答えた。

「海軍の修復部隊を独島に派遣しろ」

秘書は驚いた

「それでは日本が・・・」

大統領は答えた

「・・・その程度では出てこぬわ」

ー週末　日本　愛知県某所のショッピングモールー

「教官教官、これ似合いますか？」

「ん、うん。似合ってる・・・んじゃないか？」

仲沢の服はまあ似合ってることで、こっちとしてもニヤニヤが止まらなかった

「じゃあこれ買っちゃお」

俺は財布を出して

「いくらだ？」

と問う

「いいですよ、今回は自分で買います」

「そうか」

仲沢はその服を買い、ほくほくとした表情で歩き出した。

２５歳と１８歳。

パッと見、兄と妹かもしれないなと思いつつ俺は仲沢についていった。

「プリクラ？１０年ぶりだぞ」

プリント倶楽部の略、プリクラ。

「はい。やりましょ！」

「え、あ、ちょ」

二人で入っていくのには抵抗があった。

何しろ狭い。近すぎて意識してしまう。

「え、ええと私選択しますね！」

いろいろボタンをポチポチ押していく仲沢をよそに、俺はプリクラの筐体をしげしげと見ていた。

昔は単に撮影ボタンと背景設定だけだったが、このプリクラはタッチ画面で肌色や目の大きさまで選べるようだ。後ろに暗幕もあるし

「撮りますよ！」

『もっとよって、ふたりは仲良し♪ピースポーズではいチーズ』

俺は戸惑いつつもたぶん曲がっているであろう笑顔でピースを作って仲沢の横へ並んだ。

顔を横にすれば頬にキスが出来る。それくらいの距離で、久々の女子の匂いにくらくらした。

2枚目に入った

『初めてのデート、緊張をほぐそう!縦撮りでハイポーズ♪』

俺はとっさに仲沢の後ろへよって、抱きしめて顔を方からのぞかせた。

「ひゃ、ちょっ、教官ッ、変なとこさわらない・・・でっ」

「す、すまん」

「べ、別にいいですけどっ」

『3枚目はほっぺたにチュウ!せーの♪』

「なっ、これは別の方法でとろ一」

俺の頬に僅かな柔らかさが残った

『パシャッ』

「な・・・」

仲沢を左目で見ると完全にキスをしていた。頬にだが

「えへへ・・・」

出来上がったプリクラを2つに分け、一つを仲沢に渡す。

「えと、ちゅ、ちゅー迷惑でした?」

私はフードコートで教官に聞いてみた。

教官はたじろぎつつ（スッゴクかわいい）答えた

「あーなんだ・・・えええと・・・うれしいから良かった」

私たちはご飯を食べ、駐屯地へ向かう

帰りの電車で教官は言った

「実は・・・なんだけど」

「?」

「別の部隊に掛け持ちで入隊することになってな」

「え?そうなんですか?」

どこの部隊だろう

「特殊作戦群みたいなところだと思ってくれれば」

「危険な感じですか?」

「・・・うーん、まあ」

「私、死ぬのだけは嫌ですからね」

「お、あ、ああ・・・」

―翌日　ＡＭ１１：００竹島沖２０ｋｍ―

「こちらおしどり2、報告のあった遭難船を発見した。どうぞ」

『こちら美保航空基地。乗員は見えるか?』

「あー、待ってくれ・・・うん、見える」

海上を漂っていたのはクルージング用ボートで規模は小さいものだった。

遭難信号を出して1時間後、ヘリは彼らを発見した。

「よし、じゃあ回収するか」

ヘリはロープを下ろし、救助隊員をラペリングで下ろし始めた。

『おい、まて。レーダーに航空機。領空侵犯してる航空機が急接近中！』

ヘリの無線にけたたましい声で乱入される。

『？　？？？　？？？？？？？？？？？？？？？？？？？？？？？？』

「あ？韓国語？」

『Ｔｈｅｓｅ　ｗａｔｅｒｓ　ｉｓ　ｔｈｅ　Ｒｅｐｕｂｌｉｃ　ｏｆ　Ｋｏｒｅａ．　Ｉｆ　ｙｏｕ　ｄｏ　ｎｏｔ　ｇｏ　ａｗａｙ　ｄｏｗｎ』（この海域は韓国のものだ。直ちに離脱しない場合、撃墜する』

ひどい韓国訛りの英語も次に聞こえてきた。パイロットは理解した。

『Ｔｈｉｓ　ａｒｅａ　ｉｓ　ｎｏｔ　ｉｎ　Ｓｈｉｍａｎｅ　Ｐｒｅｆｅｃｔｕｒｅ，　Ｊａｐａｎ．　Ｉ　ｌｅａｖｅ　ｔｈｅ　ａｉｒｓｐａｃｅ　ｉｍｍｅｄｉａｔｅｌｙ　ｗｈａｔ　ｔｈｅｒｅ』（この海域は日本の島根県のものだ。そちらこそ直ちに空域を離脱するんだ）

パイロットの返答に韓国空軍のパイロットは頭に来た

『？？？　？！　？？？？　？？？？！　！』（ふざけるな！目

を回せ！）

韓国空軍のＦ－１５Ｋスラムイーグルはおしどり２の横を急速回転しながら突っ込んできた。

「おおいおいおいおい！？」

ヘリはジェット噴射で風をみだされ、失速した。

「やばいやばい！」

ロープにしがみついていた隊員はジェットの勢いで振り落とされた

「うわあああああああああああああああ！！！！」

２０ｍの高さから海面に叩きつけられ隊員は死亡した。

ヘリは体制が戻らず、こちらは海へ不時着水した。

『？？　？？・　？　？？？？？　？？　？？　？？？　？？？　？？？！？？？！！！！！！！』（阿呆め。大きな面しやがって・・・ん？う、うわあああああああ！アイゴーーーーーーー！）

あろうことか戦闘機は制御を失い、海中へ突入した。

－１時間後　日本総理官邸－

「あーうん。聞いてる」

首相はまたこのネタかといった感じで席についた。

「担当は？」

椅子にふんぞり返りつつ問う

「海保の芹沢です」

「うん、報告お願い」

芹沢はプロジェクターに画像を写した

「えー、本日ＡＭ１０時頃に海上保安庁第８管区にＳＯＳが入りました。民間人の操るクルーザーが座礁転覆したとのことで。第８管区美保航空基地から救助ヘリおしどり２が救助のため、救助隊員３名パイロット２名をのせ飛び立ちました。

ＡＭ１１時１０分におしどり２は漂流中の男性３名女性４名を確認、救助行動に入りました。ええと、韓国空軍の動きは空自の田宮さん、お願いします」

空自将官の田宮が場所を変わった。

「では変わります。ＡＭ１０：４０頃におしどり２は韓国空軍のレーダーに引っかかったと思われます。その２分後にスクランブルしたのが大邱空軍基地所属のＦ－１５Ｋスラムイーグル１機です。これは１１時１２分に空域へ侵入。これに対応して空自のＦ－１５Ｊ

がスクランブルしました。

１２分頃に無線で口論があり、その後・・・は芹沢さん」

「はい。その後、Ｆ－１５Ｋはヘリの真横を通過、風に煽られてヘリは失速しました。救助作業中の隊員１名が風で滑落、死亡。ヘリも水中へ墜落しました。

Ｆ－１５Ｋも自身の行動により失速、墜落しました。パイロットは死亡しています。巡視艇がが現在状況を確認していますが、ヘリ乗組員と遭難者、救助隊員の遺体と韓国空軍パイロットの遺体はすでに収容しました。」

「じゃあ外務省に連絡しといてよ」

と首相は秘書へ連絡した。

－翌日　大韓日報－

「日本、韓国領空を侵犯し空軍機を撃墜－激しく抗議－

昨日の朝１１時頃、独島へ領空侵犯してきた日本の自衛隊の戦闘ヘリがスクランブル発進した大邸基地所属のパン・ギョンサン中尉の乗るＦ－１５Ｋスラムイーグルを撃墜し、パン中尉は死亡した。

現在外務省が日本政府へ抗議を行っており、場合によっては戦闘も辞さない考えだ。事件のあった空域では同時に自衛隊の戦艦も目撃され、日本の侵略行為が目立つ。」

ー数時間後　韓国ソウルー

「日本人の横暴を許すなー！」

『日本人を許すなーーー！』

「日本人は国を捨てて海にいけー！」

『いけー！』

「九州は我々のものだー！」

『物だー！』

「燃やせ燃やせ！この汚い赤旗を！」

韓国人たちは日章旗を取り出して派手に燃やす。

「日本人旅行者を襲え！パン・ギョンサンの仇だ！」

韓国人暴徒は一斉に日本人旅行者へ襲いかかった。

「各地で反日デモが激化しています！我々も参加しましょう！」

テレビまでもがデモを肯定し、参加を促した。

ー同日　夕刊日本新聞ー

「韓国で反日暴動ー日本人５０名が襲撃されるー

前日起きた韓国空軍機墜落事件が韓国では曲がって報道され、暴動を誘発する結果となった。

韓国側の主張によれば日本の”救助ヘリ”が音速で飛ぶ戦闘機を撃墜したというのだ。

実際は救助作業中のヘリを挑発し、コントロールミスで自爆しただけなのだ。さらに作業中の隊員１名が死亡しており日本政府も韓国に抗議中だ。

韓国内で襲撃された旅行者はいずれも軽傷だが、内２名の女性が性的暴行を受けた模様。

日本でもインターネット上で報復が騒がれており、非常に危険な状態となっている」

ー同日　日本大型掲示板ー

【韓国】「日帝が民間機で戦闘機を落としたニダ４機目」

１：韓国人は敵：２０１０／１１／５（火）　１６：０７：４０.２４　ＩＤ：Ｂｚｌｈｋａ

韓国人ついに湧いたから４スレ目

２：大日本帝国さん：２０１０／１１／５（火）　１６：０８：２４．９３　ＩＤ：ＦＢＺＨＨＫＫ
韓国人の偽証が始まったみたいだ

３：大日本帝国さん：２０１０／１１／５（火）　１６：０８：４３．６８　ＩＤ：ＪｕｏｑｆＣｏ
またか

４：大日本帝国さん：２０１０／１１／５（火）　１６：０８：４７．４３　ＩＤ：ＢＸＯｏＴＴＧＧ
日本もいいかげんにしろ。戦争しないんじゃないのか

５：大日本帝国さん：２０１０／１１／５（火）　１６：０９：１６．８０　ＩＤ：ＢＸＯｏＴＴＧＧ
＜＜４だよな

６：大日本帝国さん：２０１０／１１／５（火）　１６：０９：２８．１５　ＩＤ：ａｒＷｅｖＮ
＜＜４－５自演乙ｗｗｗ在日帰れｗｗｗ

７：大日本帝国さん：２０１０／１１／５（火）：　１６：０９：５１．００　ＩＤ：ＳｓＱＡｓ
デモ決定。新大久保で待つ。

開始時刻：２０１０／１１／１０（日）
ＡＭ９：００　新大久保。警察に許可とったよ。

８　：大日本帝国さん：２０１０／１１／５（火）　１６：０９：５２．７９　ＩＤ：ＸｐｇＯＲＡ
＜＜７　ＧＪ

９　：大日本帝国さん：２０１０／１１／５（火）１６：０９：５３．７０　ＩＤ：ｈＯ＋ｆＩＫＡ
自衛隊出てこい。

１０　：大日本帝国さん：２０１０／１１／５（火）　１６：１０：３１．２１　ＩＤ：ｋ１ｎｖ／
＜＜７別スレでも集めてるね

１１　：大日本帝国さん：２０１０／１１／５（火）　１６：１０：３１．４９　ＩＤ：ＺＸｘＩ７
ヘリに煽られたってかｗｗｗ

１２　：大日本帝国さん：２０１０／１１／５（火）　１６：１０：５１．９１　ＩＤ：ＷｖＬｒｘＫ
なんか聞いた話だと自爆らしいよ

１３　：大日本帝国さん：２０１０／１１／５（火）　１６：１１：

２３．５０　ＩＤ：ＢＸＯｏｒ
＜＜１２　ｗｗじｗかｗさすがキムチイーグルｗｗｗｗ

ー１１月１０日　東京新大久保ー

「韓国人は帰れ！」

『帰れ！』

「偽証をやめろ！」

『やめろー！』

「フザケヤガテ、ブッコロス」

４人の韓国人が道へ出てきた

「何だ、在日！邪魔だ！デモは認められてるんだ！」

バンッ

「・・・あ？」

１発の銃弾がデモの先頭の男性を撃ちぬいた。

「キャアアアアアア！！！！」

「銃だ！銃だああ！」

韓国人４人は手に銃を持っていた。

手当たり次第に参加者へ撃ちまくる。

警戒していた警察は威嚇発砲をした。

「や、やめなさい！」

韓国人は彼を撃った

新宿Ｃｒｙｓｉｓ（前書き）

当小説にでる団体組織人物はフィクションです。

今回警察無線部分は少しこだわりましたが、レベルは相変わらずです

『至急至急！大久保通りで自動小銃を所持した男５人が銃を発砲！ＰＭ（警察官）２名負傷！至急応援を求む！』

『こちら新宿（警察署）、了解した。付近警ら中のＰＣ（パトカー）及びＰＭは大久保通りで発生中の銃乱射事件の対応に当たれ。マルヒ（犯人）５人は全員武装しており、受傷事故防止等に特段の留意を持って対処せよ。』

『状況確認中！ＰＭ２名が心停止の模様！新大久保のデモ参加者を犯人が撃っている！現在も銃撃されている！指示を！』

『こちら新宿（警察署）、今増援を送っている。もう少し持ちこたえてくれ』

付近に居たパトカー４台は現場へ急行した。

『こちら新宿２０、現着』

『新宿３４現着』

『新宿１５、現在急行中』

『マルヒは現在北へ向け逃走中！散発的に銃撃！現在玉木巡査長と中居で追跡中！』

『路地から出てきたぞ！中央綜合病院のとこだ！止まれ！止まれ！うわあああっ！』

『最上ッ！最上巡査が撃たれた！クソッ！撃て撃て！』

パン！パンッ！パンッ！

『マルヒ一名にわたしの弾丸が・・・命中！』

『マルヒ４名はへ出た！ＰＣ回せ！』

『マルヒ１名確保！わっぱだ！わっぱかけろ！あと救急車！』

『マルヒ４名現在北へ逃走中！ああっ！タクシーを強奪、運転手が撃たれた！ＰＣ早く！』

『タクシーが西の方向へ逆走中！』

『新宿１５、現在マルタイ追跡中。マルヒは淀橋市場前を右に曲がった。ＰＣが封鎖しているのが見える』

『こちら新宿２２、通路封鎖完了。バッチコイ』

『マルヒ発砲！応射だ！応射しろ！』

パンッ！パンッ！パンッパンッパンッ！

『タクシー停止！取り囲め！』

『マルヒ４名確保！現在時刻午前９時４０分、殺人未遂、公務執行妨害、銃刀法違反で現行犯！』

『こちら新宿１１、新大久保だが個人的見解で言えば死者は１２名程度。ＰＭは４名が撃たれた。えーうち２名が心停止、繰り返す心停止。

現在救急が処置中』

「えー、ただ今入った情報によりますとテロップの通り東京都新宿区新大久保で発砲事件が発生した模様です。詳しくわかり次第お伝えします」

「えー詳しい情報が入ってきました。本日午前１１時頃、新大久保で反韓デモを行っていた人数十人へ向け、何者かがライフル銃を発砲した模様です。

犯人はすでに取り押さえられた模様ですが、犯人側と警察官にも負傷者が出ている模様です」

ー大型ＳＮＳサイトー

Ｍａｋｏｂｅまこべ

新大久保から花火？の音と悲鳴聞こえてんだけど

Ｍａｔｉｋｏまちこ

いま店から出てきたら警官が撃たれてた！？何事！？

Ｔｏｏｋとーく

韓国人が銃撃ってる。映画かなんか？

Ｍａｔａｋｉｂｅｓｉまたきべし

銃撃なう

Ｋｏｎａｍｉｔｅｓａｉｋｏ

○ｃｈのデモ隊が襲われたみたい

ＲｏｃｋＳｔｒｅｅｔ石道

おいおい！デモしたら撃たれた！救急車呼んでる！

「こんばんは、６時になりました。ニュースの時間です。本日朝１１時頃、東京都新宿区新大久保駅の大久保通りで外国人による自動小銃乱射事件が発生しました。

現場では当時反韓デモが行われていおり、人が大勢いる中の犯行で

した。参加者２００名のうち７０名以上が流れ弾や弾が当たって砕けた硝子に当たるなどして軽傷、内５名が死亡しています。

犯人グループは現場から逃走する際に警察官４名を発砲、内２名が殉職しています。犯人グループはその後逮捕されました。

犯人たちの目的や情報はわかってはいませんが、反韓デモに対する攻撃と見て間違いはないでしょう」

―同日　ＡＭ１２：３０　東京都某所朝鮮系暴力団「覇尊会（ファジョン）（？？？　）」ビルー

「？？，　？？？　？？？？？」（兄貴、どうしますか）

兄貴と呼ばれた男は覇尊会の若頭のボ・ソドク

「？？　？？？？　？？？？　？？？？？？　？？　？？？　？？　？？？　？？　？？？？」（まだまだ足らない。日本人にはもっと痛みを味わってもらう。）

と言いながらソドクは煙草をくゆらせた。

「？？？　？？，　？？　？？？　？？？　？？　？？　？？　？？？，　？？？　？？？　？　？？？？　？？？，　」（しかし兄貴、うちの組員を出す訳にはいかないですよ。傘下の組員がこの事件で捕まりましたし。）

「？？？？　？？？？？，　？？？？？　？？？　？　？？　」（日本人を使え。薬物中毒になってるようなのを。）

「？？？？？，　？？　」（分かりました、兄貴）

ー1時間後　東京都新宿区ー

「いっしいくーん」

「いるんやろー？薬吸おうよ～」

二人のスーツを着た男が数十人の不良グループへ話しかけていた。

「キム兄～でもお金ないよ」

不良グループから出てきたのは石井と呼ばれた中学生くらいの風体の少年が出てきた。

「いいって、そん代わりだけどうちらのジョブやってみない？」

「えーなに？」

「ダチでただで吸いたい子いるかな？入ればいるほど連れてきてよ」

数分後、やはり中学生くらいの風体の少年ら5人が集まり合計6人に

「まあ、こんな集めたねえ石井くん」

「余裕っす。そんでキム兄、ジョブって？」

「カンタンっカンタン」

「え〜？」

「ポリをさあバラしてくれよ」

「え、えええ！？ポリっすか！？」

石井は狼狽する。

そして石井の連れてきた５人も。

「アイツら撃ってこないから平気だよ〜。なあソ？」

キムは相方に話しかけた。

「ああ、全くにできますよねこれこれは」

「武器もあるからさー」

キムはバンの後部ドアを開けた。

バンには旧ソ連製のトカレフＴＴ－３３の他、中国製のマカロフ拳銃、ＡＫ－４７や散弾銃があった。

「エモノあったら楽っしょ？誰も丸腰で戦えなんてさ。タダで薬やるつってんじゃん？」

－５時間後　新宿警察署－

「お、おいホントにやるのか？」

「薬のためだぜ・・・人殺し、しかも警官殺し。箔がつくぞ」

６人の少年たちは手に拳銃と自動小銃を持ち、警察署に走った。

１発の銃弾が午前中のデモ隊銃撃事件の取材に集まっていたテレビ局のクルーに向けられた。

『うわあああ！！！』

『キャーーーーっ！』

銃声が続く。

警察官たちはまさか自分たちが襲撃されるなんて思っても見なかっ

た。

警察官たちの対応は遅かった。

「突撃、突撃しよう！！」

銃を手に少年たちは暴力をふるった。

麻薬で自己管理能力は飛び、まさに少年兵だった。

少年たちは１Ｆロビーに突入し、カウンターの警察官を撃ち殺す。

『至急！至急！署内で発砲事件発生！署内の警察官は侵入した武装集団の鎮圧に当たれ。本件はけん銃格納室からのけん銃の持ち出しを許可する』

「ひゃーーーはは！マジか、マジで死んでやがる」

少年たちはロビーの警官の遺骸に銃を撃ちまくった。

善悪がもともと区別がついていないような輩だったが、さらに善悪の意味すら理解していなかった。

「相手は何だ！？」

「巡査長！相手は少年です！」

「少年だぁ！？」

警官たちはその襲撃者に驚いた。

「全員けん銃を使用して身の安全を守れ。法律や世論など関係ない。自分の命を守れ」

「石井君、あの影にポリ４人くらいかくれてんで？」

「撃っちゃえよ」

少年が持つ散弾銃はベラッチと呼ばれるイタリア製の水平二連散弾銃と呼ばれる物である。

散弾銃は２発の弾を発射した。

「ぶっ！」

「巡査長！巡査長が撃たれた！うちかえせ！！！」

警官はホルスターからＭ３６－ＳＡＫＵＲＡを取り出した。

「足を狙え、足を！」

警官たちは散弾銃を持つ少年の足を撃った。

「イッタァ！！！ポリ公マジザケンナヨ！！」

撃たれた少年は散弾銃の弾を補充し、警官の隠れるブースへ走りこんだ。

「あ・・・」

ズドンズドン

「おされてる！射殺していいのか！いいならやるぞ！」

「お、おい！」

一人の警官が走りだした。

Ｍ３６ＳＡＫＵＲＡを取り出し、散弾銃に新しい弾を込めていた少年の頭に狙いを定めて撃った。

「ぶっ！」

「一名無力化！」

少年たちは眼の前で倒れた友人をみて悟った

俺たちは帰れないことをしてしまった。

少年たちは銃を落とした。

「・・・？と、取り押さえろ！」

「被害は・・・」

署長は椅子に座りながら部下に聞いた。

「警察官５名が殉職、３名が重傷、１０名が軽傷です。外の撮影クルー１０名も重傷です」

「犯人は」

「１名射殺、ほか５名は軽傷です」

署長はぼやいた

「警察署襲撃なぞ・・・ありえん」

「容疑者は全員都内の都立中学に通う男子中学生でした。詳しく犯行理由を聞いていますが、薬物ほしさにやったとか」

「バックはヤクザか」

署長の問に部下は

「キムという韓国系の名前を実行犯の少年が言っていますので現在当たらせています・・・ああ、どうだった？」

署長室に駆け込んできた捜査員から情報を聞き、署長へ話す

「キム・イルセウム。在日韓国人で朝鮮系覇尊会の末端組織の組長です」

「ファジョンか・・・」

署長はファジョンに「借り」があった。

「・・・この件は僕ではなく上を通す」

この不正を皮切りに新宿区では暴力団による抗争が始まってしまった。

極右系暴力団「憂国維新会」を筆頭に新宿の防衛をせんとする暴力団が集結。

これに対し朝鮮系暴力団「覇尊会」を中心とした半島系の犯罪者が新宿に集結した。

警察は署長の命により動くことが出来なかった。全ては覇尊会の仕

組んだことだった。

大規模抗争は歌舞伎町での日本人ヤクザと在日韓国人ヤクザによるトラブルから発生した。

トラブルにより日本人ヤクザが殺害され、憂国維新会はついに行動に移した。

「お前ら！チョンを一人5人ぶっ殺してこい！いいなあ！？」

『ウォオオオ！！！』

憂国維新会は１９４０年代からある古株の組織であるが、活動内容は不明であった。

しかしながら、今回は違った。

彼らは戦中戦後にかけて政府にまでネットワークを広げ、今や政府幹部でこの組織を知らないものはなかった。

警察権力も彼らが一切の犯罪行為を起こさない上に警察幹部も取り込まれているためこれまで手を触れてこなかった。

新宿に受難の日々が訪れたのは１０月１２日からだった。

憂国維新会の構成員は覇尊会の運営するホストクラブやキャバクラ

を襲撃した。

「カチコミや！お前ら逃さへんぞ！」

「右翼が、右翼が来た！」

事務所に乗りこんだ構成員は金属バットで店長を殴り、店を破壊した。

セキュリティは警棒とスタンガンで攻撃をし、両方に負傷者が出た。

大規模抗争は歌舞伎町から事務所のある市街地へ移行し、市街戦になった。

「朝鮮人が、やっとこさ叩き潰せるわ」

黒塗りの外国車で維新会メンバーの野口為三は覇尊会傘下の暴力団「新尊会」の事務所へ向かった。

まだこの抗争では銃撃はなかった。

まだ

野口ら４名は事務所を取り囲み、突入した。

「キムゥ！キムおるやろ！」

彼らが探していたのは事の発端となった「キム・イルセウム」だった。

「おいキー」

ぱん

「・・・あ？」

パンパンパンパン！

銃声が連続して続き、野口は倒れた。

「日本人が・・・」

キム・イルセウムはこの行動により覇尊会に「処刑」された。

この銃撃を始めとして新宿区各地で右翼と覇尊会による銃撃事件が散発的に発生し、警察は対応に追われた。

本庁は事態の収集に当たるため新宿署署長を更迭し、警視庁警備部警備第一課特殊急襲部隊ＳＡＴの派遣を決定。派遣するまでの間、機動隊が街の保安に務めることとなった。

警察は右翼側の援助をしたが、銃を使用した場合は検挙した。
しかし事態が解決することなはなく、覇尊会は警察への攻撃を開始した。

「ホントにやっていいのか？」

「いいに決まってる。撃て」

警視庁の機動隊を輸送するトラックを覇尊会は襲撃した。
対戦車ロケット弾を使用し、トレーラーは大爆発を起こした。
警察側への攻撃は覇尊会を更に追い込むことになった。
ＳＡＴは覇尊会本部への襲撃作戦を決行した。

－１０月２０日　新宿区覇尊会本部ビル上空－

４機のベル４１２はラペリング降下を行うため、覇尊会本部上空の空域へ侵入した。

「来たぞ・・・撃て」

「！赤外線誘導弾！回避！」

ヘリはフレアを発射し、誘導ミサイルを避ける。

「敵の攻撃に遭遇、空域を離脱！」

ＳＡＴは対空ミサイルによる攻撃を受け、撤収しなくてはならなかった。

覇尊会本部は地対空ミサイルと対空砲、地上は武装トラックに守られた鉄壁だった。

ＳＡＴは幾度も本部への襲撃を計画したが誰かが”意図的に”漏らしているかのようにその都度迎撃されてしまった。

抗争は民間人居住区にまで及び、覇尊会側の攻撃で民間人５名が死傷する騒ぎも起きた。

やがてこのニュースは海外にも知れ渡った。

ー東京で紛争発生ー死者は数百人ー
ー日本の首都東京でギャング抗争発生ー

「ええい、この襲撃事件を終わらせんか！」

首相はこの自体をとても憂慮していた。

「しかし内通者がいるのかＳＡＴが行動できないのです」

「自衛隊を出せ、自衛隊をぉ！」

防衛大臣はこれに反発した

「相手は在日外国人です。武器を向ければ国民を殺すことになり、国際問題になりかねません！」

首相もまた反発する

「右翼とはいえ日本国民に被害が出ているんだ！治安維持活動目的で出動させろ！」

かくして練馬区から第１師団の第１普通科連隊が投入された。

彼らに渡されたのは暴動鎮圧弾、俗にいうゴム弾ではあったが問題はいささかなかった。

自衛隊は高機動車に分乗し、街で交戦している右翼に撤収を促して彼らの持ち場をとって変わった。

憂国維新会もこれに同調、自衛隊への差し入れに軸を移した。

－１０月２５日　新宿区－

陸上自衛隊はついに覇尊会と交戦にはいった。

「こちら桜１、敵テロリストを捕捉・・・送れ」

『こちら本部、人数は？』

「３０人程度、拳銃で武装している・・・対応を」

『こちら本部、発砲許可。繰り返す発砲許可』

狙撃手はＭ２４狙撃銃に装填された模擬弾で先頭を歩いていた構成員の腹部を撃った。

「ぶっ！」

構成員は昏倒した。

「攻撃だ！撃て！撃て！」

第１師団の狙撃部隊は彼らの歩く道の脇にあるビルの４階部分から狙撃した。

「命中。２発目」

２発目もまたクリーンヒットする。

「こちら桜１、撤収する」

桜１を引き継いだのは退役間近の７３式装甲車だった。

３台の７３式は道路の歩いてくる構成員へ向け車載の７４式７．６２?機銃で銃撃を開始した。

「こちら桜２、銃撃開始」

『こちら桜３、こちらもだ』

『桜４も同じく』

構成員たちは戦車を見て驚いた。

自衛隊は模擬弾による鎮圧と警察との連携により１００名以上を検挙した。

自衛隊の攻勢により覇尊会は自身本部まで押し下げられた。

しかし自衛隊も本部で被害を受けた。

本部ビル付近で対戦車ロケット弾を受け、７３式装甲車１両が大破。幸い載っていた隊員は軽傷で済んだものの自衛隊は作戦変更を余儀なくされた。

自衛隊はチャフと強力なＩＲジャマーを装備したＵＨ－６０を派遣し、本部上空を旋回した。

自衛隊の電波妨害をうけ、ＳＡＴは襲撃を決行した。

ラペリングによる降下をし、屋上を制圧。

「こちら朱雀１、屋上制圧。本部には背面攻撃を仕掛ける」

ビル屋上のパイプにカナビラをつけ、そこからさらにラペリングを行う。

会長室はビル４０階で、ＳＡＴはそのエリアの窓を足で蹴破った。

同時に自衛隊は９６式装輪装甲車を投入、発煙弾で本部１Ｆを襲撃した。

２勢力による攻撃により覇尊会本部は甚大なダメージを受けた。

１Ｆへ引き寄せられた構成員は会長室の防衛に徹しなかったためにＳＡＴの鎮圧力によって鎮圧された。

「朱雀５、マルヒ確保、マルヒ確保」

ー新宿抗争集結へ　覇尊会幹部逮捕ー

ー全国で韓国人差別横行　一部では死者もー

―１０月３０日　大韓民国　青瓦台―

「大統領、それで・・・如何なされますか？」

「決まっているだろう室長・・・開戦だ」

星降る夜

新宿武力抗争事件より４日後

―日本　防衛省中央情報隊―

「矢部１佐、衛星入りました」

「よしよし・・・おーあー・・・来てるな」

中央情報隊はアメリカ政府経由での衛星利用を行い情報を収集していた。

衛星が写しているのは竹島沖

「規模は・・・あー、世宗大王級駆逐艦だな旗艦は・・・おうおう”竹島”級もか。こいつらの目的地は？」

局員が応対する

「無線の傍受内容によれば竹島です。国内では緊急な軍事演習としていますが、完全武装のイージス艦です」

「あー、自衛隊出動への反応か。だから言ったんだ、やめろってさー」

局員は矢部の反応に返答する

「ええ。デフコンかけますか？」

「デフコン３ってとこ―」

衛星はライブ映像で、矢部１佐は世宗大王級駆逐艦の放った光を見た。

「おおおい！？ミサイル撃ったぞ！」

「Ｊ／ＦＰＳ―５（レーダーサイト）でもミサイルを捕捉！種類は天竜型巡航ミサイル。飛距離１５００ｋｍ。攻撃予定地は・・・島根県！」

「海自のイージスに対空防衛を要請しろ。島根の陸自の高射部隊にもだ！」

「島根には高射部隊が存在しません！海自も現在展開できていません！」

矢部１佐は焦った

「ええいこれだから平和ボケ国家なんだ！・・・ん？この表示は・・・」

彼は布陣図に目を移した

「こいつはアメリカ海軍のシャイローか」

「あ、はい！ＢＭＤ任務についています」

「情報を送れ。迎撃に当たらせろ」

―竹島沖１００ｋｍ　世宗大王級駆逐艦―

「巡航ミサイル、予定通り島根県へ向かいます」

「これは我々の行動力だ。敵にダメージを与えるんだ」

―日本海　島根県沖４００ｋｍ　アメリカ海軍タイコンデロガ級ミサイル巡洋艦「シャイロー」―

「日本国内よりミサイル情報。巡航ミサイルですね」

「韓国か」

「そのようです」

「ああ、クソッ。西側同士で・・・ＶＬＳを第１から第４セルまで使ってＳＭ－２で迎撃しろ」

前方のＶＬＳセルから４発の艦対空ミサイルＳＭ－２が発射された。

ミサイル４発は発射された巡航ミサイルを迎撃した。

「日本へ連絡。迎撃成功」

―日本　東京都霞が関総理官邸―

「韓国海軍が先ほど島根へミサイルを撃ちました。アメリカ海軍が迎撃したものの我々への攻撃に変わりありません」

防衛大臣の報告に総理は

「上等じゃあないか。アメリカはなにか言ってきたか？」

「アメリカ側からは韓国海軍への警戒を怠るなと。それと同胞への攻撃ということで現在韓国へ抗議中です」

「受け入れんだろう、あの土民は」

と総理。

「とりあえず海上自衛隊を日本海沖へ集結させています」

「マスコミは」

「いえ、しかし時間の問題かと・・・」

―同日（１１／３）午後４時愛知県名古屋市守山区守山駐屯地―

「あうー・・・疲れた」

仲沢凛は日々の疲れを癒すため、基地の浴場で汗を流していた。

「りーんっ！」

「ひゃああ！？」

ナナが後ろからわたしに抱きついた。無論裸で。

「ちょ、どこさわっ」

ナナはわたしの両胸をもんできた。

「サイズB！」

「うるさいっ！」

「教官とはどこまでやったのさー？」

わたしは顔が真っ赤になった。

「あれ・・・もしかして・・・まだ？付き合って3週間近いよ？」

「・・・ほ、ほっぺにチュー・・・」

するとナナはわたしから離れて隣りに座った。

「はー・・・奥手ねえ、ふたりとも」

「ふ、普通じゃない？」

わたしの言葉にナナは驚き

「じゃなーい！」

と、あるゲームのセリフを言いながら切れた。

「あーもう、キスっつーかもうエッチしちゃえよ！初めてじゃないでしょー？」

「・・・・」

「・・・まさか処じ―」

「わぁあああああ！しーっ！しいいいっ！」

私は慌てるあまりナナの口を手で覆った

「わかっ、わかったわよ！にしても遅すぎるわよ・・・」

「そんなことないし・・・だってまだ１８・・・」

「遅いって。早いバカは１４で終わったりするし」

私はそんなこと考えるだけで体が熱くなるのを感じた。

「・・・頑張る」

「坂崎２曹、抜け駆けですか！」

「うるさいバカ」

俺は池田の執拗なまでの口撃に悩まされていた

「なんで同期から持ってくんですかー！」

「可愛いからだ、だから黙ってろ」

「ちぇー！」

俺と仲沢の中は誰かがばらしたのか、とんでもない勢いで駐屯地内に広がりこの間は楢木隊長にまで祝福されてしまった。

「誰だよ、全く」

―島根県竹島沖　韓国海軍日本侵略部隊「？？　？？　？？　？？」（日の本の国沈没）艦隊―

「第１波攻撃は序章に過ぎん。第２セルから第２０セルまでの天竜を使用しろ」

「忠誠！」

光の筋は大量に天高く舞い上がった。

―日本　防衛省韓国対策課―

「世宗大王級駆逐艦が再度攻撃を開始！イージス艦は対応に当たれ！」

―島根県沿岸　ＤＤＧ―１７５イージス艦みょうこう―

「目標情報が転送されました。イージスシステム、７割のミサイルを補足しました！おそらく目的地は九州！」

「残りは！」

「システム不備により追尾不能です！」

ＣＩＣは焦りはしていたが対応は正確だった。

「こちら海上自衛隊みょうこう、陸自の第２高射群につないでくれ」

『こちら第２高射群』

「ミサイル３割を補足できていない。地対空ミサイルでの迎撃を要請する」

『了解』

「イージスモード完全展開、ミサイルの数は１９発！目的地は福岡特定！」

「７割迎撃可能です。命令を」

「迎撃！」

「了解！攻撃準備・・・発射！」

みょうこうは艦前方のＶＬＳユニットからＳＭ－２ミサイルを発射した。

「・・・命中・・・１９発中１５発迎撃！４発本艦上空を通過します！」

４発のミサイルはみょうこうの上空を通過した。

－福岡県　航空自衛隊芦屋基地－

「ＰＡＣ－３の防衛システムが目標捕捉」

「全自動モードで迎撃しろ」

「了解！発射します」

ＰＡＣ－３ミサイルは発射機から放たれる。

トレーラーが揺れる。

「・・・３発迎撃！１発外しました！！！！」

「対空砲は－！」

「ああ・・・なんてことだ！！！！」

天竜型巡航ミサイルは福岡市内へ着弾し、爆発した。

「私は日本国民へ報告をしなければなりません。本日午後４時頃、大韓民国海軍は１発のミサイルを我が国へ撃ちました。ミサイルはアメリカ海軍の協力により排除しましたが、

本日午後１０時頃、韓国海軍は１９発のミサイルを我が国へ撃ちました。解除自衛隊および陸上自衛隊の努力むなしく１発のミサイルが福岡県福岡市に命中、国民が４０名死亡するという事態へ陥りま

した。

戦後６０年、我が国はこれまで周辺国家に脅かされながらも平和的国家を築いてきました。今回の攻撃は我々の平和主義を変えさせるものであります。

韓国側からは正式な「宣戦布告」を国連経由で受けております。しかし現在の法令では自衛隊に攻撃を仕掛けることはできません。すべてを受けるしかないのです。

現在憲法改正案を作成中であり、明日の午後2時に国民による憲法改正の賛否を問う選挙を各地の施設で行います。」

首相の緊急会見は日本国内に激震をもたらした。

戦争は違憲行為であり大日本帝國思想を再びもたらすものだと糾弾する左翼とプロ市民。

軍備拡充と韓国侵攻を唱える右翼。

翌日の国民審議選挙は無事開催された。

「・・・今結果が公表されました。総国民数1億2千万人中、賛成票５０００万、反対票４９００万・・・日本国はこれにより憲法第９条交戦権を一時的に内容を変更することが決まりました。」

日本の憲法改正により、韓国海軍掃討作戦を行使することが可能になった。

当日のうちに陸上自衛隊は武装を整え始めた。

航空自衛隊は敵航空機迎撃用に戦闘機の運用率を拡大させた。

海上自衛隊はイージス艦と潜水艦の日本海への展開を開始。

憲法改正案は敵本土への攻撃を除いて敵を攻撃することが可能となった。

愛知県名古屋市守山駐屯地にも非常招集が入った。

「全員戦闘準備態勢とし、武装をいつでも使えるように」

業務体系が変更され、夜間交代待機制度が取られた。

ー11月4日午後3時　島根県竹島沖ー

「・・・捉えました」

海上自衛隊第1潜水隊群第5潜水隊所属そうりゅう型潜水艦うんりゅうは前日から法案可決に先駆けて呉からここまで着ていた。

「韓国海軍の忠武公李舜臣級駆逐艦です。イージスシステムは水中まで捉えることは不可能です。アメリカ海軍の潜水艦についで優秀なこのそうりゅう型なら韓国海軍のソーナーには映りません」

艦長は本隊と連絡を取った。

「こちらうんりゅう。韓国海軍の忠武公李舜臣級駆逐艦を確認」

『こちら本部、了解。おやしおが現在海域へ進入中。ハープーンが射程に入り次第攻撃を開始せよ』

無線が切れた時、ソーナー員は新たな波紋に気づく。

「敵潜水艦です。・・・張保皐級です。数2隻」

「ちいっ。補足されているか？」

「いえ、ですが敵捜索中のようです」

艦長は無線を再び取り

「こちらうんりゅう、攻撃不能。敵潜水艦に捜索されている」

『こちらおやしお。その潜水艦は貴艦で攻撃されたし。我々は忠武公李舜臣級を攻撃する』

「撃ち漏らした場合は」

『考えるな』

「敵潜水艦２隻を攻撃する。深度２００そのまま、ノット変更なし。メインタンク注水」

「アイサー」

「ソーナー、捉えました。敵艦距離２０００、深度７０、７ノットで航行中」

「減速、深度変更せず。攻撃開始。魚雷戦準備。１番２番４番５番発射管８９式魚雷装填」

「１番２番４番５番発射管８９式魚雷装填」

「データー解析よし、入力」

「１番２番４番５番装填よし、準備よし」

「１番４番注水」

「１番４番注水よし」

艦長は戦後史初めて敵海軍への攻撃をすることとなった。

「１番４番発射」

「１番４番発射」

魚雷２本は潜水艦から放たれた。

「2番5番注水。3番6番に装填。何秒で着弾する?」

「約30秒です。敵艦気づいていません。」

30秒は長く短かった

「命中、圧壊音確認。1隻のこってます。敵艦デコイ発射」

「2番5番発射」

新たな魚雷もまた、韓国海軍の潜水艦を沈めた。

「命中」

「敵忠武公李舜臣級接近」

おやしお型潜水艦はソーナーで補足した駆逐艦に攻撃を開始した。

「ハープーン発射!」

ハープーン対艦ミサイルはものすごい勢いで海面を突破、駆逐艦を撃破した。

自衛隊は2隻の潜水艦と1隻の駆逐艦を沈没させた。

引き継いで任務を受けた電子戦機が空域を電波妨害装置で撹乱させ、イージス艦みょうこう旗下４隻の護衛艦を海域へ誘った。

―ＤＤＧ―１７５みょうこう―

「ソーナーに反応。敵艦もこちらを補足している可能性がありますが、世宗大王級です」

「よし。ハープーンミサイル準備」

「ハープーン準備！」

「撃て！」

ハープーン対艦ミサイルは艦に詰めるだけの数が発射された。

４隻の船から無数のハープーンミサイルが発射され、世宗大王級駆逐艦旗下の艦隊は損害を受けた。

―韓国海軍日本侵略部隊「？？　？？　？？　？？」（日の本の国沈没）艦隊―

「第７セクター冠水！ああっ！武器庫水没！」

「総員退艦！」

「メインエンジン停止！艦底に深刻なダメージ！」

「武器庫に火が回る！消せ！」

「ＳＰＹレーダー反応せず！」

世宗大王級駆逐艦旗下の艦艇は世宗大王級駆逐艦以外が航行不能に陥るダメージをうけ、強襲揚陸艦独島も甲板が破裂した。

世宗大王級駆逐艦もＳＰＹ１レーダーにハープーンが着弾し、ＣＩＣが壊滅的被害を受けた。

世宗大王級駆逐艦以下、海上に浮かぶことができた船５隻はみょうこう旗下の部隊に降服した。

―１１月５日　午前２時　愛知県守山駐屯地夜間待機中の第２小隊―

「寒いですね・・・教官」

「ん、これ使うか？」

二人は舞台から勝手に離れ、基地の角で座っていた。

坂崎は自分の着ていたコートを差し出す。

「それじゃ教官風邪引きますよ」

「そう・・・だな。じゃあこうするか」

坂崎はコートを仲沢の方に掛け、もう片方を自分の肩にかけて寄り添った。

「・・・なんかドキドキします」

「俺もだ」

しばらく時間が経つと

「・・・すー・・・」

と、寝息が聞こえてきた。

坂崎が隣を見ると仲沢は心地よさそうに眠っていた。

「・・・かわいいな」

ー11月5日午前3時韓国　大邱基地ー

「君たちは日帝を叩き潰すために送られるのだ！」

『忠誠！』

韓国空軍は日本本土攻撃のため、捨て身攻撃隊を組織した。

Ｆ－１５Ｅスラムイーグル、Ｆ－４Ｅ戦闘爆撃機あわせて１０機と、護衛機のＫＦ－１６が１０機。そして日本までたどり着くための給油機がないため改造型Ｃ－１３０を投入した。

２１機の攻撃部隊は3時０２分に大邸基地を飛び立った。

日本の新たな歩み方（前書き）

国境紛争集結

日本の新たな歩み方

韓国海軍の行動は全世界へ配信され、日本の海軍力の強さが世界へ知れ渡る。

同盟国間の戦闘で「日韓基本条約」は破棄され、国家間の友好はもちろんのこと断絶した。

在韓米軍は最大同盟国日本への攻撃をした韓国領土から最低限の兵力（海兵隊の一部と航空部隊数機）を残して撤収を開始した。

さらに韓国牽制のため、撤収した兵力を日本海側へ展開した。

国内では戦果に歓喜し、日本の防衛が確立されたことを喜んだ。

―11月5日　午後7時　竹島上空―

「チョン・ミジョン大尉、コレから先は大尉が飛行隊を指揮してください」

『了解』

「日本に爆撃してやってください」

チョン・ミジョン大尉以下10機の編隊は竹島の低空域に入る。

自衛隊のレーダー網をかいくぐるためだ。

「こちらオイルタンカー、給油完了。レーダー情報によれば作戦ルートを通ればイージス艦のレーダーにはかからない」

『了解！』

チョン・ミジョンは在日韓国人だった。

１０年前に帰国し軍へ。

エースパイロットとして韓国空軍にいた。

（日本攻撃は俺の夢だ。誰にも譲らん）

愛機のＦ－１５Ｋは絶好調だった。

（今日はいつになくいい）

『大尉、我々護衛隊が援護しますので存分に攻撃を！』

「ありがとうホ少尉！」

ＫＦ－１６になど最初から期待はしていない。マルチロールファイターがＦ－１５Ｊに勝てるか。

俺のＦ－１５ＫのＡＭＲＡＡＭこそが連中を叩き潰せる。

－午後７時３０分　福岡県築城基地第８航空団スクランブルハンガー－

「レーダーに機影を捕捉。スクランブル、スクランブル。敵機数２１。スクランブル」

Ｆ－２戦闘機２機は迎撃に飛び立つ。

『こちら築城基地の吉村（司令）だ。侵犯機は間違いなく韓国空軍機だ。先ほどＡＷＡＣＳが捉えた』

「迎撃許可は？」

『戦時だ。撃ち落せ』

「了解」

『今基地からＦ－１５Ｊが離陸準備中だ。頑張ってこい』

航空自衛隊のＦ－２はレーダーに敵を捉える。

「敵が出たな。Ｆ－１５ＫとＦ－４、ＫＦ－１６か。ＡＡＭ－４安全装置解除。発射」

２機のＦ－２がロックオンした機体にミサイルを放つ。

『敵がミサイルを発射！』

『フレアめいいっぱい使え！』

『やばー』

護衛機であるはずのＫＦ－１６がまっさきに迎撃された。

「使えんな！どけ！」

チョン・ミジョンは自慢のＡＭＲＡＡＭを撃った。

「ＡＭＲＡＡＭか、余裕！」

空自隊員は見事な旋回技術とフレアを用いて避ける

僚機の隊員は冷や汗をかく

「あぶねえー・・・仕返しだっつって！」

ＡＡＭフル装備のＦ－２は２波攻撃を開始した。

『うわやばーーー』

Ｆ－４に命中したＡＡＭ４は後続機のＦ－４を５機を巻き込んだ。

更に誘爆し、Ｆ－４部隊は全滅。

「ド素人かお前ら！ええい、行くぞ！」

「まだくるか。Ｆ－１５まだ？さすがにキツイ」

「そう言うな。３発目！」

３発目のミサイルはＫＦ－１６を破壊する。

「Ｆ－１５Ｋには当たらねーかー・・・」

「ミサイル弾切れ～。Ｆ－１５Ｊ部隊は？」

『こちらＦ－１５Ｊの村木。戦線交代だ』

「よーし、敵は残機・・・ええと、１０機くらい」

『お疲れさん。あとは任せてくれ』

Ｆ－１５Ｊは後退するＦ－２を追い抜く。

１０分後、Ｆ－１５Ｊ３機の一方的な攻撃で戦闘は終わった。

『総計１０機迎撃完了。海面に複数のパイロットが見受けられる。救助艇を』

１０分以内に待機していたはたかぜ型護衛艦はたかぜが到着、内火艇でパイロットを回収した。

しかしそこに「チョン・ミジョン大尉」と後部座席要員の姿はなかった。

―同日１１月５日午後１１時　福岡県海岸沿い―

爆発音は街を轟かせた。

１１月３日の巡航ミサイル攻撃により福岡県内では避難命令が出ており、街には誰もいなかった。

海岸にはＦ－１５Ｋが突き刺さっていた。

「く・・・ソ」

チョン・ミジョン大尉は海岸を歩く。

彼の後部座席要員は不時着の衝撃で死んだ。

「日本人！出てこい！」

レーダーに突如現れた機影を確認した陸上自衛隊は市内から斥候隊を向かわせた。

偵察バイクに乗り込んだ陸自隊員２名は海岸へ向かう。

「おい、黒煙だ。不時着か」

バイクの音でうるさいが、個人間のインカムによって会話は成立した。

「ああ、そういや何時間か前かに侵入機１機取り逃がしたって報告が来てた。韓国軍だと思う」

海岸の防波堤にバイクを止め、８９式小銃を肩から下ろした。

「誰かいるな」

陸自隊員二人は小走りで浜辺へ降りた。

「動くな！！！」

隊員二人はボロボロのパイロットスーツを着た男に銃を向けた。

「？？？？？！　？？？　？？？　？？？？！」

陸自隊員には何を言っているか理解は出来なかったが、相手が韓国人であることを理解した。

男はＫ－５拳銃を手にした。

陸自隊員は即座に彼を撃ちぬく。

戦闘爆撃機隊２１機迎撃はすぐさま世界ネットで放送され日本の強さはさらにアピールされた。

韓国軍は状況の回復に必死だった。

ひっ迫する財政を軍事力で回復しようとしたのが間違えであった。

韓国陸軍は日本への送兵方法を考えたものの、すべてが日本の防空網や制海権で破壊されるのは目に見えていた。

米軍部隊は残留部隊を完全に撤収した。

アジア圏における基地放棄ということではあったが、米軍は日本海沖へと向かう。

一方日本は拿捕した独島級強襲揚陸艦を接収し、ドックで改築を開始した。

世宗大王級駆逐艦は損害がひどかったために韓国海軍に武装解除の上で引き渡した。

韓国のウォン売は凄まじく、世界からの輸送が停止した。

サムジン電気等日本に出店していた店舗は本国の送金凍結により瓦解、日本国内で韓国製品が完全にシャットアウトされた。

戦争の激化が予想されたため、日本人の帰国が始まったが大韓航空が日本人の運送を拒否したことに始まる日本人収容計画が韓国政府によって開始され「人質」となった。

韓国政府はあとに引けなくなった。

そして一斉一台にして最悪な作戦を計画した。

１１月７日、韓国政府は一部の日本人の返還を開始すると発表し、大韓航空機Ｂ７４７ジャンボジェットによる一斉送還を提示した。

１１月８日、一時休戦の約束のもと大韓航空機２機が飛び立った。

機内に積まれていたのは日本人ではなく完全装備の韓国陸軍特殊戦司令部所属特殊作戦旅団「ブラックベレー」２機総計２００人だった。

彼らは空挺部隊であり、日本国内に安全に接近して空挺作戦を仕掛ける気で居た。

Ｂ７４７は日本の領空へ入ったあと、予想外の事態に見舞われた。

『こちらは日本国航空自衛隊。只今より空港までエスコートします』

自衛隊の制空戦闘機Ｆ－１５Ｊ改３機がＢ７４７を取り囲む。

「これじゃ攻撃ができない！」

「こうなれば強制攻撃だ。日本本土のどの地点に降下する？本来は東京近郊だったが」

「あー、降下できそうなのは・・・京都。京都だ」

「よし」

一午前１１時２０分　日本　京都上空一

「降下だっ！」

Ｂ７４７のドアが開け払われた。

高高度降下作戦、成功率は低いのだが韓国軍にしては自称ではない強さを誇るブラックベレー隊は損害率をリアルに計算し、２００人中５０名の死亡を見込んでいる。

しかしそれは自衛隊機のエスコートを計算に入れてはいなかった。

ドアが開かれ、隊員たちがひとりひとり飛び降りる。

空自隊員は肝を潰した。

『ストーム１から本隊！大韓民国機から空挺部隊が降りている！』

『なんだと?』

『兵隊が飛び降りてる!降下作戦している!』

『直ちに威嚇射撃を加えろ』

『Ｒｏｇｅｒ!』

Ｆ－１５Ｊ改はＪＭ６１バルカン砲を大韓航空機の前方へ射撃した。

曳光弾での射撃は見えているはずだ。

『止まらない!』

『機体への攻撃は注意しろ』

『了解、しかし京都市内へ兵士が降りている。陸自の展開を要請する』

『わかった。Ｂ７４７のエンジン部への銃撃を許可する』

『了解』

Ｆ－１５Ｊ改は４発あるエンジンのうち右側の一番外側を撃った。

２機ともだ。

「日本軍の攻撃です！」

「降下を早めるんだ！」

大韓航空機の動き方はまさに軍の動き方だった。

『民間人地区を抜けた！撃墜許可をください！』

『・・・迎撃許可！』

司令部の命令によりＦ－１５Ｊ改はコックピットを射撃した。

２機のＢ７４７は被弾した衝撃で黒煙を吹いた。

しかし降下兵の降下を止めれず、１５０人が空へ飛んだ。

一午前１１時３５分　京都府京都市一

「御池通に軍隊がおりてるのが見える！」

緊急出動した所轄の警察官たちは降りてくる軍人に驚いた。

彼らの展開は早く、パラシュートをたたむと警察官への攻撃を開始した。

「京都より警ら中のＰＣへ継ぐ。現在韓国軍のゲリコマが京都市役所を中心に出現。ＰＭ拳銃使用許可を出すため、民間人への誤射を避けてこれを制圧せよ」

空挺部隊降下の知らせを受けた京都府桂駐屯地の部隊は直ちに武装を展開し（後方支援隊のため、６４式小銃がメイン）市内へ向かった。

『セクター１に兵隊を確認！』

陸自の到着を待たず、韓国軍ブラックベレー部隊の侵攻は早かった。市役所を制圧後、ベレー部隊は１０名ずつの集団を組んで碁盤目状の京都市内を区画ごとに制圧し始めた。

市内の警察官たちは一方的自動小銃火力により鎮圧されてしまった。

陸上自衛隊は午後１２時２１分に市内へ入った。

「第１班から第２班まではここから４ＫＭ圏内を制圧！第３班から第７班は市役所を奪還せよ！」

７０名の隊員はこちらも１０名スクラムを組み、区画の奪還に乗り出した。

「敵発見、射撃開始！」

第１班の陸自隊員はトラックを盾にして射撃を開始した。

ー桂駐屯地司令部ー

「第１班、韓国軍と交戦開始」

『こちら１班山本！敵の火力攻撃が凄まじい！』

「第２班交戦開始」

『２班の祖父江です！敵の軽機関銃攻撃が・・・うわああ！』

「第２班班長祖父江真司２等陸曹バイタル停止。ＫＩＡ、ＫＩＡ！」

本部の７０名分の体調が表示されているコンピュータの一つから明かりが消えた。

「さ、３班班員全員のバイタルが停止！なにがあった！」

『こちら第４班枕木！第３班の展開方面で対戦車火器が使用された！』

「第５班三島澤行１等陸尉バイタル停止！」

「第４班２名バイタル停止！」

「何が起こってるんだ！」

第１班は何とかして生き残っていた。

第１班の冴島昭二１等陸曹は６４式小銃に弾を装填し、敵を撃った。

「援護は！援護はまだか！」

陸上自衛隊はエスコート機のＦ－１５Ｊ改を呼び戻し、機銃掃射を要請した。

「こちら第１班山本！航空支援要請！」

『こちらストーム１！了解！スモークを炊いてくれ！』

陸自隊員は発煙弾で敵の位置を示した。

『了解！』

Ｆ－１５Ｊ改は一気に降下し、ＪＭ６１を発射した。

「区画制圧確認！」

『Ｆ－２支援攻撃機の空域への到着を確認』

Ｆ－２は対地攻撃キットを装備していた。

「建築物の破壊を制限されてるとはいえ、炸薬量の少ない模擬弾とはね」

「殺傷力は十分だ」

Ｆ－２により空爆が開始されると韓国軍は下水へ潜った。

制圧にはこれより２ヶ月かかることとなった。

日本への空挺降下により韓国国内は勝利に沸いた。

日本の古都への成功というだけあってだ。

もちろん民間機を使用した偽装降下作戦は世界で批判されたのも事実だった。

軍備力を南へ集積した韓国軍は潜水艦による大規模侵攻作戦を計画

した。

しかし予想外の事態が起こった。

―11月15日　南北国境地帯における武力抗争勃発―

北朝鮮軍は薄くなっていた防衛戦を突破し、韓国への進軍を開始した。

世界でもこれは予測できていなかった事態だった。

疲弊していた韓国海軍の裏を書いた作戦が成功し、北の海軍が韓国の湾口施設を攻撃した。

そして飽和攻撃によりソウルを爆撃。

アメリカ軍をなくした韓国軍は為す術もなく、11月20日ソウル陥落。

軍令部や民間人は大邸へ撤収した。

韓国は日本との戦闘に余力がなくなり、休戦協定と戦闘支援を要請した。

日本はこの提案を蹴り、終戦合意を求めた。

陸自隊員が２０名以上殉職し、官民合わせ１００人の犠牲が出た戦闘は以外にも早く終結した。

日本政府は在韓邦人救出名目での陸自派遣を決定し、１００名規模の特殊作戦群が韓国釜山へ向かった。

日本人を回収後、特殊作戦群は韓国軍の陰湿な妨害を受けつつ邦人を帰国させた。

１２月に入り、戦闘は激化した。

米軍は共産主義流入を防ぐべく、北との交渉を行った。

１２月５日、北朝鮮と韓国は終戦草案に基づき「統一高麗連邦」として成立することになった。

日本は戦闘集結を皮切りに第９条交戦権をもたないという条目を復帰させた。

同時に武器輸出三原則を改定し、同盟国への輸出を許可した。

台湾はすぐに連絡を取り、Ｆ－２を発注した。

日本の歩み方が変わる。

日本の新たな歩み方（後書き）

無茶に締めすぎたこと後悔します。

次回からはエロ要素が入り込んできますかもですので、注意してください。

南極の遺産

日韓紛争は世界への激震となった。

韓国の崩壊と朝鮮半島の統一化でことは閉められたものの、半島での治安は悪化していた。

中国もスプラトリーでの一件で国際世論に登場する余力もなく半島は見捨てられていった。

日本の武器輸出はアジア諸国を喜ばせた。

Ｆ－２戦闘機のラインは２０１１年で閉鎖予定だったが台湾の４０機発注で撤廃した。

フィリピンからもオファーが入り、Ｆ－２は改良の余地ありとして技研での研究が進められることになった。

８９式小銃や０１式軽ＭＡＴは陸自が難色を示したため輸出はしないことになった。

台湾は９０式戦車か１０式戦車の発注も依頼したがこちらは国防の理由により断ることになった。

またフィリピンは艦艇1隻失ったので日本への依頼をした。

軍需産業が国家レベルまで回復した日本は自国軍のハイスペック化に乗り出すことができた。

ー12月3日　愛知県名古屋市守山区守山駐屯地ー

「教官、デートしましょうよ～！」

「ん、いいけどどこに行くんだ？」

「うーん、カラオケとか？」

「いいけど最近のはあんまり歌えないぞ？」

12月3日、冬本番の名古屋市で彼らはダウンジャケットを着て外へ出た。

「近くにあったよな・・・ええと、あった」

歩いてカラオケ店に入り、3時間コースを選ぶ。

「っと・・・」

仲沢の1曲目が終わった。
俺はその4分程度を完全停止で聞いていた。
「下手・・・でした?」
俺は即答した
「うまい」
俺は無難にロック系の曲をチョイスした。
3分ほどの曲だが、曲の上下がすごい。
うるさかったかな
「・・・ふぅ。あーすまんきらいか?」
すると仲沢は目を輝かせ
「このバンド好きなんです!」
「おー、趣味合うな」
何曲くらい歌っただろう。
「20分か・・・」

時計を見るとタイムアウトまで２０分残されていた。

「・・・」

「・・・」

唄で気づかなかったが、距離が異様に近い。

仲沢の心音が横で聞こえる。

「あ・・・えっと・・・どう・・・します？」

ふたりともレパートリーを歌いきった。

俺は頭を掻いた。

「あー・・・っとだ・・・こういう時に言うべきかわからないけど・・・その・・・キスしたいかな」

何言ってるんだ俺は変態じゃないのか何言ってしまった

「あ、やっぱえっと・・・」

俺が言いかけると仲沢は

「・・・どう・・・ぞ」

「・・・？」

ふるえる声だった。

「私も・・・したいです」

俺は初めてじゃない。キスは学生の時に何回かした。だけどあれから7年以上立っているからすこし心配だった。

「えっと・・・その・・・優しく」

仲沢は顔を赤くしながらそうつぶやいた。

俺はゆっくり唇を近づけた。

「ん・・・」

私の唇にかすかに触れた感触があった。

暖かい。

眼を閉じているけど教官は・・・眼の前だ。

１０秒、２０秒。

私は自分で離れれなくて、結局教官が離れた。

「ふ・・・あ・・・」

「大丈夫だったか？」

その問いに私は

「・・・ファーストキスですからね。えへへ・・・」

体がなにか熱くなってきた。

そこに時間を知らせるブザーが鳴り、私と教官は帰り道を歩いた。

「なあなかざ―」

俺が名前を出した時、彼女は俺の前に歩き出して道を塞いで言った。

「凛って・・・呼んでください。二人のときは」

俺は少し恥ずかしかったが

「わかった」

そう答えた。

「じゃあ・・・凛、も・・・俺のこと名前で呼ぶんだぞ？」

「・・・修一？」

その言い方に思わず

「・・・なんかかわいいな」

ーその日の夜　守山駐屯地女性隊員隊舎ー

「へー、口にキス？」

「うん！すごいよ！すごい！いきそうになった！」

「馬鹿かってーの」

ポコンと私は頭を叩かれた。

「もう何するの」

「あんたその程度でそんなじゃ・・・ふふ♪」

「え、ちょ、なに！？」

「本番とかどうすんのよー」

私は本番という言葉で頭がおかしくなりそうになった。

「わっ、ちょっ、顔真っ赤！」

「・・・だよね・・・耐性付けないと」

「そうだよ、彼氏なんだし」

―12月5日　防衛省中央情報隊司令室―

衛星探索員の情報で矢部はまたここに着いていた。

「次はなんだ?高麗軍でも来たか」

「いえ、これを」

衛星が示していたのは南極だった。

「ここがどうかしたか?国家不干渉エリアだ」

「ここを見てください」

ズームアップしていくと、氷が溶けて中からなにか出ていた。

「・・・船?」

探索員は答える。

「正確には宗谷型砕氷船です。文献によればこの艦は非公式です。宗谷型はソ連側に2隻と日本側の1隻だけですから。ソ連側の物でないとすればこれは・・・」

「遺産か」

「はい」

矢部1佐は興味を示した。

「積荷は?」

探索員は答えた。

「非公式艦と断定したには理由があって、１９４５年1月に見慣れない船が日本国旗をつけてドイツの軍港を出たとあります。ドイツ側は戦乱でこれを日本へは伝えていません。

ドイツ国防軍の証言と宗谷型のスケールは一致してます。また、これにを目撃した他の海兵は数十人の武装ＳＳとＳＳ将校と日本軍の兵士が乗り込んだのを見ています。

積荷は木箱１００個とコンテナが４０個、大荷物です」

「ふうむ・・・探査の余地ありだな。それで最後の更新記録とかは？」

「はい。１９４５年3月2日に南極を航行中していたソ連海軍が部隊確認のできない船を攻撃しています。それと同行していたドイツ海軍のＵボート2隻。」

「よーし、第2小隊にまた頼むか。第1は今高麗国の調査しているしな」

―翌日朝９：２０　愛知県名古屋市守山区守山駐屯地―

「はい、電話代わりました坂崎修一２等陸曹です」

『あ、坂崎くん？オレオレ、矢部』

「矢部１佐ですか」

『うん。この間はどうもね。んで今回もお仕事よ』

「どうすればいいですか？」

『えっとさ、今日迎えが行くからさ、それに乗ってよ』

「え、仕事・・・・ですか？」

「ああ・・・長くなるかもしれない」

「どこまでとは・・・」

「言えないけど・・・大丈夫だ」

凛はすごく心配していたが、納得してくれた。

迎えに来たのはワンボックスで、中には第2小隊のメンツが載っていた。

「よーっす、修一くん」

「よろしくお願いします、真賀山2佐」

車の中で任務の解説を受けた。

「またもややべっちの任務だ。場所は南極」

『南極ぅ!?』

全員が驚いた。

「南極の溶けた氷から見つかった砕氷船だ。日本軍のものと思われる。ここは開拓当時からブリザードが激しすぎて誰も到達してはいない地点だが地球温暖化で今年溶けて見つかった。

ー5日後　南極昭和基地ー

近くまで飛行機で行き、そこからアメリカの船に乗って基地まで入った。

「これより探索へ向かいますが・・・あの人達は?」

南極遠征隊の隊員たちは突如現れた６人を不審に思った。

「わからんが、同行しろとのことだ」

―１２月９日２時間後（ＡＭ１１：００）グリッド１４，４７―

「こいつか」

「あなた方はこれを見なかったことにしていただけますかね？」

不審に思う遠征隊をなだめ、真賀山２佐は小隊を率いて船へ近づいた。

「水密扉か。Ｃ４でふっ飛ばしちゃうおうかな？」

「雪崩とかいいのか？」

危険なことを言う千葉３等陸曹に突っ込む富坂１等陸曹。

「普通に溶接機かなんかでこじ開ければ？」

と冷静な意見な平城３等陸曹。

「溶接機はあるぞ」

と三ツ矢３等陸佐

「じゃあ修一くん頼んだ」

俺は溶接機で凍りついた水密ドアに切れ目を入れていく。

「よしっと、開きました」

扉は内側へ倒れた。

「何があるかわからんから用心しとけ～」

寒波に強い旧ソ連製ＡＫＳ－７４Ｕを持ち、船内へと入る。

「貨物室が臭うな。何が積んであるかはわからんらしい」

６人の隊員は速やかにかつ無駄のない動きで部屋にはいってゆく。

「このエリアは船倉か。船員の部屋だな」

ドアを開けると毛皮のコートを纏った骸骨が転がっていた。

「軍人じゃないな」

富坂１等陸曹は骸骨の服を検分しながら言った。

「体格と服装、所持品からしてコイツは日本人だ。まぁ、日本の船だしな」

しばらく歩くと大きなドアにぶち当たった。

「こいつか、貨物室の扉は」

「なんなんでしょうねー」

「まぁ、この地点は踏破されて来なかった場所だし我々としても実績が残るし」

昭和基地の遠征隊はブツブツ言いながら船の外で待機していた。

すると一人の隊員が倒れた。

「?おい、どうし・・・」

倒れたところには赤い雪ができていた。

「え、血?」

パシュッパシュッ!

「うわ、な」

カシュシュシュシュシュ！

「Ｕｎｔｅｒｄｒ?ｃｋｕｎｇ（制圧）」

「Ｖｅｒｓｔ?ｎｄｎｉｓ（了解）」

黒の軍服の男たちは日本人遠征隊を全員撃ち殺し、宗谷型砕氷船の前に降り立った。

数は１５人。

「Ｏｄｅｒ ｖｅｒｂｉｒｇｔ ｓｉｃｈ ｅｉｎ Ｓｃｈａｔｚ Ｓｃｈｉｆｆ ａｎｖｅｒｔｒａｕｔ Ｓｅｉｎｅ Ｅｘｚｅｌｌｅｎｚ Ｐｒ?ｓｉｄｅｎｔ Ｇｅｎｅｒａｔｉｏｎ ｎａｃｈ ｗｉｒ（これが総統閣下が我々後の世代に託された財宝を秘める船か）」

「Ｄｅａｒｉｍａｓｕ Ｊａ，Ｈｅｒｒ Ｇｕｔｅｎｂｅｒｇ Ｃｏｍｍａｎｄｅｒ．（そうであります、グーテンベルク中佐殿。）」

指揮官と思しき壮年の青い瞳を持つ男は打ち破られたドアを見ていった。

「Ｔｒｏｌｌ Ｇｒａｂ． Ｋｉｌｌ．（墓荒しだ。殺せ）」

『Ｓｉｅｇ　Ｈｅｉｌ！（勝利万歳！）』

ナチ式敬礼（元はローマ式敬礼）を済ませた彼らはＵＭＰ４５サブマシンガンを携えて船内へ入っていった。

「情報にあった木箱１００とコンテナ４０だーな。千葉ちゃん、適当にひとつ開けてよ」

「了解」

千葉３等陸曹はバールで木箱をこじ開けた。

「・・・っと・・・こりゃあ・・・スゲェ・・・おい見てくれよこれ！」

千葉３等陸曹が木箱から取り出したのは金の延べ棒だった。

「延べ棒？隠し資産か何かか」

真賀山２佐はしげしげと金を見つめる。

「刻印がハーケンクロイツだな。ドイツの金で間違いない。箱にもドイツ語か。おい、そっちの日本語の箱は？」

俺の目の前の箱を指さして真賀山２佐はバールを渡した。

俺はバールで箱をこじ開けた。

「三菱の延べ棒ですね」

「枢軸軍の隠し資産だな。コンテナはなんだ？」

千葉３等陸曹、富坂１等陸曹、俺で凍てついたコンテナの一つをこじ開けた。

三ツ矢３佐が「おぉ」と感嘆する。

中身は何かのエンジンだった。

三ツ矢３佐はエンジンを見ていった。

「Ｊｕｍｏ００４エンジンだ。ドイツ空軍のＭｅ２６２ジェット戦闘機に詰まれてた」

「詳しいんですね」

と俺が言うと

「ホントは空自に入りたかったんだけどねー」

と答えた。

その隣りのコンテナには８８？戦車砲が３つ入っていた

「技術提供用も兼ねていたのか。なるほどね」

他のコンテナにはＳｔｇ４４やＭＧ４２、ＭＰ４０が大量の弾薬と共に積まれていた。

「このコンテナは開けたらまずい気がするな」

少し離れた位置にあるコンテナにはバイオハザードマークが刻み込まれていた。

「生物兵器か細菌兵器のたぐいだろうな・・・開けたらまずいと思う」

『Ｗｉｒ ｓ?ｎｄｉｇｅｎ Ｇｒａｂ Ｖａｎｄａｌｉｓｍｕｓ. Ｉｃｈ ｗｅｒｄｅ ｕｍ Ｖｅｒｇｅｂｕｎｇ Ｓ?ｎｄｅｎ ｗｅｉｎｅｎ!（罪深き墓荒しよ。泣いて許しを乞うがいい！）』

突如船内放送が響いた。

ひどいハウリングだった。

「おいおい、亡霊でも出てくるのか?」

そんなことを言った千葉3等陸曹の足元に弾が着弾した。

「敵襲！」

全員が一斉に散らばる。

『Ｄｕ　ｂｉｓｔ　ｅｉｎ　Ｔｒｏｌｌ，　ｅｉｎ　Ｓａｔｚ　ｈａｔ　ｉｎ　ｄｅｍ　Ｇｅｂｉｅｔ　ｄｅｓ　Ｄｒｉｔｔｅｎ　Ｒｅｉｃｈｅｓ，　Ｄｅｕｔｓｃｈｌａｎｄ　Ｓｃｈｕｈｅ　ｓｔｏｌｚ！（お前たちは誇り高きドイツ第３帝国の領地を土足で文荒らしているのだ！）』

「ナチ野郎だな！ネオナチだ！」

真賀山２佐の声は全員に届いた。

「ナチぃ！？うそでしょもー！」

と平城３等陸曹。

三ツ矢３佐も信じられないといった感じだ。

『Ｖｅｒｚｅｉｈ　ｍｉｒ，　ｗｅｎｎ　Ｙａｒｒｏｗ　ｏｕｔ　ｎｏｗ！　Ｃｏｍｅ　ｏｎ！　Ｋｏｍｍ　ｈｅｒａｕｓ！（いま出てくれば許してやろう！さあ！出てこい！）』

「わからないよドイツ語は！」

真賀山2佐はＡＫＳ－７４ｕを発射した。

『Ｗｉｒ　ｌｅｉｔｅｎ　Ｓｉｅ　ｗｅｉｔｅｒ　ｕｎｔｅｎ　ａｕｆ　ｄｅｒ　ＳＳ　ｂｅｗａｆｆｎｅｔ　Ｈ?ｌｌｅ　ｋｌｏｐｆｅｎ！（武装ＳＳがお前たちを地獄の底へ突き落とすだろう！）』

俺の目には黒のコートを着こみ、ＳＳの襟章をつけた男たちが大勢降りてくるのが見えた。

「敵の増援です！」

「俺がやる！」

富坂1等陸曹はＰＫＭ軽機関銃をコンテナから少し出して敵の方角へ撃った。

『Ｃｏｎｔａｉｎｅｒ！　Ｄｅｒ　Ｂｅｈ?ｌｔｅｒ　Ｓｃｈａｔｔｅｎ！』

全員ほぼ別のコンテナに陣取っている。

隣のコンテナが富坂1等陸曹、富坂1等陸曹のさらによこが真賀山2佐、その後ろが平城3等陸曹、俺の後ろが三ツ矢3佐、そして千葉3等陸曹。

俺は左から顔を出してＡＫＳ－７４Ｕを撃った。

男は階段の所でその弾に当たり、転げ落ちる。

『Ｆｒａｎｚ！』

ＰＫＭの掃射が落ちる男を助けようとした敵を切り裂く。

『Ｏｈｈｈｈ！！！』

「グレネード！」

三ツ矢３佐は銃撃がやんだ隙に上の敵が出てくる水密扉（今いる位置はくぼんでいる）に投げつける。

炸裂音と断末魔が聞こえた。

「敵発見！」

別のドアから出てきた敵を千葉３等陸曹が撃つ。

「ちょろいっ一」

千葉３等陸曹が撃った敵は死なずに撃ち返し、倒れた。

「千葉ァ！」

真賀山２佐は走った。

「大丈夫っす・・・ボディアーマー着てますから」

「そこで待ってろ。全員、放送室への攻撃を開始するぞ」

『了解』

５人の隊員は貨物室に千葉３等陸曹を残して船倉へはいった。

「こいつらカッコだけだな！弱い！」

真賀山２佐の言うとおり、彼らは戦闘に慣れている様子ではない。

銃の反動で天井を撃つ奴もいる。

『Ａｔｔａｃｋ！Ａｔｔａｃｋ！』

敵二人が角から躍り出た

平城３等陸曹が前に歩み出る。

ＡＫＳ－７４Ｕを横薙ぎに発射し、二人を倒す。

「クリア」

放送室に敵は残ってなかった。

「こちら宗谷、本部送れ」

『こちら本部～、どうしたー？』

矢部１佐の抜けた声はこの自体を知らないようだった。

「ネオナチの部隊に襲撃された」

『了解。負傷者は？』

「千葉が撃たれた。敵は２０名弱を制圧したが、隊長っぽいのは見当たらない」

『・・・あー、待て。未確認の航空機がその近くに着陸した。・・・付近を航行中のアメリカ海軍がもう１機にスクランブルしたらしい。現在南極自体がアラートだ』

「了解。どうすれば？」

『宗谷型砕氷船の防衛に・・・あー待て。アメリカ海軍がそっちも援護するって打診してる。どうする』

「財宝と命をかけたら命だ。頼む」

『了解。アメリカの護衛兼救助のヘリは２０分で到着する。衛星によると敵はあと１０分でそこへつくぞ』

―南極沿岸　アメリカ海軍第７艦隊群―

「所属不明機、現在南極グリッド３０．６７に着陸。ハリアー１、現在これに対処中」

「日本より応援要請。座礁船調査中の探索部隊が攻撃を受けた模様」

「ＳＥＡＬＳを出せ」

ワスプ級強襲揚陸艦エセックスからＭＨ―６０Ｓシーホークが飛び立つ。

『こちらハリアー１、所属不明機確認』

「無線チャンネルを全チャンネルで帰還を命令しろ」

『了解』

『こちらアメリカ海軍。貴機は不可侵の南極領域を侵入している。所属国を名乗り、帰還せよ』

『こちらドイツ第３帝国所属の戦闘輸送機である』

『正確な所属を述べぬ場合撃墜を辞さない』

ハリアーの追跡していた小型輸送機は着陸直前であった。

『こちらハリアー1、迎撃許可を』

「攻撃を受けぬ場合、攻撃してはならない」

『了解』

輸送機は着陸し、遠い津郡の制服を来た兵士が一斉に走りだした。

『連中は武装している。対応は？』

「ＧＡＵ－１２での殺傷を許可する」

『Ｃｏｐｙｔｈａｔ』

２５？機関砲による攻撃は兵士たちをミンチに変え、輸送機を吹き飛ばした。

「敵発見」

双眼鏡を覗いていた三ツ矢３佐が静かに話す。

「しかし、コイツを撃てるなんてね」

真賀山２佐は少々興奮気味に喋った。

俺たちは貨物庫から千葉3等陸曹を安全な位置に移したあと、ＭＧ４２を人数分持ちだした。

「弾づまりも確認したし、十分に引きつけるぞ」

敵は３０人といった数だ。

その時遠くで爆発音が聞こえた。

「アメリカ海軍の攻撃だな」

敵は船から１００ｍの位置へ入った。

「オープンファイア～」

ＭＧ４２のバイポッドを船の手すりにかけ、射撃開始した。

ヴァーーーという連続音は彼らを地獄へたたき落とした。

「ＭＧ４２!?」

指揮官、マールハイツ・グーテンベルク中佐は祖国の名銃の発砲音

に驚愕した。

「中佐！遮蔽物が！」

「ＲＰＧ－７を撃て！」

ＲＰＧ－７を抱えた兵士が走ってくる。

そして倒れた。

「俺がやる！」

マールハイツはドイツの第３帝国党を率いている。

第３帝国党の党員全員がここへ集結した。

引けない。

マールハイツはＲＰＧ－７を打ち込んだ。

「ＲＰＧ！！！！」

真賀山２佐の叫び声で俺たちは船の中へ転がり込んだ。

爆発で頭の中がキーンとする。

「・・・うあ」

俺はすぐに立ち上がり、手元にあった武器を取った。

ＡＫＳ７４Ｕを持って外へ出ると手すりが吹き飛んでいた。

ネオナチの兵隊たち、約２０人はもうそこまで着ていた。

俺はＡＫＳ－７４Ｕを撃つ。

下へ撃ち込み続けた。

銃声が聞こえない。

無音空間で俺は銃を撃っていた。

しかし反動の手応えが消えた。

「弾切れっ・・・！？」

真下に居た敵はニヤリと笑い、武器を向け

倒れた。

真下まで着ていた敵がことごとく倒れていく。

「いったい・・・？」

聴力が戻るに連れて騒音が聞こえてきた。

音の方を見るとヘリが1機、下へバルカン砲で攻撃していた。

マールハイツは銃弾で体を割かれた。

彼は最後に、祖国で自分に愛想を尽かして出ていった妻と娘、エリスを気にかけた。

アメリカ軍のヘリの中で、日本語の話せる兵士が俺に聞いた。

「あんた痛くないのか？」

「・・・？」

「？」

「そこ！」

アメリカ兵は自分の右肩を叩いて俺を指さす。

「・・・あ」

破片が刺さっていた。

血が出ていた。

そう言われると突然激痛が走った。

「イッたぁっ！？」

「気づいてなかったのか。治療してやる」

千葉３等陸曹はヘリの奥で衛生兵に見られ、他の隊員たちも少なからず軽傷だった。

後に正式な調査隊が船を調べた結果、４兆円相当の金塊とＭｅ２６２１機分のパーツ、ドイツ軍の資料が発見された。

武器は１個中隊分が入っていた。

日本政府はこれの所有権を国連に主張、受理された。

ドイツ軍資料はドイツ連邦に寄付され、Ｍｅ２６２もまた寄付された。

４兆円の金塊はドイツ刻印のものはドイツ連邦、日本刻印は日本政府に分配され日本は１兆５千億円の権利を手に入れた。

－１２月２０日（金曜）午後５時００分日本名古屋市守山区守山駐屯地－

「ただいまー・・・ってアレ？」

俺は同室の赤坂が部屋にいないのに驚いた。荷物もない。

「横田、赤坂は？」

横田は驚いた様子だったが

「知らなかったのか？まあ、お前１週間いなかったしな。アイツなら自衛隊やめたよ」

「は！？」

驚いた。

アイツがやめるとは。

「驚いたのがさ、あいつ里中3尉と出来てて一緒にやめちまったんだよ」

「なんだって!?」

アイツ連絡くらい・・・

「あ」

そういえば携帯電話の電源を切っていた。

電源をつけると3通入っていた。

2通は凛からだ。

1件目「遅いです!」12／10

いつになったら帰ってくるんですか?私寂しいですｏ（、ω,＊）ｏプンスカプンスカ!!

2件目「びっくりしました」12／17

修一がいないのが残念です。赤坂3等陸曹と里中3尉が一緒に自衛隊をやめちゃいました。送別会を開いたんですけど、二人付き合ってたみたいです。

寂しいなあ・・・

修一も早く帰ってきて！・・・修一ってなんか書いてるとドキドキしちゃう

3件目「すまん」12／17

お前と別れるのは辛いが、やめなくちゃならない事情になった。

お前になら話せるからいつでも電話をくれ。

一応年中は国内にいるつもりだ。

あと美紀と付き合ってるのは秘密にしてた（笑）

結婚とかじゃないから心配しないでほしい。ただ日本じゃ不便だったから。

親愛なる友人へ、早く帰ってやれ。仲沢が最近訓練に集中しない。

あと俺の部下の江崎、七宮を頼む。そうじゃないと吉山の馬鹿が引き継ぐことになる。

お前が最近空けがちのせいで怪しいんだ。注意しろ。

電話を頼む。

「なるほどな」

俺はとりあえず凛にメールを送ることにした。

件名：帰ったぞ；

すまなかった。俺も会いたくて寂しかったんだ。

４０分くらいしたら行く。

そして電話番号を電話帳から探し、赤坂に電話した。

『よぉ、遅かったな』

「おい、なんの相談もなしか？」

『まあ、電話じゃなんだしさ、８時くらいに駅前の居酒屋でどうだ？仲沢も一緒にさ』

「・・・わかった。じゃあな」

『りょーかい』

２０分後くらいにメールが入った。

件名「おかえりなさい！」

わかりました！今でも大丈夫ですよ？

俺は早速勇み足で向かった。

「・・・？」

女子隊舎は3階建てのビルで、今は薄暗くなりつつある。

隊舎のそばに男性隊員がコソコソしていた。

「吉山純太・・・？」

防衛大学校卒の自称キャリアの陸曹長が居た。

あからさまに怪しいので俺は声をかける。

「吉山陸曹長、どうかいたしましたか？」

「ッ！！！！！！」

かなり動揺していた。

「坂崎かッ・・・チッ」

吉山は逃げ去る

「なんだアイツ」

「その怪我・・・」

「ん？あー、たいしたことない」

俺の方の包帯を見て少し驚いていた。

「・・・無茶しないでくださいッ」

凛は俺に寄りかかった。

「泣かせちゃったか・・・ごめん」

「・・・自分を大事にしてください」

凛は自分で離れた。

「赤坂が８時に駅前の居酒屋に来ないかって」

「いいですよ」

「よし、じゃあ７時４０分に迎えに行くよ」

俺は帰り際に二人分の外出届を出し、自分の部屋を片付け、ＴＶを

見る。

バラエティをつけたりニュースを見たり。

「・・・う」

眠気が来た。

「寝るか・・・」

7時25分に俺は起きて着替えた。

寒いのでダウンを着る。

「おう」

「かっこいいですねその服」

「ん・・・そうか?」

おまえのが可愛い。

もこもこしたジャケットにミニスカにタイツ。

そしてもこもこしたブーツ。（全部ナナチョイス）

「行くか」

「聞いてくださいよ、ナナ今日から休みとって彼氏と日曜まで温泉なんですよぉ？」

「あ、ああ」

「だから今度連れてってください」

「わかった・・・ええと、今月末か」

「予約取れますか？」

「何とかやってみる」

「やったぁ！」

―7時57分　駅前居酒屋―

「おーっす。肩どうした？」

「ちょっとな」

居酒屋には里中元三尉と赤坂がいた。

「坂崎くんにひみつしてたけど、ごめんね」

「いやー、三尉殿がコイツとねえ」

「もう三尉じゃないわよ」

話は弾んだのだが２０分程度で赤坂が席を立ち

「ちょっとこれから話せない話に入るから奥座敷に行こう」

奥座敷をとってあったのか、気の効くやつだ。

俺だけ奥へ行き、凛は里中元三尉に任せた。

「で、話って？」

「あー、実はさ。俺のやめた理由だけど」

「ああ」

「ＢｌａｃｋＥａｇｌｅＣｏｍｐａｎｙって聞いたことないか？」

「あー、新進気鋭の民間軍事会社（ＰｒｉｖａｔｅｍｉｌｉｔａｒｙＣｏｍｐａｎｙ）か？」

自衛隊に属していればそういうニュースも耳に入るものだ。

「そう。そこにスカウトされた」

「はぁ？なんで」

「実は第２小隊の隊員数人にスカウターが着てたんだ。お前は出てたからコなかっただけで。楢木隊長と幹さんと神部さんと俺と美紀。これに乗ったのが俺と美紀なんだよ」

「なるほどな。給金でも高いのか？」

「このＰＭＣ、アメリカ資本なんだけどアメリカに家１軒がでる。」

「すげーな」

「ああ。そんでもってからの月収が１００万。ボーナスもでる」

「すげーな、それ」

「だから志願した」

「なんだ、まあがんばれよ？」

「ああ、ありがとう」

「こう、アタックしないとダメよ？」

「へーそうなんれしゅか？」

「そう。あいつ鈍いから。」

「おい、話し終わったぞ」

「あ、おかえり俊也」

「おかえりなはーい」

俺は凛のただならぬ気配に気づいた。

「・・・おい、飲ませたんじゃ・・・」

と言うと里中元三尉が

「やーねー、チューハイよ」

「飲ませてるだろうがッ！」

「メンゴメンゴー」

「あー、もう」

凛はベロンベロンだった。

「帰るわ」

「おう。次会えたら」

「またな戦友」

凛をおぶって帰る。

「修一ぃ」

「んー？」

「わたしってこどもっぽいよね？」

「・・・そこが好きなんだって」

「・・・そっか」

「わかったらおとなしくしてろ、犯罪だぞ飲酒は」

「ひゃーい・・・」

「すいません寮母さん」

「いいけど、この子未成年よね？」

「・・・ええ、まあ」

「もう、仕方ないわね」

俺は凛を寮母さんに預け、部屋に戻ることにした。

「・・・？」

何か俺は視界の中に違和感を感じた。

「・・・気のせいだよな」

－ＰＭ１１時５０分－

「そろそろ消灯か」

俺はＰＳ３の電源を落とし、布団に入った。

「・・・なんか喉乾くな」

まあ、時間内に戻ればいいよな。

俺は隊舎を出て外の自動販売機に向かった。

「寒ッ・・・」

ジャージにダウンを羽織ったが、やはり寒い。

「ブラックなんか飲んだら眠れなくなるな・・・温かい奴・・・・っと」

ココアを無難に選ぶ。

「・・・なんだ」

何か胸騒ぎ的なななにかがする。

気づくと俺は女性隊舎に足を向けていた。

「お、坂崎2曹、逢引はいけませんよ？」

「うるせぇ、バーカ」

巡回の後輩をかわし、隊舎に向かった。

「ああと確か、凛の部屋は1Fの奥・・・」

何もなければ窓を開けてココアを置いていけばいい。

「・・・ッ！」

窓が開いていた。

この寒いのに開いてるわけがない。

俺は走った。

１０ｍ、５ｍ、２ｍ、１ｍ

窓をゆっくり覗くと中に黒影が一人、コソコソとしていた。

キリキリキリ・・・カチッ

ガラガラ・・・・

「んぅ・・・？」

私は窓の物音に目を覚ました。

誰か、立っている。

「えっ、だ－」

「静かにしないと殺すぞ」

「ムグゥっ！！？？？」

口を手で抑えられた

「へへへ、黙ればいいんだよ、黙れば」

「むぐー！むぐーっ！」

「黙れっつってんだろ！」

横腹を殴られた。

「ムグッ！」

「よしよし・・・へへ」

「何やってんだゴルァ！」

ビクッ！！！

俺が叫ぶと人物は体をびくつかさせた。

男は手で凛の口を塞いでいる。

「久々に本気出すわ」

俺は右ストレートで人物の顔面を殴った。

「ガッ！」

人物にストレートに入ったが、奴は手に持っていた工具で殴りかかってきた。

「あぶなっ！？」

レンチか何かは俺の肩をかすめた。

「ツッ！！！？」

この間の怪我のところを刺激し、激痛が走った。

人物は俺を蹴り飛ばし、馬乗りで殴り始めた。

「ガッ・・くそっあ！」

「死ね！死ね！死ね！死ね！死ね！」

やばい、意識が飛ぶ。顎に何発入ってんだこれ。

「あああああ！！」

？

目をかすめて開けると凛が椅子で人物に殴りかかっていた。

チャンス

俺はするっと抜けだして後頭部を思い切り殴った。

「痛っ！！」

そのままチョークスリーパーをかけ、気絶させる。

「大丈夫か？凛」

「大丈夫ですッ・・・たすけてくれてありがとう・・・です」

「とりあえず紐、ひもない？」

「ええと、これでいいですか？」

凛が差し出したのは荷造り用の糸だった。

「うん」

俺は人物の手首足首を結び、かぶっていた覆面を剥ぎとった。

「吉山！？」

そこにいたのは吉山純太陸曹長だった。

「強姦未遂及び暴行、住居不法侵入の現行犯で逮捕します」

この駐屯地には第１３０地区警務隊本部が設置されているため、いわゆる憲兵（警務官）に吉山を引き渡した。

「クソがあああっ！俺は吉山陸将補の息子だぞコラアアアアアア！！！！」

「・・・怖かった」

「・・・うん」

俺は自販機の横のベンチに座って凛を慰めていた。

「・・・あの」

「？」

「膝の上、乗ってもいいですか？」

「え、あ・・・いい・・・けど」

ちょこんと凛が座った。

身長１６０ｃｍ、体重４０ｋｇ台と聞いてはいたが軽い。

しかも良い匂いがする。

「・・・ココアおいしいです」

「そうか、よかった」

俺は顔面に氷嚢を当てながら、笑った。

いつまでもこんな幸せが続くといい。

南極の遺産（後書き）

おい坂崎そこかわれ

ホセ・フェルナンド（前書き）

今回は短いですが、一応導入にはなるかと。

一応グロいです

ホセ・フェルナンド

―12月21日　メキシコ　ヌエボラレド―

「ぎ・・・ぎぎ」

「ガアアッ！」

暗い地下室。

不気味な怪音が響く

ギチギチギチ

断裂音が暗い部屋を覆う。

その時、ドアが開き一筋の光が入った

「ケイラー、今日はそれで終わりだ」

「OK，ボス」

「掃除屋を呼んでおく。何か情報は？」

「ノン。ダメ」

「ったく、警官殺しってのも面倒なんだぞ」

「Sorry」

「まぁいい。とりあえず着替えて来い。商談だ」

ーヌエボラレド　バー「クリアッサム」ー

「フェルナンド、ようやく来たか」

「すまないね、チェッカー」

一人のメキシコ人がバーに入ると店員と思しき男が彼に挨拶をし、店の奥に通した。

あちこちで破廉恥な衣装を身に纏ったダンサーが男たちを魅了する。

「ボスがお待ちだ」

「OK」

「お呼びでしたか、セニョールヴォドグラニク」

「ああ、よく来たな。まあ、座ってくれ」

男は応接室の椅子に腰掛けた。

「まぁ、話は簡単だ。麻薬の供給量を増加して欲しい」

「ご注文ですか」

「そうだ。何なら用意できるんだ、フェルナンド」

フェルナンドと呼ばれたバイヤーはスマートフォンを取り出して在庫情報を開いた。

「そうですね・・・ヘロイン、大麻、ケシ。これくらいなら増加でお渡しできますが？」

「それはフェルナンドカルテルの総意か？それとも君自身？」

フェルナンドはクスクスと笑い

「あくまでも僕の意見です。ヴォドグラニクさんは大お得意様ですからね」

「ふん、媚びても何も出さないぞ」

「出してもらうのは使用済みのドル札で結構」

「運び屋はこっちで用意する。受け渡しは」

「いますぐでも」

「よし」

「確かに、ドルですね」

「また頼むところだな」

「深入りしますがこれはどこへ？見たところアメリカじゃなさそうだ」

「ヤポーニャ、ニホンだ」

「ほう、新しいルートでも？」

「それは企業秘密だ。だが日本人は金さえあれば薬を買う。簡単なボロ儲けだ」

「ボス、次のお仕事は？」

「次はアメリカのスパイ野郎の拷問だ」

「うふ、私そういうの好き」

「ケイラー、あんまりくっつくな。ただでさえ馬鹿でかいお前の胸が俺の思考を邪魔する」

「はーい」

一人の爆乳型白人女性とメキシコ人はビルの一室へ向かう。

「フーーーッ・・・・」

「ハァ～イ、グリンゴ（アメリカ人）？」

「・・・いいデカパイだな」

「うふ、ありがとう。でも私の胸を見て昇天した人は数え切れないの」

薄暗い地下室には３０歳くらいの男が足かせ手枷で壁に縛り付けられていた。

「それで？何分コースなんだ？」

「そうねー、どれくらいがいい？」

「できればひと思いがいいな」

「ぺろっと情報を吐いてくれたら9？パラベラムで終わらせてあげるわよ？遺体も郵送するし」

「まあ、お手並を拝見しようか？」

「生きていることを後悔したんじゃない？」

「じ・・・じぃ・・・・」

「なぁに？」

「地獄に・・・落ちろ」

男は腕の皮をそがれ、目を潰され、足の骨をおられていた。

「あらーこれ７８００回目よ？」

ケイラーは男の股間に肘鉄を食らわせ、睾丸を破裂させた。

「あがががっっがっがががが！！？？？」

「もう子作りできないわね♪」

「糞アマ・・・お前・・・・誰に何をしたか・・・」

ケイラーはニコッと笑い、テーブルにあった資料を取った。

「アメリカ陸軍第１特殊作戦部隊Ｄ分遣隊の所属、マイケル・リートハイト１等軍曹」

「・・・完全にバレてるな」

「デルタのお兄さんは二人目かなー、結構レア？」

「・・・けっ」

「何も吐かないなら私の好きにしちゃうけど～？いいの？」

「言いたくない」

「あら、そう、じゃあキリストにでもお祈りしたら？」

「自分は無宗教だ」

「じゃあお母さんにでも祈るのね」

ヅッ・・・ズギュ・・・ギリッギリ

「あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝ぁ!!!!!」

「これを切って～次は首かな～?」

ケイラーは性器を切り取った。

「・・っ・・・っ・・・」

リートハイトはただ痙攣しているだけだった。

「うーん、気絶しちゃいみないんだけど?」

ケイラーは冷水を部下に出させ、ぶっかけた

「アガアアッ!アアアアッ!」

「はーい、つづきいっきーます」

「やめ・・・やめええ!!!」

「じゃあお仲間の場所と任務を教えて?」

「さ・・・さ・・・・サンタイザベルアヴェニュー・・・カミノホテル・・・任務は・・・ホセ・フェルナンドの・・・逮捕」

「ありがと♪じゃあ、このペニスはデルタの基地に郵送するね。あなたは・・・ホテルにおいておくわ」

「・・・え?」

「もちろん首を切り落としてからだけど」

「や、やめやめやめやめれえええええええ

ケイラーはＭ８２Ａ１をピックアップの荷台に固定し、デルタフォースのとっている部屋に乱射した。

「敵の攻撃！！」

「対物ライフルッ！？」

「オーストンがやられた！」

「撤退、撤退！」

デルタがドアを蹴破った瞬間廊下の端からおびただしい数の銃声が響いた。

―１２月２８日　アメリカ合衆国ワシントンＤ．Ｃ―

「対麻薬作戦に参加していたＤボーイズが全滅した？」

「はい大統領。２日前フォートブラッグに隊員の性器が届けられるという事態に」

「ホセ・フェルナンド、だったか」

「フェルナンドカルテルの長です」

「どうにかならんのか。奴の供給量はメキシコから来る１０％なんだろう？」

「Ｄボーイズは使えないのか・・・？」

「現在担当の将軍がＮＧを出しています」

「屈するべきか・・・ええい」

ホセ・フェルナンド（後書き）

次話は坂崎・凛のキャッハウフフ回です。

初めての・・・（前書き）

えろえろ？ノ臭がします。駄文ですので見たくないひとは最後の方まで飛ばしてもいいかもしれません。

初めての・・・

―１２月２５日　愛知県ＡＭ７：００―

「しっかり掴まってろよ？」

「はい」

バイクで高速へ入り、熱海へ行く計画を立てた俺は事前に熱海のホテルに予約をとっていた。

「あの・・・」

「ん？？」

「暖かいです」

ぎゅっと体にしがみついてくる凛。

「・・・凛も暖かい」

高速道路では５時間かかるのでサービスエリアを利用しつつ向かう。

「ぷぁっ・・・」

フルフェイスヘルメットを事前に購入し、凛に渡した。

凛はそのヘルメットを脱いだ。

「はふ・・・」

「どうだ、バイク。前も乗ったけど」

凛はニコッと笑い

「楽しいし暖かいです！」

俺は急に恥ずかしくなった。

「そ、そうか。なにか食べたいものとかあるか？１２時までつかないし」

時刻は９時だ。

「んーっと・・・フランクフルト食べたいです」

「わかった。買ってくる」

俺はフランクフルトを２本買い、戻った。

「あむ・・・はふ・・っ・・・あつ・・・」

フランクフルトを食べる姿を見て男というのは悲しくて、興奮するものだ。

「あー、もう凛お前かわいいすぎるわ！」

言ってしまった。これぞキャラ崩壊。

「へっ・・・？と、突然なんですか？・・・あむっ」

俺は冷静を取り戻しつつ

「いや、ごめん」

「・・・修一もかっこいいよ」

「もうつくー！？」

「あと１０分くらい！」

バイクで高速を降りて数分。

俺と凛はショッピング街に入った。

「温泉の匂いがするねー」

「ああ、温泉街だからな」

ぶらぶらとバイクを引きながら歩くのも邪魔なのでバイクは駐車場へ止めてきた。

「あっ・・・」

「？どうした？」

「あの、浴衣・・・」

凛が見ている先には浴衣があった。

「欲しいのか？」

「えと・・・はい」

「よし、買う」

「えええ！？そ、そんな！？」

凛の慌てふためきは面白かった

ーＰＭ６：００　ホテルー

「はふーっ！疲れたー・・・」

「ずっと歩きっぱだったもんな」

俺たちはさっきチェックインした。

「25日だから混んでるかとおもいきや、観光地はいないもんだな」

「うん」

しばらくすると仲居さんが入ってきて夜食の時刻を聞いてきた。

「いつがいい？」

凛はうーんといい

「7時頃？」

「じゃあそれで」

7時に飯を決定した。

自衛隊もさすがに二日連続で休めないので今日一日泊まって、明日の昼に部隊に戻る予定だ。

「風呂でも入るか？」

「えーと、その・・・大浴場って恥ずかしいと言うか・・・」

「まぁ、わかるが・・・あ、そういえばこのホテルは部屋にも露天がついてるんだ。入ってきたらどうだ？」

俺の提案に凛は了解を示したが

「えっと、修一が先入っていいよ？」

「ん、そうか？悪いじゃあお先」

「ふう・・・２５でふぅはないな」

さっき入っていたメールが腑に落ちない。

－１０分前－

件名：招集するかも

送信者：やべ

公安がくさい人物を発見。年始３日から予定を空けること。

年始３日からか・・・

思えば中央情報隊第２小隊はかなり暗躍している。

韓国への挑発やネオナチの殲滅。

次は何を押し付けられるんだ

「あのー・・・」

「・・・え？」

俺は驚いた。

バスタオルを巻いていることは巻いてあるが、おそらく全裸であろう凛が浴室に入ってきた。

「な、なんではいっ!?」

「えと・・・背中流しましょうか?」

「あ・・・えと、俺は終わったけど・・・なんで?」

「遅かった・・・」

凛は少し悲しげな表情を見せた。

「じゃ、じゃあ俺が洗ってもいいけど・・・?」

「・・・お願いします」

なにこの状況。

「前は自分で洗いますからっ・・・」

「わかってる」

ごしごしと背中を洗う。

小さいんだな、凛。

ショートの髪の毛が時々俺の手に当たる。

「あ、気持ちいい・・・」

「よかった」

「髪もお願いします」

髪の毛は女の子の大事なものだ。それを任せてくれるということはそれくらい信頼してくれているということだ。

幸い、俺は妹の髪の毛を洗っていたので勝手がわかる。

「あ・・・上手ですね」

「ま、まあな・・・」

うーん、さらさら感が尋常じゃないぞ。すっきりさわやか。

「流すぞー、目を閉じてろよ」

「はーい」

お湯で髪についた泡を洗い流す。

俺は湯船に戻った。

「私も入りたいです・・・」

「え、まっ！」

ばさりとタオルが落ち、凛の顔が桜色に染まっていく。

「っー・・・・」

「・・・・（ゴクッ）」

思わず喉が鳴った。変態すぎる。

胸は比較的小さいのだが、無駄のない形で腰もくびれていて筋肉もつきすぎていない引き締まった感じっていうのがわかる。

凛は大事な部分を腕で隠しているが、その姿がさらに妖艶さを増している。

「へん・・・ですか？」

「・・・いや、いいと思う」

凛はゆっくりと湯船に浸かり、俺の股におしりをおいて俺が手を伸ばせば抱きかかえれる形になった。

「・・・」

「・・・」

いかん

ヤバイぞこれは。

凛はゆっくり俺に背中を預けてきた。

「気持ちいいです」

「そ・・・うか」

何分間か無言の時が過ぎ、凛が口を開く。

「あの・・・えと・・・キス・・・」

そう言いながら凛が振り向いた。

「・・・」

重なる唇。

体がお湯のせいだけでなく暑い。

「ん・・・あ・・・ん!?」

俺が舌を凛の口の中へ入れると凛は驚いた様子だったが

「・・・ん・・・む・・・ちゅ・・・」

舌が絡みあう。

「ぷあっ・・・」

「はっ・・・」

凛はゆっくりこっちを向いたまま

「舌なんて卑怯です・・・」

「は・・・は、ごめん」

俺は後ろから凛を抱きしめる

「でも、気持よかったです」

「よかった」

ここまで来ておいてなんだが、そのそういう展開にはならなかった。

風呂を出て（凛が先に）、飯を食って8時ごろに俺はビールを取出して飲んでいた。

「似合うな、浴衣」

先ほど買った浴衣はすごく似合っていた。

「あ、ありがとうございます・・・嬉しいです」

しばらくすると

「・・・吉山陸曹長のお父さんには驚きましたね」

凛が言うのも無理はなかった。

ー強姦未遂事件翌日　ＡＭ７：００守山駐屯地ー

黒のハイヤーが朝早くに基地へ入ってきたのを俺は見た。

基地司令と警務隊の隊長、そして当事者である俺と凛が応接室に呼ばれた。

吉山聡一陸将補は俺達を呼びつけ、一言。

「なぜ息子を警務隊に売った」

「それは、ご子息が私の部下の仲沢凛１等陸士に暴行を働こうとしていたからであります」

「それは君の勘違いだったのではないのか？そう見えただけだった。そこの雌がうちの純太を誑かしたのやもしれんとなぜ考えなかった」

雌・・・

「窓は特殊工具で破られ、ご子息は工具を持っていたのが目に見えました」

「貴様の一存で息子は・・・私には貴様とその雌をこの日本にいられなく出来る権限を持っているのだぞ！」

「吉山陸将補殿、まぁまぁ」

となだめたのは警務隊の磯崎1等陸佐だった。

「ご子息は犯行を認めておりますし、まぁ穏便に」

「・・・いくらなら」

「はい？」

「いくらなら息子を転属できる！」

「・・・・」

これには場にいた全員が絶句した。

「息子さんは警察へ引き渡す予定で－」

「させんぞ1佐。したら貴様の首を飛ばす」

「・・・」

「ここにいる全員に口止め料を払う」

横で凛が震えているのがわかった。

俺は手を握ってやる。

「袖の下はちょっと・・・」

という基地司令の言葉を無視し

「誰も言わなければいいのだ。誰もな」

俺と凛は口止め料は貰わなかったが、口止めを約束させられた。

その後1時間以内に吉山陸曹長は父親に連れられ転属していった。

―現在―

「吉山は俺の後輩なんだが昔から親の力でどんどんひとを引きずり下ろしてた。何人かは転校していた」

「そうだったんですか?」

俺は缶ビールのプルタブを開け、口に注ぎ込む。

「・・・ああ、部活・・・剣道部も同じだったが奴は女を基本的に傷めつけて喜んでいたゲスだった。案の定剣道部を首になった」

「ホント最低な奴・・・」

珍しく語気を荒げる凛。

俺は凛を引き寄せて

「大丈夫、俺はお前を守る」

凛はじたばたして

「ちょっ・・・も、もうっ・・・」

と、しどろもどろのような感じに逃げてゆく。

「そういうとこがかわいいってーの」

俺は凛を追いかけて抱きしめる。

ー翌日ー

「チェックアウトするぞー」

「はーい」

俺と凛はバイクに乗り、駐屯地へと足を進めた。

―１２月２３日　ＰＭ２：００博多港―

「捜査員は第１船倉から第４船倉までの貨物を捜索しろ。十分に警戒してくれ」

「了解しました」

公安警察傘下の捜査部隊が拳銃を手に船内へ突入していく。

「メキシコ人船員は確保しました」

「よーし、ちゃっちゃといくかー」

―２０分後―

「５人のロシア人が武器を所持していたため射殺しました」

「了解。病死ってことにしておく」

「あとメキシコ産純度７０％の覚せい剤が５０ＫＧ。半端じゃないです」

「バイヤーは？」

捜査員の一人が歩いてきてその疑問に問う。

「船長室に居たロシア人が持ってました。バイヤーはメキシコ４大カルテルのフェルナンドカルテルです」

「やはりな。あー、中央情報隊の矢部１佐呼んでくれ」

初めての・・・（後書き）

メキシコへ向かうのか・・・！？

次回も序盤はらぶらぶいちゃいちゃ

マラカスの誘い（前書き）

最初に惚気＋エロ。注意です。

マラカスの誘い

―１２月３１日大晦日　日本愛知県名古屋市守山区守山駐屯地―

Ｆｒｏｍ：凛
件名：お正月なんですけど

えっと・・・両親が見たいって・・・

件名：Ｒｅお正月なんですけど

お、うちの両親も言ってるんだよ。午前午後に分けるか？休みだから午前うちで午後そっちの家で

件名：Ｒｅ２お正月なんですけど

あ、そうしましょう！あ・・・電話しますね♪

俺はかかってきた電話に対応する。

「おう、どした」

「ごーよーんさーんにーいーち・・・あけましておめでとうございます！」

時刻は１２：００。２０１１年１月１日を指している。

「お、おお、よろしく」

「今年一年は楽しみです！修一が彼氏だから！」

「俺もお前がいて楽しみだよ・・・その、なんだ・・・結構真面目な話してもいいか？」

「えっ？はい」

「あー・・・お前と落ち着いたら結婚したい。まだ一ヶ月経ってないけど、俺はそれくらい好きなんだ」

「・・・ひゃっ、けけけけけ結婚ッ！？」

「うん。あー・・・嫌なら仕方ないつーかカッコ悪・・・」

「わ・・・私は大丈夫です」

「そ・・・うか、ありがとう」

「あ、お参り行きましょうよ！」

―1月1日午前7時　一宮市内の大きな神社―

「うわー混んでんなあ」

「そうですねー」

俺と凛は俺の地元の大きな神社に訪れていた。

「はぐれるなよー」

「はーい」

俺はしっかりと凛の手を握った。

「あれ？修一？修一じゃない？」

俺は会ってしまった。

「・・・鏡花」

「へ・・・あっ」

水月鏡花との遭遇だった。

私が見たのは理奈さんが怒気を露わにして怒っていた女性だった。

「あ、この前のコ？あ、新しい彼女？」

握っていた手が冷たくなるのを感じた。

そして小刻みに手が震える。

修一は完全に怯えている。

顔を見ると青くなっている。
精神的に来ている。
「修一・・・？」
私の問いかけにも反応をしない。
「鏡花・・・お前・・・近づくなって・・・」
「あはー、だって君のこともっと”壊したい”もの」
「・・・お前・・・」
「あの、悪いんですけどっ！」
私が思い切り前に出た。
「私と一緒にいるんで！」
「あ、そう。死ぬ？」
私は一瞬で非常な悪寒に襲われた。
「あ・・・え・・・・」
「凛、帰るぞ」

「あの・・・修一・・・・？」

「・・・ごめんな」

「え？」

「俺は・・・アイツが嫌なんだ」

ー９時１５分　坂崎実家ー

「うぃーっす」

「おじゃまします」

「あら、この間の・・・」

「えと、正式に彼女になりました仲沢凛です！」

おふくろになんちゅう事を

「あらー、そうなの？よかったわねー修一」

「それより親戚連中は？」

「今年は1月3日からね。今日は一応お父さんと理奈と健二がいる

けど？」

「全員じゃねーか」

「あと健二の彼女」

「マジか」

「あ、凛ちゃんおひさー！」

「お久しぶりです」

「あ、正式？ねえ正式？兄貴」

「うるせえ馬鹿、てめぇはどうなんだ」

「わ、わたしだって・・・・」

「居ない」

「うるさいなもう！」

「凛はえっと・・・」

「兄貴ひさしぶ・・・あ？彼女？」

ここで健二が出てきた。

「そうだ。お前も連れてきてるんだろ？」

「うん。呼ぶ？」

「後でいいだろ。どうせ面合わせするんだろ？」

「まあ」

凛と俺は居間に入った。

「・・・あれ・・・ナナ？」

そこには七宮竜宮2等陸士が居た。

「あれ？知り合い？」

「知り合いも何も健二、同じ部隊！」

「えーまじか！」

どうやら七宮は健二の彼女らしい。驚くべき偶然。

ここで家長、父親の登場である。

「あー・・・愚息はふたりとも女を連れ込み、愚娘は男の気もなしか」

「うっさい糞オヤジ」

「・・・それで、と。自己紹介をお願いできるかな?」

親父の言葉に凛と七宮が反応する。

「えと、じゃあ私から。仲沢凛です。坂崎修一さんとは同じ部隊で知り合いました。前に一度お会いしましたよね」

「じゃあ次私ですね。七宮竜宮です。私も仲沢さんと同じ部隊で、健二さんとはコンパで知り合いました」

親父はうんうんとうなづき

「成る程・・・。それで、理奈は?」

「うっさい禿げろ」

「・・・もうヤダこの家族」

「それでみんな国防関係なわけだ。ここにいる人間は母さん以外そうだな?陸海空本部全部揃っている」

父の声に確かにという。

「健二って今どこ配属だったか？」

俺の問いに健二は

「機密って言いたいけど今は護衛艦きりしまに配属されてるよ、兄貴。親父は？」

親父は

「今はＦ－１５Ｊ戦闘航空団の地上指揮官だ」

「なるほどね」

俺は理奈に話を振った

「理奈は？何開発してるんだ？」

「うーん、それは流石に言えないけど・・・そろそろ配備されるみたいですよ、私の作ったもの。ちなみに陸自のアイテム」

その答えに少し驚いた。

「へー、俺も使うかもしれないな」

「そうだとおもうよ」

「お邪魔しましたー」

「まだいればいいのに」

「俺これから凛の家も行かないといけないんだよ」

「だからスーツなのね？」

「じゃあおふくろまた今度」

―２０分後　仲沢家実家―

「おかえりー、凛・・・あ、その人が？」

凛のお母さんにまず挨拶をする。

「坂崎修一です。凛さんの上司で・・・その、一応彼氏をやらさせてもらってます」

「かっこいい人つかんだわねー凛」

「お、お母さんッ！？」

凛に似て屈託の無い笑顔の人だ。

「凛の母です。よろしくお願いします」

「こちらこそ」

「お父さんももういるから、入って入って」

凛のお父さんは警察官だと聞いていてすごく怖そうな人を想像していた。

「あ、君がそう？うんよろしく。僕は凛の父親の仲沢純一。よろしくね」

フランクそうな人で一安心。

「坂崎修一です、よろしくお願いします」

「あーうんうん、かしこまらなくていいよ」

そう言いながらお父さんは煙草を灰皿に擦りつけて消す。

「うーんと・・・どっかで合ったことあるよ絶対」

突然だった

「え？いや、“お世話”になったという意味ではないと思いますが・・・」

「あー、仕事関連ではあるけど同じ立場として。思い出した。３年前このへんでちょっとした水害があった時！」

―３年前―

「陸上自衛隊到着しました」

大雨で堤防決壊寸前だった。

俺は当時2等陸士として災害派遣についていった時だった。

「僕は仲沢巡査部長です。向こうの堤防がキレかかっていますから土のうの運搬をお願いします！」

「わかりました！」

俺は指示に従って任務遂行していた。

その時にあった警察官だったのだ。

―現在―

「ああ・・・！」

「あん時はお疲れ様。さて、凛だけど・・・婚約と考えていいかな？」

突然の言葉に俺はこけかけ、凛は飲んでいたお茶を吹き出した。

「ごふっ・・・おとうさんっ！」

「真面目な話、自衛隊をやめさせる気ではいたからね。この間のP

KO活動から」

「自分はPKO活動を2回行いました」

「あ、スラヴィニアとスプラトリーかい？」

「はい」

「なら戦場の怖さがわかってくれているよね」

「自分としても凛を置きたくはありません」

「うん。意見は一致しているね。凛は？」

凛はゆっくり顔を上げて

「私はあと一年やりたい・・・」

お父さんはその声に

「じゃあ、寿除籍じゃなくてこどもが出来たりとかしたらやめてよ？」

「こ、子供ッ！？」

俺もたじろぐ

「あの、さすがに子供は・・・」

「善は急げ、だね。僕は君のことを気に入っているし」

「それは・・・どうも」

「じゃあ婚約！」

「ごめんね、修一。お父さんが・・・」

「いや、俺も結婚したいし」

「・・・そっか♪」

晩御飯と風呂を頂いた俺は凛の部屋に泊まっていた。

「あの・・・私達もう大人だし・・・」

「？」

「その・・・体とかにも興味ある・・・し、さ？」

「俺は構わないけど・・・凛はいいのか？」

「・・・うん」

俺は手に汗を感じた。

「初めて・・・だから」

「うん」

「キスして欲しいかな・・・・？」

俺は自分から口を近づけた。

「んむ・・・」

舌はもう慣れたのか口の中で絡ませる。

俺は上に乗ってキスをしているので空いている手で凛の胸を触った。

「ひゃ・・・」

という声が凛から漏れる

「痛かった？」

と聞くと

「・・・ちょっとびっくりしただけです」

俺は少し力を入れて揉んでみた。

「んむ・・・」

「気持いいか？」

「・・・いいです」

俺は服の上でやっていたので同意を得る。

「服の中に手を入れちゃってもいい？」

「・・・はい。あっ、ブラ・・・取ります」

ぷちんという音がした。

「強くさわらないでください・・・ね？」

服の間から手を入れて胸を触る。

柔らかいし暖かかった。

「ん・・・ちょっと・・・刺激的ですね」

「すこしきつく触るな」

ちょっと力を入れて上下に揺さぶってみる。

「あっ・・・んっ・・・気持ちいいです」

「俺も気持ちいい」

3分くらい触っていると凛が

「修一のも触り・・・たい」

「じゃあ・・・」

俺は上に載っていたのを横に移動した。

「ズボンの上から・・・」

凛の小さな手が俺の股間に触れる。

「かた・・・」

「ごめん・・・なんか恥ずかしいな」

「でも暖かい・・・」

「下・・・触ったりして欲しいです」

「ん・・・」

俺は凛のズボンを少しずらして中に手を入れ、下着の上から触った。

「んくぅっ！・・・修一上手・・・」

「・・・ありがと」

触っていると手の先が湿ってきた。

「・・・濡れてきちゃった・・・」

「可愛いな、ホントお前・・・」

「へ？」

「素直すぎ」

でも俺はなにかこう、まだダメなんじゃないか？という気がしてきた

「凛、その、本番は・・・今日はやめとかないか？」

「え・・・？」

「ゴムだって持ってないし・・・」

「うん・・・」

少し寂しそうだけどほっとした感じだった。

「じゃーね、お父さんお母さん」

「修一くんに迷惑かけるんじゃないぞ、凛」

「わかってます！」

俺と凛は結局あのあと何かしたわけでもなく駐屯地へ戻った。

ー1月2日明朝ー

「おい、坂崎。起きろ」

「ん・・・？」

朝の目覚めを破ったのは富坂1等陸曹だった

「富坂さん・・・？」

「緊急招集だ、すまん起きてくれ」

「・・・はぁ、了解です」

ー3時間後　太平洋上空ー

「とにかくのせられたけど、明らかにこれは民間機じゃあないですよねー」

と、千葉3等陸曹

「アメリカ空軍所属機、C－130Gマリーキャットへようこそ」

突然の声に場に居た第2小隊の隊員が驚く。

「陸軍のサニー・スコッツ中佐です。責任者の方は？」

アメリカ軍女性士官は流暢な日本語を話した。

「私ですが」

真賀山2佐の答えに

「あ、そうですか。では作戦をご説明しろとあなたの上司から言われてますので」

「作戦はメキシコ、ヌエボラレドで行われます。相手はメキシコ麻薬カルテルの一つフェルナンドカルテル。

作戦内容は至ってシンプル。カルテルのおさであるホセ・フェルナンドの逮捕もしくは殺害です」

真賀山2佐は手を上げた。

「はい？」

「なぜアメリカが関わってるんだ？」

「この作戦は日本の中央情報隊と米陸軍第１特殊作戦部隊Ｄ分遣隊、通称デルタフォースとの連携作戦です」

「意思疎通が測れない」

「同時通訳がチームに入ります。そちらは全員英語が堪能だとお聞きしていますし？」

「まぁ、そうだが・・・」

「支援チームは第１６０特殊作戦航空連隊（ナイトストーカーズ）がＭＨ－６０を出します。他にも一応ＡＨ－６リトルバードも」

「ヒュー！ミサイルポッドを積んだアレ？」

と、平城３等陸曹。

「はい、そうです。今作戦はメキシコ陸軍第３機動中隊フォーマスコリードがデルタとあなた方を支援することになっています」

三ツ矢３等陸佐が

「中隊の武装は？」

「はい、ＥＲＣ－９０９０？カノン砲車とＶＣＲ装甲車です。ヘリは我々のナイトストーカーズで足ります」

―1月2日　PM11:00　アメリカニューメキシコ州カートランド空軍基地―

「中央情報隊、第2小隊。真賀山2等陸佐以下6名到着しました」

「デルタのアンドレイ・マッケンジー中佐だ、よろしく頼む」

―基地内　作戦説明室―

「まず敵はすでに我々デルタの精鋭6名を惨殺した。かなりの手練だ」

マッケンジー中佐は淡々と細かく全員に説明を行う。

「この作戦にはSOAR（第160特殊作戦航空連隊）の他、先ほどあったサニー・スコッツ中佐がAC-130SpookyでAWACSの代わりを行う。もしもの場合、Spookyのボフォース40?砲と25?機関砲での航空支援を行う手はずとなっている。105?砲は弾薬すら積んでいない。我々は民間人を殺さん。

敵勢力は主に街全てをカバーしているため、メキシコ軍との連携が肝だ。メキシコ軍はカルテル本部を攻撃する。我々はそこから逃げ出すホセを叩くんだ。

こちら側の兵員内訳はそちらが6名、うちが私は指揮官なので現地

指揮官が別にいる。現地部隊はあわせて7名。メキシコ軍フォーマスコリードは２００名となっている。

君たちは全員ファストロープは可能か？」

真賀山2佐が答える

「いえ、全員は不可能です中佐」

「ならばBルート、君たちはピックアップ3台に分乗してくれ。我々デルタはＭＨ－６０によるファストロープを行う」

－1月3日　ＡＭ２：００　ヌエボラレド市内－

「作戦決行予定はＡＭ２：２０です。お忘れなく。また司令部となるＳｐｏｏｋｙ０１の周波数はチャンネル２で」

「了解」

3台のピックアップは動き始めた。

俺は2号車の助手席に座り、運転席には真賀山2佐が座る。

「先頭車じゃなくていいんですか？」

「ん、まぁいいじゃないか」

『こちらＳｐｏｏｋｙ０１、メキシコ軍が陽動作戦を開始。作戦開始まで１０分』

ピックアップはまとまって路地裏に待機していた。

当たりから砲声と銃声が轟く。

『こちらロダーマン６１（ＭＨ６０）、空域はクリアか？Ｓｐｏｏｋｙ０１』

『空域はクリアです、ロダーマン６１。カルテルよりホセの逃走を確認し次第、作戦を行なってください』

『こちらミートチョッパー１（ＡＨ－６）、俺のバルカンとロケットはいつでもポテトスナックだ』

『了解です。アンダー１、そちらは？』

「こちらアンダー１、配置には付いている」

俺たちのコールサインはアンダー１である。

『作戦決行です。ロダーマン６１、ミートチョッパー１、ミートチ

ョッパー2はエリアシエラデルタへ、アンダー1、アンダー2、アンダー3はアルファフォックストロットへ』

『じゃあ行きますよ真賀山さん！』

1号車の千葉3等陸曹の声で車列は動き出す。

―ミートチョッパー2―

「空域にはまぁ敵はなしと。メキシコ軍も派手にやるな」

「ホーヴァス中尉、見物もいいですが作戦中ですよ」

「あ、すまんなイーガル少尉。さてシステムチェックだ。バルカンの油圧は？」

「OKです」

「ロケットポッドは？」

「問題なし」

PPPPPPPPPPPPPPPP

突如の警報音

「ミサイルアラート！、チャフで回避！」

「まにあわなー」

―ＡＣ－１３０Ｓｐｏｏｋｙ０１－

「ミートチョッパー２ロスト！」

「なんだと！」

「メキシコ軍の攻撃で落ちました！」

ＡＣ－１３０の機内に緊張が走る。

『こちらミートチョッパー１！メキシコ軍の対空砲攻撃を受けている！ＩＦＦ（敵味方識別）はどうなってるんだっ！』

「こちらＳｐｏｏｋｙ０１です、状況を確認しますのでー」

「ミートチョッパー１レーダーロスト！」

「ええっ！？」

―メキシコ軍第３機動中隊フォーマスコリードー

『こちらソーチェル、リトルバード撃破』

「あとはブラックホークとピックアップだ」

『了解』

フォーマスコリードの中隊長マルベガ・ユーティリティはフェルナンドカルテル本部に居た。

「この気にうちに来てくれると助かるんだけど？」

「どうせ国賊で追われますからお願いします」

「よしよし」

ホセ・フェルナンドは巧みに彼を買収していた。

「私の部隊は全員あなたの配下です」

―アンダー１―

「くそ、まだついてくる！平城さん追っ払ってよ！」

「やってるわ馬鹿！」

ピックアップ助手席から身を乗り出して平城はＰＰ２０００（ロシア製最新式ＰＤＷ）を追いかけてくるハンヴィーに撃った。

「防弾かったいなぁぁぁあああ！」

「これ使って！」

千葉はデザートイーグルをダッシュボードから出した。

「ありがとっ！」

平城は車内にＰＰ２０００を投げ入れてデザートイーグルに持ち替えた。

その巨大な弾丸はハンヴィーの防弾ガラスを貫通するが、致命傷ではない。

―アンダー３―

「全員バラバラだっ！」

「文句いわず飛ばせ！」

富坂と三ツ矢も追われていた。

装甲車に。

「ＲＰＧ－７もないのに装甲車なんか壊せるかって！」

「足止めしてみるから飛ばせ！」

三ツ矢はケースからＭ４Ａ１とＭ２０３を取り出して取り付け、サンルーフを開けて銃を構えた。

「当たれ！」

ＰＯＷ！という音でグレネード弾がＶＣＲ装甲車に命中する。

「効果なし！」

―アンダー２―

「がしゃがしゃ撃ってー」

「軽ッ！やばいんですけど！」

俺は真賀山２佐の運転で逃げていた。

サンルーフを開け、Ｍ２４０のバイポッドを開いて天井に取り付け、後ろから迫るハンヴィーに撃つ。

「当たれ当たれ！」

―ロダーマン６１―

「ドアガンナーは制圧射撃だ！誰もよらせるな！」

ロダーマン６１はＳＡＭ射撃領空外かつ高射砲も届かない低空を飛行していた。小銃による攻撃に対応するためにドアガンは必死だった

「メキシカンを吹きとばせ！」

―ＡＣ―１３０Ｓｐｏｏｋｙ０１―

「こちらＳｐｏｏｋｙ０１です」

『こちらアンダー３！装甲車に２５?ぶち込んでくれ！』

「了解しました」

「火器管制員、２５?砲による支援攻撃を開始せよ。ターゲットはアンダー３後方のＶＣＲ装甲車」

『Ｃｏｐｙ』

管制員はステックを動かして照準を合わせた。

「Ｆｉｒｅ」

天空からの攻撃はＶＣＲ装甲車を砕いた。

『ＶＣＲ大破しました』

「わかった」

カルテル本部に設営された作戦室でマルベガは指示を下していた。

「ＡＣ－１３０か、厄介な」

「ＡＣ－１３０？」

ホセ・フェルナンドは米軍の構成は知らなかった。

「アメリカの攻撃機ですよ、ボースっ」

ケイラー・レブリアンズは自慢の胸を揺らしつつ、説明をしながら入ってきた。

「強いのか？」

「このビル一撃で吹き飛びます」

「メキシコ空軍に援護求めたほうがいいか？」

「できるなら」

―ＡＣ―１３０Ｓｐｏｏｋｙ０１―

「掃射完了」

『こちらアンダー３！ありがとう！』

「作戦継続に不備が出始めています。無線には耳を傾けてください」

『こちらニューメキシコ州カートランド空軍基地ＩＫＲ、Ｓｐｏｏｋｙ０１応答せよ。Ｓｐｏｏｋｙ０１応答せよ』

「こちらＳｐｏｏｋｙ０１のサニー・スコッツ中佐です」

『こちらはカートランド空軍基地のダニー・ベイ大尉です。現在そちらへメキシコ空軍所属のＦ―５戦闘機が４機、ミサイル装備で向かっています。これらはメキシコ空軍の飛行計画にないもので、カルテル側に寝返った勢力とみられます。当基地から迎撃機のＦ―２２が向かいましたが、間に合いません。全速力での空域離脱を進言します』

「了解しました。Ｆ―５はあとどの程度でこの空域に侵入すると思われますか？」

『およそ３０分です』

「わかりました。迎撃機は？」

『およそ３５分です』

「迎撃機到着までの間、この空域を離れます」

『了解しました』

『こちらはＳｐｏｏｋｙ０１のサニー・スコッツです。敵戦闘機出現のため、Ｓｐｏｏｋｙ０１は一時空域を離脱します』

―ロダーマン６１―

「こちらロダーマン６１、一時撤退するか？Ｓｐｏｏｋｙ０１」

『待機してください』

「了解」

「俺達も暇じゃないんだがな」

「そうは言っても作戦だしなー」

後部座席に座っていたのはリチャード・ヴェルディーク1等軍曹とエスター・ロカヴェニク2等軍曹、シュトルム・マクスタイン中尉、ソーズ・ドリフィ大尉の4名。

他の3名はミートチョッパーに分乗していた。

リチャード・ヴェルディークはスラヴィニア動乱の際に功績が認められ、入隊を果たしていた。

「どーすんの」

アンダー隊は無事合流できていた。

ピックアップは地下駐車場へ逃げ込み、6人は作戦会議を行った。

「メキシコ軍が情報全部リークしてやがった。作戦は終わってるわ」

「撤収命令出てませんよ？」

真賀山2佐の情けない言葉に三ツ矢3佐が口撃。

「ロダーマン61と連絡は？」

と、富坂1等陸曹。

「とれる。坂崎、やってみてくれ」

「了解」

俺は無線機をいじり、連絡を取った

「こちらアンダーチーム、ロダーマン６１聞こえるか？」

『こちらロダーマン６１。アンダー、どこだ？』

「現在市内の地下駐車場に隠れてる」

『了解』

「作戦は継続なのか？」

『ＡＣ－１３０が帰ってくるまでまたないといけないんだ』

「了解」

『ところでウチの部下がそっちの隊員と話したがってるんだが？』

「？」

『Ｓｅｒｇｅｎｔ坂崎は？』

「私です」

『よし・・・』

『無線変わった。元レンジャーのリチャードだ！覚えてるか？』

「え、あ、あの？」

『そう。日本語うまいだろ？』

「どうしたんだ？」

『お礼をな。あん時は助かった』

「いや」

『Ｓｐｏｏｋｙ０１はあと少しで戻る。がんばろう』

―メキシコ空軍基地―

『チワワ１から全機、我々の目標は輸送機改造型の爆撃機だ。全機徹底破壊で行くぞ。ＤｏｙｏｕＣｏｐｙ？』

『Ｃｏｐｙ！』

Ｆ―５戦闘機隊『チワワ隊』はフルスロットルで戦闘空域に向かった。

―カートランド基地―

「ターナー1からコントロール」

『こちらコントロール』

「離陸許可求む」

『ターナー隊全機出撃を許可する』

「Ｒｏｇｅｒ」

Ｆ－２２戦闘機隊『ターナー隊』はこのメキシコ作戦のためネリス空軍基地より運ばれており、隊長機にはイラク帰りの「サラ・ブライト中佐」が乗っていた。

「ターナー1から全機、離陸を許可」

『Ｒｏｇｅｒ』

Ｆ－２２が5機、離陸する。

－ＡＣ－１３０離脱後3分－

『ブライトから全機、広域レーダーに敵機を捉えたわ。メキシコ政府からは許可をもらってるからガンガン落としても構わない』

『了解中佐』

Ｆ－２２はＦ－５のレーダー範囲外からＡＩＭ１２０ＡＭＲＡＡＭを発射した。

『ＦＯＸ３！』

『ミサイル警報？レーダーに敵機なんか映ってないぞ。誤報だ』

チワワ隊はレーダー範囲外からの遠距離捕捉攻撃を信じなかった。

『アメリカ空軍のＡＭＲＡＡＭかもしれません。回避行動を』

『そうだな』

Ｆ－５はＡＭＲＡＡＭが至近距離にはいってからフレアを射出した。

『え、つ、ついてく－』

ＡＭＲＡＡＭの対フレアシステムの前に旧型化したＦ－５は防衛手段を持たなかった。

『中佐、４機落としました。あと１機です』

『全機ＦＯＸ３』

『Ｒｏｇｅｒ』

５機のＦ－２２から放たれたＡＩＭ１２０にＦ－５は為す術なかった。

『こちらターナー１、Ｓｐｏｏｋｙ０１空域はクリアよ』

『こちらＳｐｏｏｋｙ０１のサニー・スコッツ中佐です。ありがとうございます』

『いいえ。ところでだけど私達”偶然”ＧＢＵ－３２ＪＤＡＭ（誘導装置付き投下爆弾）持ってきてるのだけれど、支援は必要かしら？』

『はい。現地部隊と直接連絡を』

『こちらＳｐｏｏｋｙ０１です。ロダーマン６１、応答を』

「こちらロダーマン６１。遅いぞ姉ちゃん」

『すいません。Ｆ－２２部隊が爆撃支援を行うと提案しています』

「助かる。ＪＤＡＭなら位置だけ教えりゃいいよな？」

『はい』

「じゃあメキシコ陸軍が集まってるカルテル本部付近を爆撃してくれ。さっき飛んだんだが民間人も居ないし広い道路だ」

『では詳しくはＦ－２２と交信を』

「Ｒｏｇｅｒ」

数分の間があり、ナイトストーカーズに連絡が入る。

『こちらターナー１のサラ・ブライトです』

「こちらロダーマン６１のエンリケ中佐だぁ、よろしく」

『爆撃位置は先程のポイントで？』

「頼む」

『了解』

Ｆ－２２は高空で侵入した。

『爆撃コースに侵入。装甲車部隊発見』

『対空砲トレーラーもあるな』

「ターナー１から全機。通りのみを爆撃せよ」

『了解中佐。投下！』

爆弾はスマートボムでカルテルの中を怯えさせるには十分だった。

「戦闘機が空爆！部隊の７割が連絡を断ちました！」

「なにぃい！？」

「我方の隊の８割が損失、地対空ミサイルと対空砲オフラインです。自動追尾ＣＩＷＣも作動しません！」

『こちらＳｐｏｏｋｙ０１、通りは爆撃されました。カルテル本部へのバルカン砲攻撃を開始します』

２５ｍｍによる制圧射撃が開始された。

ビルの窓への攻撃である。

２５？弾は窓を貫通し、ビルを破壊する。

「こちらロダーマン６１、カルテル屋上から突撃をかける。アンダーチームは出てくる積み荷を拾ってくれ、オーバー」

『こちらアンダー、了解した』

ＭＨ－６０ＢＬＡＣＫＨＯＷＫは軽快なスピードでカルテルの屋上へホバリングした。

「デルタボーイ、ＧＯＧＯ！」

デルタ４名はロープを滑り降りてビルへ突入した。

ビルは４階建て、地下なしのもので規模も小さめ。

メキシコ軍司令部は２Ｆに設けられており、デルタは４Ｆから制圧をかけていく。

『デルタ４Ｆ制圧。３Ｆへ移動する。アンダーチームは手はず通り裏口に車を回せ』

「聞いたな？行くぞ」

ピックアップ３台は急発進した。

「リック（リチャード）、蹴破れ」

「了解」

ドリフィ大尉の指示で俺は手に持っていたＭ４Ａ１を片手で持って軽い金属でできた扉を蹴破る。

俺は蹴ったと同時に壁から離れ、エス（エスター）とマクスタイン中尉に後を任せる。

エスは故郷から持ってきたレミントンＭ８７０（木製）をぶっ放し、中尉は軍支給のＭ４Ａ１を使って制圧をする。

「クリア」

「オールグリーン」

俺は大尉の後について件の２Ｆ突入を行う。

「敵は待ち構えているはずだ。シュッツ（マクスタイン中尉）、ランチャーでぶち破れ」

「弾の種類は？」

「閃光弾だ」

マクスタイン中尉はアンダーバレルに設置されているＭ２０３擲弾筒、俗に言うグレネードランチャーの砲身をスライドさせ、閃光弾を詰める。

「発射」

トリガーを引き、閃光弾がドアを突き破って中へ転がる。

「隠れろ！」

全員が壁に逃げ込む。

パンッ！という高い音と耳障りな金属音、キーンと耳鳴りがする。

マグネシウムの臭いが入り交じる。

「ＧＯＧＯＧＯ」

俺たちは司令部へ突入する。

ＥＯｔｅｃｈホログラフィックサイト越しに敵を見つけ、撃つ。

僅かな反動がメキシコ兵の命を消す。

裏切り者め。

「エリアクリア。フォーマスコリードのマルベガ・ユーティリティ発見。死亡した。Ｓｐｏｏｋｙ０１、フォーマスコリード殲滅を確認」

『了解、デルタ。引き続き１Ｆの捜索を行ってください』

「大尉、見てください」

「なんだシュッツ」

中尉はマルベガ・ユーティリティの遺体の横で何かをしていた。

「コイツは俺たちが殺したんじゃない」

中尉が指をさしたのはマルベガの首筋だ。

「ナイフだ。しかも大きな、ククリみたいな」

「鋭利な刃物だな」

スパーっときれいに線が入り、血は出ていない。返り血を浴びない位置を切ったんだろう。

「まるで魚でも下ろしたみたいだぞ」

中尉の言葉を遮り、大尉は

「首実検はいい、いくぞ。エス、アンダーにねずみが家を出るといえ」

「Ｒｏｇｅｒ」

『こちらデルタ、敵はそっちへ向かっている。オーバー』

「こちらアンダー了解」

俺はＭ２４０の弾薬を確認し、時を待った。

傍らには自衛用のＵＺＩがおいてある。

カルテルのビルの裏口は搬入用のシャッターが４つあり、出口はそこだけだった。

表口はＳｐｏｏｋｙ０１の警戒下にある。

自動シャッターがガラガラという音を立てる。

「Ｔｉｒｅ ａ ｌａ ｂａｓｕｒａ ｔｏｄａｓ ｔｕｓ ａｒｍａｓ！（全員武器を捨てろ）」

出てきたところを真賀山２佐がスピーカーでそう叫んだ。

敵は５人。

うち３人は防弾装具をしているＰＭＣのような風体で、残り二人は異様だった。

一人はビジネススーツにアタッシェケース、日に焼けた肌をしていてちょび髭。メキシコ人そのものだったが今から商談にでも行くような格好だ。

もう一人は女。身長１６０。胸はデカすぎて足元が見えないレベルだ。

だが手には巨大なククリナイフが握られていて、もう片手にはＧＬＯＣＫが握られている。

「Ｔｉｒｅ　ａ　ｌａ　ｂａｓｕｒａ　ｔｏｄａｓ　ｔｕｓ　ａｒｍａｓ！」

問いかけに応じない。

敵は撃ってきた。

「うちかえせ！」

俺はピックアップの荷台からＭ２４０を撃った。

ＰＭＣのような風体をしたやつを片付けることにした。

３人はてんでド素人で、俺の掃射にすぐ倒れた。

だが女は違った。

女はなんと隣りのピックアップの荷台に座ってライフルを撃っていた千葉３等陸曹を押さえ込んでいたのだ。

「糞アマ！離れぇぇぁ！」

ククリは今にも突き刺さりそうだった。

「千葉ァ！」

俺は気づくと走り出していた。

俺の右手のストレートは女が受け止めれるわけもないはずだったのに。

女はそれをナイフで受け止めた。

刃の方ではなく、刀身だったのが幸いだったがククリは手を離れて壁へ突き刺さった。

「Ｆａｃｋ！」

女は感情を露わに俺に掴みかかった。

俺は肘鉄を顔に食らわせ、足蹴りで身を転ばせる。

女はすぐに立て直し、俺を車から引きずり下ろした。

ギリギリギリと喉を絞めつけられ、脳に酸素がゆかなくなってきた。

俺はとっさに目の前にある球体に手を伸ばした。

「ひゃっ！？」

可愛い声だすなコイツ。

俺は胸をわしっと握り、横へ突き飛ばした。

「オーケーオーケー、動くな。Ｄｏｎ'ｔＭｏｖｅ。ＹｏｕＵｎｄｅｒｓｔａｎｄ?」

女は突然借りてきた猫のようになってしまい、英語でブツブツ言い始めた。

［ええっ、なん・・・なん・・・］

［どうした?］

俺の英語での問いかけに女は

［私はあなたに従います］

［え?］

どういう展開だ。

［私の胸を触ったのがあなたが二人目です。だから従います］

［・・・好きにしてくれればいいよ］

すると女はグロックをコッキングし、自分の仕えていた相手ホセ・フェルナンドに近づいた。

［どうした、ケイラー］

［ボス、私あなたが嫌いです］

［・・・俺を殺したらどうなるかわからないのか？］

［死ぬだけです］

バンッ

「こちらアンダー、捕虜１名。ターゲット死亡。繰り返す、ターゲット死亡」

『こちらＳｐｏｏｋｙ０１、デルタチームと合流後、ロダーマン６１で離脱してください』

「了解」

フェルナンドカルテルは頭目の死亡によって瓦解した。

麻薬ルートも地元警察によって発見され、ロシアマフィアが摘発された。

―２０１１年１月１０日　アフリカ　ソマリア・モガディシオ―

「刻一刻と状況は変わりつつあるんだ」

「わかってます」

「だったら早く我々と手を組んで・・・」

「金は？」

「ここにある」

男二人はモガディシオの中心部のバーのＶＩＰルームで密談をしていた。

「まさかソマリランド・シリングじゃないだろうな？」

「馬鹿な。我々はアレを政府とは認めない。それより戦闘機の方は？パイロットもあわせて」

「手はず通り、元ＫＧＢのボミトゥフが整えたし元ＵＳＡＦのアーケードも用意してくれた」

「陸戦兵器もボミトゥフがやると聞いていたが？」

「ああ、ボミトゥフが揃えた。銃器はいいだろう？」

「自前がある」

男たちの密談に花が咲く中、バーが揺れた。

「アル・シャバブのバカどもだ。ＡＵ軍がすぐに鎮圧する」

「お前たちは大丈夫なのか？」

「我々はコネクションが深い。問題はない」

「そうか」

相槌を打って一人の男が席を立った。

「もう、いくのか？」

「あまり長居するとバレる」

「それもそうだな。そういえばリビアはどうなってる？」

「着々と用意が進んでる。横流し武器を受け取れると思う。どちらにせよ来年からの仕事だ」

「その前に始末するんだろう？」

「ああ、もちろん。じゃまになる」

もう一人の男は店から立ち去る男に手を振り

「それじゃあミスター矢部、我々の利益のために」

国際連合安全保障理事会決議１９７３　ＵＮＳＣＲ１９７３（前書き）

※エロ注意※

国際連合安全保障理事会決議１９７３　ＵＮＳＣＲ１９７３

―１月２０日　愛知県名古屋市守山区守山駐屯地―

「え、誕生日？」

「うん」

俺は８９式小銃の分解整備をしているときにその話を聞いた。

「いつ？」

「２月の１０日だよ」

なんと凛の誕生日は２月１０日らしい。

「何か欲しいものは？」

俺が油を指していると凛は

「うーん、愛？」

俺は思わず油を注ぎ過ぎた。

「うわっ・・・なんだって？」

「だーかーらー、最近ふたりきりになれないしー・・・」

「よしよし。じゃあその日は有給とろうなー」

ー1月22日ソマリア東部ー

「傭兵部隊の集積終了しました」

「明細は？」

「はい。東欧の兵隊がほとんどで、ロシア語で問題ないかと。一部フランスとアメリカ、アフリカ系が居ますが」

「東欧の明細を見せて」

女、アリーナ・ナビトフスカヤは元ＧＲＵの現地作戦指導員であり、経験が優れている中年女性だ。

「ロシア連邦より５０人。ちらっと見ただけで４０後半と３０が多いわね。ソ連崩壊の異物達。ウクライナからもすこし。スラヴィニアも来ているわね。パイロットが多いから全員雇用して」

「はっ」

「フランスとアメリカーナはあわせて１０人。アフリカ系は信用ならないわ。切って」

「はっ」

ソマリア東部の街、かつてアメリカ軍が支援していた街でもあるの

だが長年の内戦でゴーストタウン化していたのだ。

現在、ひとつの組織が統治下においている。

「武器類はいいかしら？」

「ええ、ＡＫ－７４Ｍが人数分近くあります。あとはＲＰＧ－７とＲＰＫ－７４が少し」

「兵器は？」

「今回は使用目的ではありませんので調達はテクニカルにとどまってます」

「ありがとう、同志ウラディミル」

アリーナは軍靴をカツカツと鳴らしてコンクリートの建物を上がっていった。

元々はホテルとして栄えていた施設だ。

「中佐、中佐ではないですか？」

「？」

アリーナはリクルートルームという傭兵の登録所を横切ったときに呼び止められた。

「お忘れですか？スペツナヅ第３ヴォーク（狼）分隊のころ一緒に

いさせてもらったグルーニン・ジェシュトノフであります」

アリーナはその名前に聞き覚えがあった。

「ジェシュトノフ中尉・・・？」

「そうであります」

ジェシュトノフは綺麗な敬礼をした。

「変わった・・・わね？」

アリーナはジェシュトノフの顔についた大きな傷を見ていった。

「ああ、これはちょっとグルジアでヘマを・・・」

アリーナは彼と１０年前、チェチェン紛争時によく作戦を遂行していた。

「中佐殿もここへ？」

「いいやグルーニン。私が責任者だ」

「なるほど・・・」

「それより他に分隊のものは居ないのか？」

「中佐がやめたあと、ヴォーク分隊はチェチェン紛争で壊滅しました。生きていたのは私とドラガディ２等軍曹だけです」

アリーナはかつての同胞たちの末路を知らなかった。

「そうか・・・」

「お気を落とさず。ドラガディ、あれは私の妻です」

「そんな関係に？」

「お恥ずかしい限りで。それよりアフガンの英雄、ドミトリー・パブチェンコ中佐の噂は聞きましたか？」

「いや、なにか？」

「彼は現在ＰＭＣに入社しているそうですよ。アメリカ資本の」

「雇えるのか」

「いえ、彼はソビエトに見放された人物ですから」

「なら有益ではないな」

「しかしアフガン派兵の兵士たちは多いようですね」

「ああ、かなり。お前には期待しているぞ」

「ありがとうございます」

アリーナは懐かしの戦友に敬礼をし、階段を上がった。

「お呼びですかウスリーノフ同志」

「同志アリーナ、仕事の遅い女は好かん」

ウスリーノフ・シュタイコビッチはＫＧＢでも作戦室の出で、現地指揮官であるアリーナとは犬猿の仲だった。

「は、以前率いた部下にあったものですから」

「グルジアで名誉負傷勲章を授与したグルーニン・ジェシュトノフ少佐か。ふん、負け犬に用などない。」

「・・・」

「中佐、私は君の恨む上層部にいた事は認める、しかし統率を優先したまえ」

「そんなつもりは」

「まぁ、いい。それよりやっと兵器は目処が付いた。矢部のコネクションは尊敬する」

「何を？」

ウスリーノフは印刷したファイルをアリーナに投げつけた。

「Ｍｉ－２４Ｄ、Ｍｉ－８、Ｍｉ－２８、ＵＨ－１、Ｔ－７２、Ｔ－６２、Ｍｉｇ－２１にＭｉｇ－２３、Ｍｉｇ－２９、Ｓｕ－２５・・・アメリカのＦ－１６まで・・・よく集めましたね」

「艦艇は流石に出来なかった」

「納入は？」

「来年だ。その頃にはＳｕ－２４も手に入る」

「アラブからの支援は膨大ですね」

「全くだ。パイプライン確保という名目で集めたが・・・ロシア連邦の国家予算を超えるんじゃないのか」

－２月１０日　凛の誕生日－

「ごめんな、夜だけで」

「いえ、別に平気です」

１０日朝、俺は有給の受付を却下されてしまった。

「なんでダメなんですか？」

「お前には有給を出さんよう言われちまってなー」

矢部のしわざだった。
その書類には矢部の押印があったのだ。

俺たちは夜に外泊届を出し、凛たっての希望でレストランへ行った。
そしてゲームセンターだ。

「修一、これできる？」

凛が指さしたのはＵＦＯキャッチャーだった。
中には可愛いクマが入っている。

「高校生時代にやったきりかなー」

とは言いつつ、俺はゲーセン通い・・・これは水月鏡華のストレスによるものだったが、とにかくゲーセン通いをした３ヶ月間があった。

当時俺の中で主流だったのは射撃系の筐体で、タイムクライシスなんかがそれに当たる。

それのほかには当時見ていたアニメ、ゲームの景品が入ったＵＦＯキャッチャーをやった。

当時はそれなりに、割りに合うくらい景品を取って売ったりしていた。

俺は１００円を筐体に入れ、昔の感を取り戻すことに集中した。

さすがに1回目では無理だった。

「あー・・・」

凛の顔が心に刺さる。

次は取る。

俺はもう１００円をぶち込み、ボタンを操作した。

「すごい・・・ありがと」

「気にすんな」

俺は凛の頭に手をやって撫でた。

「外泊ってどうするの?」

「ん・・・ホテルに行くとか?」

「じゃ・・・・あそこでいい」

凛の指差す先は俗にいうラブホテル。

「あー・・・いいのか?あそこで」

「うん」

「休憩ですか?お泊りですか?」

「泊まりで」

「　わかりました」

部屋に入り、ベッドに腰掛ける。

「あー、ほい誕生日プレゼント」

俺はジュエリーケースを渡した。

「これ・・・?」

「たいしたもんじゃないけどさ」

私はゆっくり箱を開けた。

入っていたのは指輪だった。

「え、これ・・・」

修一は照れくさそうに頬をかき

「婚約指輪みたいなもんだと思ってほしいな。給与3ヶ月分じゃないけど」

「ありがと・・・ぅ」

私は気づくと涙が出ていた。

「え、あ、泣かせたか?」

「ううん、嬉しくて」

「でもいつ出来るかはわからない。とりあえず、落ち着いてからな?」

「・・・うん」

「横になって」

「？」

「いいから」

凛は俺をベッドに寝かせた。

「よいしょっと」

背中に凛が乗ると、曲がった背骨がゴリゴリと骨格にハマる。

「軽いな」

「重くなくてよかった」

凛はほっとした感じでそういうと

「マッサージしてあげるね」

「ん、サンキュ」

凛は指でツボを一つづつ刺激していく。

「っつ・・・上手いな。どうしてだ？」

「肩もみくらいするから・・・気持ちいい？」

「ああ、すごく・・・涎垂らして寝たら起こしてくれ」

「わかった・・・」

小さな指はぎゅっぎゅっと俺の方を抑える。

体から余分な息が漏れる。

「ふぅ・・・・」

「ガチガチに凝ってるよ・・・私に言えない仕事って大変なの？」

「まぁ、結構・・・」

「生傷増やして帰ってくるから・・・」

「心配させてごめんな」

「いいの。生きててくれればそれで」

ぎゅっぎゅっ、と俺の体は押されて解放される。

「あの・・・さ？」

「ん？」

凛は俺から降りてなにか言いたげにもじもじしている。

「キスしたい・・・・」

俺は凛に口付けをする。

暖かい感触がつたう。

「んむ・・・っ」

舌を口の中でからませ、手を絡ませて凛をゆっくりベッドに押し倒す。

「ぷあっ・・・」

凛の服の上から胸を軽く押すように触る。

凛は口から艶かしい息を漏らす。

「痛かったら言ってくれ」

「だいじょ・・・ぶ」

俺は胸を触りながらキスをする。

3分くらい続けて、俺は凛の服の内側に手を入れた。

「やさしく・・・」

「わかってる」

「ん・・・」

下着の中へ手を滑り込ませ、胸を触る。

「はぅ・・・」

俺は胸から手を離し、下へ動かした。

「触ってもいい?」

「・・・」

凛はただコクンと頷いた。

俺は慎重に下着の上からさわり、順に激しくしていった。

「あっ・・・ッ・・・・」

「痛いか?」

「・・・ううん」

俺は下着の中へ手を入れてもいいかと聞き、凛がうなづくのを待った。

「・・・・お願いします」

消え入るような声だったが、しかと聞いた。

俺は下着の中へ手を入れ、穴へ指を滑り込ませた。

「ツッ・・・やば・・・」

「ゆっくりのほうがいいか?」

「今のままでいい・・・」

しばらくすると粘性が出てきたので俺は聞いた

「凛、聞くけど・・・俺が初めてでいいのか?」

凛は息を整えて

「・・・修一がいい」

俺はコンドームを着けた。

そして、凛の膣が濡れてるのを確認した。

「痛かったらすぐ言うんだぞ?すぐやめるから」

「うん・・・」

凛の手を握る。

かすかに震えている。

凛は仰向けの状態で、俺は足側に立っている。

体制を落とし、凛の手を離して腰を持った。

ゆっくりと自分の性器を凛の膣へ入れていく。

まだ破瓜はしていない。

でない女性もいるというが、慎重にやるのに越したことはない。

凛の顔は少し意外そうな顔をしていた。

「あんまり・・・・痛くないよ?」

「まだあんまり入ってないからな・・・痛くなったら言えよ?」

「うん」

中頃まで来た所で凛が少し顔を歪めた。

「いっ・・・」

「やめるか?」

「・・・少し痛かっただけ、大丈夫・・・」

確実に殆ど入った状態で、凛は痛みを訴えない。

「はいったけど・・・大丈夫か?無理してないか?」

「平気・・・」

「じゃあ、少し動かすぞ?」

「うん」

少し腰を動かして、ピストン運動を行う。

「へいき、好きに動かしても大丈夫だと思う・・・血が出るかと思ったけどそんなにでないや・・・」

俺の性器の根元には血のすじが1本だけ垂れている。

「痛かったらすぐ言うんだぞ?」

「わかってるよ」

腰の動きもいい感じになってきたようで、凛は動きに順応した気がした。

「大丈夫そう・・・だな、よかった」

「ありがと、修一」

「?」

「これで私、修一の女だね」

「元々だよ」

2分くらい動かしていると、腰を持つ手が少し震えた。

「？」

凛は目をトロンとさせていた。

「どうした？」

「ん・・・いっちゃったかも・・・」

それから5分ほどは動いていただろうか。

さすがに限界だった。

溜まってもいたし、女性経験なんて何年も前だし思い出したくない。

「凛、出そうだけど・・・」

「え、あ、うんっ」

「ゴムしてるけど怖いか？」

「・・・ちょっと」

「分かった」

俺は膣からゆっくりと性器を引き出し、ゴムを外して自分で出すようにした。

「私手伝うことない？」

ゆっくりと凛が起き上がる。

「ん・・・触る」

凛が俺の性器に触れると、年甲斐もなく興奮する。

「硬くて暖かい・・・」

「あんましジロジロ見られると恥ずかしいな」

「どうやればいいの？」

俺は動きでそれを教え、凛はその動きを行う。

「いく・・・ごめ・・・」

腰が少しふるえる。

精液は凛の手にかかってしまった。

「あ、ごめん」

俺はテイッシュでそれを拭きとる。

凛はしばらくすると我に返り、口を開けた。

「気持よかった・・・です」

「こちらこそ」

俺と凛は何だか、学生のようなセックスをしたような気がしたが、子供をつくるような気はまだないし膣内射精は馬鹿じゃない限りできない。

私と修一は初めてのエッチの後オフロに入ってすぐ寝てしまった。

私は朝の5時頃に目が覚めた。

横では修一が布団にくるまって寝息を立てている。

ふたりとも服は来て寝ている。

私は右手の人差指で修一の頬をつんつんと触り、反応を楽しんだ。

―3月19日　リビアミスラター

坂崎修一はAK74Mの弾倉を確認した。

「アメリカ軍の着弾確認に引きずり出されるとは思わなかった」

真賀山2佐のボヤキにデルタフォースのマット・クレイズ軍曹が反応する。

「俺も嫌だよ。まったく」

俺たちはオッデセイの夜明け作戦に参加していた。

後学のため、という口実だった。

作戦に投入されたのは第2小隊とアメリカ陸軍デルタフォース第1分隊。

リチャード・ヴェルディークとマット・クレイズ、トニー・ガーフィールド中尉。

今回は日本人のほうが多くなっていた。

乗っているのはリビア空軍籍のＭｉ－２４で、コードはもちろん偽装していた。

「もともと俺たちだけでいく予定だったのに」

千葉3等陸曹の声にしわがれた声で答えるのはトニー・ガーフィールド中尉。

「俺達だって貴様のようなひよことは行動したくはない」

デルタはミスラタ郊外に落ちたミラージュ戦闘機の救出任務を持っていた。

途中で彼らを降ろし、第2小隊はそのままミスラタ郊外の空軍基地付近に着陸した。

「敵はなし。炎が上がってるだけだな」

「基地内部も見ろとのことですな」

「うん、いこう」

富坂1等陸曹と真賀山2佐の短い会話は終わった。

基地内部には炎上しているＭｉｇ－２３が4機、壊れたＳＡＭトレーラーがくすぶっているだけだった。

黒焦げの死体も多数見られたが、敵は居なかった。

「撤収したあとかもしれ－」

1発の銃声がした。

そして横にいた千葉３等陸曹ががくりと倒れた。

「え」

「狙撃、狙撃ー」

突然眩しくなった。

そして羽音。

上空には黒塗りのＭｉ－８ヘリが４機もいた。

「かこまれて・・・」

機銃掃射が地上を襲う。

「ああがが！」

銃火に平城３等陸曹が倒れる。

「平城！」

富坂１等陸曹が助けに走りだした時、彼も倒れた。

「くそっ！隠れろ！」

俺と真賀山2佐と三ツ矢3等陸佐はひたすら走った。

「格納庫に飛び込め！」

大きく穴が開いている格納庫は多少なりとも銃火を防げる。

俺はＡＫ７４Ｍを構えてヘリに撃った。

機銃手が銃撃を食らって機外へ落ちた。

「どんなもー」

パンパンパン

胸に熱い痛みを感じた。

「・・・へ？」

カラダが倒れる。

駄目だ、ここで倒れたら・・・凛に会えなく・・・

後ろを向くと三ツ矢3等陸佐と真賀山2佐が倒れていた。

そのまま俺は仰向けで倒れた。

かつーん、かつーんと足音が聞こえる。

視界に入ったのは黒のスーツを着た「矢部」1等陸佐だった。

「よぅ、坂崎」

「やべさ・・・なんで?」

「いや、悪い!」

彼は俺を見下ろしながら両手を合わせた。

「いやー、武器購入にどうしてもここに入らないといけなくて。んで、安全確認してもらったわけ」

「なんのことか・・・さっぱり・・・」

「よーは、俺は国を売って金持ち。君は地獄へ落ちる」

P220拳銃が俺に向けられた。

「彼女さん悲しむだろうけど、そのうち別の男でも作るだろ」

俺は矢部に憎悪の念を込めていった。

「・・・お前は俺が殺してやる

ダンッ

「坂崎！坂崎！」

デルタフォース第1分隊は応答しない坂崎たちを探しにわざわざ戻ってきていた。

格納庫に倒れている彼らを見た時、血の気が引いた。

トニー・ガーフィールド中尉は格納庫を見回して

「ミサイル類すべてがない。先ほど飛んでいったMi－8に積んであったんだろう」

「それより坂崎たちが・・・！」

トニー・ガーフィールドは言う

「どいつもこいつも穴だらけだ。回収はするけどな」

裏切りは彼女の愛情を挫き、戦争を起こした（前書き）

今回は年表っぽくて人が出ない印象が強いです。
次回は戦闘編です。

震災は自衛隊活動ができないし、個人としても描きたくなかったので・・・

裏切りは彼女の愛情を挫き、戦争を起こした

―２０１１年　４月１０日―

「我々はＡＩＦ、対帝国主義戦線である」

１本の映像が動画配信サイトに載せられた。

「私はアミール・ヒーディン。ＡＩＦの指導者だ。我々ＡＩＦはリビアに対するＮＡＴＯ軍の攻撃を大変遺憾に思う。

我々はアフリカ、中東解放のためには手段を選ばない。たとえ世界が滅んだとしてもだ。

我々はカダフィー大佐を救うために動く。反政府軍並びにＮＡＴＯ軍。貴様達は地獄を見るであろう」

この動画は世界中のストリーミングサービスにアップロードされ、世界の権威ある放送局にデータが転送された。

アルジャジーラなどの放送局はこれを「テロ予告」として世界へ発信した。

実際、翌日４月１１日にアデン湾を航行するフランス海軍のフリゲートが攻撃され、轟沈する騒ぎが発生。

そして４月１２日、リビアの都市、ベンガジは消えた。

同時刻、電磁波障害と放射能、そして爆風と揺れが観測された。

アメリカ空軍タスクフォース　ワン・ゼロエイトはリビアに行う予定だった空爆任務を緊急中止し、偵察隊としてＦ－１５Ｅストライクイーグルを送った。

「こちらイントルード１。ベンガジ付近にはいった。ガイガーカウンターは通常値を振り切った。放射能濃度からしてやはり核爆弾が使われたんだろう。」

『了解イントルード１。引き続き地上を偵察してくれ』

「了解」

Ｆ－１５　３機は右へ旋回し、地上偵察を開始した。

「酷いな・・・」

イントルードリーダーであるサラ・ブライト中佐はヒトコトつぶやいた。

『そうですな中佐』

「全くだ」

二人乗りのＦ－１５Ｅの後部に乗るノーマン・サッツ大尉の声に返事をする。

望遠カメラに写ったベンガジは酷いものだった。

街は完全に消滅していた。

「政府軍が核爆弾を持っていたという情報はなかったが・・・」

『カダフィー大佐は所有していたという宣言をするはずです・・・これはＡＩＦの仕業でしょうか？』

「わからん。我々は政府の犬に過ぎない。帰投時刻だ、折り返すぞ」

『了解』

「・・・ん、レーダーにＩＦＦに反応しない機体！サッツ、ＡＭＲＡＡＭを発射準備！」

『了解！』

Ｆ－１５　３機に襲いかかったのはＭｉｇ－２９フルクラム戦闘機隊だった。

『アレクサンドル、右へ旋回。イードルは左だ！アメリカ野郎を叩き落す時がついに来たんだ！』

パボロディア・ドミトフスキー退役中佐は懐かしいミグ製の操縦桿を握りしめた。

『ついに来たんだ。ついに』

ソ連崩壊と共に削減された軍人の内訳に入っていた彼はＡＩＦに取り入ったのだった。

「Ｒ－２７追尾ミサイル、撃て」

『了解』

「中佐、連中ポンコツのファルクラムだ。狙ってもいいですか」

『撃て。ＡＭＲＡＡＭがあってよかった』

３機の戦闘機はＭｉｇ－２９　１０機に反撃を開始した。

「サラ・ブライト中佐、応答を」

『こーらーブライー敵の攻撃でー被弾ーコントロールがー』

「中佐？中佐！」

『ＳＡＲ任務は必要なー』

「無線停止！無線停止！レーダーからロストした！」

ー４月１７日　アメリカ・ニューヨークー

「起爆できそうか」

「はい」

二人の男はニューヨークのホテルに居た。

緑色のスーツケースはかちりかちりと時を刻む。

男が立ち上がると部屋を誰かが突き破った音が聞こえた。

「警察だ、動くな！」

訪問者に男たちは怯え、起爆した。

アメリカ国民はその数分後にテレビ、ケータイ、パソコンに表示さ

れた文字に驚愕した

緊急速報―ＮＹで核テロ発生。被害甚大―

実際に使われたのは核爆弾ではなく、デイジーカッターの小型版で、大きなきのこ雲が上がるので誤認された。しかし爆発範囲は凄まじく、ホテル周辺５？は壊滅的被害を受けた。

９．１１を彷彿とさせたこのテロはアメリカ国民を怒りと好戦的な欲望へと傾けた。

―４月１８日　ソマリア北部―

ＡＩＦ司令部は頑丈なバンカーで守られていた。

アリーナ・ナビトフスカヤは満足そうに戦車を眺めた。

「ジェシュトノフ、Ｔ―７２には思い入れがあるな」

「は、チェチェンで世話になりましたな」

そこへ一人の兵士が走ってくる。

「アリーナ中佐、ウスリーノフ同志がお呼びです」

「分かった、すぐいく」

「中佐、計画は順調だ。我々は勝っている」

「はい。報告ではパリでもデイジーカッターを爆破したそうです」

「次の標的は日本だ。資本主義などたたきつぶしてしまえばいいんだ」

そこへ一人の男がゆらりと入ってきた。

「お取り込み中申し訳ないが・・・」

ウスリーノフは気づき、アリーナに言った。

「同志アリーナ、席を外してくれ」

「分かりました」

アリーナは部屋から出てドアに寄りかかった。

立ち聞きして何が悪い。

「矢部大佐、仕事には大変感謝している。イグラ地対空ミサイルとR－73ミサイルは受領したよ」

「カダフィはもう終わりですな」

「ああ、パフォーマーとしてはいいやつだった。ベンガジを滅ぼしたのはパフォーマンスにすぎないからな。それより日本の即応部隊は」

「3月に潰しましたよ。部下ですが、まぁ必要ないかと」

「次の作戦は前々からあるように日本の東京だ」

「わかっていますよ」

矢部はスーツの襟を直し

「そのためのルートは開けてありますよ」

ー4月2日　日本ー

ベンガジが核爆弾で消滅する数日前、坂崎修一は日本に植物状態で入国した。

ドイツの米軍病院で治療されたが千葉英知、平城涼香、富坂幸太郎、三ツ矢静江は戦死した。

真賀山洋次は奇跡的に一命を取り留め、記憶は混濁していたものの意識は戻った。

二人は日本へと送られ、仲沢凛はまっさきに駆けつけた。

「修一・・・・」

凛はただ、立ちつくした。

何も喋らない。

「頭部銃創は盲管銃創でしたので摘出しました。頭蓋で止まっていたのが幸いでした。

しかし傷を受けたときに脳に衝撃が加わり、一時的に植物状態です」

医師はそう告げ、病室を出た。

「気の強い人だ・・・彼は目覚めるだろうか」

「頭部銃創ですよ・・・？無理でしょう・・・」

「修一、言ったよね?帰ってくるって。だからかえってくるよね?」

凛は泣かなかった。

「私、私待ってるよ?ずっと。もし１０年後に起きるなら十年後まで待ってるよ?」

ただ、ただ修一の手を握って。

「だって、私・・・初めて好きになったの修一だもん。他の人を探すなんて嫌だよ・・・」

目は真っ赤だったが、涙は流さなかった。

「ねぇ、覚えてる?初めてあった時。修一の訓練生としてあった時・・・」

「この間だって・・・帰ってきたじゃん・・・だからぁ・・・」

凛は病院のある名古屋市から守山区へ電車で帰った。

その後の凛は荒れた。

精神状態は最悪で、それは楢山2等陸尉の目に止まるほどだった。

「仲沢1等陸士、ちょっと」

「・・・はい」

楢山は彼女を自分の執務室に呼んで話をした。

「坂崎修一2等陸曹は帰ってくる」

ただそういった。

「アイツはここで死ぬか、さまようような馬鹿じゃあない」

凛は答えた。

「保証はないんですよ・・・」

「仲沢凛1等陸士、本日より長期病欠休暇を与える」

「・・・へ?」

「君は訓練中に建物から落下、足を複雑骨折してしまった。全治1ヶ月の重傷。自宅療養を命ずる」

「・・・な・・・?」

「行ってこい」

「坂崎と真賀山が生きている?」

「はい、1佐殿」

矢部は日本を離れていた。日本政府は彼が裏切っているという情報はつかめていなく、ただの出張扱いに。

「厄介な」

「真賀山はアメリカ陸軍が確保してしまいました。どこから情報が漏れたか・・・しかし坂崎はフリーです」

「消せ。目覚められては厄介だ」

「は」

―４月１７日　日本―

日本でもベンガジの核爆発は話題になった。

名古屋市の病院に深夜忍びこむものがいた。

２人の全身黒ずくめの男。手には消音器付きの拳銃が握られている。

ハンドサインで命令をし、裏口から中へ入った。

「奴は４Ｆだ」

２人は監視カメラを回避しながら４Ｆへと上り詰めた。

「ここだ」

2人は病室の前に立ち、ゆっくりとドアを開けた。

「・・・？」

ベッドの隣に椅子があり、誰かが寝ているように見えた。

男の一人はハンドサインで敵が増えたと報告を後続の一人に伝えた。

病室のタンスから枕を取り出し、そのイスに座る影に歩いた。

「・・・！！！」

人形だった。

男はとっさに殺気を感じ、左を向いた。

そこには病室に飾る花瓶を持った凛がいた。

思い切り花瓶を振り下ろし、男の頭に当てる。

ガシャン！と大きな音がし、男はたまらず倒れた。

手から消音器付きの拳銃が飛ぶ。

後続の男はそれに驚き、銃を構えようとした。

凛は走って飛んだ。

大きく飛翔し、右足で思い切り蹴る。

男は後ろのドアにまでぶっ飛んで拳銃を落とした。

凛はそれをサッと拾い、男に突きつけた。

「動かないで」

「とんだあばずれだ・・・」

凛は躊躇いなく、男の足を撃った。

「あがっ！クソあまぁ！」

そして振り向いて後ろから首を絞めようとした一人目に倒した男の眉間に銃を突きつけた。

「修一は殺させない」

パシュッ。

「後処理は我々が」

「・・・はい」

中央情報隊の第1小隊（矢部指揮下ではない）が病室を”掃除”した
身元はわからず、誰が襲ったのかすらわからなかった。

－4月20日朝7時25分　東京駅－

一人の男が電車から降り立った。
彼の手にあるのはスーツケース。
誰も目に止めない。
中には小型化されたソ連製のデイジーカッターがあるというのに。

男は汗をかいていた。
自爆攻撃なのだ。
男は駅構内の中心部の辺りで壁に寄りかかった。
手にはスイッチが。
男はふるえる手でそれを押した・・・

5月1日、北大西洋条約機構ＮＡＴＯはＡＩＦ掃討作戦を開始することにした。

日本も漏れることなく参加せざるを得なかった。

ＮＡＴＯ（アメリカ軍、フランス軍、ドイツ軍）＋２（日本、ロシア軍）と呼ばれるこの連合軍はＡＩＦ掃討作戦を開始した。

ソマリアを基地としているのは明白であったものの、ＡＩＦ軍は膨大な戦闘機を導入してソマリアを防衛していた。

そこでアメリカ軍とロシア軍とフランス軍が主導でソマリアを攻撃することになった。

アメリカ海軍の空母2隻、ロシア海軍の空母1隻、フランス海軍の空母1隻を中心とした空母攻撃軍はイージス艦などに守られてアデン湾へ侵攻。

制空権を確保したあとは地上攻撃機による空爆を開始し、戦闘要員を送り込むことになっていた。

日本はこの「戦闘要員」支援として陸上自衛隊を派遣した。

ＡＩＦによるテロ行為で日本は東京駅が全壊、死者行方不明者１万人を出し、ドイツはベルリンのブランデンブルグ門が破壊された。

ロシアもまた、赤の広場で爆弾が爆発して大きなクレーターができた。

国内ではＡＩＦ討伐を訴える声が大きくなった。

この時点でも坂崎は目覚めなかった。

凛は必死に願い続けた。

―５月１０日　ＡＭ４：００アデン湾―

『ヴォーム小隊、離陸準備完了』

「ヴォーム小隊、離陸を許可する」

アドミラル・クズネツォフ級空母からＳｕ－３３が５機発進する。

『テイラー小隊、離陸許可を』

「テイラー小隊、離陸を許可する」

ジョージ・ワシントンからはＦ／Ａ－１８スーパーホーネット５機が発進し

フランス海軍のシャルル・ド・ゴール空母からは

『マクイック小隊離陸』

「了解」

５機のラファール戦闘機が発艦した。

１５機の艦上戦闘機はアデン湾からソマリアへ目指した。

アメリカ空軍のＡＷＡＣＳが連携をするため、安全域でＦ２２に護衛されながら彼らに情報を送る。

『こちらＡＷＡＣＳ、ジョーカー７。君たちの前方、約１００?にＭｉｇ－２９ファルクラム隊を発見した。武装は不明。数は１０機。注意されたし』

１５機のＮＡＴＯ空軍はこれらを迎撃し、たたき落とした。

『敵続報。そこから北西に１５０?、Ｍｉｇ－２１戦闘機隊１０機』

この日のうちにＮＡＴＯ空軍は２０機の制空機を撃墜した。
被害は０。
ＡＷＡＣＳもさらなる敵が居ないことを確認した。
さらに衛星でもＡＩＦが航空戦力を失ったことを認識した。
アリーナ・ナビトフスカヤは戦闘機隊の全滅をなんとも思っていなかった。
「同志ウスリーノフ、戦闘機隊は全滅しました」
「わかってる。Ｓｕ－２５とＳｕ－２４、Ｍｉｇ－２７は？」
「攻撃機はすべて地下に隠してあります」
「敵はおそらくここを狙うだろう。同志アリーナ、私は出発する」
「どちらへ？」
ウスリーノフは太った体を揺らし
「アフガンだ」
「私は？」

「君はここを防衛し、頃合いを見て脱出しろ」

「・・・我々の目的は世界から資本主義を叩きのめし、アフリカ、ひいては中東を解放するんですよね？」

「・・・ああ」

アリーナはウスリーノフが嘘を付いていることに気づいた。

彼女は幾度と無くチェチェンで捕虜を尋問して彼らの嘘を暴いてきた。

彼女には分かった。

「・・・お気をつけて」

思った通りで、ウスリーノフは少数の機銃と戦車とヘリ1機以外を撤収させ、兵隊もアリーナとグルーニンが率いる５０名程度の兵士。

全員がロシア系であった。

アリーナはウスリーノフらが脱したあとにＮＡＴＯ軍に向け無線を流した。

「こちらＡＩＦソマリア基地。ＮＡＴＯ軍の前線部隊の指揮官、応答せよ」

しばらく間が空き、無線がなった。

『こちらアメリカ陸軍ソマッド・アルカディア中佐だ』

「こちらはＡＩＦのロシア連邦陸軍退役中佐、アリーナ・ナビトフスカヤです」

『お話があるということで』

「たった今、我々の指揮官がこの危地を脱しました。彼らはアフガニスタンへ向かっています。この基地は明け渡します。我々の安全を保証していただければですが」

『武装解除を確認したい』

「ＵＡＶ偵察でもしてください。基地中央に銃火器を集めさせます」

アリーナ達はＮＡＴＯ軍に回収された。

アリーナ・ナビトフスカヤはＮＡＴＯ軍に自分たちの目的、武装を話した。

ウスリーノフはイリューシン７６輸送機に乗ってソマリアを脱した。

この飛行機は正式に認可された飛行をしているため撃墜される恐れ

すらない。

彼がアフガニスタンへついたと同時に、アフガニスタン各地で小規模武装勢力が活発に活動を開始した。

ＮＡＴＯ軍はアフガンへと行動をシフトさせることにした。

国内では「世界治安法案」として海外への多国籍軍参加が認められた。実際は日本国内の軍需産業による猛烈なプッシングで成ったものだった。

陸上自衛隊と航空自衛隊、海上自衛隊はある一定数の隊員を連れてアフガンへ向かうことになった。

そして、仲沢凛はアフガン遠征隊に選ばれてしまった。

―５月１日―

凛は修一にお別れをしに来た。

未だ眠る彼は、少し痩せてきた。

「もう２ヶ月だね」

ただ寝息を立てる。

「・・・私、死なないよう頑張るね」

凛は軍服を締めなおし、立ち上がった。

凛はその日のうちに国内を出た。

起きれないぞ・・・

ああ、くそ。なんだ。

坂崎修一はやっと目覚めた。

目を開けると白い天井が見える。

「やっとお目覚めかな?」

「ん・・・」

自分が期待していた人物はなく

「・・・赤坂？」

「よぉ」

そこにはかつての同僚がいた。

「状況は最悪なの、坂崎くん」

「マジで最悪だ」

坂崎は体がなれないというのに病院の下に停めてあったセルシオに詰め込まれた。

赤坂の他には里中元３等陸尉。

里中さんが今運転をしている。

「いつつ、今何月だ。３月じゃあ・・・ないよな。暖かいし」

坂崎の問に赤坂がすかさず

「５月の２日だ」

「クソ、２ヶ月死んでたのか・・・あっ！矢部、あいつどうなった

！？」

今度は里中さんがダッシュボードから書類袋を投げ、説明をした。

「矢部１等陸佐は現在国際指名手配中。日本政府は中央情報隊を解体した！」

「そんな・・・俺の小隊の仲間は？」

この質問には赤坂が答えた。

「真賀山２等陸佐以外全員死亡！彼は先乗りしてる」

「先乗り？どこへ」

「アフガンだ。仲沢達陸上自衛隊も向かってる」

「凛が！？」

「昨日お前にお別れに来てたんだ」

「ああ、くそ！」

「今お前は政府にマークされてて自衛隊ルートでは入れない」

「どうするんだ」

「今回、ＢｌａｃｋＥａｇｌｅＣｏｍａｐｎｙはアメリカ政府の要請でＡＩＦ要人を暗殺することになった。だが隊員が足らないんだ。そこで俺と美紀、真賀山さんとお前とあと二人の補欠要員と情報屋

でやることになった」

赤坂の説明に坂崎は答える。

「目標は？」

「ＡＩＦ指導者、アミール・ヒーディンと矢部宏和。彼らは５月４日にアフガンの首都、カブールの一角で合流するらしい」

「合流？」

「アフガンは国土の７割をＡＩＦに制圧された。しかもそこへイラン軍まで賛同してえらいことになってる」

坂崎修一は国際空港からチャーター便でアメリカ軍普天間基地へ向かい、その足で米軍の輸送機に便乗してアフガニスタンへと向かった。

裏切りは彼女の愛情を挫き、戦争を起こした（後書き）

坂崎が加わったＢｌａｃｋＥａｇｌｅＣｏｍａｐｎｙ。坂崎達は動いた・・・！

次回、中央情報隊第２小隊編終了予定。

矢部宏和の答え（前書き）

物足りないかもしれませんが、どうぞ。

矢部宏和の答え

―アフガニスタン　首都カブール―

仲沢凛の陸上自衛隊第２小隊とアメリカ海兵隊のアルファ２―１第１分隊はカブールに侵攻中のＡＩＦ軍を叩いていた。

ビルのひしめくカブールの一角、海兵隊のＭ１Ａ１戦車とその後方に凛たちの歩兵部隊。

池田は８９式小銃のマガジンを脱着して異常がないかを見ていた。

「自衛隊が戦争に駆り出されるなんてなー。な、仲沢」

「う、うん」

ロシア語がその遠くで聞こえていた。

４階建てビルの屋上。

「ミャシャコグ、配置についた」

『了解』

男はバイポッドを取り付けたＳＶＤ狙撃銃で下を狙っていた。

「目標発見。アメリカ兵と日本兵だ」

『了解。少し待て』

男はスコープの倍率や、手の汗を拭いて待った。

（狙撃手、1。ほかなし）

（了解）

二人の男は狙撃手のいるビルに居た。

手にはサプレッサー付きのＳＩＧＰ２２０。

ハンドサインで指示を送り、片方の男がナイフを出した。

ドアをゆっくりと開けてビルの縁にいる狙撃手に近づいた。

「やらせねぇ」

日本語でそうつぶやき、うつぶせの狙撃手の胸ぐらに手を入れて顔をこっちへ向けさせて首へナイフを差し込んだ。

「クリア」

坂崎修一は血のべっとりとついたナイフを自分の倒した敵の服で拭きとった。

「坂崎、狙撃しろ」

「了解」

坂崎は死体からＳＶＤを剥ぎとって構えた。

スコープには凛がいた。

「・・・凛」

真賀山は坂崎に

「後であわせてやる。だが、まずは彼女を守れ」

と、つぶやいた。

「よし、まずは路面。ＩＥＤ爆薬が見えるか？」

坂崎はスコープを覗いて爆弾を探した。

小さな箱状のものが見える。

「あの箱か？」

「そうだ。撃て」

坂崎は引き金を絞った。

ダンッ、という狙撃銃の軽快な発射音と7．６２ｍｍ×５４ラシアン弾はＩＥＤを撃ちぬいて起爆させた。

ドガァーン！という大きな爆発音は部隊の進みを止めた。

「え、何・・・？」

凛はただ困惑した。

「よし、上出来。次は狙撃手だ。向かいの建物、内部の３Ｆだ」

真賀山は双眼鏡を覗きながら坂崎に指示をした。

「見えます」

「撃て」

坂崎は息を整えてＰＳＯ－１スコープのレティクルに敵を収めた。

タンッ。

「こちら斥候隊、敵殲滅。次のポイントに移ろう」

『了解』

真賀山の無線でＡＨ－６リトルバードが接近する。

丸い機体側面には「ＢＥＣ」の白文字がある。

ヘリはビルの屋上に乗り付けて坂崎たちを回収した。

「改めてよろしく、坂崎さん」

「よろしく、ええと・・・」

女は答えた。

「アリーナ・ナビトフスカヤ、よろしく」

差し出されたのは黒手袋の手だった。

坂崎は手を握り返す。

「ＳＶＤね、私にくれないかしら？」

坂崎は持ってきてしまった狙撃銃をアリーナへ渡した。

「ん、ありがとう」

この機内にいるのはアリーナ以外見知っていた。

パイロットは

「よろしくー、しゅーいちくん」

「いいからちゃんと飛ばせ」

「はーい♪」

ケイラー・レブリアンズ、だった。

彼女は多彩というかもうおかしかった。

「ＢＥＣに入社したのは戦いを続けるため。それだけ」

そう彼女はいっていた。

「最終目標は日本人とアラブ人の始末ね」

アリーナはＳＶＤのマガジンを見つめながら口に出した。

『こちら2番機、１番機どうぞ』

ひどく訛った英語が聞こえてくる。

ケイラーは無線に

「汚い英語しゃべんなヴォケ！」

と悪態をつく

するとロシア語で何か返答があり、アリーナがぷっと吹き出した。

そして何かロシア語で返答した。

すると無線の主はまたひどい英語で

『すまない、おらはロシア人でな。日本人に変わる』

無線がガサッと音を立てると

『こちら赤坂、聞こえてるな？敵はバザールの一角にあるカフェで商談をやるらしい。大方逃げる手はずだろう。バザール付近にはもともと反政府系ゲリラしかいない。自由射撃地帯だ』

赤坂は続いて

『1番機は下に降りろ。2番機が機銃掃射と支援を行う』

バザールが見えてきた。

その近くでは黒のランクルに乗ったＢｌａｃｋＥａｇｌｅＣｏｍｐａｎｙの社員が制圧準備をしていた。

『降下！』

ヘリは思い切り高度を下げ、バザールの中央に着陸した。

「いけいけ！」

坂崎はＭ１４ＥＢＲを持って外へかけ出した。

耳のインカムに敵はそこから真っすぐ進んだ建物にいると聞こえた。

俺はただ走った。

目標の建物の中には見知った男が幽霊を見たかのような顔をしていた。

「おどろい・・・た。坂崎くん、生きてたのか」

俺は窓ガラスを叩き破って中にはいった。

「動くなよゲス野郎」

「ひっどいなぁ」

矢部の足元にはすでに死体があった。

「アミール・ヒーディン？」

矢部は首を振り

「ウスリーノフ・シュタイコビッチ。知ってるだろ、そこのロシア女は」

アリーナは近寄って死体を見た。

「なんてことだ、ってか？アミールはとっくにアフガンを離れた。そして俺もだ」

矢部は思い切り走った。

俺がＭ１４を構えると床下が爆発した。

「くそっ、トラップだ！追おう！」

俺はＭ１４を背中に背負ってＰＤＷのＭＰ７を出して走りだした。

考えろ。考えろ。

ああ、いい囮がいる。

矢部は裏に停めておいた野戦バイクに跨り、エンジンをかけた。

そして走りだす。

「くそっ、バイク！」

坂崎は矢部の逃げる背中を見ただけだった。

『乗って！』

バタバタと空からは音が聞こえ、ケイラーの運転するＡＨ－６が着陸した。

『こちら2番機、バザールに敵が集まってきた。脱出しろ』

高いエンジン音を鳴らすバイクは米海兵隊の戦車の横を猛スピードで滑り抜け、陸上自衛隊の小隊の前に迫った。

矢部は目標を見つけ、片手を出してかっさらった。

手に収まる人物は一瞬過ぎて訳がわからなかった。

バイクはそのまま行き止まりに差し掛かった。

俺はＭ１４にスコープを載せて矢部を狙った。

「１発だ、１発で終わらす」

そして俺は見た。

矢部の隣に凛がいるのを。

「凛ッ！？」

『はーい、坂崎くん残ねーん。凛ちゃんはここで死にまーす』

「ふざけんなてめえ！」

坂崎はヘリのヘッドセット越しに怒鳴った。

『ほーら、ちゃんと当てないと死ぬぞー？』

矢部は自身があった。

この女を盾にする。

もしアイツがあとすこし待って撃たなければ後ろの壁を乗り越えて逃げる。

この先はＡＩＦの支配下だ。

凛はこの男が、自分の彼氏をあんな目に合わせたのだと理解した。

上空のヘリから銃を構えているのは修一なのだろうか？

凛は決意した。修一ならやれると。

「・・・！」

俺は凛の手の人差し指が地面を向いて手を上下に動かしているのが見えた。

「下がるっていうのか・・・！」

そして手を開いて指を一本ずつ閉じていった。

「カウント・・・！」

俺はＭ１４を握り直した。

「気づいて・・・！」

凛は思い切りしゃがんだ。

矢部の腕からすっぽりと抜ける。

坂崎は撃った。

思い切り撃った。

「ああ・・・・」

矢部は視界が赤くなるのを見ながら倒れた。

坂崎は命を消していく矢部のそばにすわった。

「・・・おまえは・・・いい部下だ」

「お前の部下じゃあない」

「・・・ふん。俺の目的は金だったと思うか？」

「・・・ああ」

「違うな・・・俺はただこの世界を壊したかった」

「・・・？」

「気まぐれさ・・・・は・・・・・は」

―ＡＩＦ軍、撤収か　ＮＡＴＯ軍被害軽微―

新聞の一面に乗ったのはこれだけだった。

ＡＩＦ軍は矢部が死亡し、アミール・ヒーディンが消えたあと実態が明らかになった。

ほとんどが傭兵だったのだ。金のもらえなくなった彼らはバラバラに消えていった。

しかしＡＩＦに取り入った武装集団はその余った兵器を奪い取って各地への潜伏を行った。

「私ね、結婚したい」

「・・・え？」

坂崎は自宅の自分の部屋で凛がそういうのを聞いた。

「だってあと1年って・・・」

「いつ死ぬかわからないから・・・」

「あ、ああ」

「だから」

矢部宏和の答え（後書き）

次回予告。

忘却の彼方へ葬られた姫、助けるのは葬られた王子。

次回「葬られた王子と姫」

過去の亡霊（前書き）

話が飛びすぎて申し訳ございません。序盤のみエロ注意。

過去の亡霊

俺はハンバーグを箸で食べやすいサイズに割いて口へ運ぶ。

「ん・・・うまい」

「ほんと?よかった!」

―２０１１年１０月１０日　愛知県守山区―

俺と凛は7月に結婚式と婚姻届提出を終わらせ、基地近くにアパートを借りた。

凛は自衛隊をきっぱりと辞めてしまった。

「よかったのか?」という問に彼女は。

「よかったの」

と答えた。

俺は中央情報隊の解散後は第１０師団に籍を置きっぱなしにしてある。もちろん出勤も。

「ああ、今月のお給料です、奥様」

俺は銀行で下ろした生活費を茶封筒で渡す。

「おつかれさま、旦那様」

「ふぅ・・・」

晩飯の後、バストイレ付きの部屋なのでシャワーを浴びる。

すると狭い個室に凛が丸裸で入ってきた。

「な、ちょ・・・」

「肩おもみします♪」

胸が背中にあたっているというのに、大胆にも抱きつきながら肩を揉む凛。

「なんか、大胆になったな?」

「夫婦だし♪」

「え、そこ舐めるの・・・?」

「ん、久々にやろうかなと」

「い、いいけど・・・洗ったから」

俺はベッドの上で凛の局部を舌で舐めた。

「ん・・・、相変わらず・・・・上手っ・・・・」

「ありがと」

「あの・・・さ、修一」

「・・・ん?」

「私・・・子供欲しい」

「え・・・・」

俺は少し、というかむちゃくちゃ驚いた。

「19歳・・・だし?修一はまだ欲しくない・・・?」

「いや、そりゃまあ・・・でも、自由が効かなくなるんだぞ?」

「いい、大丈夫」

「本当に・・・・?いいんだな?」

「うん。絶対」

俺は自分の子供というのに少し慣れなかった。

「・・・分かった。じゃあ、今日はゴム無し・・・・?」

「・・・お願いします」

俺はゴムも何も付けず、性器を凛の膣へ入れた。

「いつもと違って・・・なんか、気持ちいい」

凛の感想に俺も「同じだよ」という。

「んっ・・・・んっ・・・!」

俺が腰を動かすたびに可愛い息が漏れる。

「痛い?」

「大丈夫ッ・・・気持よすぎるよ」

しばらくその行為を続け、俺も限界が近づいてきた。

「本当に・・・していいんだよな?」

「大丈夫ッ・・・だから、お願い」

俺は自分の子供を作ることが出来る種を凛に入れた。

「・・・はぁ・・・っ」

「・・・んぅ・・・」

ゆっくりと性器を抜くと凛の膣から精子が少し垂れる。

「ん・・・暖かい。ありがと・・・」

ー3週間後ー

「ただいまー」

「おかえりなさい」

俺が仕事から帰ってくると凛が玄関で待っていた。

「どうした?」

「あの・・・あのね?」

「ん?生活費足らなかったか?」

凛は首を振ってポケットから体温計のようなものを出した。

「風邪引いたのか?」

「ちーがーうの!これ!陽性なの!」

俺はその言葉でようやく気がついた。これは妊娠検査薬だ。

「にん・・・しん?」

「そうっ！」

俺は凛を抱きしめていた。

「え、ちょ、なにっ！？」

「俺に子供が出来るのかもしれないなんて嬉しいじゃないか・・・！」

後日、一緒に産婦人科へ行くと妊娠していることがわかった。

俺と凛はうれしさで胸が一杯だった。

両方の親にすぐに報告し、１０ヶ月彼女を支えることに俺は専念することにした。

柑橘類が食べたいといわれればすぐに買いに行ったし、やることもすべて。

全く、苦ではなかった。

妊娠、それはつらいものだけど。愛している人のこどもが生まれるのは嬉しい。

修一は私のできない家事や、余った仕事を片付けてくれた。

出産予定日は来年の８月中旬。それまで、がんばろう・・・！

―せかいのどこか―

私は囚われの姫。

私は外に出れない。

「あああああああああああ！！！！！」

「五月蠅いぞ！」

檻をガンッと警棒で叩く音。

叫んだ人物は番兵の行動で黙る。

「くそ、最高に嫌な仕事だ。こんなんぶっ殺せばいいのによ・・・」

番兵はロシア産の煙草をひとつつまんで錆びたライターで火を着けた。

「そのくせ、犯せねえと来たもんだ・・・ったく」

―２０１１年１２月１０日　新スラヴィニア民主主義国―

敗戦から1年近く過ぎた。

この国は戦後にロシア連邦による強制的な統治が行われた。

財政逼迫やロシアが利権を得るための金銭で国内は増税を重ねた。

スラヴィニアが所有した鉱山や油田はロシア連邦かどさくさにまぎれて入手した民間企業が独占した。

『こちらＺＶ駐屯地、イワノフです！』

「こちら本部、どうした」

『民間人が大規模なスクラムを組んでこちらに接近しています！武装しています！』

「了解した。直ちに1個分隊を派遣する」

民衆の怒りは爆発した。

「こちらカサトーカ１－１。カサトーカ１－２は俺と同じ進路をとれ」

『了解、カサトーカ１－１』

２機のＫＡ－６０カサトーカはＺＶ地区、プリャネンチ街区にはいった。

プリャネンチは先の戦争では荒廃しなかったものの、スラヴィニアの有力都市の一つだった。

スラヴィニアは戦後に軍隊が解体されてしまったのでロシア連邦軍が統治していた。

ＫＡ－６０は街を旋回する。

『こちらカサトーカ１－１。鎮圧部隊をラペリング降下させる』

ＫＡ－６０はスリリングを着けた兵士たちをヘリから下ろした。

「こちらソーコル１分隊。民衆へ発砲する」

『許可する』

ＡＮ－９４アバカンを装備した鎮圧部隊は棍棒を持つ民衆に一斉に掃射した。

「人殺しは楽しくて仕方がない」

ソーコル１の隊長は新しい弾倉にリロードした。

「・・・？」

地面が揺れ始める。

街のビルの一つからＢＭＰ－１Ｐ装甲戦闘車が出てきた。

「ＩＦＶ！ＩＦＶだ！」

ＢＭＰ－１は主砲の７３?砲を密集していた鎮圧部隊に撃ちまくった。

『おい、本部！こちらカサトーカ１－１！鎮圧部隊が戦車に蹴散らされたぞ！』

『何？情報を確認したい』

『我が方のＢＭＰ系の装甲車が鎮圧部隊を鎮圧した！』

その時、カサトーカ１－１に地対空誘導弾が直撃した。

１２月１１日、プリャネンチを中心とする複数都市から正体不明の武装集団がロシア連邦軍を攻撃した。

－２０１２年２月１０日　陸上自衛隊のとある基地－

「ここに特殊捜索隊、ＳｐｅｃｉａｌＳｅａｒｃｈＦｏｒｃｅ、Ｓ

ＳＦの設立を宣言する」

俺はある式典に居た。

式典といっても基地の片隅ではあるが。

中央情報隊解体後、強制調査が出来る部隊を失ったため自衛隊はＳＳＦを組織した。

俺はＳＳＦの指揮官として配属されることになり、第１０師団から移籍した。

職場は名古屋だったので住む場所も変えずに済んだ。

指揮官（デスクワーク）：真賀山洋次１等陸佐

現場指揮官：坂崎修一２等陸尉

小銃手：片山直人２等陸曹

小銃手：篠原ミサト３等陸尉（女性）

狙撃手：石塚兵悟３等陸曹

分隊支援火器：伊埜浩志２等陸曹

衛生兵：姉坂智可１等陸曹（女性）

「全員敬礼！」

全員が敬礼をする。

「んーと、修一今日は午前中だけだよね。お昼ごはん考えないと・・・」

坂崎凛は昼の献立を考えていた。

「んー、生ラーメンでいいかなあ」

ドアのカギを開ける音がした。

「あ、修一おかえりなさい」

「ん、ただいまー」

制服を着て帰ってきた修一は制帽を服掛けにかけて背広もかける。

「ＳＳＦのメンバーって今日発表だったんでしょ？どうだったー？」

凛が問うと修一は

「ああ、特殊作戦群の精鋭二人、地方からの精鋭で全員かな。女性隊員は二人か」

「浮気しないでよ？」

すると修一は凛に後ろから抱きついて

「俺はお前だけ」

「もー」

惚気を続けるばかりだった。

夕方４時になって凛は少し不安になった。

「私の誕生日忘れてないかな・・・」

修一はパラパラと参考書をめくってノートに書き取っている。

「聞けないなあ」

修一は参考書をぱたんと閉じて凛に向かっていった。

「よっしゃ、誕生日だしなにか食いに行くか？」

凛は嬉しくなった。

「覚えててくれたんだ！」

「忘れるわけ無いだろー。ほい、プレゼント」

修一が差し出したのはペンダント。

「あ・・・」

名前が彫ってある。

「2年も前に上げたやつだとダメだろ?付け替えて」

りんは首から下がっている銅のネックレスを指で触った。

「ありがと」

凛は新しいものに付け替えた。

ロシア連邦軍はある情報を突き止めた。

膨大な軍事力を持っている反政府勢力はＡＩＦから横流しされた武装を使っているらしいということを。

ロシアはＮＡＴＯへ責任を転嫁し、ＮＡＴＯへの軍事協力を仰いだ。

ロシア軍はすでに１００人の兵士が死亡しており、スラヴィニアを抑えるのは至極難しい事態になっていた。

―2月19日―

「SSFに指令が？」

「うん。スラヴィニア。懐かしいだろ？」

坂崎修一は名古屋市にあるSSF司令部で作戦指令書を受け取っていた。

「新スラヴィニア民主主義国（NSDC）、ロシア連邦軍ともめているそうですね」

「ああ、ニュースにはならんがすで爆撃機が武装市民を爆撃している。そこで我々はスラヴィニアに入って情報を収集する。そこで土地勘のある人間を助けてこい」

「？誰ですか」

「ラヴェニズク・クラフチェネンコ元少佐」

「・・・急性心筋梗塞か何かで死んだと聞いていますが？」

「そういうことになってた。現在彼はNSDCの僻地トラヴァントにある軍の刑務所に収監されている。彼をあそこから連れ戻して、武装市民軍とスラヴィニアを解放するのが今回の作戦だ」

坂崎は少したじろぎ

「しかし、それではロシア連邦と間接的に戦争になりますよ」

「ああ、問題はない。実はこれはロシア側の希望でね」

「・・・は？」

坂崎の疑問に真賀山は答えた。

「スラヴィニア財政のひっ迫は目に見えていて、スラヴィニアが供給する化学燃料だけじゃロシアに恩恵があるどころか赤字らしい。ロシア連邦軍は現在ＮＳＤＣの新軍隊を組織して対応に当たらせているから君たちが戦うことになるのはＮＳＤＣの正規軍だ。ロシア側は彼らに防衛を任せるだけ」

―３月１日　新スラヴィニア民主主義国領内　メーチ山岳地帯―

アメリカ陸軍のＡＨ―６リトルバード２機がブリザードの中を飛ぶ。

「今日は異例の雪だそうだ」

アメリカ陸軍のパイロットが操縦桿を握りながら口に出した。

俺たちは冬季迷彩に身を包み、支給されたＡＫ―７４Ｍを白い袋で包んである。

バラクラバをつけてゴーグルをはめている。

「目的地まで２０秒。準備」

ヘリパイロットの合図で俺はＡＫ－７４Ｍのセレクターをセミオートにカチリと変える。

ヘリは山岳の平らな場所に着陸した。

「行くぞ」

「了解」

俺の合図で同乗していた篠原３等陸尉と石塚３等陸曹が降りる。

俺は首元の小型マイクのスイッチを入れてもう一機のヘリに合図する。

「２－１着地。そちらのＬＺ（ランディングゾーン：着陸地点）を確保する。少し待て」

『了解２－１』

「行くぞ。ＬＺを確保する。警戒しろ」

俺は雪を踏みながら山を降りていく。

俺達を載せてくれたヘリは一度空へと上る。

山を２０ｍ降りたところに平になっている山肌を見つけた。

「石塚、ここから下を見てくれ」

「了解」

石塚はＳＶＤ狙撃銃にサーマルスコープを取り付け、バイポッドで山肌に銃を固定する。

俺と篠原は山を下へ降りていく。

「材木貯蓄施設発見。敵哨兵１名。俺がやる」

俺は無線のスイッチを切って腰から６ｋｈ４銃剣を取り出す。

ナイフを逆手にとって敵に近づく。

肩にある部隊章にはロシア語で「新生スラヴィニア軍」との文字。

俺は首筋にナイフを突き立てて奥へと押しこむ。

「が・・・あっ」

息が漏れる。

敵を雪の地面に触れぬように雑木林の中へ捨てる。

「クリア」

敵の懐を探り、ロシア製の手榴弾を2つばかり拝借する。

「大丈夫ですか？坂崎2尉」

「問題ない。大丈夫だ」

俺は血のついたナイフを雪で拭いとって腰の鞘にしまう。

『こちら石塚。ＬＺゾーンからそちらへ迫る敵を発見。身を隠してください』

「了解。篠原、そこの雑木林に入るぞ」

「了解」

俺は雑木林に伏せた。

ざくっ、ざくっと足音が聞こえる。

『敵2名。始末します』

「頼む」

ＳＶＤのサプレッサーがプシュップシュッと音を立てて二人を倒した。

「ＬＺ確保。確保した」

２機目のＡＨ－６が片山２等陸曹と伊埜２等陸曹、姉坂１等陸曹を下ろす。

「我々は崖下にあるトラヴァント軍事刑務所に入りラヴェニズク・クラフチェネンコを救出する。刑務所には横から突入する。その前に発電ケーブルを断絶して停電させる」

「どこにあるんですか？」

と、片山。

「そこの材木貯蓄施設だ。１本の太いケーブル」

俺が指さすところには黒い太いケーブルが地面を這っている。

「了解」

ケーブルは電気が走っているため、絶縁グローブと絶縁体付きのハ

サミでちょん切る。

「完了」

トラヴァント軍事刑務所は旧ソ連時代に建てられたもので元はドイツ国防軍や武装親衛隊などを収監する目的で建てられた。

現在、先の戦争で戦争犯罪者として処分された将兵や脱走兵などが収監させれいる。

規模は小さく、コンクリートの刑務所（２Ｆ建て）、コンクリートで出来た詰所（平屋）、そして車両置場。

車両置場には申し訳なさそうにＢＲＤＭ－２偵察装甲車が２台止まっていて、ヘリポートには１機のＭｉ－８ＭＴＶがちょこんと座っている。

坂崎は狙撃手と援護として石塚と姉坂を狙撃位置に送らせ、残った隊員で攻撃をすることにした。

「ＡＨ－６隊、攻撃頼む」

『Ｃｏｐｙｔｈａｔ』

坂崎の指示でヘリ2機は刑務所の詰所へハイドラ７０ロケット弾を発射する。

刑務所全体に警報が鳴り響く。

「突入」

柵をワイヤーカッターで切って刑務所に坂崎達は突入する。

新生スラヴィニア陸軍兵は詰所を飛び出した。

ダダッ、と短い単発音で一人目の兵士が倒れる。

二人目は外に居た白ずくめの男を見てぎょっとし、弾丸に倒れた。

分隊支援火器を持つ伊埜2等陸曹がＲＰＫ－７４Ｍを詰所の窓を割って中に銃口を差し込んで撃ちまくった。

「行くぞ。石塚、これより内部へ入る。務所に近づく奴は全員撃て」

『了解』

俺はＡＫ７４Ｍを右手で持って右足でドアを蹴破った。

一人の警備兵。

警備兵は腰へ手を伸ばそうとしたので足をＡＫで撃ちぬいた。

「ガアアッ！」

俺は警備兵に近寄り、ロシア語で質問をする。

［ラヴェニズク・クラフチェネンコはどこだ］

兵士は笑い

［そんな奴知らないな］と答える。

俺はＡＫ－７４Ｍの台尻で銃創を押す。

［アアアアッ！くそ、糞野郎！］

悪態をつき、涙を流す兵士。

［なら言え。何処にいる］

兵士は涙を流しながら

［２階の奥だ、くそっ！］

俺たちは兵士をおいて２Ｆへ入る。

「片山、先へ」

「了解、隊長」

片山はＡＫ－７４Ｍを構えて２Ｆへ上る。

『クリア』

無線の声に俺たちは反応して２Ｆへ上る。

『こちら石塚、現在４人目を始末した。狙撃位置をそろそろ変える。送れ』

「わかった。注意しろ」

石塚の狙撃地点変更連絡を受けて俺は伊埜と片山に入り口の防衛を指示した。

ドアはステンレス製で、あまり重厚ではなかった。

俺はドアを叩いて

［ラヴェニズク・クラフチェネンコ少佐は？］

と、ロシア語で聞いた。

すると中から

［俺はここにいる・・・ここに］

とか細い声が帰ってきた。

俺はＡＫ－７４Ｍをドアに向かって撃った。

鍵が壊れ、ドアノブが回る。

中には一人の男がいた。

だが１年前に見たあの自信と若さに満ち溢れた姿ではなく、顔は無精髭でおおわれて少し筋肉が落ちてスラリとしていた。

［痩せたな］

俺の問いかけに

［俺にあったことが？］と、か細い声で返す。

俺は正直に答える。

［１年前、国境で逃げるお前を止めた］

男は目を見開いて

［あの時の日本人か・・・！特殊部隊とは出世したものだ］

［いや、それはいい。俺たちはお前をここから出して反乱軍の指揮を取ってもらうために来た］

男は首を傾げる。

［反乱？］

俺は答えた

［敗戦後、ロシアの圧制に耐えきれなくなったんだ。第2次スラヴィニア動乱だ］

ラヴェニズクは髭を触り

［誰が希望した？］

［反乱軍の指揮官らしい。とにかく来てくれると助かる］

ラヴェニズクは答える。

［カミソリと、俺の軍服を持ってきてくれ］

「こちらクロウ1、パッケージを確保した」

『こちらアタッククロウ1－1、了解。回収に向かう。少し派手にやるぞ』

ヘリポートに止められているMi－8MTVにAH－6はハイドラ70をぶち込んだ。

爆発したヘリはヘリポートから爆風で吹き飛ぶ。

「地雷を仕掛けよう」

俺はBRDM－2のタイヤにワイヤー型の梱包爆弾を取り付けた。

車が動けば地雷が爆発して車は横転する。

『こちらトランスポート1。着陸する』

パッケージ収容のため、MH－60ブラックホークが着陸し、俺たちは乗り込んだ。

「トランスポート1より本部、パッケージ回収。これよりプリャネンチへ向かう」

『了解』

ヘリはローターを回転させて空中へ舞い戻る。

―プリャネンチ反乱軍オフィス―

ＭＨ－６０はプリャネンチ街区で一番大きくてヘリポートを備えている警察署跡に着陸した。

「これから俺はどうすればいい？」

ラヴェニズクは軍服を少し調整しながら言った。

「市民軍のリーダーにあってもらい、この国の独立の手助けを願いたい」

俺はそういった。

市民軍リーダー、スターナヴ・エレンチコワ３７歳。

夫と娘を第１次スラヴィニア動乱で失い、国に恨みがあった。

彼女は虐殺実行部隊を指揮した者たちがＮＳＤＣ（新スラヴィニア

民主主義国）内の自治に携わっていること、そして国民への食糧配給が彼らによって横流しされていることを突き止めた。

スターナヴは優秀な指揮官を欲していた。

新生スラヴィニア軍の離反部隊や失職軍人だけでは到底養えなかったのだ。

「スターナヴ・エレンチコワです」

「ラヴェニズク・クラフチェネンコ元少佐です」

俺は彼を送り届けると席をはずすよう言われたので席を外した。

「それで・・・私に何の御用でしょうか？エレンチコワさん」

スターナヴはすこしまゆを動かし

「ラヴェニズク・クラフチェネンコ、元スラヴィニア共和国陸軍少佐。紛争中、ＮＡＴＯ軍を多数撃破。功績が認められてアナスタシア・シュパジェノブスクの私兵として紛争末期に暗躍。戦後はトラヴァント軍事刑務所に入所」

ラヴェニズクはポーカーフェイスを崩さずに

「よくお調べになったもので」

スターナヴは微笑み

「ありがとう。私が調べたところによればあなたの部隊は７０％の生還率を誇っていたそうね」

「結果、全員が職にあぶれたのでしょう？」

ラヴェニズクの答えにスターナヴは

「ええ、そうね。そうよ。あと民間人への射撃はないはずね・・・？」

「自国民に銃を向けたのはボスラヴェキニとＰＭＣ、そして一部の部隊と親衛隊だ。俺に、そしてアナスタシアは関与していない」

スターナヴは眉間にシワを寄せ

「アナスタシア・シュパジェノブスクは紛争を起こした張本人じゃない」

「彼女は民間人虐殺を知らなかった。軍部も、それも彼女より下の層の立案で行われた。これは知らなかったのか？」

スターナヴは紅茶をすすり

「立案者は？」

ラヴェニズクはおどけた様子で

「俺は歴史の教師じゃあないぞ」

と答え、スターナヴは無言で睨みつけた。ラヴェニズクは折れた。

「はぁ・・・ミリャコフ・エレッカトリチェ少将、通称ママ・トリチェ」

スターナヴは手元のモバイルにそれを打ち込み、ラヴェニズクへ見せた。

そこには赤毛の壮年の女性の写真が1枚、そして経歴がびっしり事細やかに書いてあった。

「ミリャコフ・エレッカトリチェ中将。現在新生スラヴィニア陸軍の総督をしてるわ」

「虐殺女が？そりゃあすげえ」

「ええ、彼女はそれに加えて復興相長官補佐官を勤めてて、配給品を外国に売り飛ばしてる」

ラヴェニズクは頭をかいて

「ヤツを殺せばいいのか？」

スターナヴは顔を振って

「いいえ、彼女だけではどうせその後釜が出てきてしまう。現在市民軍は首都ヴルモフへ進撃中。あなたには最前線で指揮を取って欲

しいの」

「ふむ・・・了解した」

「どうだった？」

俺の問にラヴェニズクは

「引き受けた。で、あんたらは？」

「俺達はあんたを支援する。作戦は？」

ラヴェニズクは髭を触り

「昔と変わってないならスラヴィニア軍の通信網は普通回線のインターネットで行われている。もちろん、暗号化されてはいるが。そこでだ、この国は戦後におそらくインターネットの普及が促進されなかったはずだから

軍がその施設をいまだ使っているはずだ。調べて欲しい。それを叩けば軍の管理ネットワークが吹き飛び、瓦解する。」

俺はその旨を無線でアメリカ軍に知らせた。

「ペトロネンコインターネットセキュリティ社。スラヴィニア国営のインターネット管理業者だ。軍の組織でもある。これは首都ヴルモフから西へ２００？のパニャルチ工業区にある」

俺の説明にラヴェニズクは

「思ったとおりだ。見た目は民間業者だろう？」

「ああ、エストニアのインターネットサーバーを管理していることになってるがそんなサーバーはない。先ほど、バルト海からＦ／Ａ－１８スーパーホーネットが空撮した」

俺はファイルから１枚の写真を取り出した。

そこにはビルの周りにバンカーが敷設され、さながら軍事要塞だった。

ラヴェニズクは写真を見て

「ビルの屋上にパーンツィリーＳ１か。地上には同じものが２つ。周囲はＢＲＤＭ－２とＴ－６２戦車が配備されてる。まぁ、そこそこの警備だが場所が問題だ」

「場所？」

俺は首を傾げる。

「ここは空軍の基地から目と鼻の先だ。警報がなればＭｉ－３５スーパーハインドやらハヴォックやらがうじゃうじゃ出てくる」

「どうするんだ？」

ラヴェニズクはニヤッと笑い

「パニャルチ工業区は俺のおやじの出身地だ。俺はよく知ってる。ここらは排水用に巨大な排水トンネルが地下にある。このインターネット施設はおそらくソ連時代の防空レーダー基地だったのを記憶しているから下水が通ってたはずだ。

排水路はパニャルチ工業区に流れるパサムイ川から入れる。地図は排水管制所に行くしかないな。排水管制所はパサムイ川の中腹にある。現在は排水施設として機能していないから無人のはずだ。地図が残っていればいいが」

俺はラヴェニズクに

「で、そこを通るとしてヘリはどうする」

「米軍に叩いてもらうしかない」

「分かった」

2台のセダンはパサムイ川のほとりを走っていた。

「あと少しだ」

1台目のハンドルを操るラヴェニズクが答える。

車は排水管制所の駐車場に止められた。

「このへんは人里離れすぎている上に軍基地が近いから誰も立ち寄らない。荒らされてないようで助かった」

施設は窓も割れてはいないが、敷石を割って映える雑草が手入れのされなさを物語る。

「入ろう」

窓をＢｉｚｏｎ短機関銃の台尻で叩き割る。

施設にある排水管地図はすぐに見つかり、俺たちはセダンで排水管の入口に向かう。

「ココだ。車は置いておいてもいいだろう」

排水管は高さ１０m、幅１０mの大きなものだった。

「トンネルだな。車も入れるのか？」

ラヴェニズクは

「軍の弾薬線路を通す予定だったのを排水路にしたんだ。第1次大戦の時だったと思う。このへんにパニャルチ武装要塞があった。戦

後に解体されて工業区になった。水面見てみろ」

窪んでいる排水路には確かに線路跡があった。

「ここから施設まではざっと１５ｋｍはあるぞ。さすがに警備がないってこともないはずだ」

しばらく歩くと天井をつたう雫が地面から数センチの所でピカピカと光っていた。

「ブービートラップだ」

俺は地面に足をついてそこを見る。

ピアノ線が一本、水を回りにつけていた。

線の先にはピアノ線を結ぶため粘土で地面に固定された棒、もう一方には

「ＭＯＮ－５０指向性地雷だ」

ラヴェニズクがチラッと見て言った。

「旧ソ連の指向性地雷だ。クレイモア地雷のコピー品だよ」

俺は信管につながるワイヤーを切り離して無力化した。

「ココにこれがあるということは、かなりの地雷があると見ていい

な。注意しよう」

俺の言葉に隊員たちが了解と、ダタそれだけを答えた。

５ｋｍ程で地雷は３つ見つかった。

すべてを処理し、また壊れていないので鹵獲した。

「そろそろ右に曲がらないとな」

先頭を歩くラヴェニズクがポツリと漏らす。

「ここから直進で１０ｋｍ。だが・・・これを見てくれ」

トンネルはモルタルで塞いであった。

「おそらくは入れないよう塞いだんだろう。地下１０ｍ、ココまでの奥地だ。爆破しよう」

ＭＯＮ－５０地雷を分解して中に入っているプラスチック爆弾を取り出して壁に取り付ける。

「簡易爆破キット」

「どうぞ」

片山2等陸曹がすかさず爆破装置を手渡す。
俺は爆薬にそれを取り付けて距離を取った。
「爆破するぞ！」
バンッ、と地面が揺れ動く。
「開いた。行こう」
壁は人の入れる2mの穴が開いた。
「ココが終着地点。地図だとココを登るとインターネット施設の物置場にでる。さて、米軍の爆撃機を呼んでくれ」
「わかった」
俺は無線機を取り出してチャンネルをつないだ。
「こちらファイアウォール、本部どうぞ」

『こちら本部、どうぞ』

「パニャルチ空軍基地への陽動爆撃を」

『了解、爆撃する』

―米国本土　アメリカ空軍基地―

「ＭＱ―９リーパーコールサインアタックゴースト、爆撃コースへ」

「了解」

民間のパイロットは無線電波で送られるモニタを見ながら慎重にスティックを動かした。

「コース突入。いつでもどうぞ」

隣の席に座るのは空軍の士官で、彼はステックを動かして爆撃用カメラを動かす。

「ヒューッ、ゲームでしかお目にかかれないね。Ｍｉ―３５を５機、Ｍｉ―２８を４機目視で確認」

指令を出していた担当官が

「それ以外は？赤外線映像で確認せよ」

士官はスイッチをパチンと押して赤外線映像に変える。

「なし。格納庫にスホーイ系統の戦闘機が数機と・・・おっと、Ｓｕ－２４フェンサーが２機」

「最重要目標は稼働体制にある戦闘ヘリだ。どれかわかるか？」

「カメラをズームしてみます」

今度は民間パイロットが別のステックで映像を拡大した。

鮮明な画像はヘリがいつでも飛べる体制であるものを映しだした。

「Ｍｉ－３５、中央の２つは飛べます。他のはすべてエンジンがないので整備中。それとＭｉ－２８。あれは右にある３機はタイヤが無いのでこれも整備中。動かせるＭｉ－３５に寄り添ってるＭｉ－２８は動きます」

専門家が映像を見ながら答えた。

「よし、では目標を確認せよ」

「確認」

「Ｏｐｅｎｆｉｒｅ」

ヘルファイアミサイルはＭＱ－９リーパーから１発発射された。

「着弾まで5，4，3，2，1，・・・弾着・・・今」

赤外線の映像が一瞬白くなり、2機のＭｉ－３５が吹き飛ぶ。

「2発目準備」

「装填完了」

「撃て」

2発目のヘルファイアミサイルがすーっとＭｉ－２８に飛んでいく。

「弾着まで5，4，3，2，1，・・・弾着・・・今」

Ｍｉ－２８は大きな花火を上げた。

「市民軍が現在ここを制圧に向かっている。これ以上破壊するな。シースファイア」

ＭＱ－９リーパーは作戦行動を終了し、撤収した。

「いい音だ。いくぞ」

マンホールの蓋を開けると中は段ボール箱の積まれた部屋だった。

「すべて機材か何かか？まぁいい。サーバールームまではあと少しだ」

Ｂｉｚｏｎ短機関銃にはサプレッサーがついている。

「敵１、正規軍じゃない」

ラヴェニズクは階段の角から鏡を出してみている。

「見せてくれ」

鏡には黒のベースボールキャップ、小型マイク、アメリカ製の軽量化防弾ジャケット、手には近代化されているＡＫ系のライフルが握られ、腕には

「ＢＬＡＣＫＥＡＧＬＥＣＯＭＰＡＮＹ」の文字が入っていた。

「さっきの爆発音は？・・・爆撃？了解。歩兵攻撃じゃないならいい」

無線機を胸にかけなおしてＲｋ－６２をＢＥＣ社員は持ち直した。

「奴らは？」

ラヴェニズクの問いに

「アメリカ資本のＰＭＣだ。だがなぜココに？」

と返すとラヴェニズクは

「とりあえず殺す」

Ｂｉｚｏｎを構え、パパパッと撃った。

ＢＥＣ社員は首筋を押さえ、倒れる。

「クリア」

どんどん進んでいき、２Ｆへ。

「警備が薄いな。外の警備は正規軍がやってるからか」

とラヴェニズクがポツリ。

「ハイハイストップー。動くなー」

突然の声に全員が後ろを振り向く。

「全員銃を下ろして手を頭の後ろに・・・って・・・え?坂崎くん?」

里中先輩だった。

「あたた、ＳＳＦ?じゃあ私たちは敵対する側?あー、しかも追い出される?」

「ああ、そうだ先輩」

ＢＥＣ社員5名と先輩は俺たちの武装解除をやめ、話し始めた。

「あー、会社の部長に騙されたねーあたし達」

社員たちが互いにやっぱり、と言い始めた。

「部長の独断で送られたのよ。どーせ金掴まされたんだろうなー」

俺は間を縫って

「先輩、済まない。ひとり殺した」

「え?ああ、いいわよ別に。ね?」

「逆にせいせいした」

「うん、いなくなってよかった」

どうやら倒した社員はえらく嫌われてたらしい。

「兎にも角にも、ここのサーバーふっ飛ばせば終わるの？」

「ああ、終わる」

里中先輩はニッコリと笑い

「全員サーバールームを制圧！」

『了解！』

ＢＥＣ社員が一斉に走りだした。

「どうしたんだ？先輩」

「あのサーバー室だけボスラヴェキニの残党部隊が警備してるのよ。制圧させるだけ」

「これでサーバーは終わりです」

「オツカレ、伊埜」

制圧されたサーバールームの端末にＵＳＢメモリーを差して触っているのは伊埜。

コンピュータウィルスか何かを感染させ、すべてを停止させたらしい。

「帰り道は？」

「行き通った地下道を通るだけで一」

ドォん！と突然大爆発した音が聞こえた。

「どうした！」

里中先輩の怒号に窓から外を見ていたＢＥＣ社員が

「Ｔ－６２がビルに発砲！気づかれました！」

「敵詰所よりＢＲＤＭ－２が歩兵をデサント（車外に乗って）して接近中！」

「無線が壊れたらあそこを壊せと命令があったからな」

Ｔ－６２ズヴェール１の戦車長はキューポラから身を乗り出した。

「全車攻撃開始！」

彼の手信号でＴ－６２が一斉に砲撃を開始する。

その数３台。

戦車長も車載のデシーカ３８機銃を撃つ。

「やっぱいやっぱい。対戦車火器？んなもんないぞ！」

俺が口に出し、全員がやばいと言い出す。

「うちらもＧＰ－３０しかない！」

ＢＥＣ社員達も慌て始める。

「あ、まてよ」

俺は思い出した。

無線機を取って連絡をとる

「ＵＡＶはまだいるか！？」

『ＵＡＶはまだいるか！？』

作戦室に少し日本語で訛った英語が響いた。

ティータイムをしていた民間パイロットと爆撃担当士官が手からクラッカーを落とした。

指揮官がすぐさまマイクを取った。

「どうした」

『ビルに猛烈な戦車砲攻撃を受けている！ヘルファイアミサイルはまだあるのか！？』

「おい！ＵＡＶ、ＲＱ－９リーパーを呼び戻せ！」

民間パイロットは手からコーヒーカップを投げ出し、操縦桿を握った。

「目的地まで数秒だ！フェルファイアミサイル残り２発！」

パイロットの叫び声をそのまま司令官がマイクで伝えた。

『戦車は３台だ！ＢＲＤＭ－２も来てる！』

作戦室ではくそっ！という声が響いた。

「我々では２台しか！」

その時、衛星監視モニター担当の士官が

「空域に我が国所属のＲＱ－１プレデターが居ます！部署、確認します！」

「はいはい、こちらはＮＳＡですよ・・・え？プレデターの操縦権を移せ？無茶言うな」

アメリカ合衆国の組織ＮＳＡ　アメリカ国家安全保障局のオフィスに空軍の電話が飛び込んだ。

「日本のＳＳＦが釘付け？しゃーねーな。了解。ヘルファイアはこっちが先に撃つから」

再び空軍作戦室で３台のＢＲＤＭ－２が吹き飛び、戦車１台が木っ端微塵になるのを確認した。

「火器管制官、やれ！」

爆撃担当士官は残りの戦車にヘルファイアをぶち込んだ。

「ファイアワーク！」

「制圧確認・・・フゥ」

全員が安堵の生きを漏らした。

「いい機転だよ、坂崎くん」

「サンキューっす・・・先輩」

ＭＨ－６０は制圧されたビルの前に着陸した。

「我々はこの足で現地担当部長倒してくるわー」

「了解、援護ありがとうございました、先輩」

里中先輩はランドクルーザーに乗り込みかけた時

「あ、私妊娠した」

とポツリ言っていった

「えええ・・・」

俺はただただ驚くばかりだった。

新生スラヴィニア軍は施設崩壊を受けて無線網が完全に停止した。

スターナヴ・エレンチコワは施設を接収し、ココを拠点に改めた。

「ありがとうございます。作戦が成功したお陰で軍の起立が乱れ、撤退する部隊や投降する部隊が出ました。任務加えて一つよろしいですか？」

スターナヴはラヴェニズクに相談を持ちかけた。

「はい」

「ノヴォド商業街区、首都圏付近にある街をご存知ですか？」

「ああ、知っている。戦災をうけなかった地区だろう？」

スターナヴはファイルを差し出して

「今週末、ミリャコフ・エレッカトリチェ中将が士気を鼓舞するためにココを訪れます。場所はノヴォド商業街区中心部にあるエソフレスト物産商業センター。

この国で一番大きいデパートです。これは・・・戦後に出来たのでご存じないかと」

ラヴェニズクはいや、と答える。

「独房では国内紙が読めた。知っている。ロシア連邦協力でこれまであったデパート数店舗を潰して建てたんだろう？」

「ええ。現在、新スラヴィニア陸軍第７機甲大隊を中心とした陸軍部隊約５０００人が集結しています。ここを叩くのですが・・・・」

スターナヴは窓の外を見て

「その前に、彼女を。ミリャコフ・エレッカトリチェ中将を暗殺してください」

新陸軍創設1周年セレモニー

「本日は集まってくれて有難う諸君。折角の戦闘前休暇だというのに。改めて。私は新陸軍省総督、ミリャコフ・エレッカトリチェ中将だ」

集まった無数の兵士たちが称賛の拍手をする。

「ありがとう。知っての通り君たちは反乱分子をこれから相手取るのだ。当然、民間人もいよう。しかし祖国を守ることに変わりはないのだ」

「大層なことを言ってくれる。ヘッドショットでいこう。エイム」

「了解」

エソフレスト物産商業センターから距離１ｋｍあるホテルに坂崎と石塚は居た。目標は１ｋｍ離れた屋外の特設演説台で演説をしていた。

坂崎と石塚はこの１ｋｍ離れたホテルの窓からＡＳ５０狙撃銃による狙撃を行おうとしていた。

―５時間前―

「３月１８日、天候は晴れのち曇りでしょう。降水確率は５％です。続いて国内治安情勢です。反乱軍は以前進軍を止めず、政府軍との交戦に入っています。

昨日出された夜間外出禁止令は国家法に基づく国民安全保障の政策であり、これを守らなかったものはすべて反乱分子とみなし射殺すると当局からも連絡が入っています。

本日一番のトピックスはノヴォド商業街区にあるエソフレスト物産商業センターで行われるミリャコフ・エレッカトリチェ中将によるセレモニーです。セレモニーは午後１時からの予定です。」

「最悪、最悪だ」

ラヴェニズクはぼやいた。

「狙撃任務？ああ、くそ。抜群にうまくないぞ」

坂崎はちらっと見て

「今回の任務は二人で十分だ。あんたと、俺の部下全員はバックアップ要員としてこのバンに残っててくれ。石塚、俺と来い。後ろに積んであるの視えるな？」

移動手段としているのはベンツのＶ２３０。

運転は伊埜に任せ、助手席には姉坂が乗っている。
後部の荷台は全部余分なものを省いてあるため、凹凸のある道に入ると尻が痛い。

「ＡＳ５０ですか？」

「そうだ。アレを使って狙撃する」

ラヴェニズクは地図を取り出し、床に広げた。

「最終確認だ。まず１時、奴はこの壇上に上がる」

トントンとビルの地図の手前を叩く。

「演説予定は約２０分。その間に仕留める。仕留めたのを確認後、レーダー圏外に待機していた市民軍のＳｕ－２４とＴｕ－９５の爆撃機編隊がエソフレストごと爆破する。

我々は狙撃後にこのバンで脱出。ノヴォド商業街区を抜けた所で市民軍のＭｉ－８で脱出する。ＯＫ？」

『ＯＫ』

「外国テレビクルーですか？」

「ええ、そうです。日本の。私は通訳です」

7名の”外国テレビクルー”はホテル「ブリェースク」へチェックインを願い出た。

「ええと、では政府の許可証とパスポートを拝見できますか？通訳さん以外」

男はカウンター係のわからない不思議な言語で喋った。

すると外国人達は許可証とパスポートを出した。

「照会作業をしますのでしばらくお待ちを」

カウンター係はウィンドーズ９５をパチパチと触り、照会作業を行う

「えらく古いパソコンだ」

「ああ、ホントだ」

片山と石塚が会話をする。

「ええと、はい。確認できました」

ラヴェニズクは受け取って部屋の番号を確認した。

ー３時間後　現在ー

「よし、エイム」

石塚は息を吸い込み、手の震えを抑えた。

「ＯＫ」

「シュー」

ガシャァァン！

突如の破裂音。

「うわあああっ！」

石塚が銃を放り投げて目頭を抑えた。

「どうした！？」

「狙撃手！伏せてください！」

ガシャーン！

窓を２発目の弾丸が抜けた。

「こいっ！」

俺は石塚の襟を掴んで柱の奥へ引きずった。

「大丈夫か？」

「大丈夫、大丈夫です。スコープに被弾しましたけどスコープだけを貫通しました」

目は衝撃でまぶたが深く切れていた。

「これを当てろ。しばらく狙撃は無理だな」

腰からファーストエイドキットを出して包帯をあてがう。

「こちらグロウリーダー、オールグロウへ！状況はレッド！失敗した！」

『こちらグロウ１。爆撃指示を出す』

「了解」

無線を腰に戻して鞄からＭＰ７ＰＤＷを取り出した。

「動けるか？石塚」

石塚は包帯を目に取り付け、彼はＭＰ７と弾丸が共通のＨ＆ａｍｐ；ＫＰ４６拳銃を取り出した。

「はい、問題無いです」

『こちらグロウ1、撤収まで後2分』

急き立てるラヴェニズクの声。

「スモークグレネード」

腰からM18発煙弾を取り出し、ピンを抜く。

「・・・いくぞ」

レバーを親指で飛ばして窓に転がらせる。

煙が瞬く間に発生し、火災報知器が作動した。スプリンクラーが更に視界を遮る。

「廊下にも焚く!」

部屋を飛び出し、廊下の隅にも発煙弾を投げた。

「武器しまえ!逃げるぞ」

武器を腰のポーチに戻し、逃げる客に混じってホテルを出た。

ホテルの外に止まっていたバンに乗り込む。

「狙撃された。姉坂、石塚を見てくれ」

「はい」

ラヴェニズクはＴＶモニターを見て俺に話しかける

「まだ俺たちはついてる。ミリャコフのアマは地下鉄へ退避した。この近くに駅がある。そこから追うぞ！」

「爆撃機は！？」

片山が叫ぶ

「来た！」

東の空に複数の機影が確認できた。

そして曳光弾による対空砲火。

「ベンツで駅に乗り込むぞ！」

ラヴェニズクはアクセルを入れ、車を出した。

車両進入禁止ポールを吹っ飛ばし、階段をがたがたと降りる。

「地下鉄、地下鉄で逃げてる」

銀色の地下鉄はウォオオんと音を立てながら加速していく。

「やばい警備兵だ！応射してください！」

運転を変わった片山の叫び。

「ルーフぶち開けろ！」

坂崎の声で伊埜がＭ２７ＩＡＲの台尻でサンルーフを破って半身を外に出した。

「オープンファイア！！！」

ダガアガガガガガガ！！！！と連続射撃音が響く。

「こっちからもやるぞ！」

サイドのドアを開き、身を乗り出して銃を撃つ。

「後部に火力を集中させろ！」

坂崎自らもＭＰ７を使って攻撃する。

地下鉄後部の新スラヴィニア陸軍兵が銃弾に倒れる。

「ぶつけるぞ！乗り込んじまえ！」

後部にバンを付け、フロントガラスを破って地下鉄の後部から中に侵入する。

「車で追いかけ続けろ！だが、脱線の可能性を踏まえて２００ｍ後方だ！オラオラ！スピード落とせ！」

坂崎の合図でラヴェニズクと片山と石塚を載せたバンは後方に消えていく。

「篠原、後衛頼む」

「Ｓｉｒ」

ＭＰ７のロングマガジンを腰に入れて新しい弾倉を取り出す。

「車両編成は知らないが先頭まで行くぞ」

伊埜をポイントマンに後方に隊員たちがぞろぞろと続く。

「接敵！２名！」

伊埜の合図で全員が銃を構える。

伊埜はＭ２７ＩＡＲで弾幕を張り、そのサイドに坂崎と姉坂が躍り出る。

ＭＰ７のタタンっ、タタン！という小さな銃声がうるさい走行中の車両に響き渡る。

ＡＫ－７４Ｍを手に走りこむ敵を倒してゆく。

「クリア、前進！」

坂崎の合図で部隊はさらに進む。

「接敵！抵抗激しい！」

銃火がいきなり増えた。

「近いぞ！応射！」

壁に身を隠し、窓枠から銃をつきだして乱れ撃ちをする。

「ああ、くそっ！撃たれた！」

伊埜の悲痛な叫びが響いた。

「クソ、姉坂！援護する！見てやれ！」

「りょ、了解ッ！」

坂崎は援護のため伊埜のＭ２７ＩＡＲを拾い、撃ちまくった。

「篠原、撃ちまくれ！」

「やってます！」

篠原はＳＡＩＧＡ１２セミオートショットガンを断続的に敵へお見舞いしていた。

「・・・シースファイア！」

反撃が無くなった。

俺はＭ２７ＩＡＲを伊埜へ投げ、ＭＰ７に新しい弾を込めた。

「伊埜、動けるか？」

「ええ、まあ」

「じゃあサイドアームで援護しろ。全員動くぞ」

隣の車両へと侵入する。

血煙が舞っている。そして死臭。

血まみれの死体一つ一つをクリアリングしていく。

「うぅう・・・」

生きている奴には遠慮なく銃弾を叩きこむ。

「隊長、目標発見。生きてます」

姉坂の声に俺は近づいた。

「被弾してません」

「わかった。伊埜を見てやれ。篠原、一人で悪いが電車を止めてくれ。レバーを引けばいい」

「了解しました」

列車は徐々にスピードを落とす。

「おい、生きてるか？」

「ん・・・ぐ・・・」

ミリャコフ・エレッカトリチェは目を開けた。

「忌々しい反乱分子が・・・」

「悪いが俺はあんたの国の人間じゃあない」

「何物だ・・・」

「言えないね」

「動くな」

ミリャコフは持っていた書類ポーチを必死に隠そうとした。

俺はそれを取り上げた。

戻ってきた篠原にミリャコフを見張るよう命じ、書類を開けた。

「武器輸出会議・・・3月20日・・・場所はロシアの・・・ヴェージマ・・・商人はリュスタル・キャンバス・・・引換として・・・アナスタシア・シュパジェノブスク・・・だと?」

そこには新スラヴィニア陸軍の武器密売とそれに対する対価として「アナスタシア・シュパジェノブスク」がロシアのヴェージマという地でリュスタル・キャンバスという武器商人によって取引されることを記していた。

「おい、どういうことだ?」

アナスタシア・シュパジェノブスクの件について坂崎はミリャコフ・エレッカトリチェに質問した。

「私は、私たちは勝たなければならなかった。逆賊に。それに勝つには・・・国民が信じきっている虐殺者を呼び戻す必要があった・・・」

坂崎は加えて質問をする。

「生きているのか?アナスタシア・シュパジェノブスクは」

ミリャコフは力を落として答えた。

「生きている。ロシアの武器商人の元で」

「アナスタシアが・・・?生きてるだって?」

「ああ、遠いが。生きている」

「・・・場所は?」

ラヴェニズクは食い入るように質問をする。

「抑えろ。場所はロシア北西部、ヴェージマ。ああ、俺の記憶が正しければ陸軍の駐屯地だ」

ラヴェニズクは武器を持った。

「そこへ行こう。助けだす」

ラヴェニズクが言い始めたその時、トランシーバーに無線が入った。

『こちらスターナヴ・エレンチコワ、どうぞ』

「こちらＳＳＦグロウリーダー」

坂崎はスターナヴ・エレンチコワの無線に応答する。

『スラヴィニアングロウと変わってください』

「了解」

俺はラヴェニズクに無線機を手渡した。

「はい、スラヴィニアングロウ」

『任務お疲れ様でした。ミリャコフ・エレッカトリチェの身柄拘束しました。彼女の拘束を受け、新政府は市民政府と交渉状態に入りました。あなたには大変苦労をかけました』

「それはＳＳＦのチームにでも言ってくれ。それより一つ頼みがあ

る」

『はい？』

「ミリャコフ・エレッカトリチェは武器をロシアの武器商人に売る予定だったらしい。市民政府にとってこれは汚点になるかもしれない」

『と、いいますと？』

「前政府とはいえ国は同じだ。武器が輸出されたと世界に知られたら立場は危うい」

『それで、どうすればいいんですか？』

「ロシア北西部、ヴェージマ。そこを急襲する。ロシア政府に打診してくれ」

ロシア政府はリュスタル・キャンバスという武器商人を認知していた。

ロシア政府への資金援助を理由に彼はヴェージマの軍基地の一部に自分の商店を開き、稼いでいた。

ロシア政府としても苦い自体であった。

ロシア政府はヴェージマに駐屯する５００人の兵隊のうち、４５０

名を基地司令官の娘の結婚式に招待するという名目で基地から引き上げさせ、さらに５０人の兵隊も基地での休暇を命じた。

彼らはヴェージマにあるリュスタル・キャンバスのオフィス攻撃を容認した。

「ヴズルィーフ1より全機。現在より作戦を開始する。作戦を開始する」

Ｍｉ－８輸送ヘリはヴェージマから南に2?の草原に着陸した。

同行するのはロシア連邦軍ヴィンペル部隊の精鋭たち。

「坂崎中尉、我々は手はず通りで構わないのか?」

「ええ、ウラジミネンコ中佐。リュスタル・キャンバスの私兵の始末をお願いします」

ヴィンペル部隊４０名は即座に展開した。

「あれが牢獄・・・ヴェージマ城」

坂崎は思わずつぶやいた。

ヴェージマ城。かつてここまで至ったドイツ人たちが建造した砦。

ＷＷ２後は政治犯収容所として使われ、現在はただの城だ。

ウラジミネンコは語り始めた。

「政府はこの城をリュスタル・キャンバスに売却した。奴はここを武装要塞化している。とりあえず爆発に紛れて潜入するのが常套句だ」

「どこからはいればいいんです？」

「壁なりなんでも吹き飛ばしてくれ。うちの部隊がエアボーンで上下を攻める予定だ」

「迫撃砲装填」

２Ｂ９　８２？自動迫撃砲がヘリから降ろされ、城へ砲身を向けた。

「アゴイ！」

ドンッ！ドンッ！ドンッ！と３発の砲声で城へ命中する。

「続けざまに打ち続けろ！」

ＳＳＦはＭｉ－８に乗り直し、エアボーン部隊に加わった。

Ｍｉ－２８ハヴォックとＫａ－５２ホーカムは編隊を組んで城への爆撃を開始した。

「いけいけいけ！」

ヘリのサイドドアを開け、ロープを滑り降りる。

５秒で城の屋上に着地し、ＡＳライフルを装備する。

ラヴェニズク含め全員が降下完了するのに３０秒程度だった。

「俺達はこちらから中に入る！牢獄はそちらだ！」

ヴィンペル部隊の指示を受けて俺たちは別の入口から下へ降りていった。

「襲撃です。敵はアンノウン！不明勢力！」

「何！？」

「どういたしますか！？」

リュスタル・キャンバスは睨むような目で

「各個撃破しろ。必要なら”商品”も使っていい」

「了解！」

「地下牢はこの階段を最後まで降り切った場所らしい！」

「アナスタシア・・・！」

坂崎の声にラヴェニズクは愛する人を助けるため、足を早く動かした。

「ッ！」

ＡＳライフルを即座に坂崎は取り出し、階下から上がってくる敵の頭にバス、バスと命中させた。

「私兵だ、リュスタル・キャンバスの」

Ｐ９０ＰＤＷを所持していた。

黒いベレーにアメリカ製の簡易防弾アーマー。

サブアームはＦＮ５７でＰ９０と弾薬に共通をもたせていた。

「行こう、時間があまりない」

階段を転がるように降りていく。

７名の隊員は中腹までたどり着いた。

「敵７名！制圧射撃！」

ジャカジャカジャカ！と軽機関銃が音を立てた。
踊り場に2脚を取り付けたＲＰＫ機銃が待機していた。
土のうで銃手の体を隠している。
「くそ、銃座、銃座だ！」
「任せてください！」
姉坂はＭ１４テルミット焼夷手榴弾を銃座に身を晒さないように投げ入れた。
爆発後、壮絶な悲鳴が反響する。
「ギャアアアアアアア！焼ける！焼けーー！！！ああああああ！！！！」
7名の隊員はその横を通って階下を目指した。
「第3セクターの銃座手と連絡が途絶！」
「外部エリア、ＢＴＲ－９０との連絡がオフラインです」
「居住区のＢコンコースが破壊されました！」
リュスタル・キャンバスは気がついた。
「くそ、そっちは陽動だ！第3セクターから下は地下牢だ！敵は何

人だった!?」

パソコンを叩いていた兵員は

「7，7名です!」

「他の地区の侵入兵は!」

「10名強」

リュスタル・キャンバスは確信した

「敵の目的はアナスタシア・シュパジェノブスクだ!コンピュータを燃やせ!牢へ急ぐぞ!爆破用意!」

「コンピュータ制御のドアです。ハックするので援護を」

伊埜はバックパックからパスワードを解読する端末を取り出してパスワード入力用のドア端末に接続した。

ドドドドド!!!

城が大きく揺れた。

「何事ですか?ウラジミネンコ少佐!」

坂崎の問いかけに

『敵が証拠隠滅のため自軍の司令部を爆破した模様・・・リュスタル・キャンバスは発見できず』

「敵です2尉！」

ダダダッ！と篠原と片山が銃を撃ち始めた。

「伊埜、頑張れ」

「くそ、了解しました」

『こちらA班！牢獄前で敵7名と接敵！』

「やはり。お前が目的のようだな」

リュスタル・キャンバスはガン！と鉄格子の扉を叩いた。

「連れ出せ！コンボイ部隊で脱出する！」

ドアが空いた時、アナスタシアは引きずられるように連れていかれていた

「アナスタシアッ！」

ラヴェニズクの声虚しく、ＢＴＲ－９０２台とトレーラーは城を出た。

「くそっ・・・くそぉぉぉっ！」

「諦めるなラヴェニズク！追うぞ！」

ラヴェニズクは坂崎の襟をつかんだ。

「なにで、何で追うんだ！？」

「あれだ」

坂崎はあるものを指さした。

『こちら後部。追跡してきたＭｉ－２８を撃墜』

「よくやった」

武装トレーラーはヴェージマから彼の隠れ家を兼ねた武器庫に向かっていた。そこにはリュスタル・キャンバスの私兵部隊が多く住んでいる。

「リュスタルよりオールファイター。敵殲滅のために準備しろ」

『こちらファイター、了解』

隠れ家の部隊とも連絡がとれた。

「万事休すかと思った」

ロシア連邦軍は彼をわざと逃していた。

トレーラーの後ろから高速で何かが接近してきた。

トレーラーの上に座っていた対空兵は度肝を抜いた。

「ＢＴＲ－９０!!!」

「主砲発射!撃て!」

坂崎の合図でラヴェニズクが射撃スイッチを押した。

ＢＴＲ－９０の３０?砲弾はトレーラーのタイヤを吹っ飛ばし、護衛のＢＴＲ－９０を撃破した。

「停車、停車!」

ＢＴＲ－９０はブレーキを掛け、中から7名の隊員が降車した。

「気をつけろ」

トレーラーの後部扉に片山と篠原が張り付き、ドアを開けた。

中には数名の兵士と、リュスタル・キャンバス本人。そしてアナスタシア・シュパジェノブスク。

「動くな。全員引きずりだして手錠かけろ！」

坂崎の指示でＳＳＦ隊員は私兵たちを引きずり出し、プラスチック手錠をかける。

「アナスタシア！ああ、よかった！怪我をしていないか！？」

ラヴェニズクが頬けているのを横目にリュスタル・キャンバスを拘束した。

「糞野郎、俺を捕まえてどうなると思うんだ！？だれだかしらねえが、てめぇらただじゃすまねえぞ！おい！」

「あー、うるさいうるさい」

ラヴェニズクは数年振りにあった恋人の姿に喜んだ。

「よかった、死んだと聞かされていたんだ！」

「・・・ボソボソ」

「え？」

アナスタシアは小さなふるえる声でガタガタと体を震わせながら

「Я　виноватЯ　виноватЯ　виноватЯ　виноватЯ　виноват・・・！」
（Я　виноват＝ごめんなさい、私が全て悪いのです。の意）

「アナスタ・・・シア？」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい・・・・」

「くくくっ」

一人笑うものがいた。

「お前の大事な女は廃人になってしまいましたとさぁ！ひひひ！」

リュスタル・キャンバスは笑った。

「お前一体、一体何をしたんだァァアァアアッ！」

ラヴェニズクはＭＰ４４３グラッチを取り出してリュスタル・キャンバスの額に擦りつけた。

「おいおい、おらぁ、何もしてないぜ？」

「フザケるなよタコ野郎。なにをした、なにを！」

リュスタル・キャンバスは答えた。

「俺は何、コイツに毎日自分の犯した罪を説法してやっただけさ。民間人を虐殺した。その事実を」

「あれは彼女じゃ・・・！」

リュスタル・キャンバスはフッ、と鼻で笑い

「アイツは部下に人民を従わせろと命じた、そう、あのミリャコフ・エレッカトリチェに。そしてアイツは人民を虐殺し、従わせた。間接的でも彼女が命じたのは明白！どうだ？ひひひっ！」

バンッ・・・バンバンバンバンッ！

「アナスタシア、アナスタシア！」

「ごめんなさいごめんなさ・・・」

リュスタル・キャンバスの遺骸と私兵の遺骸を脇道に捨てるＳＳＦの隊員をよそ目にラヴェニズクはアナスタシアに話しかけ続けた。

「わかるか？俺だ、ラヴェニズクだ！」

「ら・・・ラ・・・・ラヴェニズク・・・？」

「そう、そうだ。わかるか？わかるか！？」

「ラヴェ・・・ああ・・・・」

アナスタシアは目にいっぱい涙を貯めて。

ボロボロと涙を流し始めた。

「いいですね、あれ」

篠原がポツリ。

「再開ってやつだな」

坂崎の返しに

「2尉はご家族居ましたっけ?」

と篠原。

「ん、妊娠した奥さんがいる」

篠原は

「ええ!?独身だと思ってた」

と、こんな答え。

「篠原さん、俺はどうよ、俺は!」

と、石塚が声を張るが

「目を怪我してる人は嫌いかな」

「じゃあ俺は！？」

伊埜も必死に声を上げる。

「撃たれる人は論外！」

「ハハハ……」

片山もこれには苦笑し、姉坂も

「ま、まぁ篠原さん」

「姉坂さんはいいじゃん、彼氏いるし」

「ご迷惑おかけしました・・・」

「いえ、しかしこれで我々も仕事は終わりです。国に帰って妻の面倒が見れる」

坂崎は先ほどリュスタル・キャンバスの私兵からいただいたタバコに火を着けながらアナスタシアの謝辞に答える。

「あーいや、ひとつ頼みがあるんだ」

ラヴェニズクの声が入った。

「俺達は何処かに亡命したい。日本政府にそれを計らってはくれな

いだろうか」

「ん・・・俺の権限ではないが」

「あー、こちら坂崎です。お久しぶりです、真賀山1等陸佐」

『おー、お疲れさん。聞いたよ。アナスタシア・シェパジェノブスクまで助けだしたんだって?』

「はい」

『先ほど市民軍は政府軍を吸収して統治したよ。民主主義国家の再誕だ』

「それはよかった。ああ、アナスタシア・シェパジェノブスクとラヴェニズク・クラフチェネンコについてなのですが・・・」

『ん?どうした』

「ニホンへ亡命できないかと、打診してくれと言われまして」

『んぅむ、簡単だ』

「え?」

『なにせ彼女は”死んだ”ことになっているし、ラヴェニズクも死んでいる。新しい国籍でも取得すれば日本に永住権を与えれるはずだ』

電話はしばらく続き、の日本行きの飛行機にのることになった。

―３月３０日午後3時４０分　エストニア　タリン空港―

『午後４時発、フィンランド航空タリン発日本行き５７８便にお乗りのお客様はＡ搭乗口へどうぞ』

「やっと終わったよ、凛」

『お疲れ様！いつ帰ってこれそう？』

「明日の午後くらいかな？」

『じゃあ、夜は豪華なご飯用意しとくね！』

「ん、ゴメンな連絡できなくて。規定でさ」

『いいよ、気にしてない。じゃあ、頑張ってね』

公衆電話の電話機を下ろして小銭を取る。

「峯岸さん、行きますよ」

空港内で階級で呼び合うわけにも行かないので片山は偽名で坂崎を呼んだ。

「ん、わかった」

「エレーナ・クロンチコワが新しい名前かぁ」

「俺はラヴェード・スラデだぞ」

楽しそうにラヴェニズクとアナスタシアは話し合っていた。

飛行機は管制塔から許可を出され、ゆっくりと前進して空に飛び上がった

――「チャンスはあまりないんだ」――

――「ボスは最終支払をたんまり出してくれた」――

――「殺して、パラシュートで逃げっちまおう」――

飛行機は数時間のフライトを予定していた。

白馬の王子様（後書き）

次話、ＪａｐａｎＦｏｒｃｅ完結予定

終焉　そして未来へ

「コーヒー、もらえます？」

「はい、少々お待ちください」

キャビンアテンダントに飲み物の注文をしたアナスタシアは以前の邪悪さをなくし、歳相応の可愛らしい女の顔をしていた。

「熱いから気をつけてな」

「温かい物飲むの久しぶり・・・」

「ゆっくり休め。日本まではかなりかかる」

「ん・・・」

「フゥ・・・」

「ため息ですか・・・？」

「ん、ああ」

俺のついたため息に片山が反応した。

「いや、なんだ・・・長かったからさ・・・仕事が」

「ああ・・・僕もですよ。こんなに長い、というか実際の仕事」

片山は少し目を遠目にして

「実際、人を手にかける仕事なんですよね・・・」

「・・・国は７０年以上の平和を誇ってきた。もちろん素晴らしいことだ。だが・・・だが、有事に争えない軍に意味はあるのか？俺は・・・それを理解出来ない。

ただ、今の仕事も国を守るためにやってきたつもりだ。韓国紛争時ももっと的確に動けていれば京都攻撃もなかっただろうし」

「チャンスは一度だ。ГОТОВЫЙ？（用意はいいか？）」

『ダー』

まだ機内を動けない中、シートベルトが外れた音が機内に響いた。

キャビンアテンダントはトイレに立った客だろうと思い、即座に歩き始めた。

「あの、お客様。お席にお戻り願えますか？もうしばらくすればシートベルトは外せますので」

「動くな。我々はテロリストだ」

男は小さな、黒光りする銃を持っていた。

「全員その場を動くな！テロリストだ！」

『キャアアアアア！！！』

『うわあああああ！』

典型的な脅し文句に乗客たちはパニックを起こす。

「動いたらぶっ殺す！」

手に持たれているのはＦＭＧ－９、マグプル社製の超小型ＳＭＧで隠密度が高い。

「ああ、クソ！・・・エレーナ。動かないでくれ。峯岸・・・どうする？」

「どうするも何も待つしか無い。いざとなったら制圧する。人数を確認しよう」

二人は、いや、ＳＳＦの隊員たちとラヴェニズクは腰にあるシグザ

ウエルＰ２２９に手を伸ばしていた。

ＦＭＧ－９を持っているのは４人。

全員目出し帽をつけているわけではなく、東欧系だった。

一人は女。

全員が軍人崩れのような風体であった。

「４人、元軍人風。武器はマグプルかどっかの豆鉄砲だ」

坂崎の報告に７人は「楽勝」と考えた。

「女、この乗客を呼び出せ」

「・・・はい」

キャビンアテンダントは言われるがまま、マイクに手を伸ばし

『エレーナ・クロンチコワ様、至急お話ししたいとのことで－』

『おいアナスタシア・シェパジェノブスク！いるのはわかってんださっさと出てこい！じゃねーとスチュワーデスの頭にチューリップの花が咲くぞオラァ！！！』

『キャアアアア！』

「・・・ラヴェニズク、私行かないと」

「駄目だ行くな」

「でもっ・・・」

アナスタシアはラヴェニズクの手を強引に離し、走った。

「ああ、くそ！ああ、待て！」

「よぅ、久しぶり」

「・・・ジェレミー・ウラン中佐」

元スラヴィニア陸軍親衛隊ジェレミー・ウラン中佐。

現在彼は

「リュスタル・キャンバスの仕事でね」

リュスタル・キャンバスの私兵組織に居た。

「他のも全員親衛隊ね・・・？」

『フフフ』

残り３人も親衛隊だった。

「あなたがイケないんですよ。死んでくれなきゃあねえ？」

フフフ、と不気味な笑みを浮かべる女。

「ユーチェリ・ガガノフ少尉、あなたは生きていていい人間ではなかった。ここにいる全員を殺しても殺したら無いでしょう？」

「ウフフ、そーね」

ユーチェリ・ガガノフは虐殺担当の兵士だった。

「さあ、て死ねよ」

ＦＭＧ－９をもう一人の兵士が構えた時、ラヴェニズクは動いた。

腰の拳銃のセイフティを外し、構える。

（軍の学校時代を思い出せ・・・一撃でやれる）

坂崎は驚いたがＳＳＦ隊員に合図を送り、全員が拳銃を持った。

バンッ！・・・パパパパパパパパ！

ラヴェニズクの放った４０スミスアンドウェッソン弾はＦＭＧ－９を持っていた男を撃った。

反動でＦＭＧ－９が暴発し、後ろに居た男を撃ちぬいた。

「クソ、敵だ！」

６人のＳＳＦ隊員が一気に拳銃を撃ち始める。

「射線注意！撃たせるな！」

坂崎は続いて英語で

「伏せて！」と乗客に。

「ああ、くそくそくそ！」

ジェレミー・ウランは死んだ。

悪態をつくのはユーチェリ・ガガノフだ。

「ストルフスキー、パラシュート！逃げる！」

「わかった！」

「ほら、お前もだよ！」

ユーチェリ・ガガノフは最初に撃たれたストルフスキーを先に行かせ、アナスタシアの手を掴んで走った。

「逃げた！クソ、追うぞ！」

「分かった。全員は待機、負傷者と敵を確保しろ！」

『了解しました！』

坂崎とラヴェニズクは後部へ向かった3人を追いかけた。

「ああくそくそくそくそ！」

ユーチェリ・ガガノフは悪態を連呼しながら弾がかすった右腕を抑えた。

「あのクソイカレポンチのヤポンスキー共め！飛行機爆破用意！空中でふっ飛ばしてやる」

ストルフスキーはＣ４爆薬に信管をさした。

「姐さん、いつでも」

ストルフスキーは起爆装置をユーチェリ・ガガノフに渡して落下傘を体に着けた。

「お前は先にとべ！」

ズドン

銃声でストルフスキーは機外へ落ちていった。

「終わりだよ、イカレ戦犯」

アナスタシアはコルトポケットと呼ばれるものすごく小さな自動拳銃を持っていた。

「お前・・・飛行機が吹き飛んでもいいのか？」

ズドンズドン

「え・・・あ・・・？」

ラヴェニズクはまたもや４０Ｓ＆Ｗ弾で仕留めた。

飛行機は緊急事態のため、近くのシェレメーチエヴォ国際空港に着陸した。

着陸後、ロシア連邦保安庁の捜査員がテロリストの遺体を回収した。

ー４月１日　日本国愛知県午前２時３０分ー

「寝てるよな・・・」

自宅のマンションドアを開ける。

真っ暗だ。

当然だ。

飛行機は新しい便を待たなくてはならず、さらにＦＳＢの取り調べ。
それはまあ真賀山１等陸佐の計らいで数分だった。

これでも急いだが・・・午後には間に合わなかった。

「はー・・・？」

居間には人影があった。

電気を付けると

「ああ・・・お前はホントに・・・」

テーブルにはケーキと俺の好きな料理が並び、ケーキには「お疲れ様！」と書いてあった。

テーブルに突っ伏して寝ているのは間違いなく自分が愛する人間だ。

「・・・ああ、ホント・・・ああ・・・」

涙が出ちまう。

「ん・・・あ、帰ってたの!?」

驚いた顔で凛が眠気まなこをこする。

「起こしてくれれば・・・?泣いてるの?辛いことでもあったの・・・?」

ああ、本当に

「え、ちょっ・・・かえってきて急に抱きつくとか・・・え、なに、どうしたの・・・?」

「凛、本当に・・・有難う」

「・・・ん、ちょっと怒ってたけど吹き飛んだ」

凛は俺を自分の胸に抱きとめた。

「おいしいなこれ」

「でっしょー?頑張ったんだよ」

凛の作る料理を食べながら、お酒を飲んだ。

「あ、そういやあ忙しくて一緒にお酒飲んでなかったな・・・飲む

？」

２０歳になったんだ。

「のむのむ！」

凛にチューハイを渡すと、ちびりちびりと飲んでいく。

「おいしい」

「ふぁー！」

一緒に風呂に入った。

「お腹大きくなってきたな」

「ん、偶に蹴られるんだよ？」

「俺も親父としての自覚を持たないとな。しばらく休みなんだ。家事は手伝うよ」

「いいよいいよ！明日は休んでて。ね？」

「・・・ありがと」

「・・・ん？」

目が覚めると時計は１３時を指していた。

「・・・おいおい・・・」

「おはよー起きた？」

隣では洗濯物をたたむ凛。

「起こしてくれてもいいじゃん・・・」

「だって可愛く寝てたし」

昼食をとって俺は家事を手伝った。

夕方のＴＶをつけるとすべてのテレビ局があることを取り扱っていた。

「アメリカ合衆国は先程、イランに対して攻撃を開始しました。これは昨日起きた米軍の墜落機を中国へ売却しようとしたためだと言われていて―」

「凛、休暇無くなりそう」

凛は肩を落として

「チューくらいしてってね」

思った通り携帯に電話が入った。

「はい、坂崎です」

『わかってるよね？イラン事象。明日から作戦開始。邦人救出ね』

「・・・りょーかい」

―２０１２年８月２９日　愛知県内の産婦人医院―

「修一くん、落ち着いたらどうだ？」

「お父さんこそタバコが毎分１本ペースですが」

凛の父と俺と凛の母親、それとうちの親父とおふくろは分娩室の外に居た。

凛は俺に立ち会いをすることを拒んだ。

「だって見せたくないもん・・・すごい顔するから」

と。

俺は足が貧乏ゆすりから毎秒2回ペースの機銃ゆすりだったし両方の父親は毎分1本ペースのヘヴィースモーカー。

「名前は決めてあるの？」

と、凛の母親。

「女の子ということなのでさき、と」

「いい名前ね。ドキュンネームじゃないのでしょう？どういう字を書くの？」

「薄絹とかの紗に葵という字で紗葵です」

「いい名前ねえ」

と、俺の母親。

「おぎゃあおぎゃあ」

産声は響いた。

その場に居た全員が、拍手した。

そして俺の、父親としての人生が始まる。

―２０２６年４月１日　柊北部中学校始業式―

「紗葵ちゃん、遅れるから」

「はあい・・・」

ゴシゴシと眠気まなこをこする姿は、数十年前の母似である。

「おはよ、お父さん」

「ん、おはよう。今日も可愛いな」

「・・・朝からヘビー」

「悪い」

俺の早朝ジョークも快調に滑り倒す朝。

俺はコーヒーを飲む。

「新学年頑張れよ」

「・・・うん」

心なしか心に違和感を覚えた。

なんだろうか

「じゃあ、行ってきます」

「おう、行ってらっしゃい」

「いってらっしゃい」

凛と俺、二人残されたマイホーム。

前のマンションから一戸建てを何とか立てて住んでいる。

真賀山さんがＳＳＦの指揮官を辞し、俺はソレを継いだ。

今年でもう４３。

「年取るもんじゃないなあ」

「まぁ、いくつになっても修一カッコいいけど」

「ん、ありがと」

そっと抱きしめる。

「１５年経っても仲いいのうちだけだよな」

「そうかもね。里中さんのトコは・・・生きてれば同じくらいだと思ったけど」

里中、赤坂は１０年前にＢＥＣの作戦中に行方不明になってしまった。

里中先輩はシングルマザーで防衛省の技術研究本部に入ったと聞いた。

「・・・いつ死ぬかわからない」

俺は新聞を開いた。

「中華人民共和国連邦（Ｐｅｏｐｌｅ'ｓ　Ｒｅｐｕｂｌｉｃ　ｏｆ　Ｃｈｉｎａ　ｆｅｄｅｒａｔｉｏｎ　ｏｆ　ｓｔａｔｅｓ，ＰＲＣＳパークス）は本日、統一高麗連邦と合意の上で高麗連邦を領土にした」

ＰＲＣＳは１０年前、東アジア共同体構想で確立された。

モンゴル、ミャンマー、ラオス、キルギス、タジキスタンがすでに取り込まれた。

ＰＲＣＳは実態が西側政府には不明であった。

「・・・戦争かな」

自分の子供、紗葵たちには戦争を体験して欲しくない。

そう願うばかりだった

－ＥＮＤ－

終焉　そして未来へ（後書き）

見てくれてありがとうございました。長々と駄文晒しただけですいませんでした。

坂崎修一と仲沢凛の物語は今回でお終いです。

でもタイトルにあるように「未来へ」。が次のコンセプトです。

次回作も見ていただけると幸いです。それでは、数日後に。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9790t/

Japan　Force

2011年12月13日01時59分発行